名誉なき預言者

アナーキーオンライン ストーリーズ（１）

ラグナー・トーンクイスト著
根本正午訳

c Funcom 2001

アナーキーオンラインのもととなったストーリーの骨子は以下の三人によって書かれました
ゴート・ゴダージャー
トミー・ストランド
ラグナー・トーンクイスト

名誉なき預言者：アナーキーオンラインストーリーズ（１）
ラグナー・トーンクイスト著
www.ragnartornquist.com
ゲームを遊ぶために
www.anarchy-online.com

「すると彼は夢を見始めた。見よ、地の上にははしごが立ててあり、その頂は天に達していた。そして、見よ、神のみ使いたちがそれを上ったり下ったりしているのであった」

――創世記　二八章十二節

「僕らが見聞きするすべてのものは、夢の中の夢でしかない」

――エドガー・アラン・ポオ

序章

西暦29475年　惑星ルビカ

きらびやかな摩天楼が立ち並ぶオムニ－１の街が、沈みゆく二つの太陽が放つ焼け付くような栗色の光を反射し、きらきらとまたたいている。何百マイルも遠く、弧を描いている地平線に沿って吹き荒れる風は止むことを知らず、それが巻き上げる赤い土埃と砂嵐の中に、太陽はその姿を消し去ろうとしていた。

複数の船からなる大きな艦隊（フローティラ）が北と西の方角で飛行しており、まるで海の表面に姿を表そうとする灰色な鯨のように、ゆっくりと上昇を続けていた。船隊は嵐を避けるために、その上を飛び越えようとしているのだった。東には、鉱山から帰還する別の艦隊の姿が遠くにちらちらと銀色の点となって見えている。

嵐の音を聞くにはそれはまだ遠すぎた――もっとも鋭敏な強化臓器（インプラント）を持つ者にとっても。だが、フィリップ・ロスは嵐を感じることができた。惑星ルビカは、結局のところ彼の世界であった。この世界では、彼が知らぬ間に雀が一羽地面に落ちることさえ、ありえなかった。
しかしそれはあくまで比喩の上の話であり、この惑星上にはただの一羽の雀も存在しないのだが。
ロスは目を凝らした。すると窓は暗くなり、彼の眼下に広がっていた景色は見えなくなっていった。あとには心地よい明るさに調整された彼のオフィスが残される。
彼のオフィスはオムニテック社が所有している、ある超高層ビルの最上階に位置していた。重々しく強化されたそのビルは威圧的な外見を備えており、この首都の建物の中でもよく目立っていた。オフィスは広い円形をしており、ロスはそれを彼の所有する闘技場（コロッセオ）であるかのように思っていた。ライオンも剣闘士もいなかったが、それは彼の部下や同僚たちに、予想通りの効果をもたらした。広さは彼らを怖気づかせた。彼のもつ権力の大きさがその部屋にそのまま表れていたのだった。そのオフィスは彼らをより矮小に感じさせることができた。
フィリップ・ロスについてのあらゆることはそのように大きかった。
彼は暗く調整された窓の表面に写っているローブに包まれた自分の体をじっと見つめた。背は平均よりもかなり高く、灰色の髪がきちんと刈りこまれている。彼の外見は、その地位に立つものにふさわしい雰囲気と、成熟した男性がもつ魅力をしっかり兼ね備えていた。彼は見かけにこだわるタイプではなかったが、外見が他人に与える影響力を熟知していた。フィリップ・ロスは細かいことがらを無視する人間ではなかった。
彼は窓に背を向けた。強まりつつある嵐の中にとうとう太陽が沈んだため、部屋はどんどん暗くなりつつあった。彼の強化された視覚は自動的にその暗さに合うように調整される。
オフィスには家具と言える家具はなかった。贅沢なマホガニーの机がつつましく配置されている。それは地球に残された最後の熱帯雨林を再生させた素材からできていた。人工皮だが座

り心地がよさそうな椅子が三つだけ置かれている。高価な原生恐竜（ブロント）皮の家具を見せびらかすといったことは、彼には無縁だった。

部屋には端末（コンソール）が一つだけ設置されておりしかも旧型だったが、多機能でかつ安定しているため、彼には十分過ぎるものだった。社内用端末は使用されていないときはオムニテック社のニュースを生放送で流し続けており、たいていそのままになっていた。

植木鉢さえ部屋には置かれていた。それは遺伝子工学により汚染から保護されたサボテンで、地球のヨーロッパの砂漠から手間ひまをかけて、この異星の地まで輸送されてきたものだった。にわかには信じがたいことだが、サボテンはこの地で成長しているようだった。

最後に、部屋には警備用アンドロイドの姿もあった。エレベーターに通じるドアの脇に、直立不動の姿勢で警戒態勢を崩さないアンドロイドだ。これを設置したオムニ公安省（オムニ・ポル）の人間は、ロスが反対したにも関わらず、個人を守るために必要な防衛装置をオフィスに設置しなければならないという意見に固執したのだった。それは執拗なほどだった。

この危険な機械は外見からして残忍であり、熱力防護壁（エネルギー・シールド）をアクセサリーとして身にまとったその姿は、まるで携帯用の大砲といった感じだった。アンドロイドはじっと動かずに立ち、何か、あるいは誰かが破壊されるために近寄ってくるのをひたすら待ちつづけるのだった。

暴力を予防することは暴力を招くことだ、とロスは考えていた。彼はこれまで一度も暴力から逃げたことはなかったが、この彼の家（ホーム）に暴力を持ち込ませることは認めるわけにはいかなかった。

我が家、なんとよそよそしい言葉だろう。

もちろんここは彼の家ではなく、ほかの皆と同じように、設備の整った個人用住居を彼も持っていた。その部屋はほとんどからっぽだったが。だが、ロスは人生のほとんどの時間を、このコロッセオで過ごしていた。宝石で身を飾り立てた皇帝のように、端末（コンソール）の画面越しに報告されるこの世界の愚かさと野蛮さをじっと見つめ、その所業に対して裁きを与えるのだった。

惑星ルビカにおけるオムニテック社の業務は、朝食と夕食の間にこなすことができるような簡単なものではなかった。その仕事はすでに彼の存在そのもの、過去から未来へと続いている彼の人生のすべてだった。それは間違いなく、生きるに値する人生だったろう。だが、そのフィリップ・ロスですら疲労を覚えることはあるのだ。

そして今、ロスはとても疲れていた。今すぐあの豪奢な家に戻って、ぱりっとした清潔なシーツの敷かれたベッドに横になり、下の薔薇園から来るかすかな香りに満たされながら眠りたかった。失望と疲労以外のものを求めて、彼は自分の気持ちを安らげるものが、今朝のニュースにあるかどうかと探したのだった。何もなかった。ニュースは気持ちを悪化させるだけだった。

私の懐柔策は、まるで膝をついて、やつらに和平を乞い求めるようなものだった、と彼は思う。私は理解と和平を求めてきた。そしてやつらそのみかえりにしたことは、私を裏切り背中

から刺すようなものだった。

報告には、オムニ社直轄区の近郊でオムニテック鎮圧軍とクラン反乱軍がまた衝突を起こしたとあった。死人が出て、緊張はいやがおうにも高まった。二つの陣営は再び束縛から逃れようと、戦いをはじめる機会をうかがっている。これらの不幸な事態は予想できないものではなかったが、それでもロスをいらだたせ、悲しませた。二つの陣営の無意味な争いのすべてがその源だった。

ロスは以前の自分の判断が誤りであったことに気がついていた。彼はごく一部の不満分子が全体の流れに与える影響を過小評価していたのだった。その教訓は、すでに何百万回も繰り返し学ばれていたはずだった。もう一万七千年前の昔、現代のモーゼとして知られるディビッド・マーリンが、奴隷解放戦争のリーダーとなり、<オメガ>を破壊したあのときから。だが同時に、その破壊の後の時代がオムニテック社を生んだものでもあったのだ。彼に感謝しなければならないのかもしれない、とロスは考える。しかし解放がもたらした結果はどうであっただろうか・・・？

その結果は人類に間違った刷り込みを与えただけだった。たとえば人間性や美徳とは何かというと、それは巨大な組織の権威や行政に対して、反抗の狼煙をあげることである、等々。それをやかましく騒ぎ立てることが、まるで良いことであるかのように、名誉あることであるかのように思われてしまっているのだ・・・。

いや、革命は人類を癒したのではなく、むしろそれに害を与えたのだ。

ディビッド・マーリンは最後の <オメガ> の一人を打ち倒したあと、その剣を収めるべきだった。解放された奴隷たち、地球の後継者であるソリタスたちは、自分たちの力で自らの運命を切り開くべきだったのだ。

この人間が作り上げた世界に神の入り込む余地などありはしない。

今、壮大で無意味な言葉が理性という皮をかぶってきらびやかにひるがえっている。それは「自由（フリーダム）」や「解放（リバティ）」そして「公正な権利を人民に（ジャスティスフォアオール）」という言葉に代表されている。

誰のための正義だというのだ？　何からの解放で、誰のための権利だというのだ？

おそらくこういった言葉は、象徴的な力を持った人間が口にすることにより、あたかも真実であるかのように見えるのだろう－－なぜならもともとこれらの単語は、価値のある貴重な言葉だからだ－－しかしこの言葉の背後に隠されたイデオロギーが現実の世界、たとえばこのルビカのような不確かなバランスの上で成り立っている世界で使われれば、それは災厄をもたらすだけだ。それはロスにとって不幸であり、オムニテック社にとって悲劇であり、またこの企業に頼って生きる数百万の人々にとっての災厄だった。企業は彼らを守り、そして仕えるため存在しているというのに。

クラン反乱軍が成し遂げている唯一のことは、目的のない反乱を繰り返すことにより二つの陣営の均衡を崩し、彼らが解放しようと試みている人々に新たな痛みを与えることだけだった。

ルビカを失うこと、そしてその結果として <ノータム> のもたらす利益を失うことで、オムニテック社がすぐにでも崩壊するというわけではない。この企業はすでに大きくなりすぎ、想像できるあらゆる工業と貿易の場と密接に結びつきすぎていた。

だが、オムニテック社の芝生を侵食しようとする競合企業がないわけではない。<ノータム> はオムニテック社の優位性をさらなる将来にわたり保証する、唯一の鉱物なのだ。

＜ノータム＞なしでは、オムニテック社も、ほかの超企業となんらかわりばえのしない存在になってしまうかもしれない。

その考えはロスをいらだたせ、神経質にさせた。拳を開いたり閉じたりしながら、彼は自分が望んだわけではない戦争のことを考えた。バランスが崩されてしまった彼の世界を、そしてコロッセオの画面に映し出される、地面に落ちて死んだ雀のことを。

太陽が沈みきったあとの暗闇は濃くなり続けて、彼のオフィスをつやのある黒に包んでいった。小さな街の光が何千も眼下に広がる中で、フィリップ・ロスは自分が痛いほどに孤独であると感じた。

彼らがもし理解することができたなら、と彼は思う。もし彼らがいま私が見ているものを見ることができたら、我々の存在・・・恐らく私という個人がいなければ、この世界に未来はないのだという真実を知ることさえできたら。私たちは皆本当の平和と繁栄を享受することができるというのに。

彼は街を見つめながらじっと立っていた。彼の街、彼の世界を。そうして静かに考えをめぐらせながら数分間立ちつくしていた。この高さからだと、人の生活はきらめく明かりと、車から吐き出されるエネルギーの流れでしか、見ることができないように思えた。彼はそこに誰一人として知っている者の姿を見出すことができなかった。しかし人々はこの世界のどこかにいるはずだった。いま生きている人々が。眠りに落ち、夢を見ていたりする人間がいるはずだった。

フィリップ・ロスは世界に背を向けて、めったに訪れない家の、ほとんど使われていないベッドで眠るために歩き出した。彼は祈るのだった。長く安らかな夢のない眠りを。そして休息のひとときを、暗く深い闇の中ですごせることを。

西暦28911年　星々と星々のはざまで

赤い土埃に包まれた惑星地表の映像が、七色に色分けされたディビッドの視覚の中心に写りはじめる。リアルタイムで映し出される複雑な恒星系のイメージが、ディビッドの視界の周りを巡っている。神経接続（ニューロン・リンク）インターフェイスから入力されるその映像は少しずつ更新されてゆく。

それは特に巨大な惑星ではなかった。地球より少し小さいぐらいの惑星だったが、その隣にある巨大なガス惑星のせいでちっぽけに見えた。ぶかっこうで陰鬱なその兄弟星の表面は、大陸ほどの大きさがある激しい嵐でまだらになっており、しかもぎらぎらと輝く氷のアステロイドベルトの輪がその体を囲んでいた。その兄弟星と比べると、その惑星はむしろ華奢といってもいいぐらいで、兄に付き添われた赤ん坊のように見えた。その恒星系は双子の太陽を中心に持ち、小さい太陽は赤く、大きいほうは黄色だった。二つの太陽はお互いを追うようにして軌道をめぐっており、そのさまは叙事詩の中で久遠に回りつづける、二人の優雅なバレリーナのようだった。この構成のせいで、恒星系の惑星の描く軌道は、一つしか太陽がない恒星系よりもはるかに複雑なものになっていた。

だがもちろん、寿命を持たない船内コンピュータ（オンボード）にとっては、これらの惑星の軌道を予測する計算は難しいことではなかった。ディビッドもこのインターフェイスの力を借りて、宇宙船をどのように目的地まで運航すればよいか、数ヶ月で計算することができた。

ディビッドはまばたきし、そして接続を引き抜いた。

その感覚は水の入ったバスタブを抜き、水が流れるさまを倍速で眺めるのに似ていた。視覚情報としての水、過去と現在の航路、そして変わりつづける重力の影響による現在の船の座標との関係を描写している情報などすべてが、渦を巻きながらどこかにある穴に吸い込まれてゆくのだ。彼を引きずり込みながら。

それに慣れることはなかった。軽いめまいを覚える。彼はなるべく接続する時間を短くしようとしていたのだった。昔はよくこんなことが言われたものだ。自分の目で見ることによる楽しみ、自分の耳でものを聞く楽しみというものがある、と。本を読んだり、映画のフィルムを鑑賞したり、もうとうの昔に失われた絵画を眺めたり、船倉にしまいこまれたバッハやモーツアルトやマルティネス、ビートルズといった録音音楽を聴くこと。そして星を眺めること、等々。

彼が故郷からどんどん離れるにしたがって、いつもそこにある星々が少しずつその位置をずらしつづけていた。もう何年前のことだったか思い出せないが、地球にいたときは空を見上げればそこに見知った星座があった。子供のころにすべて覚えたその星座を、自分の娘であるアミイに教えたものだった。

亡霊どもめ。彼は思う。現実に存在しているのか、俺の頭の中の妄想なのか知らないが、あいつらはいつも俺とともにいる。忘れさせてくれない。

彼は目をしばたかせ、考えが流れるにまかせた。ほとんど眠りに落ちているようだった。やるべきことはたくさんあった。白昼夢を見ている暇はないのだ・・・少なくとも今日は。目的を果たせる日まであと少しだった。もっとも時間と空間が無意味に思えるこの船の中では、あと少しという言葉はあまりに抽象的すぎるかもしれない。

それよりも彼は腹を空かしていた。何か食べるものが必要だった。彼は生体（バイオフォーム）マットレスから身を起こす。マットレス素材はまるで生きているかのように伸び縮み、もとの形に戻った。そんな動きのひとつも、何か原始的な感情でディビッドを落ち着かなくさせた。この孤独な牢獄において、あたかも生きているかのように振舞う存在は、彼がまだ生きているということに対する侮辱ではないかと思えた。もう長い長いあいだたった一人で話す相手もなくここにいるというのに。彼は自分がこういった生体マットレスと同じただのモノになってしまうのではないかと恐れていた。何も考えず、外からの刺激に合わせて自動的に反応するだけの物体に。プログラムされたとおりに動き、それ以外の動きができない無感覚なモノに。

腹が激しく鳴っていた。生命はその基本的な感情によって、不毛な哲学的思考から現実へと彼の心を引き戻した。

不思議だ、と彼は思う。不老不死も生きるために必要なことをちゃんと要求する。食べなければ飢え死にする。

自然な食材といったものは――野菜や肉やシリアルなど――もちろんこの恒星と恒星の間の空間ではほとんど存在しなかった。ここにあるのは、どこまでも広がる冷たく真っ暗な真空と、まるで蝋燭の芯が残した残像のようにかすかな、無限の距離を越えてきた黄土色の光があるだけだった。そして最後に、彼をずっと守りつづける機械の滋養分である、エネルギーがあった。彼が使ってよい食材はそれぐらいしかなかったのだ。

そういった状況では、スフレや肉汁のたっぷりつまったハンバーガーといったものはまず手に入らないはずだった。だが実際はそうではなかった。<オメガ> たちもひとつぐらいは人間の生活に大きく貢献したのかもしれない。車輪の発明以来の、もっとも偉大な歴史を変えた天才的な発明・・・。

創造機（ビルダー）を。

創造機（ビルダー）を使えばほとんどあらゆるものを手に入れることができた。どんなものでも作れるというわけではないし、何もないところから作り出せるというわけではなく、創造機にもその限界はあった。それが生み出すことのできるのは、あらかじめプログラムに組み込まれているものだけであったし、また複雑なものを作成するとき、どれほど本物に近くできあがるかは、機械がその処理にどれほどのエネルギーを使うかによっていた。また創造機は原材料を必要とした。化合物や単一元素や・・・宇宙塵かもしれない。創造機が実際に何を材料に使っているのか、ディビッドもよく知らなかった。彼はもともと学者ではなかったが、彼が毎週機械に与えている、丸められた帆のような形状の薄い多孔性の物質を切り取ったものが、創造機にとって必要なもののようだった。それは広げるとサッカー場を何百も並べたものぐらいになりそうであり、どうもそれを原料として、機械は熱いホットドッグや、上等なラザーニャや冷たいビールを作っているようだった。また、それは機器の部品といった小さな物体も作ることができた。この船のコンソールといったものを修理するための部品は作れたが、武器は駄目だった。

何年か前に自殺したいという強い衝動に襲われたとき、彼は試してみたのだった。実際に自殺できたかどうかはわからない。ただ彼は自分が引き金を引ける立場にいるという感覚を持ちたかったのだ。いつでもできる、という感覚を。それは支配欲といえたかもしれないが、問題

なのは何ひとつとして自由にならないという現状であり、彼が強制されている現実だった。
もちろんそんな考えは過去のものだった。今は空腹しか残されていない。彼は何秒かメニューを熟考し、マッシュポテト付きのポーク・チョップに決定する。皮付きの大きい肉に、大蒜の香りがするオニオンフライとグレービーソースをつけて。そういえばもう何ヶ月もポーク・チョップは食べていなかった。心が決まると胃が激しく鳴った。彼は背を思い切り伸ばし、腕を天井に届くまで上げて唸り声を上げる。生体マットレスは柔らかく心地よく作られていたが、それでも何時間にわたる接続のあとは、背中がひどく痛むのだった。船内はさほど広くなかったため、運動できるところは限られていた。この操舵施設と司令室があるチャンバーは、約十二メートルの長さの反回転シャフトにより、多機能エクセサイズ施設がある尾翼チャンバーまで接続されていた。彼は毎晩眠る前に電極に体を接続し、筋肉組織の退化をふせぐために刺激を送らなければならなかった。それでもディビッドは自分が事実上、地球にいたときよりはるかに健康であることに気がついていた。
だが背中の痛みはほとんど殺人的ともいってよいものだった。
左手の丸窓の外をちらりと見ると、針の穴のような星々の光が見えた。彼が遠い昔に旅立った惑星と太陽の位置を、想像することはもうできなかった。それはとっくの昔にどこかに流れ去ってしまっていた。前部チャンバーはそれ自体が回転することにより、常に１Ｇという地球の重力を再現できるようになっていた。ディビッドはたまにそのメカニズムを停止させ、無重力の接続シャフトの中でのように、生体マットレスに軟禁されることなく神経接続したいという思いに駆られることがあった。しかしそれはやめたほうがいいことも彼は知っていた。自分の体のためにも、そして繊細な機器のためにも。この部屋にある全機器は下の床に設置されるようにデザインされていた。もっとも、この船内では下も上もなく、さらに言えば北も南といった方角も存在せず、ここと絶対的なあそこを区別するものはなにもないのだった。
ディビッドが理解できる方角といえば二つしかなかった。彼が後ろに置いてきたものは地球だった。前に待っているものは目的地だった。そして後戻りは選択肢からはすでに除外されていた。これまでずっとそうであったし、これからもそうだろう。
ときおり、地球が彼の故郷であることすら疑わしくなるのだった。あれは熱に浮かされた短い夢のなかのことではなかったのかと、彼は思うときすらあった。数歩足を踏み出し、緩衝材の入った靴底越しに白く柔らかい床板を感じる。彼は壁に並んだコンソールに手をついて体を支えた。このチャンバーからは船のあらゆる機械を操作することができた。すべてのシステムはメインネットワークが提供する仮想インターフェイスを通して接続されており、またバックアップ用として準備されているたくさんの端末機器からもアクセスできるようになっていた。彼はこの船を操作するために必要な書籍をほとんどすべて読み尽くしていたが、もしこの完全に自動化されたシステムに何か異常があった場合、この乗り物を乗りこなせる自信はなかった。
彼が創造機に向かっている途中、突然どこかからかすかなささやき声が聞こえてきた。
体をすくませて、彼は頭を回してささやき声が聞こえてくる方角を見る。
小さなダイオードが、緩やかにカーブを描く衝撃防止材が貼り付けられた天井に均等に並んでいる。チャンバーには影といえる影はなかった。永遠に続く黄昏のような明るさがあるだけだった。朝焼けの灰色がいつまでも引き伸ばされているような色だ。それはひょっとしたら夕暮れの色だったのかもしれない。ものの見方の違いだった。日が昇るということは、夜が明けるということだ・・・光と闇、生とそして死も同じだった。このあまりに長い黄昏の中で、彼

を最後に待ち受けているものはいったいなんなのだろう。彼はどちらを選び、そして受け入れるのだろう？

彼は震えをこらえるように体を抱きしめた。こういうことは考えたくなかった。空腹感はいつのまにか消えうせていて、胃のあった場所には真っ黒な穴しか残っていないように感じられた。生理的な飢えは別の感情に取って代わられていた。恐怖と不安と・・・そして激しい怒りに。

ささやき声がまた聞こえはじめる。今度は左手の方角からだったが、彼はそっちを見なかった。この船の中には影というものが存在しなかったが、亡霊たちは確かに存在していた。それはほかならぬ彼自身のかき乱された心が生み出した断片以外のものではなかったが、少なくとも彼を取り囲んでいる鋼鉄の隔壁と同じ程度にはリアルな存在だった。

亡霊たちはまた彼を捉えて離さないのだった。ここ数日、いや数週間の間姿を表さなかったが、こうしてまた耳元でささやきかけて、彼をうろたえさせるのだった。彼はもうだいぶ前に亡霊たちを黙らせようとすることをあきらめてしまっていた。亡霊はいつまでも執拗に存在しつづけて、気がすむまで彼を一人にはさせなかった。無視すると、亡霊たちは増長し、その声はさらに大きくなるのだった。すでに本を読むことすらできなくなっていた。読める本はもう何千回も読んでしまったからという理由だけではなく、亡霊たちはいつもそこに存在していたからだ。彼が神経接続しているとき以外は。もうネットワークの外で何か集中してやることは不可能になりつつあった。

ディビッド、私たちのところに戻ってきて。

妻の甘く誘うような言葉づかいは、あまりにも馴染みぶかかった。ただ声ははるか遠くからこだましてきているようだった。二人のあいだには、膨大な年月と距離があった。妻の亡霊は、彼が一番恐れているものだった。妻とアミィの亡霊がそうだった。それ以外の亡霊は耐えることができた。若い男女の灰色の幽霊たちは、彼が消し去ってやった。戦士の亡霊は、彼の命令を何でも聴いた。彼が殺したが一度も顔を合わさなかった敵の亡霊もいた。また彼が戦場で置き去りにした仲間の兵士たちの姿もあった。亡霊たちはいつも彼につきまとっていた。だが亡霊たちは彼を傷つけることはできなかった。

妻の亡霊以外は。

彼女はかつて彼を支え勇気付けてくれた。ほとんど兵隊もいない軍隊の指揮官から、彼女の助けを得て、望まぬまでも大統領の地位まで上りつめたのだった――彼を救世主であると呼ぶものもおり、キリストの再来であると叫ぶものすらいた――彼は惑星すべての人民の代表だったのだ。

だが、今妻は彼をあざけるのだった。非難とののしりをあびせて、いますぐあきらめて来た道を戻るように、懐柔しようとするのだ。預言者たちが間違っていたことを証明してあげなさい。そして人類の運命は彼ら自身で決めさせなさい、と。

だが、最近はしばしば、彼女の言葉の意味がはっきりわかるような気がするのだった。

激しい疲労感に襲われながら、彼は妻を見るために向き直った。

二メートルと離れないところに、青い航海コンソールの燃えるような光を浴びた彼女が立っていた。ほかの亡霊たちと同じように、その顔は蒼白でぼやけていた。その姿はほとんど古代の白黒映画に出てくる俳優のように見えた。黒いそのひとみと長い髪の毛は、石灰のような白い肌と対照的だった。その姿は裸だったが、別にそれで困るといったふうでもなかった。亡霊

はあらゆる点で、はるか昔に死んだ妻と瓜二つだった。その挑発的な態度と、心まで見られそうな眼差し・・・。

彼女は彼の前に立ちふさがるようにして立っていた。彼はこのしろものが、偽者だということをはっきり知っていた。妻は彼の頭の中でだけ生きているのだと知っていた。だが彼は彼女に対して優しい気持ちがわきあがるのを抑えることができなかった。かつてそうであったように。

いつかは、この亡霊に屈することになるのだとわかっていた。こういった恐怖と直面した人間は・・・こんな惨めな輪廻を見せ付けられた人間は、負けるに決まっているのだ。

ディビッド、私を殺したのね。彼が愛した妻はそうささやいた。その口は動かなかったが、声は彼のまわりのあらゆるところから聞こえてきた。まるで空気自体が声を発しているようだった。だがそれは間違いなく、彼が覚えている妻の声そのものだった。私を殺したのね。私たちの娘もあなたが殺したのよ。あなたが真実に気が付くまでに、いったい何人の死が必要だというのかしら？

ディビッドは頭を振って、目を閉じた。彼は瞼の裏に水が湧き上がりたまるのを感じた。彼女が言ったことのせいではない。彼を激しく非難するようなまなざしと、あられもないその姿が亡霊を本物に限りなく近いものに見せていたからだった。もちろん、彼女が言っていることは正しかった。彼は本当に妻を殺し、娘を殺したのだ。もう長いこと、彼はそれを正当化しようとしてきた。戦争においては避けられないことだと。罪のない者が犠牲になってしまうのは仕方のないことだと言いきかせてきたのだった。

彼はその苦しみを、天からの報いとして受け入れて生き続けることにしたのだ。彼は罪人だった。神は彼に罰を与えたのだった。

それは二重の意味で正しいことが今になってわかった。彼はこの煉獄の中に永遠にい続けるのだろうか？　これを終わらせるには死しかないのだろうか？

再び目を開いたとき、妻の亡霊は消えうせていた。周りの空気にはあのささやきがまだ漂っていたが、それも少しずつ消えうせていった。少なくとも今のところは。

彼らが戻ってくることは確実だった。

食欲がなくなった彼は、生体マットレスの椅子まで戻った。多少気分が悪くなろうとも、接続されていることだけが亡霊から逃れる唯一の方法だった。あきらめるしかない。やるべき仕事はあった。考えなければならなかった。計画を立て、彼の前に広がっている空間に道を描き、どの道を選ぶべきか考慮しなければならなかった。

死んだ妻の言うことが正しかったとしても、いつかはこの愚かな旅を放棄する決断を下すにしても、これまでこの任務を放棄することは彼にはできなかったし、本当にそう決めるまでは、彼は決してやるべきことを捨てはしないだろう。

彼は柔らかく伸び縮みする生地に体を沈めた。それはまるで椅子に座るというよりも、体に巻きつきそして飲み込む何かに体をあずけるような感触だった。彼は体が穏やかに抱きしめられながら沈んでゆくのにまかせた。

ディビッドは目を閉じ、あらゆる方角から情報が花のように広がってくるのを感じた。恒星系の姿が無から浮かび上がり、瞬時に宇宙の複雑な楕円運動がシミュレーションされて描写される。没頭していれば邪魔は入らない。彼は喪失感が充実感に取って代わられるのを感じた。

ディビッドはまばたきをする。太く寄り合わされた赤い線が、複数の恒星の重力干渉と、放

出される放射線を避けるためにわずかに弧を描いている。それは彼の視点の中心にある惑星へと、描かれている航跡だった。時間軸は少しずつだが確実に短くなってきていた。それは彼の旅がもうすぐ終わることを意味していた。
　じきに彼は赤い土埃に包まれた惑星を巡る軌道に入るだろう。人類の未来はそこで決まり、ディビッド・マーリンの行く先もそこでようやく決まるのだ。
　その惑星の名は、ルビカといった。

「かつて陰気な預言者たちが主張したことは、科学技術が世界を破壊するということだったが、人間を破壊したのは人間以外のものではありえなかった」

――マックス・ラーナー

第一章

西暦1949年　モスクワ

ローマン・ドラゴヴィッチ・ツボォフは正門出口に向かって歩いていた。いつもどおりの仕事をこなした一日が終わったのだというふりをして、歩幅を崩さずに歩いていた。だがいくら彼がそう努力しても、どこかから鋭いまなざしがその一歩一歩を監視しているという脅迫観念からは逃れることができなかった。皮製のブリーフケースを右手で固く握り締めていたので、黒い取っ手を掴んでいた彼の拳は白くなっていた。彼は信じてもいない神に、その考えが単なる想像であってほしいと祈るのだった。

その暴政のありようを雄弁に表している建物の内装が、彼の不安をさらに倍増させる。窓は頭上三階ほどの高さにある、巨大なドーム形をした天井に等間隔に配置されているだけだった。六つの小さな球形の分厚い窓は薄く黄色に染められたガラスでできており、わずかな自然の光がそのガラス越しにグランドホールに射し込んでいた。常に陰気なそのホールは御影石の石材で作られており、二層に分かれた建物の中にはほとんど何の装飾も施されてはいなかった。硬く、素っ気無い柱が大きく出っ張ったバルコニーを支えており、しみひとつない大理石の床から幅広い階段が半弧を描いてバルコニーと床をつないでいた。

その建物はローマンが所属している部署の重要性を表明しているかのように荘厳なつくりだった。それは冷たく、すべての個性と魂を奪う場所であった。入り口ホールにある唯一の家具と言えるものは、ずんぐりとした警備デスクだけであるという事実が、その場所をよく象徴していた。

外の街の通りからこの建物を見ると、それは首都モスクワに立ち並んでいる他の政府の建物となんら変わりがないように見えた。建物の内部に隠されている秘密をうかがわせるものは、その外見にはまったく表れていなかったのだった。もし合衆国の人間がソビエト連邦の明らかな独裁者であるイオシフ・ヴィサリオノヴィッチ書記の存在を知ったらいったいどうなるだろう？　アメリカ（ヤンキー）の新聞では彼のことを「親爺（アンクル・ジョー）」などと呼んでいるが、彼らは幸運にもこの男の本当の力と、その悪辣で仮借ない悪行の数々を知らないのだ。この男が分厚い石の壁の中で、自分ともっとも信頼できる側近たちだけのためにどのような未来を作ろうとしているか、彼らが知ったらいったいどうなるだろう？

ローマンは彼の肩にかかっている秘密の重さをよく理解していた。もちろん、祖国を裏切ることに対する罰もよく理解していた。また彼は、この建物にある研究所の中で生まれている科学と医学の飛躍的な研究成果の数々が、アメリカ人にとって、いやすべての近代国家にとってどれほどの価値があるものなのかも知っていた。

彼は自分が立てた筋書きを頭の中で千回以上繰り返していたが、その結論は毎回同じだった。二十年以上にわたる研究の成果をこのままこの政治体制に献上することは、愚かきわまりない行為であるということだ。

そしていまローマンはすでに決断していたのだった。賽はすでに投げられ、後戻りはできな

かった。もう二度と。彼はあたりを見回し、見えない視線を送ってくるのが誰なのか確認したいという強い衝動を感じた。本当に監視されているのか、それとも尾行されているのかどうか確認したかった。だが単に後ろを振り返るだけでも、警備兵は彼を疑いはじめるかもしれない。何かがおかしいと判断されれば、彼は拘引されるだろう。運がよければ、いくつかの質問に答え、数分間の貴重な時間を浪費するだけですむかもしれない。しかし、もし警備兵がブリーフケースの中を調べることになったら？　彼らは中に入っているものの真の価値を理解できないだろうが、それが重大なものであるということには気が付くはずだ。そしてもし逮捕されれば、これまでの仕事と準備のすべてが無駄になるのだ。

　だが振り返らずにただ何気なく歩くことがうまくできたとしても、もし奴らがいま追跡してきたとしたら逃げることは不可能なのだ。ローマンは自分の心臓が激しく打ちはじめ、喉がからからに渇いているのがわかった。外へと続く回転ドアまでの距離は、まるで無限の長さがあるように思えた。しかし彼は可能な限り普段どおりにふるまうしかなかった。彼は何とか威厳を保ちながら、運命の女神が——これまでうまくやってきたのだから——彼の側についてくれることを祈った。

「先生（ドクター）？」

　ローマンはその声で凍りついた。

　馴染み深い声だったが、すぐには思い出せなかった。特徴のある声だった。その声が彼の心臓を跳ね上がらせ、皮膚を引きつらせたのだった。

　平静を無理やり装いながら、ローマンはゆっくりと声のした方角に振り返った。ブリーフケースを本能的に盾のように持っていることに気が付く。だが中に入っているもののことを考えると、それは良いやり方ではなかったのかもしれない。

　しかしそんなことはどうでもよかった。ばれたのだった。銃殺について考えるには早すぎた。銃弾もあるいは首の周りのロープも、面接（インタビュー）と呼ばれる拷問のあとに控えているものだった。彼はコリマにある強制収容所（グラーグ）にて囚人（ラガーニック）としての短い存在を終えることになるのだ。連邦書記はこの意外なアイロニーを楽しむことだろう。かつてスターリンにもっとも重要視された人間が、墓碑銘もなく埋葬されるのだ。強制収容所で栄養失調の体を震えさせながら、犯罪者として朽ち果ててゆくのだ。

「ローマン・ドラゴヴィッチ！　君が逃げ出す前に捕まえることができてよかったよ」

　その人物が誰であるか特定できる一秒のあいだ、ローマンは今すぐ向きを変えてこのホールから逃げ出すことを考えた。裏切りが露呈したことはもう疑えない事実だった。彼の犯した罪はすでに知られており、拘束されるのはもう時間の問題だった。

　しかしすぐに思い直した。衛兵は銃器を持っているし、今聞こえてきた声の持ち主の命令があればいつでも発砲するだろう。彼はまだ生きていたかった。そういう筋書きはありえそうになかったが、機会があるのなら釈明を試みるほうがよかった。ローマンは、何が来ようと相対する決心をして顔を上げた。呼びかけてきた男はそこにいた。廊下に続く階段を降りてきたばかりのその男は、セルゲイ・ニコライッチだった。発展医療調査部に属している、連邦書記が代理と認めている男だった。それはスターリンを除けば、いまローマンがもっとも会いたくな

い人間だった。
　ニコライッチは一人のようだった。そして上機嫌だったので、ローマンはブリーフケースを下げて、唇を慇懃な笑みの形にした。まだ望みがあるのならば、この男の疑いをまねくような行為は慎まねばならなかった。ニコライッチは最も上層部まで顔が効くため、連邦にとってのローマンの仕事の重要性を考えると、おかしな言動はまず確実に記録されそして報告されるだろう。
「今日は早く帰るのかね　ツボォフ同志？　上が気にするのではないかね？」
「今日は外で夕食を取る約束があるので・・・」ローマンは答え始めたが、ニコライッチはそれをさえぎった。
「君の意見が聴きたいのだよ。非常に重要で、緊急なことだ」
　ニコライッチはそう言うと、ローマンのそばに来て彼の腕を親しげともいえなくもないふうにつかんだ。書記代理は、いつもしみひとつない服装をしていたが、どこかだらしがないところがあった。彼はずんぐりとした背の低い男であり、分厚い縁つき眼鏡と、左から右へと撫で付けられた薄い頭の毛が特徴的だった。その湿っぽい真っ白な肌は、ウォッカの飲みすぎと、あまり太陽を浴びない生活を表していた。おかしなことに、減りつづける頭の毛の手入れはきっちりとされていたが、眉毛は濃く、またもみあげも生え揃っていて乱れたままになっていた。
「なんでしょうか、同志？」
　ローマンの耳にも自分の声が少し震えているのがわかったが、ニコライッチはそれには気がつかなかったようだった。もしくは気が付いているが、表情には出さないのかもしれなかった。
「我々のゲルマン人の友人たちについてだが・・・」

　書記代理は鼻を叩きウィンクして続ける。「君にハバロフスクの施設（キャンプ）に行ってもらえないかと思っていたのだ。サンプルを取得してきてもらいたい。あのヒトラーの飼い犬たちはよく太っていたからな」書記代理はつばを吐くと、不機嫌そうに言った。
「やつらはもうだいぶ長いことあそこにいるが、わが国の反乱分子よりは健康なはずだ。

そうす（ダ）るべきだ（ー）と思わんか（？）ね。目標のために仕えられるほうがよいだろう、同志？」

　ローマンは体全体が安堵で満ち溢れるのを感じた。書記代理はローマンが画策していることは何も知らないのだ。笑い出し踊りだしたい気分だった。だがもちろん彼がしたことはうなずき、次のように答えることだった。
「大変すばらしい案かと思います、同志」
　書記代理は彼をいぶかしげに見つめた。何かを期待しているかのようだった。ローマンはそれを受けて続けた。
「私が案を提出しようかと思いますが、いかがですか？」
　書記代理はにっこりと笑った。こういった答えこそが彼がローマンに期待していたものだったのだ。
「すばらしい」ニコライッチは時計をポケットから出して一瞥した。濃い眉毛を芝居がかったしぐさで上げ、ローマンの腕を謝罪するかのようにぽんと叩いた。
「同志ツボォフ、大変申し訳ないが、ここでおやすみを言わなければいけないようだ。私も大事な夕食の予約があるのでね」

彼はまた鼻を軽く叩くとウィンクを送ってよこした。
「我らの偉大な指導者のために」
書記代理は皮肉の一切まじらない口調でそう言った。「君の答えは報告しておく」
そういい残すとニコライッチは去っていった。ローマンは安堵のため息を我慢するのに精一杯だったが、結局のところ心配するほどのことではなかったのだろう。書記代理はローマンのブリーフケースの中身が何なのか知らず、組織で最も必要とされている人物である彼が連邦に対して裏切りを行おうとしているなど、まったく考えていなかったに違いない。彼はもう少しのところで死から免れたことを感じた。
一分もたたないうちに、ローマンは灰色の黄昏の中を歩き出していた。秋は終わりかけており、吹く風にはかすかに自由のさわやかな香りがするように思えるのだった。公道までは歩いてすぐだった。今出てきたばかりの堂々たる建物を、彼は一度も振り返らなかった。あの巨大な石の壁に閉じ込められることはもう永遠にないのだ。あとは車に乗り込むだけだ。彼は運転手（ショーファー）が開くドアをくぐり、車内に座り込んだ。
「家まで」
ローマンは彼にそう告げると、速度を上げ始めた車の中で目を閉じた。

「アンカ、今日は外で食べるよ」
ローマンは台所にいる家政婦のアンカにそう呼びかけた。広々としたアパートメントは彼女が調理しているキャベツの香りで満ちており、その強い匂いは食欲をそそらせる。公式には、ソビエト連邦は真の社会主義国家であり、職業的身分の貴賎に関わらず、また階級制度（ヒエラルキー）のどこに属するかに関わらず、機会はすべての人に平等に与えられ、給付金も平等であるということになっていた。ここには特権階級などは存在せず、職業の高低が生活に影響を与えることはないはずだった。
あくまで公式には、だ。
誰もが知っていることだった。少なくとも階級制度の底にいる人にとっては常識だった。たとえば連邦にとって、ある人間の価値がその隣人より大きいとしたらどうだろうか。その人間の仕事の結果が、連邦の優位性と確実な利益をもたらすとしたらどうだろう？　権力を持つ者にとって重要な成果を出す仕事をしている人間、それがローマンだった。そうすると話はまったく別で、彼は多くの特権を与えられていたのだった。
たとえばローマンが住んでいたアパートメントは、最も歓迎していい特権と言えた。モスクワで最も人気がある区に建てられていた建物は、帝政ロシアのかつての黄金時代をよく表していた。ローマンが子供時代を過ごした、ドブネズミが住んでいたあばら家とはまったくの別物だった。彼は母方の祖母のところで、母と叔父、そして七人の兄弟たちと一緒に住んでいたのだった。もう二十年以上親戚たちとは会っていなかったが、二度と会いたくないという気持ちだった。
はっきり言えば、それはどこにでもあることだった。権力は特権とともにあるのだった。連邦がいくらそれを声高に否定していても、だ。母なるロシアは合衆国ともヨーロッパの同盟国とも異なっていた。まったく違った。他の諸国では、権力や豊かさは見せびらかすことができ

るものだった。だがこの国ではそれは隠蔽され、存在しないものとされ、否定されているのだった。だがローマンは彼に与えられている特権に対して罪悪感を覚えることはなかった。あったとしてもごく短い間だけだった。彼が下層大衆と同じ待遇に苦しまなければならない理由はなかった。もし彼がどこか別の国に生まれていたとしたら、その研究成果とめざましい発見の数々により、名誉も金も手に入れることができていたはずなのだ。

だが今日からそれも変わる。彼の業績は、彼に莫大な富を現実にもたらすことになるだろう。

確かに彼の住処は贅沢だった——少なくともほとんどの市民の家と比べればそうだったが、党の権力者たちが住む家は彼の家の四・五倍は広かったし、彼らが田舎に持っている別荘（ダーカ）に比べてもまだ小さかっただろう——ローマンは隣人に恵まれたこの環境を気にいってはいたが、このすべてを置き去りにすることに彼は躊躇しないだろう。

いや、少なくともアンカが作る料理を失うのは惜しかった。鼻で大きく息を吸い込むと、濃厚なキャベツの香りで胃袋がうなりを上げた。ローマンは彼がこれから行く先に、こんなロシアキャベツがあることを願った。ハンバーガーやコカ・コーラでは、アンカの料理と比べるべくもなかった。

おそらく私が行く先では、どこでもロシア料理が食べられるに違いない。彼はそう考えた。コミュニストたちが権力を握る前の数年間、たくさんのロシア人が外に移民したのだ。また鉄のカーテンが下りた後の数年間も、連邦政府の妨害をかいくぐってたくさんの人々が逃げ出したのだ。確かにアンカの料理を失いたくはないが、食べ物の問題は今彼が心配することではなかった。

彼女は彼を待っていたかのように廊下に現れた。手にはローマンのオーバーコートと手袋を持っている。彼をにらみつけて言った。「どこか外でお食べになるのですか？」質問ではないようだった。「だとすると今私が作っている今晩の料理が無駄になってしまいますが」とアンカはぶつぶつと不平を言った。「いったい誰がこれを食べるというのです？　私はいりませんよ、もう食べましたから」

もっともアンカが二度、あるいは三度食事を取ることはめずらしくなかった。それは彼女の太りつつあるがっしりとした体と、林檎のように赤い頬を見ればすぐにわかることだった。

ローマンは微笑んだ。「それは明日食べるよ。アンカ、明日と明後日は休んでいいから。今日の夕食は明日温めなおして食べればいい」

アンカが何か抗議し始める前に彼は続けた。「お願いだからアンカ、文句を言わないでおくれ。明日明後日は家を離れて仕事をしなければならないんだ。読むものがたくさんあるし、一人でやりたい仕事だからね。祝日と考えてほしい。あまり休みを取っていなかっただろう？夕食は貯蔵室の見つけやすい場所においておいてくれればそれでいい」

アンカは不機嫌そう両手を宙にさまよわせた。「ええ、わかりましたわ。先生がそうおっしゃるのなら、反対する理由はございません。ありませんとも・・・」

彼女は手を振って彼を後ろに向かせ、温かい外套に袖を通すのを手伝うのだった。手袋と帽子もかたづける。彼は少しの間、荷物を簡単にまとめて出発の準備をしたほうがよいのかと考えたが、やめておくことにした。建物を出るときにも監視されている可能性は高い。晩餐パーティに出向くというのに、化粧品や肌着をつめたバッグを持って行く者がいるだろうか？

ＫＧＢの手口として、不平分子の疑いがあるものを常に監視するというのはよくあることだ

った。より重要度が高い任務として、上から信頼されており、ある程度の権力を持った地位についている個人を監視するというのは当然考えられることだった。高度に専門的で重要な能力を持っている個人対象ならなおさらだ。連邦はこういった人間を手放すことを絶対に認めないだろう。ソビエト連邦の偏執狂（パラノイア）ぶりはすでに芸術の域に達していた。決して誰も信用してはいけないのだ。

　おそらくその通りなのだ、とローマンは考える。結局私自身、国家を裏切ろうとしている。なぜだろう？　誰が間違ったのだろうか？　民衆が悪いのだろうか、それとも民衆を駆り立てる国家が悪いのだろうか？

　ソビエト体制は、少なくともスターリンの支配下では忠誠心を生むようなものではなかった。なぜなら忠誠心ですら、あらぬ懐疑や拷問、そして死によって報われることがしばしばあったからだ。彼は共産主義が無くなっても困らないだろう。彼はこれまでたくさんの禁書を読み、政治家たちの個人的な意見を耳にしてきた。その結果理解したことは、共産主義というものは欠陥のある哲学であり、やがて崩壊することが運命付けられているということだ。そしていつか母なるロシアは、資本主義を受け入れなくてはならなくなるだろう。

　彼の同胞たちのためにも、願わくは世代が変わらないうちにそうなってほしいものだった。そのためにはもちろんスターリンが去らなければならないだろう。彼がその地位にいる間は、この体制が変わることなどまずありえなかった。だがローマンは政治家ではなかったし、そうなりたいと思ったこともなかった。そして今彼の頭にあるものは、彼自身のことと、これから始まる旅の行く末だけだった。手に余る問題は、これまでの古い人生とともにここに置いてゆけばよいのだ。

　この日から彼は生まれ変わろうとしているのだ。モスクワを去るときには名前すら捨てることになるだろう――レニングラードで準備されているはずの書類で、新しく西洋式の名前すら手に入れることができるに違いない。

「ここにいらしたのですね」とやってきたアンカは彼を上から下までじろじろと見る。「もう出かける準備をされたようですね」

「ありがとう。次は土曜日だね？」

　アンカは不機嫌そうに大きく鼻を鳴らした。

「アンカ？」

「先生、私は休みなんかいりませんよ」とアンカは抗議をはじめる。「この家を放っておくわけにはいきませんし、仕事を無視して休むなんて私にはできません！」

「そうかもしれないけれど」辛抱強くローマンは続けた。こうなることは予想していたのだった。「調査のために、数日一人になりたいのだよ。そう言っただろう？　邪魔を入れないで集中したいから、君にもいてもらったら困るんだよ。いつもならば君にいてもらったほうがいいのは、もちろんなのだけれども」

　アンカはため息をついた。彼女はもう少し抗議したかったのかもしれないが、優しい先生の指示に従わなかったことは一度もなかった。またローマンは、彼女が家族と過ごす時間を何よりも大切にしていることを知っていた。

　そして土曜日が過ぎれば、彼女は孫たちと過ごす時間をたくさん手に入れるに違いない。願わくはＫＧＢがしつこく尋問しないでくれればよいのだが。ＫＧＢは彼女が消えた先生の行く

先について何も知らされてないことにおそらくすぐにわかるはずだ。量はさほど多くないが（彼女にとっては間違いなく大事なことだ）、ルーブルが銀行の彼女の金庫に来週から定期的に振り込まれる手はずになっている。だがＫＧＢがその小額振込みに気がつくことはあるまい。
「土曜日ですね」と彼女は負けを認めた。「それではおやすみなさい、先生。もうすぐ家に帰りますが、帰る前にこの夕食を片付けておきますわ」彼女の自然な心遣いに、彼はほんの少し罪悪感を覚えた。だがローマンはその罪悪感も、彼が永遠に捨て去ろうとしているロシア人の特徴のひとつでしかないことを知っていた。

彼はいつもと同じように、お休みとアンカに言い残して――正直に悲しみを見せることは疑いを招くことになる――家を後にした。硬い樫の木の扉が背中で閉まり、彼は大きな玄関ホールで一人ぼっちになった。とうとう終わったのだという感触が、彼の心臓の鼓動を速く激しくした。もう後戻りはできない。もちろんそれは今日の午後、研究所にいたときからすでにそうだったのだ――いやそれよりもずっと前、この計画に必要な準備をしていたときからそうだったのかもしれない――だが、たったいま、何かが終わったのだと彼は感じたのだった・・・後ろで扉が閉じたのと同時に、どこか別の扉が彼のために開かれたのだ。

車は外で彼を待っていた。いつもとまったく同じ夜であるように振舞うことが重要だった。少なくとも午前二時半までは。そこからローマンは約束の場所に向かうだろう。自由へとつながる道へ。

二十分後、車はフィオドールのレストランの前に停車した。それはルビャンスキー・プロッツの中でもかなり高級な店であった。共産主義が変えられなかったロシア人の性質があるならば、食事と酒に対する愛好心がその一つだった。

ローマンは運転手に話し掛けようと体をのりだした。運転手はモスクワ生まれのイエフゲニィという男だったが、アンカとは違って、ローマンが今日はもう帰ってよいと命じても文句を言わなかった。今晩は遅くなるから、とローマンは言った。一緒に来ている人に家まで送ってもらえることになっているのだ。
「ゼーニャ、最後に」車から降りる前にローマンは言った。「明日と明後日は家にいるつもりだから、車で来てもらう必要はない。車庫に車をとめておいてくれ」
「ありがとうございます。先生」イエフゲニィはそう答えた。

ローマンは運転手の肩を叩いて、車を降りた。車が遠ざかってゆくにしたがって、彼はまた何かが閉じてゆくのを感じた。ゼーニャも彼の人生の一部であり、おそらく二度と会うことはないのだ。運転手と別れるのがつらいというわけではなく、アンカを失うより大きなことではなかったのだが・・・。

人生というのはあきらめるのが難しいものなのだ、彼はそう気が付いた。こんなことをやっている理由は、この道の最後に新しい人生が彼を待っているからなのだ。新しいだけではない。大事なことは、いまより良い人生が待っているということなのだ。

その夜はいつ終わるとも思えないほど遅く時間が流れていた。上等の食事と美味い酒があったが、ローマンは酒をあまり飲まなかったし、また猜疑心を招かないようにすることで精一杯だった。結局のところ、ウォッカがまだ残っているグラスをあけるのを拒んではいけないのだ。また無理に食事をつめこむこともできなかった。これから起こることの重みが始終彼にのしか

かり、耐えがたいほどだった。一つでも間違えて、ほんの少しでも疑いを招くような行為をしてしまえば、ここにいる誰かがＫＧＢに連絡しようと思うかもしれない。偏執病（パラノイア）はすでに全土に蔓延するロシアの特徴だった。

そのテーブルに座っていた彼の友人たちは、夜がふけるにしたがいだんだん饒舌になっていった。空き瓶はどんどん高く積み上げられたが、ローマンはその話の半分も聴いていなかった。パーティが終わる瞬間まで、旅の最初の一歩を踏み出すのを待たねばならないのだった。それはわかっていたが、彼は一刻も早くここを離れたくてうずうずしていたのだった。ここにいる一分一秒が、彼を破滅へと導いていくのではないかと思えた。このパーティにいる誰かが、突然彼を裏切り者呼ばわりし、皆彼を取り囲んで押さえつけ、漆黒の車に押し込めるのだ。

だがもちろん、現実にはそんなことは起こらなかった。

すべてが終わったときは夜中の一時を過ぎていて、凍りつくような夜の中にローマンは足を踏み出した。霧が雨で濡れた通りにぴったりとまとわりつき、その姿はまるで棺を覆うベールのように見えた。真珠のように光る微小な雫が街灯の光を弱めていて、それが亡霊のように霧を照らしていた。秋はもうすぐ終わりだった。冬はもうすぐそこまで来ていて、モスクワはその一番美しい季節にさしかかっていた。

ローマンは深く息を吸い込んだ。きりきりとした冷たい空気が彼の肺を満たし、頭が少し軽くなる。頬の感触がなくなり、唇が歯から離れるのを感じる。

無くしても惜しくないものがここにもあった、とローマンは考える。この厳しい寒さだ。

パーティで残った最後のうち、友人であるミーシャが出てきて彼のそばに立った。どうやら空気の冷たさは気にならないようで、毛皮のコートのボタンを閉じていなかった。ミーシャは彼の肩を叩き、にっこりと笑った。背が高くどちらかといえば痩せている彼はウォッカで顔を真っ赤にしていたが、今晩あれだけ休まずに飲みつづけていたにも関わらず、それ以外は普通に見えた。

「同志ドラゴヴィッチ、君の車がないようだけど、よければ家まで車で送っていこうか？」

ローマンは笑って、頭を振った。「車はもう呼んであるんだよ、同志アンドロノビッチ。もうすぐ来るはずだ」

彼は銀の懐中時計を見せびらかすように出して時間を見た。「運転手はいつもより少し遅れているようだが、すぐにくるはずだよ」

ミーシャは肩をすくめて、夜の風にコートのボタンを閉じた。「こんな寒さの中に立っていると、玉が凍ってしまうぞ、先生。いいから乗って行くべきだよ」

「玉など使い道がないよ。女遊びについて考えるには、やるべき仕事が多すぎる。そういった気晴らしは不必要なものだし、我らの指導者はそれを快く思わないだろう」

「確かに」ミハイル・アンドロノビッチはそういって笑った。「しかし僕を元気にしてくれる女性が夜いないとなると、毎朝仕事に行く元気がなくなってしまうよ！」

「堕落した遊びの奴隷になっているのかい、ミーシャ？」ローマンは微笑む。

「君はりっぱではあるが、見当違いの義務感の奴隷なのさ、ローマ君！」

ローマンは大きく笑って、友人と別れの抱擁をかわした。

そしてミーシャも去っていった。もう市場では販売されていない高級車に乗って。ローマンはようやく一人ぼっちになった。

彼はミーシャの車が角を曲がり視界から消えるまで数秒待って、建物の中に戻った。テーブルは片付けられ、照明は落とされていた。最後の客もちょうど去ろうとしているところだった。ローマンはウェイターに身振りで手洗いを借りるために来たと伝える。ウェイターはうなずき、自分の仕事に戻っていった。

トイレの後ろの窓は鍵が外されていた。指示があった通りに鍵が空いていたことにローマンは安心する。それを上って飛び降りるのは容易だった。出ると外は木が立ち並ぶ暗い小道で、レストランと近所の家の間にはさまれていた。間違えようがなかった。そしてローマンに道を教えたウェイターは、彼が知らないうちに用をすませて立ち去ったと思うことだろう。もし仮に彼が尾行されレストランの外から監視されていたとしても、この移動方法なら尾行者をまくことができるはずだ。少なくともしばらくの間はそうだろうし、その時間が貴重になるはずだ。

彼は南を目指した。影に隠れるように歩きながら、ローマンは最後の運命の旅を始めたのだ。ここ暗く静かなモスクワで。あと数時間もしないうちに、彼はこの街を去って二度と戻らないだろう。次に太陽が昇るとき、彼は北東のレニングラードへと続く道の途上にあり、そのあとすぐに彼の故郷に別れを告げることになるだろう。

ローマンは二度と見ることがない故郷を懐かしむことはないと確信していた。

もちろん、永遠という時間の中では予測することなどできはしない。寒さに震える彼の唇に、密やかな笑いが表れる。永遠、それはいま始まるのだ。この秘密をスターリンの鼻先で持ち出すのだ・・・今もしほんの一秒でも足を滑らせることがあれば、歴史は大きくその姿を変えるだろう。

だが彼が足を滑らせることはないだろう。今もそしてこれからも。いま彼の頭上で輝く星空と同じように、彼の未来は澄み渡っていた。彼らはそう言ったのだ。そしてもし彼らがこの共産主義の牢獄から彼を助け出してくれるのであれば、そしてローマンしか知りえないことを知っているのであれば、彼らに従わない理由などどこにもない。

彼らが正しくないわけがない。

第二章

サンフランシスコ――「Ｅ－ビジネス ワィア」誌より――西暦2007年1月27日付

今日アプリカテック社とＷＰＭ製薬は、役員会にて平等な合併を実施することについて全員の合意を得たと発表した。合併後の正式名称は株式会社ファーマテックとなる。

ファーマテック本社は現在アプリカテック社の施設があるカリフォルニアのシリコン・バレーに置かれることになり、その目的は主にバイオテクノロジーの開発に焦点をあてたものとなる。二つの組織はいままで通り、それぞれの分野で研究と開発を続けることになり、役割分担としてはニュージャージーのスタンフォードにあるＷＰＭ製薬は薬剤の研究を行い、インドとドイツ、そしてイギリスにあるアプリカテック社支部では埋め込み型ソフトウェアとマイクロプロセッサーの開発に焦点を当ててゆくとされている。

新しくファーマテック社の代表取締役（ＣＥＯ）に任命された、旧ＷＰＭ制約の代表取締役ローランド・ドレイク医師は以下のように述べた。「二つの企業が平行して行ってきた医学とマイクロチップ技術の研究は、これからも続けられることになるだろう。しかし我々はこの二つの分野が、バイオテクノロジーの発展により一つに収束すると予測している。そのためファーマテック社が将来この分野のリーダー的存在になるであろうことは自然なことだ」

ドレイク医師は次のように続けた。「私たちはこの合併が、お互いが持っている資産を有効に、最大限に活用できるようになるものだと信じている。二つの企業の人材と設備についても同じことが言えるし、市場はこの決断を歓迎してくれるものと思っている」

ＷＰＭ製薬は、1922年にニュージャージーのスタンフォードにて実業家のウィリアム・ピーター・モリスが個人で創立したもので、製薬工業でトップランナーとしての地位を保ってきた。同社の老化細胞についての研究は、この十年間、アルツハイマー病の発症遅延化とその予防を行う薬品の開発に多大な役割を果たしてきた。

アプリカテック社は、2004年にバークレーのカリフォルニア大学の卒業生であるジェリー・ウォングとアレキサンダー・スタージェスによって設立され、2005年に株式上場し、その時のIPOは五百五十万ＵＳドルを超えていたとされている。同社のナスダックへの彗星のような登場ぶりは経済アナリストたちを驚かせ、合併の前には八十億ドル以上の価値があるとされていた。

近年になってアプリカテック社の人工知能とバイオテクノロジーについての研究は、世界各地で科学的な注目を集めており、カリフォルニアのサン・ホセに本社を構えていた同社は、さらにインドとイギリスに支社を開いたばかりだった。

アプリカテック社のウォング氏とスタージェス氏はめいめいその代表取締役と最高財務責任者（CFO）としての地位を離れ、合併したファーマテック社は経験豊富なローランド・ドレイク医師の手に委ねられることになる。

より詳しい情報については、WPM製薬のジュール・ライマンまで
ＩｎＰ：９７１７．３１７．２８３４

＊＊＊

西暦2012年　カリフォルニア　サン・ホセ

「コンピュータ、個人日誌の記録を続けてくれ。エリック・ミラー、一般ファイル規制で」
「一ケー、もう日曜の夜だ。そして僕らはとうとうやったんだ！　気持ちを抑える必要さえなければ、ほんと僕は叫びながら裸でリビングを走りまわってるね！」
「昨晩サイモンと僕は、正電荷を与えた真空の中で <ボット> を十一分二十五秒・・・本当に正確に言えば、プラス六十九ミリ秒もの間、保つことに成功した。ぽんとそれが壊れる前にね。前進したんだよ！　やっとだ！　僕ちはキングサイズのマリワナタバコを分け合ってテラスに上がり、星空の下で成功を祝った。もう二週間前の土曜日以来、空を見ていなかったなんて信じられないね。きれいだったよ。僕らは星々がこれまでにないぐらい近くにあるように感じた。
「それから三週間ぶりに家に帰った。驚いたことは、ジェニーがいなくなっていたことだ。書き置きすらなかった。しかしそんなことは糞くらえだ。この発見は僕らが待ち望んでいた飛躍的な前進かもしれないんだ。・・・・いや、このためだけに馬車馬のように働いてきたんだ。もちろん僕らが正しければ、ノーベル賞を取るのは僕ら二人だ。僕らが持っている自社株（ストックオプション）は何十億ドルもの価値を持つものになるだろうし、南太平洋の孤島に楽園を作ってそこに引退してハーレムを作ることだってできる。そこで余生を幸せに暮らすってわけだ。ジェニーにとってこれがいい教訓になるように祈るよ」
「サイモンがこれを僕らの <聖杯> と呼んだのは的を得ていたと思う。もちろん、ラリっていたのは間違いない。だがあいつは正しい。この <ナノ・ボット> ・・・その小ささでどこにでも入り込めるこの機械は、まさに万能といっていい。あらゆるものを創りそして修理することができる。こいつは地球上のあらゆる工業に革命をもたらすだろう。そして病気は過去のものになり・・・僕らは永遠の命を手に入れるだろう。僕らは小さな何百万もの外科医を体内に持ったまま生活し、それがバクテリアやウィルスと戦い、細胞の劣化を止め、臓器を修理し、外傷にあっという間に修復することだろう。内臓に弾丸を食らったとしても、一秒の間にこの虫たちがそれを縫い付けてくれるだろう。これはＳＦじゃない。科学が生んだ現実だ。そして最初のナノ・ボットが幕の下からその姿を見せたとき、誰がその名誉を受けることになると思う？　エリック・ミラーとサイモン・ローゼン、それがその名前さ！　ファーマテック社の牢

獄で一日の休みもなしに過ごしたこの惨めな五年間が、ようやく報われるときが来たんだ」
「だけどもちろん昨晩までは、その分子構成を損なわない形で数秒間その形を保つことができるボットを作るなんてことは信じられなかった。ちくしょう、そんなことはどうだっていい！　十一分半という時間は短い時間みたいに聞こえるかもしれないが、これは自己複製機能を持ち、お互いに修理しあうことができる・・・しかも僕らはようやくスタートに立ったばかりだ。今十一分できるというのなら、いずれ十一時間、十一日と伸ばすことができるはずだ・・・永遠よこんにちは、だよ！　ファーマテック社は世界でもっとも重要な会社になるだけではなく、人という種の救世主になるんだ。そして僕は想像したよりもはるかに金持ちになるだろうし、ジェニーはひざをついて俺によりを戻したいと頼み込んでくるだろうさ！」
「いや、もうすべては終わったことだ。わかってる。もともと彼女とよりを戻したいとは思っていない。僕が望むことは彼女がずっと苦しみ続けることだけだ。人生ってのはひどいもんなんだよ。時間がたてばあいつもその教訓を理解できるだろうさ」
「あと数時間したら研究所に戻る。そうすればしばらく家には戻って来られないはずだ。数え切れないミーティングが毎朝あるだろうし、そこらじゅうから来る記念品といっしょにおそらくドレイク医師本人も訪れるはずだ・・・そこからがエリック・ミラーの仕事の始まりだ。これからボットの寿命を延ばす仕事に入る。そしてもし運がよければ、ボットを真空容器から取り出すことができるはずだ。それまでは、この万能の機械も理論上の存在にすぎない。だがこの日から、物事はよくなる以外にありえない。もっとも重要なポイントはすでにクリアした。次に超えるべき問題はあるかもしれないが、革命はすでに始まったんだ」
「オーケー。どうも呼び鈴がかなりうるさい。サイモンがいらいらしてるのかもしれないな。おそらくボットを安定化させるためのいいアイディアを思いついたんだろう。コンピュータ、記録を終了し、記録してくれ。ハイバネーションに入れ。おやすみ、よい・・・」

＊＊＊

西暦2016年　イギリス　オックスフォード

　サラ・キャロルは夢を見ていた。
　空を飛んでいる夢だった。そんな夢を見るのは初めてではなかったが、いつもの空を飛ぶ夢とは様子が違った。いつもだったらたいてい飛行機に乗っていて、ハンサムな彼氏が隣に座っており、何か飲みながら彼としゃべっているのだった。その後必ず何かとてもひどいことが起こるのだった——翼がぽっきりと折れたり、エンジンが爆発したりといったことだ。たとえば、テロリストが突然立ち上がり、導火線がばちばちと燃えている大きなダイナマイトをロード・ランナーのように振り回しながら、しわがれ声で何かわけのわからないことを叫びだしたりするのだ——そして飛行機はぐるぐると急降下しはじめ、確実な死へと向かって地面へまっすぐ落ちてゆくのだった。そこで彼女は悲鳴をあげ、もがきながらベッドの上で目を覚まし、実際には飛行機など乗っていなかったことに気が付くのだ。
　しかし今回は——この夢では飛んでいたのは彼女自身だった。暖かい気流に乗って、鷹のように高く飛んでいたのだった。サラは凍りついた荒野を見下ろしており、その氷の砂漠の上をとても小さい、蟻のような人々が行き来しているのが見えた。その人々をよく見ようと彼女は

高度を下げる。
　人々は汚らしいぼろきれを身にまとっていた。毛深く汚れたその体の背中に、槍や棍棒が入った重そうな鞄を背負っている。その姿はほとんど穴居人のようだったが、その声が風に乗ってサラが浮いている上空へと運ばれてきたとき、その言葉がほとんど英語のように聞こえることに気が付いた。強いRなどのアメリカ英語に見られる特徴があったのだ。サラはさらに高度を下げて、人々の言葉を聞き取ろうとした。
　穴居人たちはサラが見えないようだった――もちろん見えないのは当然だった。彼女は夢の中にいたが、人々はそうではないからだ。人々は目を覚ましていたのだ。彼らは時間も空間も遠く離れた場所におり、サラが見えるはずもなかった。しかし彼女は人々の姿をはっきりと見ることができた。それは目を覚ましているときよりもくっきりとしているようだった。
　サラは穴居人たちのすぐ後ろに足から着地した。彼女は雀のようにそっと着地できたので、その裸足にほとんど衝撃は感じられなかった。そしてサラはこっそりと盗み聞きするために近づいた。
　穴居人たちは小さな焚き火の周りに集まっていた。サラはそのときその人々が穴居人などではないことに気が付いた――彼らはサラと同じような普通の人々だったが、ちゃんとした衣類を着ておらず、髪がもつれ肌が荒れて、歯は黄色くなっていた。そのの爪は分厚くかちかちになっており、体中傷跡だらけだった。彼らは荒野に生きる人々だったが、野蛮人ではなかった。この人たちは、未開の環境に取り残されたかつての文明人なのだ、とサラは直感した。
　三人の男と女が一人いた。女性は長い金髪で、とても美しかった。サラはその姿を見て誰かを思い出しそうになったが、誰なのかはっきりと思い出せなかった。結局のところ、これは夢なのだ。そして夢はたいていその端々であいまいなところがあるものだ。
　その女が口を開いた。「もう疲れたから寝るわ」
　女は立ち上がり、棒を置いた。その棒の一番先には何かが突き刺さっていた。サラは身をかがめてそれを見ようとした。一瞬、見つかるかと思い怖かったが、この異邦人たちは明らかにサラを見ることができないようだった――その棒に突き刺さっていたのは、気味の悪い巨大な昆虫だった。こんがりと焼かれ、半分食べられたその姿に、サラは吐きそうになったが、それは馬鹿らしいことだと気がついた。これはただの夢なのだ。
　男たちは女性が立ち去ったときに顔を上げた。そのうちの若く、割と見かけのいい男が特に、女の後ろ姿を凝視していた。それは飢えた欲望以外のなにものでもなく、サラは微笑んだ。こんな荒んだ世界においても、男たちはいまだにわかりやすすぎたのだった。
　その金髪の女は積んである山から毛布を一枚取り出し、冷たい夜から体を守るように体に巻きつけた。男たちは食べつづけていたが――まるでその虫がマシュマロであるかのように噛み砕きながら――女は眠るために目を閉じた。サラは暖かい炎のそばからつま先立ちで離れて女に近づき、その寝床にかがみこんだ。
　その女性の顔は間違いなく知っている誰かだった。サラが触れるために手を伸ばすと、驚いたことにその肌は温かく、実際に彼女を感じることができた。
　突然、女性が目を開けてサラを見つめた――まっすぐ見つめるその眼差しは、肉体と魂を貫くようだった――そしてサラはなぜその女に見覚えがあるか気がついた。
　汚れて日焼けした肌、日光にさらされて脱色してしまった髪の毛の下にいたのは・・・彼女自身だった

サラはそこで飛び起きた。ぎらつく太陽の光が目に射し込んでいる。頭が痛く、気分が悪かった。世界はぐらぐらと回っており、まるで嵐の海のイカダに乗っているような気がした。彼女が実際に海を思わせるモノに横たわっていたことに気が付くまでしばらくかかった。なぜならそれは彼女のベッドではなく、トレバーが持っているウォーターベッドだったからだ。彼女は枕に頭を落としてうめき声を上げげた。

トレバー？

くそっ。

昨晩誰かと抱き合っていたことは覚えていたが、いったいなんだってこいつじゃなければならなかったのだろう？　彼女は長年このろくでなしにはうんざりしており、いくら甘い手口で言い寄られたとしても、こんな不誠実な手口には決してひっかからないと、自分に（そしてルームメイトたちに）誓っていたのだった。サラが左をちらりと見ると、予想通りそこにはよく知っている黒い癖毛の生えた頭があった。脂ぎったてかてかの黒髪だわ、と彼女は一人ごちた。魅力という言葉からこんなかけ離れたものが他にあるとでもいうの？

彼女は匂いを嗅ぎ、顔をしかめた。空気には明らかに酒と吐瀉物の悪臭がただよっており、サラはそれが自分のものではないことを切に願った。手で口をおおって深く息を吐き出す。

畜生。

吐き気を抑えるのがやっとだった。昨晩何を飲んでいたか知らないが、まだ気持ちが悪かった。どこかで吐いたのだろうが・・・そこで眠りに落ちなかったことでよしとしよう。それにここは自分の部屋でもないわけだ。まったくありがたいことだ。

トレバーが言葉にならないうめき声を上げて、仰向けになった。その彫りの深い横顔があらわになる。口を開けてよだれをたらしていた。この男に魅力を感じたことがあったのだろうか？　今その横顔を見ていて、そんなことはありえないと思った。まったく彼は色男だった・・・六フィートの体のすべてがそうだった。

ヨダレまみれの六フィート、と彼女は考え直した。トレバーは腹立たしいまでにうぬぼれたハンサムだった。サラはそういうタイプはもう苦手になっていた。まったく彼女のタイプではありえなかった。

彼女は唇を固く閉じると、息をひそめた。ここで起きられてもいいことはなにもない——なぜこの女好きの罠にまたしてもひっかかったか、くだらない言い訳をしなければならなくなる。「ぐでんぐでんに酔っ払ったせいだわ。明らかに間違いよ、じゃあね、トレバー」なんてことを言うぐらいだったら、このままさよならも言わずにここを立ち去っておくほうがましだし、今後避けられないであろう（ひっきりなしの）電話や手紙や突然の来訪をすべて拒否しつづけることが大事だ。

少なくともトレバーとは別々の大学に通っていたし、同じ場所でそう会うこともないだろう・・・普通は。昨晩彼女はアビングトンの川のフォリー橋まで出かけていったのだった——普段サラが行くところとは違ったが、そこでシェリーが連れてくるはずだったマグダレンの男たちと会うつもりだったのだ——たくさんビールを飲み、そしてそのあと何がどの順番で起こったのか記憶がはっきりしない。トレバーと会ったのは確かだ。何人かの友達に、彼氏のトレバーはハンサムねとからかわれていたような気がする。そしてトレバーを心の底から嫌っていたはずなのに、彼とダンスをして触られて、そして・・・。

なぜシェリーが助けてくれなかったのかわからない。たぶん自分のことで忙しかったに違いない。シェリーは運がよかったのだ。彼女が誰を選んだのかは知らないが、どんな男でもこのトレバーよりははるかにましだというものだ。
この色男トレバーよりは。
とにかくこのベッドからどうにかして逃げなければならなかった。奴を起こさずに、だ。彼女は肘を立てて隣で眠る男をじっと観察した。間違いなくすっかり眠りこけている。たぶん正午まで眠っていることだろう。いったい今何時なのだろう？
彼女は体を起こしてトレバーの反対側にあるベッドサイドの目覚し時計を見た。
もう正午だった。
いったいなんだっていうのよ・・・。
彼女はシーツをゆっくりとはがし、右足をそっとベッドから出した。
トレバーがうめき声を上げる。
サラは体を硬直させて息をのんだ。トレバーは右まぶたをぴくぴくさせながらまた静かになった。昨日彼はかなりの量を、サラよりもずっと多く飲んでいたはずだ。サラは片方の足を滑らせて床の上に置いた。よし、さあこれから――。
床板が大きくきしんだ。
「どおした？」
ああ、最悪。
サラは歯を食いしばって、トレバーに向き直った。彼は血走った目を細めて彼女を見ている。よだれが顎までたれており、どこからどうみてもただの気持ち悪い男でしかなかった。あのいかがわしい色男の魅力もどこかに消えうせていた。今ここにいるのは、むっちりと大きい不快なオスで、この週末を気持ちよく過ごしたければ、よほど注意して取り扱わなければならない障害物以外の何ものでもなかった。
「行かなきゃ、勉強があるから」頭を引っ掻き回してほかの言い訳を探した。「寝てていいわよ。一人で帰れるから」
「かえるう？」といいながらあくびをして、彼女に手を伸ばす。サラは飛びのくようにして、ベッド脇によろよろと立ち上がる。
そのときになって自分が尻まで丸裸なことに気が付いた。
彼は好色そうな笑いを浮かべて、上から下まで彼女を眺めはじめた。すばやくシーツをベッドから剥ぎ取り、裸の体に巻きつける。当然それはトレバーの誇らしげに屹立した彼自身をさらけ出す結果になった・・・硬くなっている。
彼の笑いは満面に広がり、さらに好色なものになった。
「トレバー、なんでもいいから体隠しなさいよ！」と叫んではみたものも、それが無理なことはすぐわかった。シーツは一枚しかない。
それなら自分だけでも隠したほうがよいと判断して、ほとんどグロテスクといってもよい光景に背を向けて、サラは散らばった衣類を集め始めた。まずあまりに小さすぎたパンティからだ。
「マス野郎」と口の中でつぶやいたが、聞こえたらやり始めかねないとサラは思った。

一番腹立しかったのは、ドアまで彼が見送りに来たことだった――何度もベッドにいるよう

に彼女は言ったのだが——ドアでトレバーはいかに昨晩の出来事が大きな間違いであったか、頭がおかしくなっていたかを述べ、理解してくれることを望んでいるなどと言ったのだった。

厚顔無恥にもほどがああった。サラはまるでこれを望んだのが自分であったかのように思われていることが信じられなかった。しかもやんわりと彼女を貶めようとしていた。

いいかげんにしてと言おうとして、そんなことをしても意味がないと思い直した。よりによってトレバーのような男にいっても、理解できるはずがない。自分のことしか頭にない男なのだ。だからサラは口を閉ざしたまま、眼差しに力の限りの軽蔑をこめてにらみつけ、ドアをその顔にたたきつけるように閉め外に出た。

道に出てから彼女は、結局のところ彼の策にはまっていたのだということに気が付いた。まるで捨てられた女のように振る舞って、冷静になれなかったのだ。おそらく勝利感とうぬぼれの中につかりきって、腹立たしいことだが喜んでいることだろう。しばらくの間、戻ってはっきり決着をつけようかと迷ったが、それは状況を悪くするだけだと気が付いてやめた。

とりわけトレバーに関することは、いつも悪くなる傾向があり、サラはいつも一分後には後悔するようなことをしてしまっていたのだった。

今回は同じ間違いはしないわ。その代わり奴のことは忘れ去って、いつもどおりの一日を過ごすのだ。

彼女は道を右に曲がり、アデレードを下ってウッドストック通りへと向かった。

並木道にはありがたいことに人がいなかった。世界は静まりかえっており、日曜日特有の気だるげな爽やかさがあった。もちろん日曜の午後のこんな早い時間に、タクシーをつかまえられるわけはなかった——ここはタクシーがどこにでもいるオックスフォードではないし、またロンドンでもなかった。あの街の良いところはそこだけだった——ここでは中央街までバスで行かなければならず、彼女のアパートまではさらに別の線に乗り換えなければならないだろう。

運がよかったのか、空は晴れ上がっていた。頭が痛みで割れそうなことを除けば、透明な春の風はサラの気持ちをすばらしくしてくれた。ほんの数分間のうちにサラは弾むような足取りで歩き始めており、トレバーのことを一時的にではあるがすっかり忘れていた。そして家に帰るのが楽しみですらあった。うまくいけば家でシェリーを捕まえて、例のトレバーの一件を止めようとしなかったことについて、ぴしゃりと言ってやることができるだろう。

それはもちろん、シェリーが家に誰かを連れ込んでいなかった場合だ。

サラについて言えば、彼女は男を家に連れ込むことについてはずいぶん奥ゆかしかった（そんなに頻繁だったわけでもない）。二人が共有している住居にサラが男を連れ帰るというのは、少なくともそれが三度目か四度目かのデートのあとであったし、サラの一番の親友であり四年越しのルームメイトであるシェリーに事前にその旨を通知しておくのが普通だった。だがシェリーは・・・人が悪いわけではないのだが、どうしてもそれが理解できないようだった。シェリーはよく男を共同アパートへと連れて帰ってきていた。その上、シェリーは大声を出すタイプだった。サラはシェリーの寝室のドアをノックして、少し静かにやるようにと言わないと眠れないことがよくあった。それはいつも赤面するようなことだったが、どうやらそういう邪魔を、シェリーは楽しんでいるふしもあるのだった。刺激剤のようなものらしい。シェリーは本当に変わった娘だったが、サラの世界で一番の友達でもあった。なので、彼女もそれ以上は追求しなかったのだ。

聞かなくてもよいことはあるし、答えなくてもよいこともあるのだと、サラはそう考えてい

た。
　市街地へと行くバスが到着したころには、サラは若返ったような明るい気持ちになっていた。春のきれいな空気に、暖かい太陽の光。濃い緑の草の香りと、咲き始めた花々。そういったもののおかげかもしれないし、単にトレバー事件はサラが心配していたよりも、ずっと小さい出来事だったのかもしれない。それはもうどうでもよい部類の出来事になっていた。とてもいい気分だった。頭痛だけを除けば。
　実際、その頭痛も治まりつつあったので、サラが感じていたのは猛烈な空腹感だった。家に帰ったらすぐにトーストを何枚か、卵とキノコそしてベーコンと一緒に焼いて、美味しい紅茶を入れることにしよう。
　胃が大きく鳴った。一時間前には、気分が悪くて病気になりそうだったのに。今彼女が一番したかったことは、早くシャワーを浴びたいということをのぞけば、ちゃんとしたイギリス風の朝食を取るということだった。かつて母が作ってくれたような朝食だ。だがそれはもう食べないと誓った朝食でもあった（トレバーとの付き合いを止めると誓ったように）。最近サラが自分に食べることを許してあったのは、バターのついてないクロワッサンだったり、カフェイン抜きの低脂肪カフェオレだったり、単なるハーブティー一杯ぐらいであったりした。研究室に向かう前の朝食はその程度に抑えてあったのだ。
　研究室。このことを思い出すと何か心が落ち着かなくなったが、サラはなぜなのかわからなかった。今日何かすべきことがあったのだろうか？　何か忘れていることでもあるのだろうか？　何があったにしろ、サラは思い出すことができなかった。
　まあいい、たぶん昨晩はほんの少し飲みすぎたのだ。回復するまで一日程度はかかるだろう。どちらにせよ、日曜日に出かけなければいけないような用があったわけではない。
　ないはずだ。
　ジョージ通りでバスを降りたあと、サラは残り道のりを歩いてゆくことに決めた。歩いていってもアパートまでは二十分ぐらいしかかからない。それに、単にこの気分を逃したくなかった。どちらにせよ次のバスを待たなければならなかっただろうし、サラにとって大事なことに、すばらしく気分がよかったのだった。サラは何かを成し遂げつつあるという不思議な高揚感にとらわれており、昨晩の不幸がどうでもよく思えてくるようだった。それはまるで今日サラの歩いてゆく先に、何かとても良い出来事が待ち構えているかのようだった。
　不思議ね、とサラは考えた。まるで今日という日が、新しい人生の最初の一日だと、運命付けられていたみたいだ。今日の晩から、あらゆるものが理解を超えて変わるのだ。もちろん、この考えはばかげていた。なぜなら明日の朝はいつもの月曜の朝だろうし、ほかの学生たちに混じって遺伝子研究室に向かい、二日酔いの後遺症と戦いながら、平凡な一週間をすごすに決まっているからだ。平日は仕事と勉強と睡眠を繰り返し、週末になったらちょっと羽目をはずしたりはするけれども、それもいつまでも続く大学生活の一部なのだった。
　そのはずなのだが・・・サラが頭の中にいま感じているちりちりとした感触は間違えようがなかった。
　母はいつもこれを <女の勘> と言っていた。祖母はそれを大げさに――年寄りはみなそうだが――霊能力だと言っていた。サラ自身は、この力は単なる知性の一端だと思っていた。意識がある事象を捉える前に、その兆しを無意識が解釈し、未来に起こりうる事象を特定のパターンに則って、一番可能性のある形で予測する力なのだと思っていた。それに、サラは自然科学

を学ぶ者ではなかっただろうか？

しかし、否定しきれない出来事というものもあった。この予測なのか予言なのか正体のわからないこの能力は、何世代にも渡ったサラの家族の血筋の中では、女性だけに現れるもののようだった。彼女たちにとって本当の驚きということは存在しなかった。たとえばトレバーがらみのくだらない出来事は、性衝動によるものであり予知の範囲には入らなかったのだ。たとえば、サラがオックスフォード大学の奨学金を受け取れることが決まり、アンドリュー医師の研究室で働けることがわかったときのことがある。サラはそれが現実のものになることを、一月以上前からはっきりと知っていた。それは事実であり疑うべきものではなかった。なので最終的な連絡が来たとき、それはむしろ期待外れというものであり、ずっと前から予想していたことだったのだ。

そして、そのちりちりとした感触は久しぶりに戻ってきたのだった。だがサラは今回それが何を意味するのかよくわからなかった。理由はなかったが研究室と関係した何かだということはわかった。だが直接関係があるわけでもないらしい。彼女は自分が研究室に向かうべきではないのだということを理解した。サラは家に帰らなければならないのだった。

サラは走り出したいような焦りを感じたが、そうしたら散歩の意味がなくなってしまう。サラが見飽きたことがない街の景観の上に太陽は燦々と輝いていて、ちりちりとしたただの予感のせいで、この天候を楽しめないのはいやだった。春の訪れを告げる爽やかさとともに、いつになく早い夏の予感も感じることができるようだった。しかし、速く歩きたい、もっと速く歩きたいという衝動は強烈で、彼女は無理やり自分を押さえつけねばならなかった。もしサラが一瞬でも気をそらしたら走り出してしまうだろう。

一体全体何が起こってるの？

サラはこれが悪い予感でないことを祈った。しかしもしそうであったなら、サラはすぐに気がついたはずだった。祖母が亡くなったとき、講義の途中のサラを激しく打ちのめしたのはその感触だった。頭を殴られたように感じた。サラはほとんど気を失いかけ、よろよろとホールを出てすぐに母親に電話したところ、母もそれを知っていたのだった。二人とも知っていたのだ――まるでその事実が空に巨大な輝く文字で描かれていたかのように――祖母が亡くなった、と。

時々それが怖いこともあった・・・このちりちりした感触が意味する直感、あるいは霊的予知能力が。祖母の死を知っていたことについて、なんら論理的説明ができないことはサラも認めざるを得なかった。そのあとサラはしばらくの間、気持ちの悪さを感じ続けた。ある人間が死んだ瞬間を、二人がまったく同時に想像したということ・・・。

まあいい、少しばかり急いでもかまわないだろう。だがほんの少しだ。どちらにせよ家まであと半分ほど歩けばいいのだから。それにサラの空腹はますますひどくなっていた。予知のせいで急ぐよりは、そっちを急ぐ言い訳にしたほうがいい。

そうしておかないと、自分のことが恐ろしくなりそうだった。

アパートに入り、ドアを背中で静かに閉めて鍵をかけた。シェリーは起きていないだろう。なにしろまだ日曜の午後一時半なのだ。あの娘は寝る事にかけては一流だった。もし一流なんて言葉があるとするならばだが、シェリーについてはそれが良く当てはまっているようだった。夕飯の時間帯までベッドでぐっすり眠る姿を見ると、それはほとんど技術の一種ではないかと

思いたくなる。それに、サラはしばらく一人で考えたかった。
　キッチンをひょいと覗き込むと、誰もいなかった。助かったわ。
　サラは流しの上の棚からやかんを出して、それに水を注ぎ始めた。
「さて、あなたは昨晩いったいどこにいたのかしら？」
　サラはびっくりしてやかんを流しに落としてしまった。落ちたやかんが大きな音をたてて、冷たい水をサラのシャツに撒き散らす。流しに落ちたやかんの口が上につきあがっており、それはサラにトレバーのことを思い出させた。
　いらいらしながらシェリーを振り返ると、バスローブを羽織った彼女がいた。その後ろには背の高い割とハンサムな男がほとんど裸のトランクス一枚で立っていて、シェリーの裸の肩ごしにサラを困ったように見ているのだった。
「シェリー、いいかげんにして」サラは言いながら水を止めて、腕組みをした。「そんな風に脅かさないでよ。まだベッドで・・・」と非難がましくシェリーの新しい彼氏をにらみつけた。「・・・寝ているのかと思ったわ。まだ日も暮れてないっていうのに、起きて何してるの？　灰になるわよ」
　シェリーはにやっと笑うと、男の髪の毛をくしゃくしゃにした。「何か着てらっしゃいな」と実に腹立たしい甘ったるい声で男に声をかけると、サラに向き直った。「女の子同士で話がしたいのよ」行きずりの男は退屈そうに肩をすくめると、二人を残して奥に消えた。
　シェリーはキッチンに入ると、流しからヤカンを拾い上げた。「あまり寝る暇がなかったのよ。九時ぴったりにお客が来てね。それであなたに電話したんだけど、また携帯の電源切ってたわね」

　サラは悪態をついて、ハンドバックの中の携帯（モトローラ）を探して引っ掻き回した。確かに電源は切れていた。たぶん昨晩のアルコールの霧の中のどこかで切ったのだろう。たぶんあの時、あれの前だ・・・。
　サラがそのフラットスクリーンを叩きつけるように操作すると、すぐにアニメ的なファンファーレ音が再生され、色とりどりのウサギが跳ねながら、片手に手紙を持ってくる動画が表示された。それはメッセージがいくつか残っていることを示していた。
「今朝の客は宅配便だったのよ――」サラが急いでメールボックスに目を通すあいだ、シェリーは続けた。二つのシェリーからのメッセージ、ひとつが（嫌になるわ）トレバーから、そして最後に匿名のメッセージ。たぶんこれも同情を引こうとするトレバーからのメッセージに違いない。「――あなた宛のね」
　サラは顔を上げた。シェリーは何かを隠すように両手を背中に回していた。「どちらの手か当ててごらん」
「シェル、私は遊びに付き合う気分じゃないのよ」
「あなたがはっきりと説明してくれるまでは駄目よ。そもそも私に説明するつもりがあったのかしら？」
「何を説明しろっていうの？」サラはこのルームメイトにいいかげんいらいらしてきていた。ぶり返した頭痛と、空腹感がそれに拍車をかけていた。
「あなたが遠くに行くってことよ」シェリーは心底腹立たしそうだった。
「なんですって？」サラはわけがわからずに叫んだ。「私はどこにも行かないわよ！」

「そう？」シェリーは左手を伸ばし、サラにクレジットカードの大きさをしたプラスティック製カードを手渡した。

サラはそれを受け取りながら、その表面に美しく輝くファーマテック社のロゴに気が付いた（心臓が跳ね上がり、サラの心は理解を超えた出来事についていこうと必死だった)。カードを裏返してみる。

何も書かれていない灰色のプラスティックの中心に、切手ほどの大きさをした銀色の四角があった。他には何の印もなく、何の文字も書かれてはいなかった。銀の四角の中にはファーマテック社の商標がホログラフで表示されており、サラはそれが何であるかすぐに理解した。それは親指の指紋でロックされた生体認証のクレジット電子チップだった。

しかもファーマテック社から届いたのだ。

サラはシェリーを再び見た。「これはいつ届いたの？　手紙とか何かついてなかった？」

シェリーは頭を振って、不機嫌そうに唇を尖らせた。シェリーがまた何か言おうとしたとき、サラの携帯が甲高い音を立てた。

「ちょっと待って、新しいメッセージが来てる・・・」また匿名のメッセージだ。トレバーからのものかと思っていたが、そこには点滅する緊急アイコンがついていた。モトローラが苛立たしげにその機体を震わせているのは、いままさに誰かがサラと連絡をとりたいと急いでいるからなのだ。

サラは携帯電話をかちりと開いて耳に当て、メッセージの小さなアイコンに指で触れた。

「おはようございます。キャロルさん」平坦だが耳に心地よい、喋り慣れた女性の声が響いた。「私の名前はアンナ・リヴェラです。ファーマテックの人事部の者です。」

そして計ったような間があった。サラは息をつくこともできずに、心臓がドラムのように鳴り響いているの耳にしていた。

「私はあなたをサン・ホセの生命技術研究所へと招待したいと考えています。できるだけ早くエリック・ミラー医師と面談をしていただきたいのです。私はすでにあなたにクレジット電子チップを郵送しました。それを使えば、ヒースロー発サン・ホセ行のファーストクラスのオープンチケットを買うことができるはずです。また、あなたの旅費はすべてそれで賄えるようになっています。近いうちにこのチップが届くはずです」

「月曜の朝一番にキャロルさんと会えることを期待しています。ただもしスケジュールをずらさなければ場合や、何か疑問点等ありましたらご連絡をください」

メッセージはそこで終わっていた。モトローラは柔らかいブザーでもうメッセージがないことを彼女に教える。サラは電話を耳から離して、ぱちんとそれを閉じた。

サラが一番の親友に目を戻すと、シェリーは彼女が何か、何でもよいから言ってくれるのを待っていることに気が付いた。この娘はこれを好意的に捉えようともしていたが、悩んでもいたのだった。

「面接をしたい・・・ってことみたい」サラは言った。考えてみると、サラ彼らが何を望んでいるのかはよくわからなかった。サラはファーマテックから来ている職員たちと話したことは一度もなかった。しかしファーマテック社員が、他の国際企業のスカウトマンたちと一緒に、飢えたハゲタカのように大学を飛び回っていることは知っていた。そして彼らはまるで栄養のために死肉をついばむように、能力が特に高い学生の周りに群がっていたのだった。

サラの研究はすでに公表されており、ファーマテック社には卒業生のうち何人かが就職して

いたので、ひょっとしたらそのうちの誰かからの推薦があったのかもしれない。
「誰が？」シェリーの声は張り詰めていた。「ファーマテック？　カリフォルニアの？　そこから郵便が届いたわけでしょ？　もうそこで働くことを決めたの？　私を置きざりにして？」
　シェリーはいまにも泣き出しそうで、サラは突然彼女に対して怒りを覚えた。シェリーは完璧に自分のことしか考えずに神経質になっていたのだった。これがサラにとってどんなにすばらしいことか、理解していないようだった。サラはファーマテック社と、あのエリック・ミラーに認められたというのに！　サラは彼の論文はすべて読んでいたし、彼の実施した実験は自分でも試してみていた。事実上サラはファーマテックを神聖視していたのだ・・・生物物理学者であれば誰でも、ファーマテックの業績がどれほど凄いものか良く知っていたし、サラも彼らを尊敬していた。そのファーマテックが彼女を面談したい？
　それなのにシェリーが心配していることは、自分が一人ぼっちになってしまうことだけだった。でもシェリーは友達ったし、サラにも彼女の気持ちがわからないでもなかった。二人は何年も一緒に住んでいた。サラもいつまでもシェリーに対して怒りつづけることはできなかった。
「向こうに住む予定はないわ、シェル」彼女はやさしく言った。「でも私は行ってみたいし、何を期待されているのか知りたいわ。ひょっとしたら、卒業後にケンブリッジにあるファーマテック研究所に就職できるかもしれない」サラはそういいながら自分の嘘に気がついていた。もし就職するということになれば、それはアメリカのサン・ホセになるだろう。しかしこの娘を心配させることはなかった。それに、卒業まではまだ一年半もある。確かなことはまだ何もない。
「それで、いつ発つの？」
　サラは眉をひそめて、今日発てるかどうか考えた。そうすると今朝の研究室の仕事はどうしたものか。とりあえず休ませてもらおう。運がよければ火曜日になる前には戻ってこられるはずだ。結局のところフライトには四時間しかかからないわけだし。
「そうね・・・今すぐ出るわ」とサラは言った。「今すぐよ！」
　そう大声で言うと、体に力がみなぎり、外に出るのが待ちきれなくなった。この生活の外へ、新しい生活を見るために出かけるのだ！
「いますぐ？」シェリーがそう聞き返す間も、サラはベッドルームに走って行き、どの服を持ってゆくべきか目録を頭の中で作り始めていた。「じゃあ日曜日の夕食はどうするの？　サラ？　サラ！」

　ほんの一時間半後、サラはヒースロー行の滑空列車（スリップレイル）に乗っていた。

　この列車はオックスフォード駅から二十分ごとに出発しており、発車してからすでに十五分が経過していた――時速三百キロで滑走するスリップストリーム列車ならば、三十分前に予約した午後六時発サン・フランシスコ行の飛行機には確実に間に合うだけではなく、余った時間を持て余すに違いない。サラは特にこだわっていなかったが、チケットはすでにファーストクラスで登録されており、その出発日も帰国日もオープンとなっていた。
　シェリーは彼女を見送りに一緒についてきた。まるでこれがシェリーにとっての旅立ちであるかのように、だんだん悲しげな表情になっていったのだった。シェリーはどんな状況でもいつも陽気な娘だったので、サラはちくりとした罪の意識を感じざるを得なかった。もちろん、

サラにとってこれは大きなチャンスかもしれないし、どちらにせよすぐに帰国する予定だったのだが、それでも気持ちは晴れなかった。
　私は彼女につらくあたるべきじゃないわ、サラはシェリーを抱きしめて、さよならを言いながら思った。シェリーは本当にすすり泣きを始めた。もし状況が逆だったら、私だってめそめそ泣いているに違いないわ。でも少なくとも、私だったら出発を祝ってあげるに決まってるわ。
「電話頂戴ね、必ずよ？」シェリーはコートの袖で涙を拭ってそう言った。それは二十分前、二人で家を飛び出てきたときに着ていたコートだった。
「私は火曜日に戻ってくるのよ、シェル」滑空列車はもうすぐ出発の時間であり、サラは早いところ乗り込んで、旅を始めたくて仕方がなかった。「出かけていることすら気が付かないわよ」
「今回はそうじゃないかもしれない」シェリーはこだわった。「でももしあっちがすごく良い職場で、山ほどの給料を出すって言ってきたらどうなの？　ノーと言ってくると約束できる？」
「そんな約束はできないってわかるでしょう、シェル・・・何が起こるのかによるんだから」
「わかったわ。何が起こるのかによるのね。私のことはどうでもいいんだ。私が何を願っているかなんて」
「シェリー、そんな言い方はしないで！」サラは頭を振って頭上の時計をちらりと見た。もう出発の時間だった。「そんなのずるいよ、わかってるでしょ。そんなのわがままだわ」
「私が？」シェリーの声は甲高くなり、頬が赤くなった。「いつも私のことを一番の友達だって言っていたくせに、運が向いてきて名声が手に入るからって、心変わりして私を置いてゆくっていうの？」
「そうじゃないわ、違うのよ、シェル、私は・・・」
　サラの声は大きく鳴り続けるブザー音で中断された。ドアが閉まるのだ。サラはシェリーににらまれながら、嫌々列車に向かって走り出した。「もう行かなきゃ」
「そうね」
「シェリー・・・」
　だが彼女はもう聞いていなかった。すでに背をむけて歩き出していたのだ。そしてドアが閉まりはじめて、サラは乗り込む以外になかった。
　彼女の背中でドアが静かに閉まり、列車がその速度を増してゆく間、サラはいま何かとても重大なことをしてしまったのだと考えざるを得なかった。友情と将来のキャリアの間で引き裂かれたサラは、後者を選んだのだ。
　そう考えるのはつらかった。だがもちろん、それは正しくなかった。断じて違うのだ。サラはただ面談を受けにいくだけだ。なにはともあれカリフォルニアを訪れるよい機会だし、日帰りではあるが外国に旅行できることになる。それにサラが何年間も尊敬してきた男に会えるのだ。自分の将来のキャリアについてよい展望を得ることだってできるだろう。サラがこの機会を逃すわけにはいかなかったことで、シェリーが捨てられたと思うのなら、そう思わせておくほかない。
　サラが戻ってくるころには、彼女の一番の親友もこんな言い争いがあったことなどすっかり忘れていることだろう。シェリーはサラが出かけていたことすら気がつかないに違いない。
　サラは荷物をしまって——その小さな鞄には着替えが一着と、化粧品と洗面用具一式が入っ

ていた――親切そうな老夫婦の反対側に空席を見つけて、そこに座った。
　老婆は旧型のモバイル端末で本を読んでおり、サラが座ると顔を上げて微笑みかけてきた。サラも笑顔で答えた。ツイードを着ていた老人は七十台後半で禿げかかっており、唇を引き締めたいかにも強情そうな男だった。老人はごつごつとした膝を手前に引いて、もごもごと何か謝罪しているようだったが、それがなんについてなのか、誰に対して言っているのかはサラにはわからなかった。

　列車はまだその速度を上げていた。オックスフォード州（シャー）の田園風景は音もなく後ろに流れ去ってゆき、平原が続いたあとのこぢんまりとした町並みは、また緑色の平原にとって代わられていった。放牧されている羊や牛たちは、度重なるひどい疫病により数を大きく減らしてはいたが、満足げに午後の食事を咀嚼しており、滑走列車がその脇を弾丸のように通り過ぎてゆくのに見向きもしなかった。サラは一瞬の間、自転車に乗った人が細く曲がりくねった田舎の道を走ってゆくのを見かけたように思ったが、それも後ろへと流されてゆき消えてしまった。
　窓の外に流れて行く世界のように、サラはいま自分の人生が奇妙なまでの速度で流れていっていることに気が付いた。この速さは彼女の想像を越えていた。ある意味、シェリーは正しかった。さまざまな変化が同時に起こっており、そのどれもがサラの理解能力の限界を超えていた。あのくだらない男の脇で、二日酔いの頭で目覚めてからまだ数時間しかたっておらず、そのとき心配だった出来事はサラが何とかできるものであった。そして今、彼女はアメリカのサン・ホセへの旅路についており、それはファーマテック社へと続いているのだ・・・。
　あの時と現在を隔てる五時間の間に、いったい何が起こりえたというのだろう？　いったいどんな魔法が、サラにかけられたのだろう？　そしてこれからの数時間と数日間の間に、いったいどんなことが起こるというのだろう？

　列車がヒースローに近づき、その速度を落とし始めたとき、サラは眠りに落ちていた。その震えるような夢の中で、彼女は断続的なイメージを見つづけていた。取り乱したシェリーと、哀れなぐらいおどおどしたトレバーが、サラの足に鉄の重りのようにしがみつき、遠くにある特徴のない真っ白な壁に取り付けられた扉まで、もがいて進もうとしている彼女の邪魔をするのだ。
　その扉の向こうに何があるかサラは知っていた。そこには救済があったのだ、その言葉が何を意味するにせよ、それがどのような形でもたらされるにせよ・・・後ろを振り返り、彼女を苦しめる二人の顔を見ると、その顔はまるで幽霊のようで、ちらちらと光りながら、前に見た夢に出てきたあの女性に似てくるのだった。あのサラ自身とそっくりだった女性、年をとって汚れてはいるが、より強くなったあの女性。それは長く寒い秋のあいだに、泥と落ち葉で淀んだプールの水面に写りこんでいる、暗いどこかの未来のようだった。

＊＊＊

　西暦2014年　カリフォルニア　サン・ホセ

「コンピュータ、個人日誌の記録を続けてくれ。エリック・ミラー、アクセス権限あり、僕の

の声紋のみ、パスワード保護」
「くそ、疲れたよ。疲れたが・・・いま夢中なんだ。どうにかして睡眠の必要性を消し去る方法があったら、すぐにそれを実行するよ。考えてみれば、まさにそれを可能にする薬の開発も、そんなに長くはかからないはずだ。世界は我々の足下に、ファーマテックの足下にひれ伏すんだ」
「今日我々は神になった」
「芝居がかってるって？　いや、僕はそうは思わない。最初の段階は完了した。不老不死はすでに僕らの手の届くところにある。僕らは今日初期治療の一環として、ガンと診断された研究所の職員にテストを実施した。当然彼女はガンについての宣告はすでに受けており、テストを手伝うことについては満足しているようだった。もっとも僕は彼女の動機はそれほど献身的なものではないと思うけどね。可能になった奇跡の治療を拒むようなやつがどこにいる？」
「あの小さな連中がガンを貪り食い尽くすまで、五十三分間かかった」
「もうガン組織はひとかけらも存在しないし、彼女はすでに完全な回復を示している。次の段階は、失われた組織を作り直し、内臓を修復し、体全体を作り直すことだ。いや、そこで止まる必要があるだろうか？　そこからもう一段階上に、僕らを完璧な存在にするために進化させたっていいんだ」
「まあどうやら、それがそもそものプランだったらしい。しかしそれすら計画の一部に過ぎない。ドレイクはいよいよ <箱舟計画（アーク・プロジェクト）> というものについて、僕らに話し始めた。ここ数年間、噂としては聞いてきたものだ。あの偏屈の年寄りが嘘を言っているのでなければ・・・つまり、それを形容する言葉はまさに聖書的ってことだ。だが、これだけの規模の計画については、見かけに騙されてはいけないだろう。そうだ、このプロジェクトは狂っている。間違いない。完全で徹底的に狂っている。僕はドレイクがそれをはっきり知っているんだと思う。奴はうまくやるだろうし、馬鹿じゃない。今僕たちが持っているこの力・・・そして今から三四年後に得ているであろう力を使えば・・僕たちは自分たちの運命すら支配することができる。それをやらないのはそれこそ気が狂っているということだ。僕たちに他の道はない。この世界はどのみち地獄のようなありさまになるんだ。だったら僕たちが本当に価値あるものを保存しておくべきなんだ。」
「僕たちはこのゲームで先に進んでおくことができるし、僕たちにひいきになるよう動くこともできる。だったら僕たちに支配権があるうちに、自分用のアーマゲドンをこしらえればいいんじゃないか？」
「こういったことはすべて遠い先の話だ、もちろん。ただそのための準備はすでに策略として始まっている・・・地下工事も政治的なやりとりも。だが僕たちの研究所についていえば、実験用のネズミが一番大事だ。僕ちはそれからは距離をおいておこう。ただスタッフを増員し、いちばん優秀な学生たちを就職させる必要がある。近い将来それを公表することで、最高の候補の中から一人一人選ぶことができるはずだ。そしてドレイクの戦略が届けられた瞬間に、それを実行できるようにしておく」
「それまでは、それが最初に始まったときから続けているこの仕事をそのままやりつづけるしかない。もう二十七年だ。僕自身にもやりたいことは山ほどある。もう障害物はない。今が前と違うところは、僕が何に向かって働いているのか知ったことだ。それがいい」

「腹立たしいのはこれが最高機密に関することで、他に漏らすことができないことだ・・・研究部でこれを知っているのはサイモンぐらいだが、最近僕たちの関係は良いとはいえない。僕がドレイクに直接、空気中で生まれた最初のナノ・ボットの報告を持っていってからだ。奴らが僕たちに何か言ってくる理由は、僕たちを必要としているからだ。ドアが閉じられ、すべての地獄が世に溢れ出す時のために。だが今は誰一人としてそのことを知らない。委員会と、中心となる人物だけだ。少なくとも今は」

「まあいいさ、準備がすべて整ったら、奴らも職員の中から自分のお気に入りを選んで、プロジェクトに加えることだろう。それまでは・・・一言でも、僕がべらべらしゃべるわけにはいかない」

「だからこうして機械に喋っている」

「もし僕がこうして喋ったことを記録して保存していることがばれたら、ファーマテックは怒り狂うことだろう。だが、僕だって保身はしなきゃいけない。おそらく、これを聞くのは僕一人だろうが、一応安全策は打っておきたいんだ」

「ドレイクの五ヵ年計画に何か反論はないのかって？　いや、特にないね。いま僕はそんなに人間が好きなわけじゃない。人間は腐ってるよ。人間は死に値する、一人残らずだ」

「コンピュータ、これを保存せよ、そして・・・」

「考えが変わった。いったい僕は何をしてるんだ？　僕は不老不死をチップにばくちを打つつもりはない」

「コンピュータ、このメッセージ全体を削除するん——」

第三章

西暦1949年　ロシア

それは彼の予想よりも、遥かに容易で驚くほどだった。少なくとも、そう信じさせられていたよりは簡単だった。ソビエト連邦を構成する衛星国家と、西を隔てていた鉄のカーテンをくぐりぬけることは、簡単なことだったのだ。

実際のところ、この旅で最も困難だったことは、肉体的なものではなかったし、それについて言えばまだ始まってもいなかった。これまで一番緊張し、神経をさかなでされた時間は、モスクワからレニングラードへの長い車旅だった。

ちゃんとした旅券等はそろっており、きっちりと判を押され署名されたものを持っていたが、職場に戻るのが丸々二日後ということになっている彼の個人的な特徴とその名前が何らかの理由ですでに知れ渡っており、ＫＧＢがこぞって彼のことを向こうで待ち受けているという危険はやはりありうるものだったからだ。すでに指名手配されているかもしれなかった。この精巧な偽造旅券を持っていたとしても危険はあった。ローマンはレニングラード工学大学で開かれるセミナーに参加することになっていたが、それは投獄され監禁されたのち、拷問を受け死に至るという運命から逃れることを保証するものではないのだ。

しかしそのドライブは、長くつらい時間ではあったが、その間ほとんど何も起こらなかった。彼は最初の一夜を、ハンドル越しの道に対向車が現れるたびに、サイレンが鳴り響く想像に脅かされながら過ごした。ようやく朝になって、道が運送トラックやバスで混みはじめてから、彼はどうやら自分がモスクワを気づかれずに脱出できたのだと感じられるようになった。

しかしまだレニングラードははるかに遠く、彼は本当に必要なときにしか車を止めなかった。たとえばガソリンを給油したり、食事をとったり、トイレなどの理由だ。たっぷり二日二晩かけて、彼はようやく旅の最初の区切りまでたどり着いたのだった。

彼はまだ一度も眠ってなかった。とてもではないが安心できなかったし、時間にも余裕はなかった。そしてようやく二日目が終わるころにレニングラードに到着し、彼は頭上の空に黙って感謝をささげたのだった。

打ち合わせどおり、ローマンは車を目立たない駐車場に乗り捨てた。もちろんその車は自分のものではなかった。どちらかというと平凡な外見の、灰色がかった緑色の1947年型ＧＡＺポベダだった。あの寒い夜、彼は打ち合わせどおりモスクワのとある場所でこの車を見つけたのだった。

その車と彼には何の関連性もなかった。運がよければ、その二つの点を結べる者は現れないだろう。もし調査が開始されるとしても、警察は単にこの車は盗まれ、そして捨てられたと考えることだろう。それはある意味正しいのだろうが、その盗難届が出されることは決してないだろう。なぜならその最後の所有者は死んでおり埋葬されていたからだ。

万が一のチャンスもないはずだった。

車を乗り捨てたあとは、すべて驚くようにスムーズにいった。クレムリンの影から安全に逃れた今、このときのことを思い出すと、ローマンは実際これはもっと難しかったはずだと、思

わずにはいられなかった。あんな重要な研究成果を手にもったまま、どのような忠実な市民をも反乱分子と疑ってかかる国家から逃げ出したのだ。その上、彼は自分の命をまったく素性のわからない異邦人の手にゆだねたのだ。まったく、あの逃亡の筋書きはもっと危険なものであってもおかしくなかったはずだった。

しかしローマンは自分の運のよさに感謝するべきだと思っていた。しかしその逃亡の中での出来事が、いまも彼を悩ませるのだった・・・。

ローマンが待ち合わせ場所であるレニングラードのエルミタージュ国立美術館に着いたのは、約束の時間よりほんの数分前のことだった。

彼は荘厳な雰囲気を持つその建物に入り、さまざまな絵画が展示されている二階へと向かった。二階の展示はこの過酷な時代の中においても、芸術という観点から見たロシアが、西欧諸国に決して劣っていないことを証明するものだった。

美術館はさほど混んでおらず、実際のところがらがらだった。ローマンは内心自分の運の悪さを呪った。より人が多いほど、尾行者をまくことが容易だからだ。しかしこの状況では、誰かが仮に尾行しようとしていたにせよ、目立たずにするのは無理だろう。見知らぬ人物がいれば、疑わしいということになる。どちらにせよ誰一人、彼の知人などここにいるわけがなかったのだが。

階段を上ってから左に曲がる。ローマンは前にこの美術館に来たことがあった。それは数年前のことで、待ち合わせ場所についてよく知っていた。その場所を選んだのは彼自身だったからだ。彼はカンディンスキーの展示室へ入った。

彼は展示室の中央で立ち止まり、迷ったふりをしながら注意深くあたりをうかがった。

彼は一人だった。相手もまだ来ていないようだ。

左手を見ると、目の前にはカンディンスキーの「冬の光景」が展示されていた。だがまだローマンは考え事を続けていた。これは旅の終わりなのだろうか。ひょっとしたら、いまこの瞬間にでもたくましい腕が彼を捕らえ、真っ黒な車に押し込められ、そのままモスクワまで連れ戻されるかもしれないのだ。そのあと、石のような表情の尋問官たちから面談（インタビュー）を受けるのだ。そして彼はすべてを話し終わるまで、何日も何日も悲鳴をあげつづけることになるに違いない。

ローマンはぞっとして、額縁の中のキャンバスに意識を集中させた。

彼はワシリー・カンディンスキーの愛好家というわけではなかった。どちらかというと伝統主義的なところがあったローマンは、愛国者であることを拒否するかのように、14世紀や15世紀の南ヨーロッパのルネッサンス絵画を好んでいた。ただ、ここにある芸術家の作品は、モスクワやレニングラードじゅうにある役所のあちこちに飾られている連邦公認のモダン・アートなどと比較すれば、確かにあらゆる面で優れていた。恐ろしいほどに画一的で、陰気で貧相な連邦のプロパガンダに満ちている、才気と愛国心を装ったいわゆるアート作品と比較してみればよい。

ここにも共産主義（コミュニズム）の失敗があった。コミュニストたちは、そもそも人民の敵であるスターリンその人が好む作品を、連邦が主張する主義主張のための作品を作るように、芸術家に命令を出せると考えたのだ。彼らはさらにこう考えた。ロシアの才気溢れるアーティストたちは好き

なときにインスピレーションを得ることができ、かつ共産主義に捧げるためにいつでもすばらしい作品を制作できるのだと。

　できるわけがなかったのだ。同志カンディンスキーの絵画は、役所の壁に飾られている何の価値もないガラクタに比べれば、ある程度はましといえるのかもしれないが、ローマンの眼にはすべてけばけばしく映った。今、目の前にある作品も含めて。

　しかし、この芸術家の才能を否定するつもりはなかった。ローマン自身、ある程度油絵をたしなんだことがあるが、彼の作品はほとんどが風景画やたまに静物画を描く程度で、遠い昔の情熱を思い出すためだけに、かつての恋人のヌードを描いてみたりはしていたのだが、作品はどれも退屈なものだったし、おそらく技術はそこそこあったのかもしれないが、魂か想像力のどちらかが欠けていたのだった。カンディンスキーは、技術も芸術性も、両方を持っていたということだろう。

　ローマンはキャンバスに近づき、絵の具の匂いを嗅ごうとした。キャンバスの表面はとてもすばらしいものだった。山頂や谷が、引き伸ばされた布にブラシで描きつけられている。何年も鍛錬をつめば、ローマンもひょっとしたらこれに近いものを作れたかもしれない。いや、彼の才能は別のところにあったのだろう。

　ホールに足音がこだました。

　誰かが近づいてきていたのだ。

　自分の振る舞いのわざとらしさに非常に敏感になっていったローマンは、なるべく何気なく振り返り、どういった来訪者が来たのか興味があるだけだというふりをした。

　それは男だった。これまでの打ち合わせでいつも姿を現した女性ではなく、男だった。男は美術館の他の客と変わらない服装をしていた。四十代後半ぐらいのその男は特徴のないスーツを着て、黒いくせ毛を短く刈りそろえており、その肌はよく日焼けしていた。男は杖を持っており、その杖の頭は鷹の形をしていた。

　ローマンは再び考えずにはおられなかった。これまで数ヶ月の間、何度も考えたことだった。いったいこの謎めいた支援者たちは誰なのだろう？　アメリカ人？　イギリス人？　ドイツ人ではないことは明らかだ。そんなことは認めるわけにはいかなかった。彼らが誰であったにしろ、その力と影響力は巨大なものだった。たとえば鉄のカーテンを超えて、なおかつ力を失わないその連絡網。そしてスターリンの迫害に日々おびえて暮らす役人を、自分たちのために働かすことができるその力。これから彼をレニングラードからフィンランドのヴァーリマーまで運び、そこから比較的安全なスウェーデンまで連れてゆける力。

　最初の数回のコンタクトでは、彼らが実際には国家保安委員会、ＫＧＢではないかという考えたこともあった。彼を罠にはめようという目的だ。しかし彼は賭けに出たのだ。そしてどうやら賭けには勝ったようだった。結局、委員会（コミテット）がここまでやるだろうか。自分の国を裏切って逃げ出すのだと、血判入り書式で彼に自筆で書かせたりするだろうか？　そもそも物的証拠はあるのだ。それは自分の研究所を二日前に出たときから肌身はなさず彼が持っているものだ。

　否、彼らは偽者ではない。そうであるはずがない。だが、ではいったい誰なのだ？

　彼が最初にコンタクトを取った女性は、その質問に答えるのを避けた。それはほんの数ヶ月前のことだ。

「ローマン・ドラゴヴィッチ、あなたが知る必要はないわ」と彼女は言った。「どうあなたに

われわれが答えようとも、何ひとつ変わらない。あなたはソビエト連邦をその研究とともに去らなければいけないし、急がなくてはならない。われわれはあなたのその行為によって直接利益を得るわけではないけれども、あなたの逃亡が与える影響は大きく、かつそれは自由な世界の未来にとって非常に重要なことなのよ。理解していただけますか？」

彼は自分が嘘を言っていると知りつつ、わかったと答えたのだった。あの時わからなかったことは、今をもってしても理解できないまま残っていた。だがそれでも彼は行動に移ったのだ。いったいなぜだろう？　欲望や恐怖のため、それとも見当違いの義務感のため？

おそらく、ローマンは考える、その三つのすべてが理由なのだ。

見知らぬ男は近づいてきて、カンディンスキーを見るために立ち止まった。彼はローマンとほどよい距離を保っており、ローマンを邪魔したくないと思っているようだった。長い一分間が沈黙のうちに流れていった。そして男は話し始めた。

「この色の使い方は非常に秀逸だと思いませんか？　特に冬の風景を描くのにこれはたいしたものですよ」男の声にあるかすかな発音の違いは、南東地方で交わされる挨拶を思わせた。ただローマンはそれがどこなのか見当もつかなかった。彼の人生は、戦争当時から現在の研究所生活に至るまで、薬瓶と本ばかりのものだったのだ。

「そうですね」とローマンは、打ち合わせどおり台本の台詞を一文字ずつ追いながら返事をした。「この温かい色合いが、寒い季節と鮮烈な対照をなしていると思います」彼は男に向き直った。男はかすかな笑みを唇の端に浮かべながら彼を見ていた。「ほとんどのことに言えることですが、自然は対照的なもので満ちていますね」とローマンは、暗号に追加して意見を述べた。

男はうなずいた。どうやらローマンの意見について何か考えているようだった。

「このカンディンスキーの冬の風景画は謎の多い絵画だ。何人かはこれが彼の作品ですらないと主張し、代理が書いたのだという。私はそのどちらでもかまわないと思う。なぜなら作品とは芸術家を抜きにして成立するものだからだ」男はそういうとローマンが左手に持っているブリーフケースに目をやった。「さて、ドクター・ツボォフ、準備はよいかね？」

ローマンは深く息を吸い込んだ。これがそのときだった。もしこの謎だらけの支援者たちが実際はＫＧＢだとしたら、ゲームが永久に終わるのはこの瞬間になるだろう。

しかし実際にそうであったとしても、もう関係ないことではあった。彼は自分の研究をここレニングラードに持ってきており、ここで会う男は彼を国外まで運んでくれることになっているのだ。もし最悪の事態になった場合、彼自身の行為に対する弁明をすることはもはや不可能だった。物事は数日前から雪だるま式に大きくなり、彼の手をすでに離れていた。

そしてローマンはかすかに頭を動かしてうなずき、単に「準備はできている」と答えた。

それに続く十二時間は、あとで思い出そうとしてもよくわからなかった。彼は男と一緒に歩いて出発したのだった。男はヴァーニャと名乗った。それはイヴァンの愛称だった、偽名であることは明らかだった。美術館を出て、駐車されていたラダに乗り込むと、車の前席には特徴の無い顔をした男が二人座っていた。

ＫＧＢの巧妙な罠ではないのかという疑いが、再度頭をもたげた。彼が錆びついた灰色の車体の後部座席に体を押しこむと、ヴァーニャはそのあとに乗り込む。車は街を出発すると西へ

と走り始め、それに伴い彼の恐怖感も少しずつ薄れていった。もし彼らが委員会(コミテット)の人間だったら、彼はそのままレニングラードの本部に連れていかれたことだろう。
　太陽が地平線に沈みながら、冬の田舎を美しい光に染めていた。木々や丘陵に当たるその光はまるで景色に魔法をかけているようだった。彼らはほとんど無人の田舎道を北へ、そして西へと海岸沿いに進んでいった。
　自由への道は開けており、監獄はその先にはありえないのだ。

　まだ朝も早い時間、夜明けより少し前にローマンは目覚めた。彼は自分が眠りに落ちたことに驚いたが、もっと驚いたのが彼らの車がまだ走りつづけていることだった。
　前部座席の二人の男は、彼が車に乗り込んでから一言も喋らなかっし、自己紹介もしなかった。またヴァーニャも、彼が思い切ってしてみた質問に簡潔に答えただけだった。ローマンは自分が真夜中過ぎのどこかで眠りに落ちたのだろうと思ったが、今自分たちがどこにいるのかまったくわからなかった。ただ前に言われたことから考えるに、おそらくフィンランドとの国境付近なのではないかと思えた。
　目覚めてから三十分たらずだっただろうか。彼はまだ頭がよく働いておらず、体は二日酔いのように重く、奇妙な感触があった。すると車はこれまでの道を脇にそれて、車の轍がついたところを走って深い松の森へと進み始めた。雪が両側に高く積もっており、道は明らかにあまり使われてないようだった。少なくとも自動車はあまり走ってはいないらしい。
　森の中を何キロか走ったあと、自動車は止まった。ヴァーニャはローマンに下りるように言った。
　冷たく暗い夜の中に足を踏み出すと、粉雪の中に足首まで埋まってしまった。ヴァーニャは後ろに回ってトランクを開け、ローマンもそれにならった。体を抱きかかえるようにして震えを抑える。ここでは冬はその真っ只中で、街に軽く外出するための服装で耐えられるような気候ではなかった。
　ヴァーニャは大きな帆布バッグをトランクから出した。
「食料と衣類だ」と説明する。「ここからは二人で歩くことになる」
　トランクをばたんと閉めて、ボンネットを拳で叩く。すぐにラダは発車し、速度を上げながら森の中へと滑るように消えていった。やがてテールライトも見えなくなり、二人は灰色の朝霧の中に残された。
「国境を越えて一緒に来てくれるのか？」ここからは一人で行くと思っていたローマンは不思議に思って聞いた。
　ヴァーニャは頭を振って、冷たい笑みを浮かべた。「いや、これはあんたが自分でやりとげなければいけない旅だ」そういうとバッグを開き、大きな毛皮のコートを二着取り出し、ひとつをローマンに投げてよこした。自分でもコートを着ながら「だが、しばらくの間は一緒に行こう。私たちの・・・投資した人間の安全を確保するためにな」
　そういうとローマンに片目をつぶって見せる。これまでの厳格さと相反するその気さくさはローマンを驚かせた。ヴァーニャはバッグからさらに二足の雪靴、手袋と帽子とスカーフを出す。衣類を身に付けてから、彼は大きな松の木の下に穴を掘り、そこに空っぽのバッグを埋めた。

すると我々の証拠は消えたわけだ。ローマンはそう考えた。少なくとも春も遅くなるまでの間は。それにいったい誰が私をここまで探しに来るというのだ？

それはぞっとするような考えではあった。この時点から、彼は完璧に消失することになるのだ。これまでの共犯者たちのうち、誰かが喋らないうちは、だ。しかしそんなことはたとえよっぽど脅迫されたとしても、ありえそうになかった。たとえばヴァーニャは拷問されたとしても、秘密を守るために死を受け入れるタイプの男に見えた。ローマン・ドラコヴィッチ・ツボォフ医師に何が起こったか知るものは誰もいなくなる。もちろん奴らは推測するだろうが、真実を知ることはないだろう。

数分後、夜が少しずつ朝へとその姿を変えてゆく中､二人は森へと出発した。足にしっかりと履いた雪靴で注意深く新雪の上を歩いてゆく。

ヴァーニャは武器を持っていた。軍隊の自動ライフルだ。狼用だ、と彼は説明したが、もし必要であれば人間相手にそれを使うことを決してためらわないだろう、とローマンは思った。ヴァーニャの物静かな態度と、まっすぐな姿勢はよく訓練された兵士のそれだった。ローマンはあのブリーフケースを肌身はなさず持っていた。その中には全財産と彼の未来が入っていたからだ。

この一連の出来事が始まってから、ずっと気になり続けていることがあった。それはこの新しい仲間たちが、直接の見返りは要らない、としつこく主張し続けていることだった。彼が西へと安全に逃亡してからも、だ。

彼らはこのブリーフケースの中に入っているものの正体をよく知っており、それは最初の打ち合わせから明らかだった。しかしそれにも関わらず、今後ローマンが面倒を見てもらうことになるスウェーデンの大学には、その研究のいくつかを提供したらどうかと提案するだけで、例のものについては秘密にしておくようにと言ったのだ。例のものこそはスターリンが、何年ものあいだ喉から手が出るほど欲しがっていたものだった。それが無くなったことに気がついたとき、スターリンは悪態をつくだけではおさまらず、その次の週にはローマンのかつての仕事仲間の全員に死刑を宣告することだろう。報復の恐れがなくなり、それから直接利益を得られるようになるまで黙っておくことだ、と彼らはローマンに言ったのだ。

「それじゃあ、いったい何が望みなんです？」ローマンは最初のコンタクトのとき、恐ろしく美しいが、腹立たしいほどに素性のわからない女性にそう聞いた。三ヶ月前のことだ。彼女は昼休みに公園で鳩に餌をやっていた彼に近づいてきたのだった。

「あなたをこの国から連れ出すことよ」その言葉使いは完璧で、発音は軽やかだった。「そして、あなたの研究の成果を、書記長とその関係者から奪うためよ。社会主義国ロシアが世界で最も強大な国になることを防ぐことが狙いなのはわかるでしょう」

この人々がアメリカ人ではないのかと思ったのはこのときだったが、やがて時間がたつにつれ、その推測もあてにならないことがわかった。アメリカ人だったら、自分たちの国へと彼を連れて帰り、その研究成果を奪って自分たちの上司に提出すればよいだけの話ではないか？もちろん、そんな条件が提示されていれば、彼は合意しなかっただろうし、ひょっとしたら初期の段階で気が変わり、この女性の、いやむしろスパイの口説き文句を一言一句報告したかもしれないのだ。彼はスターリンが自分の研究をどう使うということに恐れを抱いていたが、アメリカ人も信用していなかった。

しかしその代わりに彼らが提案してきたことはスウェーデンへと行くことだったのだ。そこ

で彼は姿を消し、もちろん新しい名前と偽造の身分を使って、大学の庇護の下で生活することになるのだ。おそらくそこで彼は自分の研究を、政治的なイデオロギーに捕らわれずに続けられるだろう。
　しかしいまこれまでにないほど、この連中の正体が何なのか彼は知りたかった。彼の逃亡による政治的かつ経済的な利益がないとはっきり知りつつも、自分たちの命を賭けて彼を助けたこの人々のことを・・・。

　雪に膝まで埋まりながら丸一日旅をするのは恐ろしい経験ではあったが、彼を元気付けるものでもあった。
　不思議なことだった。ローマンはこれまで決して活発なアウトドア派ではなかったからだ。それは彼の母国のプロパガンダが盛んに推奨しているものでもあったのだが、彼はむしろ読書しながら気持ちよく夜を過ごすほうを好んだ。ドストエフスキーや、ひょっとしたらヘミングウェイまでも。彼は後者については、とあるイギリス人からもらった違法コピー本を所持していた。火が燃え盛る暖炉の前で、アメリカ黒人のジャズを蓄音機で聞きながら、フランス産のリキュールで体を芯から温めるのだ・・・。どう考えてもそちらのほうが、危険な冬の真っ只中にロシアの森をこそこそ歩くよりはずっと良いはずだった。しかもただの冬ではなく、ロシアの冬なのだ。また国境を守る警備兵にいつ発見され撃たれるとも知れなかった。
　だが彼はこうして歩いてゆくのを楽しく感じていた。ある程度までは。結局のところ、彼は狼の毛皮のコートをまとっており、体は一インチも残さず温かく覆われていて、しかも粉雪の上を快適に歩くことのできる雪靴を履いていたのだった。
　凍りつくような風と、同行者との気まずい沈黙がなければ、健康的で楽しいものだと言えたに違いない。
　ヴァーニャがようやく足を止めたのは、長い一日が終わりかけたころだった。「私が同行できるのはここまでだ」
　同行者としては楽しい相手ではなかったが、ローマンはそれでも気が沈むのを感じた。彼はこの森の中に一人で取り残されることを考えるとぞっとした。夜になればおそらく狼が出るだろうし、地図やコンパスもなく、方角もわからないまま、どこにあるのかすらわからない目的地まで身を守ってくれるはずだったガイドがいなくなってしまうのだ。
「ヴァーニャ、できるかどうか自信がない」ローマンはそう答えた。毛糸の手袋で鼻を拭い、ブリーフケースを雪に置いて腕を伸ばし、かちこちになった指を揉んだ。「目的地まで安全に案内してくれると思っていたよ、この中では」ローマンは二人を囲む雪で重くなった木々を指差した。「まだ安全じゃないだろう」
「心配はいらない」男は答えて、下り坂を指差した。ローマンの見るところ、それは二人が立つところより北の方角のようだった。「この丘のふもとに家がある。その家に男が住んでいる。彼はイヴァンという名前だ」
　ローマンは笑った。「またその名前かね？」
「ああ、だが今回のは本物だよ、ドクター・ツボォフ」彼は微笑み返した。「男の名前は本名だ。彼はあなたが誰であるか知らないが、ちゃんとしたもてなしをしてくれるだろう。きわめて大事なことだ。彼は国境まであなたを連れてゆき見送る役割を果たすだろう」少し間があって、もはやヴァーニャではない男は空を眺めた。「明日だ。今晩は、彼の小屋で寝るといいだ

ろう」
「彼がそこにいて、私を助けてくれることに間違いはないだろうね？」ローマンは不安を覚えずにはいられなかった。結局のところ、このもう一人のヴァーニャがもし不在だったり、助けてくれないような人物だったら、彼は確実に凍死することだろう。
「絶対に大丈夫だ。最悪の場合でも、あなたが新しい生活を始めるまでの間は私たちが見ていることを覚えておいてほしい。ドクター・ツボォフ、私たちはむざむざとあなたを捕らえさせたり、死なせたりはしない、次に」彼はそういいながらコートから二つの封筒を出した。片方は封がされており、もう一通はそうではなかった。「この封筒には旅券と身分証明書が入っている」と封をしていない封筒を指さして続ける。「もう一通は」彼は封がしてある封筒を指でたたいた。「さっき話した男に直接手渡してほしい。これが彼の報酬であり、指示もこの中に書いてある。重要なのは、これを手渡す前に封を決して開けないことだ。わかったかね？」
「なぜ？」
　同行者はため息をついた。「あなたはこれまで私たちを信じてくれていた。私たちは約束をまもった。いったいどういった理由で私たちの動機や仕事のやり方にけちをつけるのかね？」
　驚いて、ローマンは恥ずかしさで穴に入りたくなった。そのとおりだった。彼らは何も見返りを求めずに、たくさんのことをしてくれたのだった。それに報いるために彼がいまできることは、この試練が完全に終わるときまで彼らを信じることだった。
　彼は封筒を受け取り、落ちないようにベルトにそれをはさむと、差し出された手をとって握手した。
「幸運を、ローマン・ドラコヴィッチ」ヴァーニャは悲しげな笑みを浮かべて言った。「あなたの手には人類の未来がかかっている。もうはっきりとわかっていると思うが」
　ローマンは突然、このヴァーニャが、夜を通して旅に同行してくれたこの男が、単なる奇妙な外国人以上の雰囲気を持っていると思った。それはまるで人よりも大きな何か、大いなる謎をその身に秘めた存在ではないかと思えた。天使か、あるいは悪魔か。
　その宗教的なイメージはローマン自身を驚かせた。そういったものの存在を考えたことは一度もなかったからだ。また彼は神話やおとぎ話の信憑性をいまも疑っていたのだが、それにもかかわらず彼の同行者は何か説明できないもの、人より大いなるものなのではないかと思えたのだった。それは間違いないとローマンは思った。
「ありがとう」とローマンはたどたどしく、さきほど疑った自分のことを再度恥ずかしく思いながら、助けてくれたことに感謝をしようとしたが、ヴァーニャはすでに去ったあとだった。彼は足早に、立ち並ぶ木の幹と重みで垂れ下がる枝の林の中へと、昨日旅を始めた方角へと帰っていった。

　もう一人のイヴァンは、なめし皮のような肌をした、無口なごつい男だった。彼はこれまでの人生をずっとこの森の中で過ごしており、一切の政治的な出来事とは無縁の生活を送ってきたようだった。同じように床屋とも無縁だったらしい。ローマンが現れてもほとんど驚かなかったこのヴァーニャは、封をされた封筒を受け取ると、ゆっくりと慎重にそれを何度か読んだ。彼は愛称で呼んでもよいように言ったが、苗字などについては明かさなかった。彼は納屋を準備し、そこに朝まで泊まるように告げた。朝になれば出発だった。
　日が昇る前にローマンは眼がさめた。外にはすでに馬そりの準備ができており、正午までに

は六時間ほど進める計算だった。

道のりはゆっくりだったが、ローマンは歩かなくてもよいことがうれしかった。ここでの雪は旅を始めた頃に比べて、だいぶ深くなっていたからだ。

ローマンはいつしか眠りに落ちていた。満月に吼えたける狼の群れの鳴き声で眼を覚ますと、夜もだいぶふけたころで、二人は松の木が立ち並ぶ山の山頂で停車していた。木の枝はずっしりとした雪で奇妙に曲がっており、下の方角には浅い谷間と、その暗闇に光る小さな明かりが見えた。

彼らは国境を越えたのだった。皮肉にも、ローマンは眠っていて気が付かなかったのだ。鉄のカーテンを超えられるかどうか数週間ずっと悩んできたのに、実際に越えたときには彼は暖かい暖炉と食べ物についての夢を見ていたのだった。

ローマンが「本物のヴァーニャ」とひそかに呼んでいた男は、彼に新しく封をした手紙を返した。納屋で休んでいる間にやったのだろうとローマンは推測した。そしてどの家に行くべきかローマンに教えた。ここはフィンランドで、地元の人間とのコンタクトはなるべく避けるようにとのことだった。この下の谷間には、と本物は続けた、スウェーデンまで彼を助けてくれる男がいる。ローマンは彼に同じ手紙を渡すように言われた。

ローマンはあとになって、手紙がどういった内容だったにしろ、それは何か特殊な内容だったに違いないと思った。そうでなければ、なぜまったくの他人が自分の命を賭けて彼を助けるはずがあろうか。

残りの道のりはほとんど何も起こらなかった。三人目の同行者は、ペッキーという若者だっが、彼の本名が何なのかローマンはもう想像もしなかったし聞きもしなかった。彼はすぐにローマンを橇に乗せて、海辺の町コトカの港へと彼を連れていった。そこでペッキーは輸送船に乗り込むように指示した。ローマンはまた手紙を返してもらい、それを指示どおりに、今度は船長へと手渡した。この協力者たちの連絡の取り方はほとんど気味が悪いほどだったが、もっと不気味だったのはその手紙の持つ力だった。

数時間後、彼は洋上にいた。冷たい風が髪を揺らし、カモメが彼と広大で暗い海の頭上を飛んでいた。旅は短かったが困難なものだった。彼がその生涯を過ごした社会主義の牢獄と、自由な世界を分かつあの国境の東で、ヴァーニャと別れてからまだ三日もたっていなかったが、ローマンはじきスウェーデンのストックホルムに着くだろう。安全な場所で、新しい未来を歩むために。

＊＊＊

ローマンは散らかった彼の小さなオフィスの窓から、大学のキャンパスの中にある緑色の芝生を眺めていた。

夏はもう終わりかけていた。もう少しすれば、学生たちは夏期休暇から勉強を続けるために戻ってくるだろう。芝生は再び元気いっぱいの学生たちで満ち溢れる違いない。

自分でも驚きだったが、彼は授業を再開することに大きな期待と喜びを感じていた。クラスルームで若い精神と触れ合い、あいた時間に自分の研究を続けるのだ。大学には解放感があったし、もう失敗を恐れる必要もなかった。好きなだけ実験と研究を続けられるし、不可能に近いことを毎回達成する必要もないのだ。

失敗することが死に結びついたり、上司が常軌を逸したパラノイアであったりすることはもうないのだ。その事実は彼の気持ちを本当に軽くしてくれた。

ドアがノックされた。

ローマンは咳払いをして答えた「どうぞ」

ドアがきしみながら開き、丸い顔がその隙間からのぞいた。「ドクター・モランダー？」

「そうだが」

丸い顔に大きな笑みが浮かび、同じように丸い体がオフィスへと入ってきた。約束はなかったが、この男は二十台後半か三十台前半ぐらいの年に見えたので、おそらく大学院生かどこかの教授の助手ではないかと思えた。相当に緊張している様子で、ローマンに近づいてきた。

「ギュスタフといいます」と男は言った。「ギュスタフ・ルントです」

「ああ」それは彼の助手だった。ローマンは立ち上がり、握手をした。「来週までこないと聞いていたよ」

「ええと、そうですね、ドクター・モランダー・・・」

「オーギュスタス、でいいですよ」とローマンのスウェーデン語はかなり上手かった。自分に外国語を学ぶ才能があることに気が付いたのは、新しい身分が必要になったあの日のことだった。「どちらにせよ、私たちは一緒になって研究をするのですから」

男の笑みは顔中に広がった。相当舞い上がっているようだったので、ローマンはこの男がひょっとしたら風船のように浮かび上がるのではないかとちょっと思った。

「ありがとう、ドクター。旅の日程の関係で少し早く着いてしまったんです。もし不都合でしたら、また調整を」

「いや、そんなことはない」ローマンは手を上げて頭を振った。「早く仕事を始めたほうがよいんだ。まあ座ってください」

二人は座って、ローマンは身を乗り出して話した。

「さて、私は君がこの大学に提出した生物学の卒業論文はかなり・・・優れていたと聞いている」ギュスタフ・ルントはその誉め言葉を聞いて真っ赤になったが、ローマンはかまわず続けた。「それはつまり、君が見込みがある者だということを意味している。これから私たちが研究するものは」と彼は左手を宙にいらだたしげに、その気持ちをうまく表現する言葉がないのかというようにさ迷わせた。「他に比較するものがないものだ！　また、あー、なんという単語だったかね、しーっ、ああそうだ、機密扱いだ。あくまで大学のカリキュラムの枠組みの中での話だが、過去に例が前例がないものだ」

ルント君はその丸い体を震わせ始めた。彼の顔の赤面はますますひどくなり、だいぶうろたえているようだったが、彼が答えたとき、その声には熱意と興奮が込められていた。

「あなたの期待にこたえられるようベストを尽くしたいと思います、ドクター・モランダー・・・オーギュスタス」と言葉を切った。ローマンは次に何が来るのかよくわかっていた。大学の知り合いからこの若者を紹介してもらったときから、彼はずっとこの瞬間を待っていたのだ。「先生の研究の基本的な方向性はわかっているのですが・・・私たちが実際に行う研究の対象はなんですか？　そしてその目的はなんなのですか？」

ローマンは椅子に背をもたれかけて、腕を頭の後ろで組んで微笑んだ。

「不老不死だよ、ルント君（ヘル・ルント）。君と私は死を克服する命の秘密を暴こうというのだ」

第四章

西暦2016年　サン・ホセ　カリフォルニア

高圧電流が流されたフェンスに囲まれ、重武装した私設セキュリティ部隊と見張り塔に守られたファーマテック社の施設は、世界有数の企業の建物というよりは、どちらかというと旧大学（アイビー・リーグ）の校舎のように見えた。

広大な敷地には青く豊かな芝生が広がっており、完璧な四センチメートルに刈り込まれていた。樫と松と柳の木が立ち並び、花々が織り成す花壇には選び抜かれた花々が咲いていた。ピンクのバラに紫のチューリップ、そしてランの花や睡蓮の花。平らにならされた砂利道が、愛くるしい姿に刈り込まれた生垣の周りを、くねりながら伸びている。何気なく配置された池や滝も、違和感なくごく自然にその環境に溶け込んでいた。アヒルとガチョウも、そして遺伝子操作により生み出された、虹の七色を体にまとった大小さまざまな金魚たちも。

敷地のあちこちには、気軽な服装をした従業員たちが一人で、あるいはグループで座りこんで昼ご飯を食べていた。彼らは本を読み、音楽を聴き、ただ十一月の日の光を楽しんでいるのだった。

サン・ホセのファーマテック社に一万以上いる従業員のうちの大部分が、この施設の中に住んでいた。新しい社員寮が毎月のように、土の上に生える四角いキノコのように建てられ、この企業街を大きくしていた。

それにも関わらず、建物の周りのこの美しい自然は混みあうということがなかった。工事はよく計画されたプランを元に進められており、定期的な拡張工事においても余裕が発生するという方針のもとに作られていた。実際のところ、ほとんどの従業員にとっては、どのような理由であれこの施設を出て行く理由というのが存在しなかった。店には考え付くことのできるあらゆる必需品が並んでいたし、映画館にコンサートホール、一万人の観衆を収容できるスタジアム、屋根つきの運動場が二つ、従業員の子供たちのための小学校から高校、そして大学まであった。またサンフランシスコとサン・ホセ空港まで直通の滑空列車（スリップ・レイル）まで用意されていた。

ファーマテックはそれ自体生きている大都市と言えた。犯罪も貧しさも存在しない、非生産的で有害なもの、それら全てから自由な都市だった。

サラの初印象は、まるで大人のための遊園地みたい、というものだった。それはまともな頭の人なら、絶対に去ろうとはしない遊園地だった。ここでは毎日が新しい遊びを発見することであり、常に面白いアトラクションが開かれる場所であった。

それからしばらくして、サラはここが自分の考を遥かに越える場所であることに気が付いた。

ファーマテックの施設は科学者のメッカであり、サラの旅は聖地への巡礼のようなものだったのだ。

この施設の中では、世界じゅうから最も高い知性を持つ者たちがお互い切磋琢磨しあい、友好的だが激しい議論を戦わせ、新しい科学上の発見のため、さらなる達成のために日々協力し、

しのぎを削りあっているのだった。皆が求めていたのはバイオテクノロジーに革命をもたらす発見だけではなく、同じ惑星の上にいま生きている人々の生活を豊かにする何かだった。この生き生きとした雰囲気の中では、あらゆることが可能だった。ここでは不可能という言葉は新たな挑戦を意味していたのだった。

そしてサラはこの雰囲気が大好きになってしまった。

初めてここを訪れたとき、サラは予定を大幅に引き伸ばして滞在したが、それでもここを去るのは身を切るような思いだった。サラはこれが自分の運命であると感じ、ここが彼女の家だと思った。あの大学の貧相な、息苦しい研究室とはおさらばだと思った。

あの研究室とここはもう根本的に違っていた。それは学術的な理論とその実践における違い、あるいは考えることと実行することの違いだった。理論と仮説はここでは、本当の進歩と発明を実現するためのステップの一部でしかなかった。

いわば「考える前の実践」、サラはその新しい考えに揺さぶられ、それを信じられるようになった。サラにとってそれは考えるよりも実践すること、プレッシャーの中で働くこと、そしてちゃんと適切な仕事をこなすことを、期待されつづけることだった。その考え方には抗えない魅力があった。それはつまりサラの価値は、いかに会社に貢献したかという一点のみで計られる、ということを知ることだった。そしてサラは彼女の価値が高いことを知っていた。社の人間はサラの資質を欲しがっていた。彼らはサラの研究を長い時間かけて吟味しており、そして彼女が学位を取ろうと取るまいと、どちらにせよ交渉をを開始することを決断したのだ。この時期はファーマテック社にとって重大なときだった。なぜならもう長い間開発中だった、将来の鍵となる製品がようやく日の目を見ようとしており、ファーマテックはそのチームにサラを参加させるためにならどんなものでも彼女に与えるだろうことは明らかだった。それはもちろん、競合企業にサラを渡さないということだった。

サラは躊躇せずに承諾したのだった。

その後数ヶ月は、あまりにも早く決断したことに罪悪感を覚えたこともあった。自分の住居を去り、友達を置き去りにするのはとてもつらいことだった。特にシェリーについて言えば、彼女はサラが決断したことに気が付くとよそよそしくなってしまった。サラは家族を置いてゆくのであり、ほとんど終わりかけていた自分の学業も放棄することになってしまっていたからだ。

しかしこの決断の結果得られるものと比べれば、こういった罪悪感はすぐに消えてゆくものだったのだ。引越しがすべて終わってから数日後には、サラは新しい研究に没頭しており、古い生活のことは完全に心から忘れ去られていた。思い出すのはだいたい夜も遅くなってからで、彼女は携帯電話を取ってシェリーに電話するのだった。しかしシェリーはサラからの電話は取らなかったし、サラが何十回か残したメッセージに対し何の返答もよこさなかった。やがてサラは彼女の一番の親友に連絡を取ろうとすることをやめてしまった。

もしシェリーが彼女と縁を切ることにしたのなら、そうさせるしかない。罪悪感があろうとなかろうと、サラは終わったことをいつまでも考えることはしたくなかった。

イギリスからカリフォルニアへの引越しはあっという間で、決定的なものだった。

そして今、大学へいくために両親と別居したときから、サラは初めてちゃんとした自分の家を持てたと感じていた。会社の設備はとても寮とは思えないほどすばらしいものだった。ベッドルームは三つついており、もちろんその使い道はまったく思いつかなかったが、さらにトイ

レが二つ、中二階のリビングルーム、あらゆる設備がそろった自宅オフィス、そして綺麗で大きなキッチンが備え付けられていた。もっともサラにはそれを使っている時間はまったくなかった。そして部屋には高級そうな家具がたくさん置かれていた。

サラが好きに使っていいこれらの設備に加えて、食物は社より供給されていたし、携帯電話は最新のものが貸与されていた。現実的には仕事以外の生活というものが考えられなかったため、高額の給料を使う時間はまったくなかった。サラは自分が三十代になるころには、ストックオプションと相まって相当の資産をためていることだろうと思った。この分野から足を洗うつもりはまったくなかったが、どのような形であれ未来は薔薇色だと言えた。

しかしこの仕事の一番いいところはそういった具体的な利益よりも、むしろここにいる人々だと言えた。特に彼がそうだった。

エリック・ミラーだ。

ファーマテック社のもう一人の草分けであり、現在ニュージャージーの医療実験所の長であるサイモン・ローゼンとともに、ミラーは近代のナノ・テクノロジーの父であった。ファーマテックからの援助を受けたミラーとローゼンは、きちんと動作する超極小のロボット、ナノ・ボットを始めて作ったのだ。それはプログラムにより命令を受け取ることができ、自己複製が可能で、他のボットと協力して自動的にさまざまな仕事をこなすことができるものだった。そして彼らはその初期概念を、商業的に利用可能なものにまで仕上げたのだった。

二人は新しい産業を生み出し、そしてそれは現在もまだ萌芽の状態ではあったが、今後もさらなる大きな可能性を約束するものだった。サラはサン・ホセに来た最初の日に、エリック・ミラーに会ったのだった。

サラは、リムジンに乗ってあの大きな鉄の門（警備兵は彼女のIDカードを念入りに調べたが、身分が明らかになると過剰なまでに親切に歓迎してくれた）をくぐったときから、震えが止まらなかった。車はブナの木が立ち並ぶ長い道を、キャンパスのちょうど中心に位置している完璧な立方体をした行政部に向かって進んでいった。

最初の夜に泊まったホリデイ・イン（利用でいる金額に制限はなかったのだが、それ以上の贅沢はしたくなかった）を出発してから、サラは運転手に向かって休まずにしゃべりつづけた。運の悪いその運転手は、もし何か口をはさみたかったとしても、一言も返事をさせてもらえなかった。サラの独り言は休みなく続いたからだ。それは何か心配ごとがあるときのサラの癖だった。自分の声により自分を安心させようとしているのかもしれなかった。だが質素で美しいファーマテック社（本物のファーマテックだ！）の敷地内に車がゆっくりと入ったとき、サラはとうとうしゃべることもできなくなり、恐れと興奮が同時にこみ上げるのを感じたのだった。

車はまったく同じ外見をした四つの建物の前で停車した。建物には黒い反射ガラス窓取り付けられており、すでにおなじみとなったファーマテック社の社章がそこで誇らしげに回転していた。運転手はサラ側のドアを開けて入り口を指差した。

「アンナ・リヴェラがオフィスで待っていますよ、ミス・キャロル。入ったらまずＩＤカードを見せてください」

「あ、ありがとう」サラはどもりながらそう礼を言って、幅広いドアへと続く階段を上り始めた。

「荷物を」と運転手が口を開いた。彼女は顔を真っ赤にして振り返った。

「忘れてたわ。じゃあ荷物を持ってゆくけど・・・」持ってゆく？　一日この荷物を持ち運び続けないといけないのかしら？
「問題ないよ、ミス・キャロル」運転手は、ちょうどサラがその質問を言う前に答えた。「私がこれを来訪者センターまで運ぶからね」
運転手はサラの不思議そうな表情を見て続けた。「あなたのために、ひとつ部屋が無期限に予約されているんだよ。往復便が数分ごとに出ているし、あなたがどこに向かえばいいかはミス・リヴェラが教えてくれるはずだ」彼は優しい笑みを浮かべて安心させるようにそういった。サラはこの運転手は、同じように若く、そして世間知らずの若者を、何度も何度も空港からこのドアまで運んできたのだということに気が付いた。
「ありがとう」心をこめてそういった。「じゃあ、私は入ってゆけばいいのね」
「グッド・ラック」運転手は帽子に指を触れると、車にまた乗り込んだ。
サラは運転手の名前すら聞かなかったことにかすかな良心の痛みを覚えた。そのすぐあと、プレッシャーが彼女を押しつぶすようにのしかかってきた。
サラは数分後には、ファーマッテック社で終身雇用を受けるための面接を受けようというのだ。小さいことで思い悩むひまがあるだろうか？
深呼吸をひとつして、自信にあふれた表情になっていますようにと願いながら顔を上げる。サラはそのままフロントドアへと通じる階段を上った。花崗岩でできた三日月型の階段の両側には、色とりどりの花が花壇の中に咲いていて、背の低い草木が生茂っていた。サラは花の名前を一つも思い出せなかった。やがて彼女はよく空調の効いた、ファーマテック行政部のロビーに着いた。
驚いたことに、受付はいかにもプロフェッショナル的で洒落たデザインではあったが、普通の企業の受付とさほど変わらなかった。たとえば新興のバイオ企業などでは、来訪者にいい印象を与えるためにやりすぎてしまう傾向があった。高額な芸術品で飾り立てたり、古すぎて使いにくいアンティーク（アバン・ギャルドな）家具を設置したりといったことだ。だがここでは、照明はちょうどいい明るさに調整され、床はきらきらとしみ一つない美しさで、高い天井に覆われたフロアには黒皮の椅子がいくつか設置されているぐらいだった。正直にいって、このオフィスが世界でもっとも強力な企業の、まさに聖域であるということを示唆するものはまったく存在しなかった。。
廊下が左右に続いており、その先に二つ並んだエレベーターが見えた。部屋の真中には円形の受付デスクがあったが、誰もいない。
サラは眉をひそめた、こういった場所では誰かが必ず仕事をしてなければいけないと思っていたのだ。
「どうかなさいましたか？」
ちょっと驚いて振り返ると、背の高い三十代中ごろの女性が微笑みを浮かべて立っていた。
彼女はイヤフォンとマイク付きのヘッドセットを身につけており、大きなスクリーンのついたウエハースのように薄い携帯端末を右手に持っていた。プロっぽいツーピースのスーツを、計算された気軽さで着こなしており、ＩＤ身分カードが左胸のポケットにピンで留められていた。ストレートの黒い髪の毛は頭の後ろで赤く結ばれていて、アジア系人種のようだったが、その表情にはどこかしら白人的な特徴があった。
サラは返事をする前にちらりと目をやり、彼女の名前がジョアンナ・ノクミであることを確

かめた。
「ああ、はい。こんにちわ」そういいながら自分が赤面するのを感じる。こういうふうに突然話し掛けられるのは苦手だった。いつも狼狽して変な振る舞いをしてしまうのだ。「私は・・・サラ・キャロルです。用件があって・・・人事部のアンナ・リヴェラさんと約束があるのですが？」最後の部分はちゃんと主張するつもりだったのだが、口を出ると質問になってしまっていた。
　サラは一瞬、そんな約束などないと言われて、自分が警備兵に構内から叩きだされるところを想像した。だが受付の女性はそれに微笑んで答えた。「もちろんです。こちらへどうぞ」
　二人は左に向かって、三つのエレベーターのうちの一つの前で立ち止まった。
　ジョアンナが、マイクに向かって小さく何かしゃべると、携帯端末がビープ音を発した。すぐあとにエレベータードアがなめらかに開いて、二人は中に入った。
　その短い昇降の間二人とも一言もしゃべらなかった。ジョアンナは会話を始めるようには見えなかったし、サラは緊張していてしゃべるどころではなかったので、五十階へと急上昇を続けるエレベーターは、あらゆるところで放送されている柔らかいクラシック音楽の他はほとんど無音だった。
　エレベーターが停止してドアが再び開くと、サラを迎えてくれたのはもう一人の女性だった。彼女は背が低く、どちらかといえばずんぐりとしていた。長い茶色の髪の毛はカールしており、控えめな灰色のスーツを着ていた。彼女のファッションセンスは明らかに質素であり、それはいつの間にか姿を消していたジョアンナとは違ったが、ファッションセンスの代わりに彼女が身にまとっているものは専門家しか持つことができないプロ意識だった。
　彼女が自己紹介をする前に、サラはこのもう一人の女性がアンナ・リヴェラに違いないと確信していた。
「ようこそ、ミス・キャロル。サラって呼んでもいいかしら？」
　サラは建物の奥へと続く長い廊下を案内されながら、頷くことしかできなかった。「直前になってからしか連絡が取れなかったのに、あなたが来れてよかったわ。とっても感謝しています、大変だったでしょう？　ここまで来るのに何か問題はなかった？」
「いえ、まったくありませんでした」サラは廊下に沿って並ぶオフィスの中を見ようとちらりと視線をやったが、興味深いことにそれはまったく普通のもので、サラがこれまで訪れたオフィス、たとえばファーマテック社よりも何千倍も、何万倍も小さい規模の企業のオフィスとまったく変わるところがないように見えた。「ファーストクラスに乗ったのは初めてだったので」とサラは不必要なコメントをつけた。「とってもよかったです」
　とってもよかった？　まるで一年生のような台詞だった。将来に雇ってくれるかもしれない人間に、自分をアピールするにはもっとましな言葉があるのではないだろうか？
　しかしリヴェラは微笑んで、こう言った。「もしもサラ、あなたがここで働くことになれば、そういった環境にはすぐに慣れるわよ。社員はちゃんと休むべきだし、気持ちよく働けるべきだと私たちは思っているからね。でも、見てもらえればわかると思うけど」
　彼女はそう言いながら、通り過ぎる途中のオフィスの一つを指差した。それは小さく質素にできており、すばらしい環境ではあると思ったが、普通のオフィス部屋と何も変わらないように見えた。中で仕事をしている男は、最新のコンソールの前に体をかがめており、その手を高解像度の感熱式パネルの数センチ上に浮かべて仕事をしていた。「私たちは不必要な贅沢や浪

費はよくないと思っているの。私たちは倹約するけれど、それは仕事にマイナス効果を与えないとはっきりしているときだけよ」
「ええ、確かに倹約はしなければいけないんでしょうね」
「それは、あなたに支払う給料が他所より安いというわけではないわよ」とリヴェラは続けた。「すぐにわかってもらえるとは思うけれどね。実際、賃金は最高レベルのものを提供できるわ。それに加えて、私たちがあなたに提供できるのは給料だけじゃないし、その他にも様々なものを提供できるはずよ」二人は廊下の終わりに開いたドアの前で立ち止まった。「ここよ。私の自宅、といっても実際の家じゃないけど」
　サラはドアに足を踏み入れた。中はごく普通のオフィスで、行政部の建物にはさまれている中央エリアを見下ろすことができる角部屋だった。石畳の十字路の中心に、美しい噴水があったが人の姿はなく、オレンジ色の嘴をもったムクドリが水浴びしているだけだった。
　孤独な島国のような眺めだった。この巨大な企業都市が作られた意図と目的を考えると、サラは驚くほかなかった。いったい他のどの企業が、このような豊かな光景、単に美しいとしか形容できないものを提供できるのだろうか？
　アンナ・リヴェラはサラの心を読んだように言った。「すばらしい眺めでしょう？」サラは頷いたが、視線は固まったように窓の外に向けられたままだった。「ここファーマテックで初めて働き始めたとき、この部屋で仕事するように言われたのよ。自分の運の良さが信じられなかったわ。こういうのはありきたりな言葉かもしれないけれど、私は他のところで仕事なんてしたいとは思わないでしょうね。さあ、座ってください」
　サラはミス・リヴェラと向かい合ったやわらかい椅子に腰をおろした。彼女は机の向こうに座り、コンソールにしゃべり掛けると、すぐにその照明がオンになった。
「さて」彼女は始めた。「オックスフォードを卒業するのにあと十八ヶ月必要なのね。間違いはない？」
　どうやってそれを知ったのか考えることは無駄なことに思えた。「はい」
「そしてエリ・バーンシュタイン教授の下で、この二年間研究をしていたわね？」
「ええ」
「彼はあなたをとても高く評価しているわよ」
「教授と話したんですか？」
「いいえ」とリヴェラは顔を上げた。「研究は気にいっていた？」
　どう答えるべきだろうか。本当のことを言うべきか？　「時々は。いつも新しいことに挑戦していたわけではないけれども、私は多くのことを学べました」
「なるほど」と微笑む。「すべて終わるまでとどまるつもりですか？」
「そのつもりでした」しまった、間違ったことを言ったかしら？
「もし私たちが大学と調整をしたとしたらどうかしら・・・いまあなたが私たちと働くことができるように、またここで仕事することが学位取得に必要なものになるように、大学にとって利益があるような形になるよう調整できるとしたら？」
「どういった利益ですか？」
　アンナ・リヴェラは肩をすくめた。「卒業生を率先して雇ったり、大学のセミナーのスポンサーになったり、あなたがここで行う研究の成果の一部をバーンシュタイン教授とその生徒たちと分け合ったり、そういったことよ」

「そんなことができるんですか？」
　アンナ・リヴェラは机に体を乗り出して、サラをまっすぐ見つめた。「回りくどいことは言わないわ、ミス・キャロル。サラ、あなたにはすぐにここに来て働いてほしいのよ。私たちにはあなたみたいな人が必要なの。それに、あなたはここの環境から得られるものはとても大きいと思うわ。卒業前に雇う優秀な学生はあなたが始めてじゃないし、若い女性が学業を最後までやり遂げることの重要性は痛感しているけれども、あなたはイギリスに戻ったりするよりは、ここに来たほうがはるかに刺激的だと思うのよ。そう思わない？」
　サラは答えを考えるまでもなく返事をしていた。
「そう思います」
「理想を言うと、フルタイムで仕事をしてほしいのよ。多くを要求していることはわかっているけど、時間をかけるだけの価値がある仕事なのは保証するわ。もし駄目なら・・・さっき言ったように、私たちは大学と話をして調整できる立場にいるわ。必要であればどういった交渉も実行できる」
「なんだか・・・舞い上がってしまって。何を考えたらよいのかよくわかりません」
「今最終的な結論を出せといってるのではないわ。本当のところを言うと、サラ、あなたにはもう一人会っておいて欲しい人がいるのよ」
「誰ですか？」

　二人は無音の小型自動車の一つを使って、キャンパスの中を生物研究所まで向かった。アンナが（彼女はそう自分を呼ぶようにこだわった。どうやらそれはあらゆる面で気さくな雰囲気を演出しようとする企業のポリシーらしかった）車を運転し、時折風景を指差してそれが何か説明した。車はショッピングモールや、人口の池、テニスコートやデジタル製品工場などの脇を通り過ぎていった。
　サラが目的地に着いたときには呆然として、心から圧倒されてしまっていた。これまで何度かこのキャンパスの広報記事を見たことはあったのだが、実際にその目で見るということと、比べられるものではなかったのだ。
　研究所自体は、行政部の建物がそうであったように実用主義一点張りで、むしろ贅沢な部分はないと言ってよかった。その設備はオックスフォード大学のものよりはるかに優れていたが、サラが想像していたような豪華絢爛なものでもなかった。
　科学者はいつもどおりの科学者たちだった。どこの世界でもそうだが科学者というものは、予算の大小にかかわらず、自分の机と小部屋を私物でいっぱいにするものらしかった。ぴかぴかのホログラフポスターや、家族や友人の動画、そして必ず皆が最低でも一つはロボットのおもちゃを所持していた。よろよろと歩いてきた子犬はそのプラスティックの尻尾を激しく振りながら、脇を通り過ぎたアンナとサラに吠えかけたし、壁にはうなり声を上げているエイリアンのモンスターが、鋭い爪で壁に張り付いていた。その舌は炎のように赤く、三つの巨大な眼球が複雑なパターンで点滅を繰り返していた。これらすべての製品はバイオテクノロジーとナノ・テクノロジーの産物であり、ファーマテック社の援助によるものだった。
　自分で動き回る玩具で遊ぶことは、キャンパスのいわば「カリキュラム」の一部だとアンナは説明した。実際、毎週金曜日の午後には上の階の共同部屋でコンテストが開催され、そこではお互いが新しい発明を使ってどういったすばらしいことができるかを競いあうのだ。いくつ

かの企業では、こういったゲームは時間の無駄だと思われているだろうが、ここファーマテック社では推奨されていた。
　サラは少し怖気づく自分を抑えることができなかった。そして最初のうちは、目立たない影のようにとりあえず回りの様子を見ることにしようと思った。もちろん、それはこの仕事に採用されることが決まったら、だが。
　しかしサラはもう、基本的にフルタイムで仕事をする決断をすでにしていた。
　ノーという選択肢があるだろうか？
「さて、ここが施設の中心よ・・・もちろん、ここではあなたの体をスキャンさせてもらうし、スーツを全身に着てもらう必要があるわ」アンナは微笑んだ。「私が詳しく説明する必要はないでしょうね。あなたも良く知っている手順よ」
　二人は長い階段の一番下に位置する重々しいドアの前で止まった。廊下は左右に伸びており、ゆっくりと曲がって視界から消えていた。その形は楕円形の何かを囲んでいるように思えた。

　ドアの前に立っていた二人の警備兵は、二人とも対生物汚染防護服（バイオハザード・スーツ）を身につけており、しかも武装していた。暗い照明の中で直立している彼らの姿はまるでＳＦ映画の中のようにおどろおどろしいものだった。ドアの上には生物汚染を示す警告ランプが点灯していた。
　サラがアンナを振り返って見ると、その顔に明らかな不快感が浮かんでいた。
「一緒に来てくれないんですか？」
「私？」アンナは微笑んだ。「ここは私の分野じゃないわ、サラ。きっと中では安心できると思うわよ。それに中にあなたを待っている人がいるわ」
「誰ですか？」
　アンナの微笑みがかすかに薄れて、その表情の下から何か嘲りのようなものがちらりと覗いた。何かに対する優越感のようなもののようだったが、サラはなぜアンナがそんな感情を抱くのかさっぱりわからなかった。
「すぐにわかるわよ。がんばってね。上の階のロビーで待っているわ。終わったら上まで上ってきて。そこで手続きを終わりにしましょう」
　サラが返事をする前にアンナは背を向けて階段を上っていってしまった。サラは眉をひそめて、近いほうの警備兵に眼をやった。
「何か身分を証明するＩＤか何かがいるのかしら？」サラは遠ざかってゆく人事部の女性を指差した。「彼女は何も言ってなかったけれども・・・たとえばそういったものが必要だとは行っていなかったわ」
　警備兵は頭を振った。「中に入ってください、ミス・キャロル」警備兵は続けた。「あなたの身分はこの部屋に入った瞬間に確認できています。あなたはここでは役員レベルの権限をもった来訪者ですし、そうでなければ私は手錠をあなたにはめていることでしょう」男の顔はまったく見えなかったが、サラは彼がにやりと笑っていることを確信した。
「ありがとう」と口の中で返事をすると、大きいドアに向かって数歩踏み出す。ドアに触れるか触れないかのところで、ドアがスライドして開いた。それは短い廊下で、同じようなドアがその終わりにあった。サラが中に入ると、最初のドアが閉まり、彼女は筒状の牢獄に閉じ込められたようだった。
　数秒間の間、何も起きなかった。するとシュッという音が鳴った。

サラが顔を上げると、薄い蒸気のようなものが、廊下の四つの角にあるノズルから噴きだしてきており、白い霧が部屋を満たしつつあった。
「心配はいらない。害はないよ。標準の汚染除去手順だよ、サラ」
隠されたスピーカー越しのその声は音響で歪んでいたが、明らかになれなれしい響きがあった。
「しかしもう一つお願いがある。服を、ええと、脱がなくていけないんだ。見ないと約束するよ」
サラの左側のパネルが開くと、そのロッカーには何着かの対生物汚染防護服がしまってあった。
向かい遠くの壁にあるカメラに抜け目のない視線を投げると、サラは服を脱いでそれをロッカーにしまい始めた。
この手順を実行するは初めてではなかった。毒性の高い物質を使ったりしていた、大学の基礎生物学の研究でも、たいてい同じような防護服を着なければならなかった。
ただ大学では、素っ裸になるように言われたことは一度もなかったが。
ブラジャーと下着だけの姿になると、カメラを見た。
「これも？」
「それは・・・まあ、そうだ。スーツを着るときは全裸でないといけないんだ、すまないね、サラ」
「見てないって言ったと思いましたけど」と言ってサラは微笑んだ。他のことはともかく、裸になることはまったく気にならなかった。もう十分過ぎる連中の前でサラは裸になってきたし、自分の外見には自信があった。それについては気になるはずがなかった。
それに、サラは自分の体で人がうろたえるのが気にいっていた。この男のように。この男が誰であるかは知らないが、彼は臆病者なのだ。典型的な科学者タイプのなのだろう、きっと。典型的なオトコだ。彼らはいつも女の体を熱望しているくせに、女をひどく恐れてもいるのだ。
「いや・・・見てないよ」
「ちゃんと脱ぐから心配しないで」
全裸になると、きつめのスーツに無理やり体を通す。もちろんそれはファーマテックのカスタムメイド型だった。あらゆるところで目にする、あの本物の社のロゴマークがその品質を保証していた。スーツは最大限の可動性を確保するための関節の自動調整機能と、真空に絶えられる継ぎ目、そして強化された極薄のラテックス製手袋などによりできていた。たとえば、想定時間よりも長い間研究所や工場でこれを着て働くとしても、その柔軟性と長い間使用用可能な呼吸装置によって、スーツの可動性は確保されるのだった。ヘルメットの顔のプレート部分にはフルカラーのＨＵＤディスプレイが映し出されており、読みきれない文字列が並んでいた。いくつかはたとえば酸素計であったり、何かの警告を出していたりと役に立ちそうなものではあったが、サラがどう考えても理解できないようなデータも並んでいた。
全身にスーツを着込んでから、ロッカーパネルをきっちりと閉め、不器用にドアに向かって歩き出した。スーツは着ているうちに慣れてきそうだった。サラはセロハンに包まれているように感じながら、カメラに向かって手を振った。
その直後に二番目のドアが開き、もう少し小さな小部屋と、その奥に閉まったままの三番目のドアが見えた。

中に入ると後ろでドアがすぐに閉まり、サラは再び牢獄のような内部に閉じ込められた。
「ここでは完全な汚染除去と、スキャンを実施することになっている」と先ほどの親しげな声が聞こえた。「数秒しかかからないよ」
直後に照明が暗くなり、部屋はきめ細かい霧でいっぱいになった。骨に響くうなり音が、少しずつ大きくなっていることにサラは気が付いた。サラはかすかな吐き気を覚えて壁に手をついたが、すぐに手を離した。壁は暖かく、しかも振動していたのだ。
「いったい何をやっているの？」自分の声が甲高くなっていることに気が付きながらサラは聞いた。
「分子スキャンさ。新しい手順だ」声は興奮しているようだった。
「これにより君が持っている異質なモノをすべて知ることができるんだ。人工のものでもそうでないものも両方ね。君が着ているスーツはそれをやりやすくするのさ。その中にはボットがたくさん詰まっている」
「本当に？」吐き気は一秒足らずでおさまった。「それはどうやっているの？」
「中に入って、そこで話そう」
声が聞こえなくなった瞬間、霧が晴れた。照明が再び明るくなってうなり音がやみ、最後のドアが遠くに開いて、天国の真珠の門のようなその入り口の向こうに巨大な部屋が見えた。
そしてその入り口に、後ろからの強い逆光を背中に受けて男が立っていた。サラにとっては聖ペテロその人であるのかもしれない男だった。彼のヘルメットは色づけされており、着ている防護服はごわごわして古くなっていたが、彼女はそれが誰だかすぐにわかった。エリック・ミラーだ。ファーマテック社の卓越した科学者、そしてバイオテクノロジーの神であり、また近代ナノ・テクノロジーの父である男だ。
通信装置を通して聞こえていたのは彼の声だったのだ。汚染除去とスキャン手続きについて手順を教えてくれたのはまさに彼であり、あの時見ていたのは彼だったのだ・・・。
サラはまるでロックンロールの歌手や映画スターの前に立たされた、ミーハーな女学生のような気持ちだった。しかしハリウッドのピンナップ写真と比べるまでもなく、この男は本物の星だった。その知性で世界を変えた科学者であり思想家であり、その業績はアルバート・アインシュタインやスティーブン・ホーキンズと並ぶといわれている男だった。ここにいる男は現在のナノ・ボットを開発した者であり、その上サラにいま微笑みかけているのだ！
「ファーマテック社にようこそ、サラ！」エリック・ミラーがそういうのを聞いたとき、サラはもう死んでもいいと思った。

「さてさきほどのボットだが・・・」エリックはそういうと言葉を止めた。ここで会った者はみなそうだったが、彼も自分をファーストネームのエリックと呼ぶことにこだわった。しかしサラはドクター・ミラーとつい呼んでしまいそうだった。エリックは目を細めて、熱心に聞いているサラの顔の左上の一点を見つめて続けた。「それはあのスーツの中で活性化すると――あのスーツにはもう慣れたことだろうと思うが――肉体から放出される生体電気エネルギーを元に活動する。たとえば汗や、熱や湿度といったものだ。それが僕の子供が育つ飼育所になっているわけだ」
サラは微笑んだ。ボットを自分の子供と呼ぶなんて、なんてセンチメンタルなことだろう。高いカリスマ性と魅力を兼ね備えたこの男と、サラは近いうちに寝ることになるだろうと確信

した。もちろん、それはサラがここで仕事をすると決めてからだが・・・いや、もう彼女の心に何の迷いもなかった。
　サラはとどまるだろう。そうしなければいけなかった。
「だが」とエリックは続けた。「環境防護服の熱の層にボットを応用するということは最近になって考えだされたものだ。だがその発想は以下のことにより明らかだ・・・」とそこで言葉を切った。その驚くほど若々しい顔に、サラは思考がどのように表れているのか文字通り読むことができた。昔読んだ記録では、たしかミラーは四十代後半のはずだった。仕事に没頭しすぎて一度離婚しており、もっと老けて見えてもおかしくはなかった。エリックの頭脳の中の働きは興味深かったが、彼は少し臆病かもしれないと思った。
　エリックはさきほど言いかけたことを忘れたように続けた。
「もし僕らがこのボットを一般的な繊維に含めることが、それも安価にできたら、ということを考えてみよう。想像してほしい。自分を修復する衣類、自分の汚れを自分で除去し、色を変える衣類を」そしてまたサラに視線を集中させた。「もちろん、そういったことは僕たちが本当に努力をつぎ込んでいるものではないのだがね。当然のことながら」
　彼はにやりと笑った。「癌に心臓病、そして一般的な風邪。ボットの働きにより十倍、いや千倍も強化されたリンパ球が、あらゆるウィルスとバクテリアの侵入をそれこそ秒単位で除去するだろう。全身の防衛機構を、完全に新しいものにできるんだ。それは数日もかからない、数時間かもしれない！」
　ドクター・エリック・ミラーは両手を大げさに上にあげ、カフェテリアにいたほかの利用者たちはそれを見て笑っていた。皆エリックの奇行には慣れっこになっているようだった。
「想像できるかい、サラ？　僕らが何をできるか、どんな奇跡を行うことができるのか想像できるかい？」
　彼は手を下ろして、声をわざとらしく小さくした。エリックは小さな丸テーブルに身を乗り出して、サラに語りかけた。「まあ言ってみれば・・・これは教科書にも載っていることだ、もちろんね。もちろん君はそんなことはとっくに考えてきたことだろう。しかし・・・僕らが病気のない世界という目標に、どれぐらい近いか理解できるかね？　そこでは人間の寿命は十年単位ではなく世紀単位になるということが想像できるかね？　十年前は、これは単なる理論だった。僕らはこれが実現可能かもしれないと思っていたが、それ以上のものではなかった。五年前、これはものになるかもしれないと思い始めた。そして今はどうだろうか・・・？」
　エリックはそこで言葉を止めて、あたりを眺め渡した。彼はまるでようやく自分がどこにいるのか気が付いたようだった。サラは彼が言葉を続けてくれればいいのにと思った。エリックの洞察力とその熱意は、彼女を捕らえてやまなかったからだ。
　ほんの少し前、二人は研究室を簡単に訪問してからまたトンネルをくぐって滅菌処理を行い、このカフェテリアまで昼食を取りにきたのだった。食堂施設は実用的だったがおしゃれで心地よく作られており、数百人が座れる座席が用意されていた。昼食はいろいろな種類の冷たい肉料理、暖かい食物にサラダ、そしてもちろんファストフードなどから選ぶことができた。
　結局、ここは確かにアメリカだったのだ。
　朝食と昼食、そして夕食は無料だとドクター・ミラーは言った。これも企業の特典の一つだ。
　しかし体重を気にしていたサラは、ノンオイルのツナサラダと白ワインを一杯だけもらった。それと比べて、エリックのほうはペペローニとパイナップルピザを三切れ、巨大なカップに入

ったチョコレートミルクシェーク、ハンバーガー二つ、フレンチフライ一皿、そしてホイップ・クリームが乗った大きなアップルパイなどでトレイを埋め尽くしてもってかえってきた。

着席してから、エリックはほとんど食べ物に手をつけなかった。彼はフレンチフライをまるでオーケストラの指揮者か何かのように熱っぽく振り回したあと、ハンバーガーの一つをばらしてトマトを分けたりしていた。どちらかというと食べるよりはしゃべるほうが好みらしかった。

サラにとってはそちらのほうが良かった。彼女はかなり腹を減らしていたのだが、サラダを口の中に入れすぎないように、いつドクターに質問されてもよいように準備しながらゆっくり食べていた。しかし質問はほとんどなかったといってよかった。

つまりサラはエリックが彼女から吸収するよりも多くのものを彼から学んでいたのだった。

二人はアップルパイを分けて食べた。実際それはかなり美味しかったのだが、彼女の心はドクターに集中していた。彼は才能があり、自分のことに無我夢中な子供のようだった。

天才って、サラは考えていた、そういうものよね。

彼は何か重要なことを言いかけていたのだが、忘れてしまったようだった。彼はホイップ・クリームを人差し指ですくうとそれをなめた。

彼は何かぼんやりしているようで、奇妙な沈黙があった。

「それからどうしたんです？」とサラは聞いた。

ドクター・ミラーは顔を上げて、まるで目の前にいる人間の存在に驚いたように彼女を見つめた。彼の実際の年齢が、さきほどより表情に表れてきていた。目じりにはしわがあり、疲れて見えた。そしてその疲労の中には、いまだ衰えない情熱があった。何秒かがそのまま過ぎ、ドクターは微笑んでアップルパイをスプーンで大きくすくった。

「それから？　サラ、君にこれがわかるかい！」エリックの眼がきらきらと輝いた。「今われわれがやっていることは・・・これまでの研究の凡庸さは忘れてくれ。君は基本をすでに学んでいるが、そこでは基本までしか学べなかっただろう」彼はどこか外の世界を指し示すように手を振った。「今我々がしていることは不可能事だ。我々は何十億年も時間をさかのぼって、創造のその日まで戻ろうとしている。そして我々は神がした間違いを正そうというんだ」

サラは咳をして、顎についたホイップ・クリームを食卓ナプキンですばやく拭き取った。ドクターを見ると、彼は本気でものを言っているようだった。

「神がした間違い？」彼女は聞いた。「たとえばどんなものです？」

つかの間の瞬間、ドクターの熱っぽい目の輝きはまるで狂気をはらんでいるように見えた。彼は身を乗り出すと、こうささやいた。

「知りたくないかね？」

サラは次の日の朝、契約書にサインをした。前日の晩、彼女はファーマテック社の社員と一緒にキャンパス内の酒場で時を過ごしたのだが、それはサラがここで知ったことを補強するものでしかなかった。

大学なんてどうでもいいわ、と彼女は思った。そもそもこれこそが、私が大学にいきたいと思った理由なんだ。

そして彼女はその契約書にサインをした。それには十分すぎるほどの給料と、加えて将来にはとんでもない金額になるであろうストックオプションが約束されていた。それはサラが考え

たこともないような利益を与えるだろうことは疑いなかった。
　しかし、金銭が問題だったのではなかった。そう思ったことは一度もなかった。いや、大事だったことは、ドクター・ミラーがあの食堂で、アップルパイ越しに言ったあの言葉だった。それがすべてを決めたのだった。。
　知りたくはないかね？
　知りたかった。サラは何よりもそれが知りたかった。

　しかし、それでもサラは夢を見つづけていた。それはただの夢だったが、どんどん強く、これまでにないほど鮮明になりつづけていた。

　サラはキャンパスの心理臨床士（セラピスト）を訪れることも考えたが、考えなおしてやめた。臨床士は彼女の上司に直接報告するだろうからだ。サラはファーマテックがさほど医師と患者との間の機密保持についてこだわっていないのではないかと思っており、彼女は自分が弱く、注意散漫になっていると思われたくなかった。特に今はプロジェクトがいくつも立ち上がっているときで、しかもその案件にどうしても参加したいと思っているときだったのでなおさらだった。
　しかし、あの夢は・・・ただの夢が、サラをいらつかせるのだ。
　何度も見る夢のひとつに、冬の夢があった。そこでは見渡す限り雪原が広がっていた。奇妙だった。なぜならここファーマテックがあるところでは雪など降らないからだ。しかしキャンパスは足跡ひとつない雪に覆われており、人っ子一人おらず、ほとんどの建物は廃墟となっていた。そしてサラはそこで一人ぼっちなのだった。
　その夢の中で、彼女は自分自身を外から眺めていたのだった。二人とも彼女自身であり、そうでないともいえた。片方は未来のサラの亡霊であり、もう片方はたくさんある可能性のうちのひとつを体現した彼女だった。サラは死に絶えた世界の中で一人ぼっちであり、そして彼女は自分がその滅亡に手を貸したことを知っていた。
　雪と風しか存在しない、寒さの終わることのない世界。冬の終わりの世界。
　その夢の中で、サラはある赤ん坊と、男の子、そして成人した男の三人を同時に見た。その三人は姿を常に変えつづけており、それはまるで時が何度も巻き戻っているかのようだった。
　こういった夢の中ではいつも、赤ん坊と男は彼女に次のように語り掛けるのだった。
「どのような終わりにも始まりがある、サラ。破壊を行うのならば、それは創造のための破壊なのだ。それを止める必要はない」
　サラはいつもこう返事をした。
「あなたは誰？」
　赤ん坊と少年、そして男は返事をする。
「私はあなたの最後の血を継ぐ者。<アリッサ> であったサラ・キャロルの血に連なる者。私は預言者ディビッドだ」
　そして毎回この男ディビッドはそう言ったあと、サラを触ろうと手を伸ばすのだが、その手は亡霊である彼女の体を突き抜けてしまうのだった。彼は痛々しい表情をすると、背を向けてしまう。そこで夢は終わっていた。
　いったい何を意味しているのだろう？　この夢・・・いつも見る夢は？　いったいどんな意味がありうるのだろうか？

＊＊＊

西暦1962年　ケンブリッジ　イングランド

暖かい八月の雨が、石畳の道とスレート葺きの屋根から夏の日照りの汚れを洗い落とした。

街は雨の訪れとともに目を覚まし、黄色く枯れかけていた雑草はその緑のつやを取り戻していた。大きく黒々とした雲の間からこっそりと顔を出した、午後の太陽の光が通りの水溜りと水の流れに反射して金色に輝いており、人々は住居やオフィスのあちこちから顔を出して、天候の変化を歓迎するために姿を見せ始めていた。

アレクサンダー・モスは考える。イギリス人というものは天候について一度も不平を述べてなかったようだが、それでは毎晩酒場で彼らはいったい何を話題しているというのだろう？

アレクサンダーはこの雨のない日々を楽しみながらすごしてきた。なぜなら彼は水をやらなければならない畑は持ってなかったし、収穫物について考える必要もなかったからだ。彼は暖かい気候が大変気に入っており、毎朝彼の質素な寝室に差し込む白いカーテン越しのさわやかな光を受けて、毎朝散歩に行くぐらいだった。

ここでもうこれ以上生活を続けることができないということ、そして彼のここでの人生はやがて終わるということは非常に苦痛なことだった。アレクサンダーはこの町が本当に気に入っていたのだ。大学は知的な挑戦の場であったし、彼の研究のためのほぼ完璧な環境を提供してくれていた。いまここを去ることは必要な手順のひとつではあったが、数年間は彼の仕事を停滞させるだろうし、これまでの引越に比べて、言うまでもなく大きな悲しみの元になっていた。ここで付き合い始めた人たちとも離れないといけないからだ・・・。

彼は親しい知人を作らないほうがよかったのだ、ということを知っていた。そういった関係は、彼がとっくの昔に捨て去った贅沢品だった。しかし、イヴェットと出会ってから、彼の研究は飛躍的に進んだし、しばらくの間ではあったが、彼の未来はもう決まったのだというように自分をだますことだってできていたのだ。

いろいろなことにけりをつけて、ここで普通の人間として生活することもできたのかもしれなかった。普通の男のように年老い、子供や孫に囲まれて、死ぬことだってできたのかもしれないのだ。

イヴェットは彼に生きる目的を、本当の自分の人生を生きるための理由を与えてくれただけではなかった。彼女と一緒にいるときは、彼はそれまでの人生の中で初めて、死ぬことが怖くないと思ったのだ。

そしてある日、アレクサンダーの元にある男が来訪してきた。

彼はその男が誰なのかわからなかったが、しかし彼はその男に何か不愉快な親近感といったものを感じた。それはまるでこの男が古い知人であり、長い間忘れ去られてきた、半分しか覚えていない夢の中の人間のような感じであった。男はアレクサンダーに短い伝言しか残さなかったが、彼が去ったあと、アレクサンダーは自分が普通の生活を営めると思ったことは傲慢であり、むなしいものだと知ってしまった。あまりにも多くのことが彼を中心にして起きたのであり、彼に賭けられているものはあまりに大きすぎ、アレクサンダーが普通の人生を望める可能性などどこにもなかった。

彼には責任があった。いわばそれは彼の運命だった。この際その運命がどこに行き着くのか、彼自身何も知らないことは、どうでもいいことだった。

男が去っていってから、今はもう二ヶ月が経過していた。

アレクサンダーはこの名前と経歴を使ってきた後始末をしてきた。そしてまた消えうせる準備をしていた。十年間の安息と充実の日々はたいしたことではなかった。十年など、大海の中の一滴にすぎなかった。今後、彼が持っている有り余る時間に比べたら、十年など一呼吸に過ぎなかった。だが、それにもかかわらずこの十年間の間、この街とここに住む人たちと本当に親しくなってしまい、彼は愛しい人と親しくなった人々をすべて捨て去ることが、恐ろしくてたまらなくなってしまったのだ。

彼は同じあやまちを二度と犯さないだろう。彼は二度と人とうちとけたりはしないだろう。もう二度と人を愛することはないだろう。

アレクサンダーは彼女と面と向かうことはできないと思った。だからもう会わないことだろう。

だから、みなに愛されたアレクサンダー・モス教授は火事の中で非業の死を遂げ、その価値ある研究成果とともに火の中に消え去るのだ。表向きは。

また大学には、彼の仕事の一般的な部分を断片的ではあるが残してゆくつもりだった。

そして彼が生涯続けている研究については、このケンブリッジで仕事をしていた間、大きな一歩を踏み出すことができた。以前は、肉体に対する処理は複雑であり、かつ危険なもので、その効果も長続きしないものだった。実際、アレクサンダー自身だけが、その処理がうまくいった実例といってもいいぐらいだった。そして現在は、処理はより遺伝子的なレベルで行われ、より基本的なやり方ではあったが、自然の現象を逆向きに走らせることに成功することまで可能になっていた。しかし、完璧な手順の確立と、不確定要素の除去、そして恒久的な効果の持続といった目的を達成するには、あと数十年が必要だと思われた。いくつかの分野において科学が彼の作り出した理論に追いつくまでの間に、自分の成し遂げたいと願っていることを半分も達成できるかどうか、彼は怪しんでいた。五十年もたてば、目標に到達するかもしれない・・・がそれより早くはまず無理だろう。

五十年か、彼は思った。五十年ですら、大海の中の一滴、もしくは目の瞬きほどのものでしかない。しかし、それにもかかわらず、私はあと一年だってこんな気持ちですごすことを耐えられそうにない。

選択の自由があったかのような感じだった。しかし、それは違う。選択の自由など、もうどこにもない。

彼は両目をこすると、窓に背を向けた。土埃だらけの窓ガラスに、雨水が銀色の水流の跡を残していた。本と書類が部屋中に散らばっていたが、彼が持っていけるものはほとんどなかった。そういうことをすれば疑われるだろう。そして死体・・・アレクサンダーの死体について考えると・・・。

殺人は彼の問題の中で大きなものではなかったが、しかしそれは間違いなく危険な問題ではあった。

彼はため息をついた。いろいろな重みが本当に彼にのしかかってきていた。しかしそれはやがて終わるものだ。時とともに、すべて終わってきたのだ。

外では雨が降り続いていた。雨は古くなってしまったものすべてを洗い流し、新しいものが

やがてやってくる場所を作っているかのようであった。

第五章

西暦1971年　ニュージャージー　スタンフォード

「ドクター・ドレイク、突然呼び出してすまなかったね」

その太った男はしわだらけの茶色のシャツにスーツを着込んでおり——格子模様のネクタイも同じように茶色であることに気がつき、ローランドは嫌な気分になった——男はそう言いながら、オフィスのドアを後ろ手に閉めて、机の後ろに座りこみ、いろいろなファイルを引っ掻き回し始めた。ようやく目的のものを見つけると、男はそのでっぷりとした手を股の上で組んだ。

男は全身が茶色に包まれていたが、その顔だけが真っ青で、皮膚には脂ぎった赤い斑点が浮かんでおり、乾き始めた汗が醜く光っていた。

ローランドはこの男に接しているとき、ずっと感じつづけていた不快感がさらに大きくなるのを感じた。ローランドが目的を達成したとき、彼がこの会社を完全に乗っ取ったその瞬間に、この男は最初の生贄になることだろう。ローランドは管理職の中にこういった腐ったリンゴの存在を許すつもりはなかったし、この男は芯まで腐っていた。よれよれの中年の中間管理職、その企業人生のすべてを、問題が起こったときの隠蔽に費やしてきたタイプの人間だった。彼にとって完璧な一日とは議論せずにすんだ一日のことであり、個人と個人のコミュニケーションや、新しいことへの挑戦などは存在しなかったのだ。おそらくこの男は八時を十分は過ぎたころに出社し、四時十分前には帰宅していることだろう。毎日同じ夕食を食べ、片手にビールの缶を持ちながらテレビの前で眠りに落ちるタイプだ。

アメリカはこういった役立たずでいっぱいだった。そしてローランドはこういった人物を彼の会社においておくつもりはまったくなかった。

もちろん、この会社はまだローランドのものとは言えなかったが、これからそうなるのだ。ごくごく近いうちに。

男にももちろん、スミスという苗字はあったが、ローランドは彼の名前を思い出すことができなかった。たぶんチャックか、フランク、あるいはジョーあたりの名前で、そういったつまらない平凡な名前だったはずだった。その名前の曖昧な男は、ローランドに座るように言った。

だいぶ遅いタイミングだったが。

どうやら面接の時には、このチャック・フランク・ジョー・スミスは自分が偉いのだと主張したいタイプらしかった。そしてローランドは、まだ現時点ではこの男を怒らせるつもりはなかった。結局のところ、乗っている馬がいくらノロマで年老いていて、性根が腐っているからといって、砂漠の真中でその馬に乗っているときに、馬に銃弾を打ち込む馬鹿はいないということだ。

ときおり、こういった犠牲を払い、自らを貶めるようなことをすることを難しく感じることがあった。何十年か未来に達成されるべく目標のために、しみったれた下等な人間の気まぐれに付き合わなければならないのだ。ローランドは常に自分に、こういったことをする必要がな

ぜあるのか言い聞かせなければいけなかった。実際のところ、ローランドは自分の進むべき道を自力で切り開くことができていた――少なくとも短期的な目標であれば――自分のやり方でやらせてもらえれば、より早く目標を達成できるはずであった。

もちろん、彼らには借りがあった。しかもその借りを本当の意味で返すことは永久に不可能だと言えた。

ロシアを去ってから、彼らはしばらく何も言ってこなかった。なので彼も普通の人間のように生活ができていた。その生活はもちろん、彼の・・・外見により疑われないように、定期的に移動を繰り返さなければいけないものではあったが。しかしあるとき、何の前触れもなく、彼らは再びその姿を見せた。そして彼に指示を与え、パスポートと書類一式、つまり新しい身分と名前を与えたのだった・・・。

ローランド・ドレイク。これまで使ってきたたくさんの名前に比べると、より本当の名前に似てはいたが、もちろんそれは彼の本当の姿ではなかった。それはやはり偽名であり、配役（キャスティング）であり、そして幕引き（フィナーレ）が謎につつまれている大いなる劇の中の役名に過ぎなかった。

彼が自分の運命を自分で切り開いてゆけると確信したそのとき、彼らがやってきてその手から自由をもぎ取っていったのだった。ローランドは突然ただの操り人形になってしまったのだ。

この千年期の終わりには、と彼らは言った、あなたはこの会社のトップに立っていることだろう。そしてあなたはこの会社を大きく変貌させるために、一歩を踏み出していることだろう・・・どのように変貌させるかは、本当のところ彼も知らされていなかった。しかしローランドはいつか、彼らがそれを言ってくるだろうと確信していた。

しかしすぐではないだろう。実際に実行するときになって初めて明かされるのかもしれない。

ウィリアム・ピーター・モリス製薬は、普通であったらローランドが働きたくなるような会社ではなかった。この会社は保守的であり、反動的であり、古臭い考えに凝り固まっていたため、今後も発展を続けてゆくはずの製薬マーケットに、大きな投資をしたりするような会社ではなかったのだ。同社の製品には痛み止めや睡眠薬、制酸剤などがあり、それは緩慢なマーケットのためのつまらない製品だった。マーケットは戦前から何の動きもなかったといってよい。

しかもそれは第二次世界大戦のことだ。

だが、それにもかかわらず彼らはここに来るように言ったのだった。ローランドはいまここに居なければならない、と。理由はどうやらこのＷＰＭ製薬が成長を遂げるのにもっともふさわしい時期が今であり、これから大きなマーケットを獲得し、巨額の利益をあげることができるのだということらしかった。それは最終的に彼らにとって必要なことを三十数年後に行うためなのだ。

ローランドはため息をついて、机の向こうのけちな男の品定めをした。

「さて」と彼ははじめる。「私の経歴書は読んでいただけたのでしょうか？」

スミスは返事をする前に、取り澄ました顔でうなずいた。その気取った態度はローランドをさらに不愉快にした。

「もちろんだ、ドクター・ドレイク」スミスは目の前のフォルダをぱちんと開くと、荒い鼻息をついた。ローランドはひどい頭痛を予感した。「たいへんすばらしいご経歴だ」彼は顔をあげた。「弊社にどういった貢献ができると思うかね、ドクター・ドレイク？　たとえば、より

実用的な分野について？」

ローランドはもう少しで笑い出すところだった。どういった貢献ができるか、だと？

この馬鹿な男がローランドが何歳か知ったらどう思うだろうか。彼の外見は三十歳中ごろに見えたかもしれないが、実際にはもうすぐ七十歳になろうとしていたのだ。そして運がよければ、つまりもしローランドの計算どおりに研究のすべてが上手くゆけば、彼は本当の意味で年をとることはなくなるのだ。あと五十年もしたら、ローランドは時計の針を逆戻りさせ、再び名前と身分を変え、若返ることだろう。

さて、この会社にどういった貢献ができるだろうか？　他と比較不可能な巨額の富などはどうだろうか？　永遠の命と、不老不死の泉などはどうだろう？

しかしローランドは単に次のように答えただけだった。「私の製薬分野における研究成果と知識は、医学の博士号と、御社の一番の競合会社における五年間の実務経験により裏付けられています」彼は微笑んで付け加えた。「スミスさん（ミスター・スミス）」

スミスは単にうなずいただけだった。それはあたかも彼が今聞いたことを吟味しており、もったいぶって意見を反芻しているように見えた・・・彼が判断するまでの間を持たせているのだ。それはまるでこの男に判断する能力があり、彼の意見が有効なものであるかのようだった。

「よろしい」とスミスはいった。「君の履歴は非の打ち所がないものだし、我々は君にチームに加わってほしいと思う。しかしながら」とスミスは何か非常に重大な宣告をしているような声色を作った。「ここモリス社では効率化を重視した実績をすでに残している。そして君はどうやら新薬の開発で見事な仕事をしてきたようだが、わが社では君の野心を抑えることが重要だ」スミスは立ち上がった。「謙虚なチームこそよいチームなのだ」

ローランドは奇妙にもこの男の顔面を殴りつけたい衝動に駆られたが、それは何も生まないことは明らかだった。スミスのような人間は鼻を折られても何一つわからないだろう。なのでローランドは男の手を取って握手し、顔に無理やり作り笑いを浮かべた。

さて、彼は中に入り込むことに成功した。彼らの指示に従い、必要なことを実行したのだ。

次は何をするのだろう？

＊＊＊

西暦2017年　サン・ホセ　カリフォルニア

サラは頭を振った。

「いいえ、やっぱりわからないわ。なぜこんなことがそもそも問題になるの？　なぜ私たちはこれについて話あっているの？　私たちは以前、これはリスクが高すぎるからやらないと決めたはずよ、火遊びが過ぎるという理由でね」

「サラ、頼むから・・・」

エリック・ミラーは目を閉じて、ソファーにどさりと体を戻した。広いドアは開け放たれており、外の庭に咲き誇っている花々の豊かな香りが、外からそよ風とともに入ってきてカーテンを揺らした。

エリックの書斎は、後ろが裏庭へと開かれており、いつもはのどかで静かな場所だった。だ

が、二人はもうここで一時間以上議論を続けており、サラは彼女の同僚であり、恋人でもある男にだんだん我慢がならなくなってきていた。えりックは頭脳明晰な天才でもあったが、くだらない奴にもなれるということを今まさに証明しているところだった。
「頼むからなんて言わないでよ、エリック！」彼女は言った。「こんな議論をしていること自体がおかしいのよ」
「まるで僕らに責任があるみたいないいかたじゃないか、サラ」
「そんな言い方するのはやめて。責任があるのはいつも私たちよ。あなたの言葉はやっぱり重要だし、それはわかっているでしょう。彼らはあなたの言うことなら耳を傾けるわ。ドレイクだってそうでしょう」
「仮定の話をしないでくれ」彼の声は毒に満ちていた。エリックはそのままサラをにらみつけた。「特にドクター・ドレイクについてはだ」
　サラはぱっと立ちあがると、部屋の中を行ったりきたり歩きだした。サラは本当に怒っていた。この話題についてはいつもたどり着く結末が同じだったのだ。エリックは彼女が知らない何かを知っているのだ。エリックは何か秘密を握っており、ファーマテックの最高レベルの戦略にかかわっていたからだ。それはわかっていたし、サラも特に期待していたわけではなかった。
　結局のところ、彼女はまだこの会社に来てからほんの一年たらずであり、その業績もちゃんとした成果を残してきていたとはいえ、エリックの仕事はファーマテックのすべての利益と、市場における地位を決める基礎部分に関わっているものだった。そして研究室での彼の研究はまさに奇跡であり、彼の献身ぶりとその熱意の証でもあった。
　しかしエリックの思い上がりは時に非常に腹立たしいものだった。それはサラがかかわってきた男たちと何も変わらない、たとえばトレバーのような男と実質同じであった。ほんとうに気が滅入る考えだわ、とサラは考えた。ここまでやってきてサラがはまり込んだ場所は、彼女があれほど捨ててこようとした場所とまったく同じだったとは。しかしあの色男トレバーと違うところは、エリックはうぬぼれるだけの理由が普通はあったということだった。
　しかし今回の件については、エリックははっきりと間違っていた。
　病気は依然としてこの惑星の上で猛威を振るっており、ファーマテックは既存のほとんどの病気に対して、治療の鍵となるものをすでに発見していたが、その仕事はまだ始まったばかりといえた。問題のひとつはコストだった。ボットの生成には高額のコストがかかり、その治療法というものも、まず研究所の中で遺伝子レベルのボットを用いた基礎作業をし、その次に昔ながらの薬の形でそれを販売するという手順を踏む必要があった。
　そして今、二人の議論の対象は、いくつかの病気の原因を直接叩こうというものだった。より正確には、蚊だった。何種類かの蚊は、危険で感染力の高いさまざまな病気の媒体なのだ。
　たとえば、この地球の生態系の中にとある遺伝子操作を加えた蚊を放ち、ほかの蚊を撲滅するとしたら？　それは迅速に、シンプルかつ効率的に行われるだろう。
　たた自然界を相手に作業をする場合、計画どおりに物事が動くことはありえない。サラはそれを知っていたし、エリックもわかっていた。彼が頑固になっている理由は、上からそういうお達しが届いていたからだ。あの高名な、誰一人として知らぬ者のないあのドクター・ローランド・ドレイク本人から指示が出ていたのだった。。
「うまくいくほうに賭けるの、エリック？　フランケンシュタインのような怪物を作ってしま

う危険はあるのよ。スーパー・モスキートを？」
　エリックは笑った。
　サラはさらに頭に血が上るのを感じた。
「スーパーモスキートかい、サラ？　惑星クリプトンから来た蚊なんだろう？」
「私の言ってることはわかるはずよ」サラは怒鳴りだしたり、物を投げつけたい衝動を抑えるのがやっとだった。
「僕らは博打を打ったりしないよ、サラ。わかってるだろう。僕らはまず地道な調査からはじめるんだ」
「でもこういった事柄については・・・結果を予測できないわ。生態系がどう変わるかまったくわからないのよ！」
「君は僕らが神になるのが気に入らないんだろう？　英国風の伝統主義かい？」エリックはそういうと目の前の飲み物を一口すすった。「それとも、僕らの行為がそもそも神などどこにもいなかったことを証明してしまうのが怖いのかね？」
「神についての話じゃないわ。人間の傲慢さについての話よ。私たちは近代のバベルの塔を作ろうとしてるのよ。それにこれは単に言葉が壊れるだけの話じゃないわ・・・生態系をすべて破壊してしまう可能性だってあるのよ」
「それは新興宗教並みのばかばかしさだ・・・」
「アナロジーよ、エリック。私たちは慎重にならなければ、責任は重大なのだから」
「サラ、天国なんてどうでもいいし、塔を建てるわけじゃないんだよ！」エリックは組んでいた足を戻してまっすぐ座り、飲み物をこぼした。しかし気にもとめていないようだった。「僕らは世界からもっとも危険な病気の媒体のひとつを削除しようとしてるんだ！　これが良いことでないはずがない。欠点などない」
「それは確かなの？」サラはエリックに近づいた。彼の理性に訴えかけなければいけなかった。「私たちの命を、それに賭けようというの？」
　エリックはため息をついた。忍耐心があまりなかった彼はる、議論を毛嫌いしていた。エリックの視点から見れば、彼は自分の間違いが証明されたときでさえ正しかったのだ。
「賭けじゃないよ、サラ。これは事実なんだ」
　サラは彼の隣に座ると、その手を取った。彼は拒まなかったが、仲直りに応じるような感じでもなかった。エリックはどんどん冷たくなって、彼女から遠ざかってゆくようだった。サラは彼を失いつつあったのだった。そしてサラの心は痛んだ。エリックを愛していたからだけではなく（サラは本当にそうなのかどうか確信はできていなかった。ひょっとしたら単に尊敬していただけかもしれなかった）、自分の将来を台無しにしかねない危険を犯して、この議論を続けていたからであった。
「どのぐらい確かなの？　データはすべて集まってないわ」
「シミュレーションは何度も実行した」
「シミュレーションは・・・」
「成功した実験に基づいているんだよ、サラ！」
　彼は手を振りほどくと立ち上がり、庭へと続くドアへと歩いていった。そよ風が吹いて、彼の疲れきった顔にかかる髪の毛を揺らした。この仕事は彼の身も心もすり減らしていたのだ。この議論も含めて。しかしサラはやらなければいけなかった。議論にかかっているのは、ほか

ならぬ彼女の良心の咎めだったからだ。
「僕らは目隠しをして仕事をしているわけじゃないよ」彼は言った。
「このやり方で病気を撲滅すると言うの？　原因を究明するのではなく、単なる運び屋を絶滅させるというの？」サラはあとについていったが、もう触れなかった。「エリック・・・ワクチンや遺伝についての仕事は時間がかかるわ。でもそれをやらないことには・・・」
「時間だって？」彼は、燃えるような視線をサラにあびせた。「時間はかかるさ！　何十年も、ひょっとしたら何世紀も、僕らが薬でやりたいことを達成するのには、それぐらいの時間がかかるかもしれないんだ。僕らはもっと積極的に取り組むべきだし、こういった問題に対してはあらゆる角度から取り組むべきだ。それぐらいわかるだろう？」
　わかっていた。そんなことはもちろんわかっていたし、サラは馬鹿ではなかった。しかしこれが良いやり方ではないことにも気が付いていた。自然に対して、予測不可能なものを作って干渉することは良くなかった。なぜならシミュレーションですら、しばしば誤った結果を導き出すからだ。しかもそれを世界に対して公式な相談や発表もなく、勝手に実行しようというのだ。
　サラは自分がファーマテックの決断に結局従わねばならないことはわかっていたし、これを世間に公表して、実験を妨害するようなことはできないと知っていた。なぜなら彼女はこの仕事を失いたくはなかったし、ファーマテックの研究がどのようなものであれ、参加したいと思っていたからだ。それは未来を変えようとする、サラなりの試みでもあったから。
　しかし、ここで黙って座っていることはできなかった。彼女は声をあげなければいけなかった。
「じゃあそれがうまくいったとするわ」サラは話しはじめた。「実験はうまくいって、蚊は今後病気の運び屋でなくすることに成功したとするわ・・・私たちは神に成り代わって創造主に、名前はなんでもいいけど、たとえば宇宙の造物主になるんでしょうね。じゃあその次になにをするの？　次はどの生き物を作り変えるの？　ああ、それよりは胎児や赤ん坊を対象にしたほうがいいのかしら？　エリック、あなたがそれをやりたがっていることは知っているわ。そういう計画なの？」
　彼は首を振って、微笑んだ。一瞬、サラは仲直りができそうだと思ったが、彼の目を見た瞬間、彼女は寒気を覚えて自分を抱きかかえた。その目は北風のように冷たかった。
「君はなんてナイーブなんだろうね、サラ。僕らがそれをまだやっていないと思うなんてね？」
「何ですって？」彼は何を言っているのだろう？
「君がこれに参加するずっと前の話だよ。僕らはそれをもう実行したんだ。僕らは遺伝子的に強化した子供を作ったのさ。僕らは大人の人間の遺伝子構造だってすでに変更済さ。これは・・・」彼は手のひらを、何かを持っていたかのように広げてみせた。だがそれは空っぽだった。
「蚊の遺伝子を修正することは、僕らの長期計画の小さな一段階にすぎない。安全で、予想可能なものだ。僕らはマラリアやデング熱、脳炎の伝播を大きく減らすことができるだろう・・・高い治療薬を買うことができない地域においてね」彼は手をふっと上にあげると、彼女に背を向けた。「僕らはすでに神なんだよ、サラ。その事実を認めなければ何もはじまらないよ」
　サラはショックを受けて立ちすくんでいた。彼女は犯してはいけない神聖なものがあるという教育を受けてきたのだった。新しい分野で果敢に研究を続けるファーマテックですら、それ

は尊重しているはずだと彼女は思っていたのだ。彼女は倫理がしばしば試されていることを知っており、またその壁が破られることもあるのも知っていた。もちろん、科学の進歩という名のもとに、だ。しかしこのキャンパス内で、その中でも最も不可侵なもの、しかも人間を対象に実験を行っていたということなど、サラは思いついたことすらなかったのだ。その上、それを抵抗できない人間に対して実験したのだ・・・それはサラの目の前で起こっていたことだったのだ。

だが、サラは本当に驚いていただろうか？　結局のところ、それは彼らの仕事の自然な流れではなかったか？　もし彼らが理論を実践できなければ、どうやって奇跡を行うことができるだろうか？

そしてこの世界には奇跡が必要だったのだ。それは確かなことだった。毎日のように繰り返される悲劇。新しい脅威、たとえばウィルスやバクテリアや環境汚染、そして戦争や貧困や自然災害は、すべて環境のバランスの悪さによって起こっているのだ。

数百万の人間を救おうというときに、一人の人間の命などなんであろうか？

これは危険な考えだということをサラは知っていた。こういった話の流れからあのような結論に達することはやさしかったし、倫理的な視点を保つことは難しかった。その結末は決して手段を正当化しはしないだろう。だからサラは自分の信念を信じなければいけなかった。どれほど彼女が事実をそのまま受け入れてそのまま進みたいと、願っていたとしても。

しかし、今ここを去る意味があるだろうか？　もしここに留まれば、サラは少なくとも自分の意見を言うことができる。その意見が受け入れられるかどうかは、重要なポイントではあったが、さほど大きな問題ではないと思えた。

もし彼女が理性的な意見をエリックの耳元にささやきつづけることができれば、それで十分ではないか？

もしそれで十分ではなかったとしても、少なくとも何もしないよりよっぽどましだ。

サラはため息をついた。「お願い、もう議論はやめましょう。せっかくの休みなのよ」

エリックは唸り声で返事をした。彼は庭の向こうに、無限に広がる空をにらみつけていた。彼が何を考えていようとも、サラができることは何もなかった。

サラは部屋の中に戻った。吐き気がしたが、一杯やればきっとすっきりするだろうと彼女は思った。

いつかエリックに理解させてやるわ、と彼女は思った。いつの日か。

＊＊＊

西暦2017年3月30日　ニューヨーク

その部屋には贅沢さと、冷たく個性のない効率さが同居していた。部屋にはほとんど使われていないような雰囲気があったが、使われる時この部屋は、権力をもった人々にだけ使用される場所のようだった。

あたりには高級な黒皮の匂いがただよっていた。すべての椅子と、角に置かれたソファー二つが革張りだった。硬い木の床はぴかぴかに磨き上げられていて、チーク材の大きな机があり、壁の展望窓からはダウンタウンを地平線まで見渡すことができた。また大きなフラットスクリ

ーンのモニターが設置されていた。四方の壁のうちの三つには絵画が掛けられており、その絵画もやはり高級だったが個性が排除されている作品だった。著名な芸術家に依頼して描かれたのであろうその絵は、部屋の持ち主の近代芸術に対する趣味とその豊かさを単に象徴するだけのものに成り下がっていた。

ファーマテック社はこのビルすべてを所有しているわけではなかった。それは無駄なことだった。ニューヨークの街ではほんのわずかの従業員しか必要なかったし、役員たちは無駄なものは一切認めなかった。

倹約とビジネスに対する昔ながらの嗅覚のよさが、ファーマテックを今の地位まで押し上げたのだ。少なくともかつてウィリアム・ピーター・モリス製薬であった、ファーマテックの一部についてはそうであった。自分たちを誇示することは、もっと若い会社がやることであり、彼らは産業界からよりよく認めてもらうためにそうしなければいけないのだ。誰しもがファーマテック社が所有しているものを求めていたが、それをどうやって手に入れたのか知っているものは少なかった。そしてその理由を知っている者達が、いまこの部屋に集まっていた。

ローランド・ドレイクはテーブルの上席に、街に背を向けて座っていた。その手はいつものように、綺麗に重ねられた書類の上にきちんと置かれていた。ローランドは紙の書類を信頼していた。彼は仕事のデジタル化の利点をまだ信じていなかった。おそらくそれはローランドの年齢がいくらか関係していたのかもしれない。彼は六十歳にはとても見えないほど元気で健康的に見えたが、実際には百歳を超えていた。ローランドは自分の古い仕事のやり方に対するこだわりには、現実的な理由があると思っていた。

紙の書類のほうが、単により効率的であるということだ。

彼のすぐ左にはハインリッヒ・ウェルテが座っていた。彼はファーマテックのドイツ支部のトップであり、また非常に有名な生物遺伝子学者でもあった。青白い肌に、背が高く痩せこけたその体の上に禿げかかった頭がのっている。彼の雰囲気には間違えようのない貴族の空気があった。ローランドはウェルテに大きな敬意を払っていたが、しばしばこの人物は彼の母国にいた党（パルティーヤ）の同志たちに似すぎていると思っていた。

またその左にはアネット・クルーズが座っていた。彼女はアジアの地下の調整役であり、ファーマテック社の世界的な保安（セキュリティ）ネットワークをまとめているのも彼女だった。その仕事の範疇はキャンパスの防衛から、オンライン・テロ対策まで幅広かった。クルーズは三十代中頃の、オリーブ色の肌をした冷ややかで魅力的な女性であり、その黒い巻き髪を肩まで垂らしていた。クルーズは強気でかつ議論好きな人間であり、ローランドはしばしば彼女の力が必要としなくなるときがくればいいのだがと思っていた。しかしクルーズはかけがえのない人材であり、特にこういった状況の中では貴重な存在だった。おそらく後になれば彼女を取り除くことができるかもしれないが、しかし今のところローランドは外交上手である必要があった。彼はクルーズが、タバコをいつも吸い続けなければよいのにと思った。その臭いは彼をいつもいらだたせた。

最後に、ローランドの右にはジョージ・マッキニーが座っていた。ジョージは計画の論理的な構築を担当としており、ローランドは認めたくなかったのだが、この七十年の間で一番友達と呼べる存在に近い人物であった。スコットランド人であるジョージは、寡黙で慎重だったが、

意外にも敬虔なルター派の信者だった。またジョージはここに集まった人間の中でもっとも鋭い知性を持った人物だったのだが、それに気が付くものは少なかった。ジョージはもったいぶらず、いつも思っていることを簡潔に述べたし、ローランドはその言葉を聞き逃すことはなかった。ジョージの天性の才能は他の人を気持ちよくさせ、なんでも話せるような雰囲気にしてしまうことだったが、ジョージはその利点をよくわかっているようだった。そして彼はそれを悪意あるやり方では使用しなかった。彼は悪意とは無縁の人間だった。また、ジョージは計画の理念を心から信じていた。彼はその理念が倫理的に正しいものだと思っていたし、神の意志であると考えていたのだ。

　いまジョージは、報告書を読み上げているウェルテをじっと見つめていた。

「さきほどニュースが入ってきました」ウェルテはローランドを見ながら言った。「私は来た報告をざっくりとしか見ていませんが、最初の印象はかなり見込みがあるものだと思います」

　ウェルテはいつも公式な体裁を大事にしており、それはローランドが好きな部分だった。しかし彼の完璧主義は、長い目で見ればかんに触るようになるのかもしれない。その発音にはかすかな訛りしかなかった。

「見込みがあるというのが正しい言い方かどうかはわからないが、ミスター・ウェルテ」とローランド。「しかし、続けてくれたまえ」

　ウェルテは咳払いをした。ローランドは、これがウェルテが不満を表すときの精一杯の表現なのだということを知っていた。ローランドはそれを覚えておくだろう。「私たちはこれから数日間の間に、広範囲の感染の兆候を見ることになるでしょう。予想では――」

「なんでこんなに時間がかかるのかしら、ウェルテさん（ヘル・ウェルテ）。だって、もう二週間よ？」

　すべての頭がアネット・クルーズに向いた。ウェルテはかすかに震えたようだったが、見事なまでに平静を保っていた。

　クルーズはみなを無視して、タバコをもみ消してもう一本に火をつけた。目を閉じると深くタバコの煙を吸い込み、ウェルテに向かって煙を噴きつけた。彼は唇をかすかにゆがめて微笑みの形にした。ローランドは前にもこういった微笑みを見たことがあったが、あまり気持ちが良い眺めであるとはいえなかった。

　ウェルテはローランドを見たが、ローランドは肩をすくめただけだった。何か言うことがあっただろうか？　質問するのは彼女の特権だった。願わくはもう少し外交的になって欲しいものだが。

「どうなの？」クルーズはタバコを人差し指と親指で硬くつまみながら、ウェルテをにらみつけた。彼女が一週間前よりもはるかに老けて見えることにローランドは気が付いた。ジョージのほうに目をやると、彼は椅子に背をもたれかけさせて目を半分閉じており、一見したところ天井に意識を集中しているようだった。

　ウェルテはため息をついた。

「ミス・クルーズ。まだ二週間たっていませんよ」彼は言った。「導入が遅れた理由はわかっている――」

「何を言っているの、ハインリッヒ？　ごまかさないで。私が何を言っているのかわかっているでしょう。なぜここまで時間がかかったの？　私たちはこのミーティングを数日前に開くこ

とだってできたはずよ。この街に留まってずいぶんと待たされたわ。五番街（フィフス・アベニュー）でアクセサリーを物色するほど暇じゃないのよ」彼女は半分まで吸ったタバコをもみ消して、すぐ次のものに火をつけた。

「アネット」ジョージが口を開いた。その声はやわらかく、心休まるものだった。そして天井を眺めているように見えても、ジョージがこれまでの話を集中して聞いていたことを、みな気がついていることをローランドは知っていた。「ハインリッヒが単に報告しているときに、それを邪魔する必要はない。それについての議論は後でやればいいだろう」彼は視線を下げてローランドと目配せした。ローランドもそれに賛成だった。「コメントするのは最後まで控えたほうが、はるかにこのミーティングを早く終わらせることができるはずだ」

　クルーズは鼻から煙を吐き出したが、何も言わなかった。ローランドはウェルテに続けるように言った。

「さきほど言いかけていたように」と彼ははじめた。「私たちがタイプXと名づけたウィルスは、香港の中央部で感染を始めました。爆心地（グラウンド・ゼロ）から五キロと離れていない地区です。もう少し早く流行が始まっていてもおかしくなかったかもしれませんが——」彼はクルーズにとげのある視線を投げかけた。「——万全を期すため、私達の計画戦略の基盤となる情報については、公式なものしか使用したくなかったということです」

「それでは、始まったのか？」ローランドは胸の中に奇妙な震えを感じた。それはどこか興奮に似た感情だったが、大きな不安でかき乱されてもいた。

　いったい彼らは何をしてしまったのだろう？

「ええ」ウェルテは満足を隠せない顔で言った。「始まりました」

　ローランドは大きく息をつき、他の者もそうしたのに気が付いた。

「よろしい。箱舟計画（アーク・プロジェクト）はスケジュールどおりに開始された」そういってクルーズを見ると、彼女は頭を振った。「ほとんどスケジュールどおりにだ」とローランドは修正する。「しかし、それは十分許容範囲内だった。ジョージ？」

「なんでしょう、ローランド？」ジョージは彼を名前で呼ぶことができるただ一人の人物だった。ローランドはそう呼ぶことを禁じたことはなかったが、そうする者は誰もいなかった。

「進捗を報告してくれるか」

「ええ」とジョージ。「もちろんですとも」彼は乗り出して、黒皮のブリーフケースを手にとってテーブルの上に置いた。「いまから見せるこの書類は、ここに居るあなた達だけのものだ。つまり誰にもこれを見せてはいけないし、あなた達以外の人間がこの内容を聞いてはいけない」

　ジョージが親指でロックボタンを押すと、ブリーフケースはぱちんと開いた。「もしこれがそれにふさわしくない人の手に渡った場合・・・僕らの箱舟は港を去る前に転覆する可能性もある。そんな残念な事態にならないためにも、十分に注意してほしい」彼は四つの封筒を出して、それを配った。

「これは何？」クルーズは五分間で三本目のタバコをもみ消すと、封筒に手を伸ばした。それぞれの表に名前が書いてあり、各個人向けに作られたものであるようだった。封筒はプラステ

ィックで封がされていた。
「あなた達の避難手順がそれぞれ入っている」とジョージは言って、自分の封筒をテーブルに置いた。だがそれを開くことはなかった。「明日の朝からのだ」
「何ですって、避難？」
「最初の段階だよ、アネット」ジョージは言った。「僕らはお互い、かなり長い間会えなくなるだろう。だが第二段階が始まる直前にまた会うことになるだろうし、もちろん第三段階のすぐあとにまたこうして集まることになるだろう。その後はお互いをよく知る時間が、ものすごくたくさんあることになる」そう言うとジョージは笑って、クルーズにウィンクした。彼女は目を回して、新しく点けた四本目のタバコの煙を吸い込んだ。「これは第一段階において、僕らの身の安全を確保するためのものだ・・・僕らを爆心地と、そこから発生する危険から守るためのね。実際の避難は・・・特にファーマテック人員の移動は、以前合意したスケジュールのとおりに実施されることになるだろう」彼は封筒を指で叩いた。「すべてここに書いてあるよ。だからすみからすみまで目を通して、内容を覚えてくれ・・・そのあとに廃棄してほしい」
「新しい施設の準備はどうなっていますか？」ウェルテが聞いた。
「ほぼスケジュール通りだよ。あなた達全員に詳細な報告を出すこともできるけど、聞きたい人はいるかな？」ジョージは一人一人の顔を見た。「僕らは何の問題もかかえてないし、進捗は実に健全なものだよ」
「特にいらないと思う、ジョージ」ローランドは言った。「実際のところ、状況は私たちの予測を超えて進んでいる。特にサン・ホセの進捗が」
　クルーズはローランドをじっと見つめた。「遺伝子改造のこと？　あの研究は実際に使用可能なまでに進んだの？」
「良い方向に動いている」ローランドは続けた。「私たちは五体の被験者たちを対象に治療をはじめた。有能なるドクター・ミラーと、彼の直属部隊がこれまでニュージャージーで一緒に仕事をしてきた内容というのは、新しいナノ・ボットを用いて染色体を分子レベルで、リアルタイムに変更を加えていくというものだ」彼は間を置いた。「そしてどうやら飛躍的な前進があったようだ。ミラーの成果である奇跡のロボットと、私の研究成果を合わせたことにより、老化現象と人間のゲノムの解明作業はとうとう終了したようだ。私たちは自然そのものを作り変えることができるようになったのだよ。そして予測どおりの結果を、間違いなく起こすことができるようになった」ローランドは両手を広げて微笑んだ。「あと数年のうちには、君たちの体は確実に・・・活性化されていることだろう」
　クルーズは目を閉じて、椅子に背中をもたれかけさせて、明らかな安堵の気持ちをしめした。ウェルテは単にうなずいただけだったが、ジョージはにこにこしていた。
「まったくすばらしい」と彼は言った。「そんなことが本当に可能なのかどうか、疑ったことがあったのを僕は認めないといけないな。すまないね、ローランド」
「問題ない」ローランドは答えた。
「どう考えても、まったく不可能ごとに思えていた。ああいった小さなモノを自由に操作できるようになるなんてね。神の創造物を、僕らが改善するなんてね！　いや、まったく僕は感嘆しているよ」
「同じく」ウェルテが付け足した。「さて、残る報告は、クルーズの中国事業がどの程度進んでいるのかということですな」彼はアネット・クルーズに目をやって、眉をひそめた。「あな

たはこの話題についてはずいぶんと静かなようですね？　言うまでもないことだとは思いますが、この事業は大変重要な鍵となるもので」ウェルテは追加した。「これが完成しなければ、それは弾丸のない銃を作ったのと同じことです」

ローランドは眉を上げて、クルーズを見た。もちろん、ローランドは彼女の報告書にすべて目を通していたが、クルーズ自身がそれをみなに報告してくれることを望んでいた。対立している二人の緊張を和らげるためにだ。外のことでも心配することはいくらでもあるというのに、中でもめている場合ではないのだ。それは時間と労力と、人的資源（リソース）の無駄であった。

クルーズは微笑んで言った。「うまくいっているわ」

長い間があった。

「それがすべてなのですか？」ウェルテが聞いた。声には苛立ち以上のものがあった。

クルーズはまた微笑んだが、目は冷たかった。「よいことだと思わないの？」

「それについては決めかねさせていただくが」ウェルテは続ける。「ミス・クルーズ、私は事実が聞きたいのであって、皮肉が聞きたいのではない」

ローランドは咳払いした。「協力して仕事をしてくれるようにお二人にはお願いしたい。お互い妨害しあうのではなく、だ」外交家のジョージはうなずいて同意した。「アネット、ハインリッヒの疑惑に答えてくれ。そうすれば私達はより早く、スケジュールどおりの仕事に取り掛かることができるようになるだろう」

「わかったわ」と彼女は言って、テーブルに肘をつき、ウェルテを念入りに無視しながら続けた。「あなたたち三人と違って、私はどんな部下も信用しないわ。あなたの研究所のネズミたちだって」言葉を切ってローランドを見る。「間違いを犯さないとは限らないし、何度も失敗する可能性だってあるわ。もちろん私は敬意は払うけれど」

ローランドは微笑んだ。クルーズが彼を意図的に挑発していることはすぐにわかったし、それにひっかかるような彼ではなかった。「もちろんだ」彼は言った。

「私は敗北主義的な発言をしているのではないわ。ただ、私たちの将来に対する見込みは少し甘いのではないかって思っているだけよ。まだ計画はサイアクの失敗に終わる可能性はあるのよ。でも」彼女は続ける。「私の女の直感のすべての部分が、この計画がうまくいくと言っているわ。まさにあなたが予言していたように、です」彼女はローランドを見た。その視線には本物の尊敬の念がこめられていた。

「そうだ」彼は何も予言してはいなかった。例によって、その啓示も上のほうからやってきたものだった。狂信的な中国の宗教団体の名前や、彼らをたきつける戦略。そして必要なときに適切な援助をして、その行動の影響力を計算し計画に組み込むこと・・・それはすべて他所の誰かの壮大な計画だった。そう、まるでローランドがやっていることは彼らの計画を実行しているだけのようだった。「私が予言したとおりだ」

「それではあの日付に変更はないのですか？」ウェルテは当然、まだ疑わしそうだった。どのようなことからでも失敗することはありうる。予言はただの予想だった。それは考え抜かれた推測であり、推論だった。何一つしっかりとしたものはなかったのだ。未来はまだ彼らの手の中にあるとはいえなかった・・・やがて当然そうなるだろうことは明らかだったが。

「次の夏」クルーズは約束した。「世界は燃え上がるでしょう」彼女はウェルテに向き直った。「それでもまだ遅すぎる？　ハインリッヒ、その日が来たとき、最後まで見届けたいとは思わ

ないでしょう？」
　沈黙が、巨大なテーブルの周りに座る四人の権力者たちの上に降りた。はるか下の街は人々でごったがえしており、その生活はバランスの中にあった。彼らのその生活は、やがて進化という祭壇の上で生贄にされるのだ。たくさんの生と死が——彼ら四人の責任になるのだ。
　最後に沈黙を破ったのはジョージ・マッキニーだった。
「人は、僕らがやったことを永久に理解できないだろう。だが神のみはご存知だ」
　クルーズとウェルテは、信じられないというようにジョージを見た。そしてクルーズは笑い出し、ウェルテは目を閉じて頭を下げた。しかしローランドはうなずいた。彼だけがジョージが本当に意味したことを理解していたのだ。
「僕らはこの計画をエクソダスと名づけるべきだったのかもしれない。箱舟の代わりに」彼は言った。
「モーゼがイスラエル人たちをエジプトから連れ出したように、僕らも人間を隷属から解き放つんだ」ジョージは深く息を吐いた。「そうだ、それが僕らのやることだ。モーゼでもノアでもいい、僕らの目的は聖なるもので、その理念は純粋で、その方法は正しい」
　ローランドは立ち上がった。他の三人もそれにならう。クルーズはもう笑っていなかったが、ジョージが気が狂ったのかというように見ていた。いや、おそらくクルーズはいまはじめて彼の中に何かを見たのだ。彼女自身の気持ちと心が、ジョージの中で反射されていたのを見たのだ。
「皆さん」彼は言った。「私たちはともに輝かしき新しい未来を迎えようとしている。進路はすでに決まり、あとは私たちの——その単語はすらりと出てきたが、ぴったりだった——聖なる義務を果たすために、能力の限り努力しよう。やがて、私たちは再び会うことになるだろう。長い道のりの最後に、君たちとまた会えることを期待している。それでは」
　彼らはみな握手を交わし、一人一人が出て行き、やがて部屋はまた空っぽになった。
　ローランドはドアを閉めるとき、最後にまた部屋を見やった。午後の太陽が南の空に沈みつつある姿が見えた。彼はその眺めの中で無くなって惜しいものは何もないことを知った。人々も、街々も、建物も、そして戦争と政治、貧困と病気も——彼は自分が、よりよい世界を建築するのだということを確信した。
　ローランドは微笑んだ。未来はすでに彼らの手の中にあった。

第六章

西暦2017年6月11日　香港

チー・ウォンは道の曲がり角でしゃがみこんで頭をたれていた。彼は疲労しきっていた。彼の周りでは、サイレンが休むことなく鳴り響いていた。それは夜を通して鳴り続けており、チー・ウォンがいくら寝ようとしたところで眠ることはできなかったに違いない。

しかしチー・ウォンは眠ろうとはしなかった。十五年間一緒に過ごしてきた妻のサン・インが、昨晩咳をしはじめて、喉が痛いと訴えたのだ。それはあのインフルエンザの最初の兆候だった。日が昇るころには、妻ははもう死んでいた。

ウィルスの活動は早かった。政府当局は何度もそう警告していた。人の免疫システムは数日間の間に、文字通りずたずたにされてしまった。そしてそのあとはどのような病気でも、たとえば肺炎やウィルス感染、バクテリアによる感染症などですら、患者にとって致死性のものとなってしまったのだった。

そしてチー・ウォンの子供たちは二人とも病院にいた。銃武装した何十人もの中国軍の兵隊に守られた検疫所の、ロックされたドアの向こうに閉じ込められていた。そして彼自身もそのウィルスに感染しており、この街に住むほとんどの人と同じように、ひどい苦痛に満ちた死を近いうちに迎える運命であった。

香港は彼の生まれた町であり、彼の人生そのものだった。それほど前のことでもない昔、ここは自由な港であり、あらゆる人に開かれた街だった。何百万もの旅行者とビジネスマンたちにとって、活気に満ちた重要な目的地でもあったのだ。いまその町は外部から隔離されており、わずかな医者と兵士たちのほかは誰も入ることはできなかった。また外に出られるものは一人もいなかった。この街で感染が始まったのであり、ウィルスは世界各地に広がりはじめてはいたが、みながこの町ですべてが終わることを願っていた。

それは大災害だった。

彼は自分の手のひらを見つめて、それをひっくり返した。まだ赤い斑点の兆候はなく、インフルエンザ後期の症状を示すものはいまのところなかった。

チー・ウォンは深く息を吸い込んだ。彼はまだ元気だった。この数日間に起こったことを考えれば、比較的元気であるとも言えた。

道の向こうで、加速するバスの車両に兵士達が発砲した。バスは店のガラスに突っ込み、燃え始めた。ガスマスクと防護服を身につけた兵士たちがバスに駆け寄り、また何度か発砲した。沈黙が訪れた。

チー・ウォンは立ち上がった。このようなシーンにはこの一週間で慣れっこになっていた。絶望しきった市民たちが、食べ物を求めて、死体の山と兵士たちから逃れて田舎へと逃げようとしていたのだ。そして彼らはみな途中でつかまり、虐殺されていた・・・しかしどうやらこれは必要な処理のようだった。政府はその国民を確実な死から守るために、ウィルスの伝播を防ごうとしているのだ。

少なくとも、政府当局がラジオやテレビやインターネット、そして新聞で伝えているのはそ

のような事実だった。何百キロも向こうから、指示を出しているのだ。生物汚染から隔離された安全な砦の中で、何百万、何十億もの人々の命を取り締まっているのだ。それはもう香港だけの話ではなかった。全世界からの隔離が必要だった。

数え切れない衛星チャンネルを通して、宣教師たちと聖職者たちはこう説いていた。破滅の時はやってきた。審判の日は近い、と。

チー・ウォンは宗教的な男ではなかったが、宗教に関することがらは信じていた。彼は寺院や修道院、教会に行ったことがあったし、蝋燭に火を点してお布施をしたこともあった。しかしこの大災害はそれにもかかわらず彼の家を襲い、妻と子供を彼から奪った。そして近いうちに、彼自身もそうなってしまうだろう。もし時間があったとしても、それは短いものだったし、やらなければいけないことは数多くあった。

病気による自分の痛みは我慢できたが、その恐怖が彼の愛する者たちに降りかかるのは許せなかった。

横転したバスに兵士たちが群がり、死体を火炎放射器で焼いている。彼はそれを避けて歩いていった。彼には目的があり、今拘留されることは避けなければいけなかった。拘留はそのまま死を意味した。

三十分もしないうちに、寺院通り市場のそば、ネイサン通りの脇の小道で彼は自分が探していたものを見つけた。おそらく指揮官から隠れている間にインフルエンザに感染したのだろう、兵士が箱の後ろに丸まって横になって死んでいた。その手は自動ライフルをしっかりと握り締めていた。

野犬がいなければ、チー・ウォンはその兵士を見つけることはできなかっただろう。犬どもは兵士の服に噛み付いて、その下の肉を食べようとしていた。彼は手を打ち鳴らして叫び、犬たちを追い払った。犬たちは脅すように吠え立てたが、やがていなくなった。野犬たちはいまのところ人間たちを畏れているようだが、それも時間の問題だろう。

動物たちも人間と同じように、危機の中で野生に返ろうとしていた。

彼は兵士から銃を取り上げようとしたが、死体はそれを放さなかった。兵士は死んでなお、それを最後の砦のように思って放さないのだった。おそらく兵士は死後の世界でそれを使おうと思っていたのだ。それがどこにあるか誰も知らない場所で。

チー・ウォンは銃を思い切り引っ張り、ようやくその冷たい指から銃を奪いとった。彼は武装したのだ。弾薬を見ると、まだ残っているようだった。残弾の数はわからなかったが、それで十分なはずだった。

クイーン・マリー病院まで歩いてゆくのに、チー・ウォンはあと二時間を費やした。彼は兵士たちや市民たちの姿を見るたびに、伏せて姿を隠さなければならなかった。二回ほど見つかったが、追手よりも街をよく知っていたことが幸いした。おそらく幸運の神々が彼についていたのだろう。もしくは神々はわざと見ない振りをして、皮肉な幸運を楽しめと言っているのかもしれなかった。最後の最後になって、何の問題もなくなるという皮肉を。

彼の死は確実だった。たぶんそれこそが神が気にしている唯一のことだったのだ。彼の魂が天国だか地獄だかのどちらに行くのか選択することが神にとっては重要だったのだろう。

二回目の遭遇はより危険なものだった。パトロールしていた二人の兵士たちは彼の持っていた銃に目をとめ、何の警告もなしに撃ち始めたのだった。しかし彼らはまだ若く、おそらく新

人だったようで、弾はまったく当たらず、またそのマスクと重々しい靴を履いたままでは、チー・ウォンを追跡することはできなかった。彼はかすり傷ひとつ追わずに逃げきることができた。

難しいのはこれからだった。病院に忍び込む方法が無かったのだ。遅くなるにつれて、あたりは暗くなり始めていた。建物の周りの照明はやがて点灯するだろうし、そうするとバリケードを超えるのはさらに難しくなるに違いない二十四時間の外出禁止令が出ていたにもかかわらず、警備兵たちは道を見張っていた。警備兵たちの目的は、もちろん患者たちを外に出さないことにあった。チー・ウォンはすばやく行動しなければならなかった。まだあたりが黄昏の暗さに包まれており、発見されにくい間に。

彼はポクフラム通りで、一時的に救急車として使われている武装車が通り過ぎてゆくのを待った。それはこの致死的なウィルスの一番新しい犠牲者たちを乗せて、隔離病棟へと繋がるメインゲートの中へ走っていった。彼はかつて賑わっていたストリートに飛び出して、建物の前の生垣に貼りつくようにして進んだ。警備兵たちとの間に車をはさんで身を隠しながら、Lブロックへと向かう。

彼が聞いたところだと、ほとんどの出口は封鎖されていたが、Lブロックの入り口は開放されており、医者たちが出入りできるようになっていた。その入り口は主館の西側にあり、二人、多くても三人の警備兵たちをやり過ごせば中に入れる計算だった。一度中に入れさえすれば・・・まあ、それは実際に中に入れてから心配すればよいことだ。

またしてもチー・ウォンは幸運だった。Lブロックの外には二人の警備兵しかいなかったのだ。誰も中に侵入するとは考えていないようだった。また主病棟に比べれば、入り口から外へと逃げ出すものがいないことは明らかだったからだろう。

警備兵たちは二人ともマスクをかぶっており、その視界は狭いはずだった。彼がその場所からこっそり近づけば、二人に気づかれることはないはずだ——もちろん、彼らがチー・ウォンの方角を見なかったらの話だが。チー・ウォンは銃を発砲することを考えなければならなくなるだろう。しかしすぐに発見されるだろうし、そのまま銃を撃ちまくりながら突入しなければいけないということを意味していた。その心構えもできていたが——どのみち皆が死ぬというときに殺人がなんであろうか——その場合物事はややこしくなるだろうし、彼の慈悲の使命を達成することができなくなるかもしれなかった。

彼は兵士たちを観察しながら数分待ったが、兵士たちはほとんど動かなかった。二人は訓練されており、プロだった。おそらく新人ではないだろう。立ったまま眠っているのだろうか？——いや、眠っているのではなかった。彼らの頭は少しずつ動いており、入り口ゲート全体を見渡していることがわかった。

彼らにこっそり忍び寄るのは不可能だ。また二人の銃の構え方から判断する限り、自分がやられないで二人を倒すことは不可能なことのように思えた。

彼はここで待つほかなかった。再び幸運が彼に微笑みかけてくれるのを祈りながら。

二十分後、明かりが点灯した。彼と兵士の間の空間は明るく照らし出された。もはやこっそり忍び寄ることはできそうになかった。

午後八時十五分ごろ、医師が一人検問を通り過ぎた。医師は自分の身分証明書カードを兵士に見せ、兵士はそれをじっくり調べたあと、いくつか質問をしてから彼を解放した。医師は建

物を回って、駐車場へと歩いていった。
　チー・ウォンはそのあとを、影の中を歩いてつけていった。そして医者が車にたどり着いたとき、チー・ウォンはそのすぐ後ろまで忍び寄っていたのだった。
　その不運な男は自分が殴られたことすら気がつかなかったに違いない。ライフルの台座で後頭部の下を殴りつけると、胸が悪くなる音がして、チー・ウォンは医者が地面に倒れる前にその体を抱えた。医者の服に血をつけたくなかったのだ。あたりを見回し、誰も見ていなかったことを確認すると、生命の失われた肉体から白いコートを剥ぎ取り、車のキーを見つけてトランクを空けた。その中に医者の体を入れて、トランクを叩きつけるように閉めてから鍵をかける。
　周りを見渡した。
　駐車場には人の姿はなかった――少なくとも駐車場のその階は他に人の姿は見えなかった――彼は自分の着ていたジャケットを脱ぎ捨てると、白い医者のコートを身につけた。身分証明カードは右ポケットに入っていた。チー・ウォンはそれを取り出し、写真を見てみた。これではぞんざいな検問しか超えられないだろう。写真の医師は彼よりも二十歳は年上だったからだ。しかし、病院の中に入ろうとする人間のチェックを、警備兵たちがどれぐらいきちんとやっているだろうか？
　それを確認する方法は一つしかなかった。しかしまず、武器を隠さねばならない。
　車の後部座席に、キャンプバッグがあった。医師はその中に服の着替えを数着入れてきていた。チー・ウォンはバッグを空にすると、自動ライフルをその底に入れた。
　まさにぴったりだった。
　上から服を詰め込むと、ジッパーを閉めて車のドアを閉めた。
　すべてがうまくいっているようだった。まだ幸運がついているようだった。幸運の神々はまだ微笑みつづけていたようだったが、この仕事の一番難しいところはまだこれからだったのだ。病院の中に入り込むのもその一つだった。その最後の使命は彼の勇気と強さに対する試練であるだろうが、チー・ウォンは自分が本当にそれをやりとげられるのか、ここまで来た今もいぶかしんでいた。
　しかし彼はやりとげなければいけなかったのだ。
　チー・ウォンは駐車場を出て、Ｌブロックの入り口へと向かった。
　角を曲がると、すぐに見つかった。しかし彼はもう隠れようとはしなかった。怪しい素振りは見せられなかった。この検問を何度も何度も通っており、いつもやっていることだということを、彼は警備兵たちに信じさせなければいけなかったからだ。
　左の警備兵は彼が近づく間じっと見つめていたが、チー・ウォンが十メートルより近づいたとき、その警備兵は無線を口に当てて何か話し始めた。何を言っているのかわからなかったが、それは中の警備兵たちに注意を呼びかける手順なのだろうと推測した。
「こんばんわ」チー・ウォンはそういって礼儀正しく頷き、ドアへと足を進めようとした。彼は自分の身分証を警備兵たちに見えるようにしたが、照明にあたらない角度で、なるべく違いに気づかれないように祈りながらだった。
　警備兵たちは気がつかなかったようだったが、その代わりに彼が持ってきたものに興味があるようだった。
「そのバッグの中身は何ですか？」左の警備兵が聞いた。

チー・ウォンは心臓が止まったかと思った。「服だよ。これから長い夜勤なんだ」
「あけてください」
彼はバッグのジッパーを開けて、警備兵に中を見せた。警備兵はうなずき、チー・ウォンにドアを開けて見せた。「入ってください。良い夜を」
チー・ウォンは瞬きして、微笑んで中に入った。
彼はドアが背中で閉まるまで息をすることもできなかった。
チー・ウォンがいたのは照明に照らされた長い廊下だった。その先では、数少ない看護婦たちが医療用品を持って行き来しており、廊下の途中の受付近辺では、二人の武装した警備兵たちが見張りをしていた。それ以外は誰一人おらず、かつてはいつも混み合っていた病院にしては、不気味なほど静かだった。
廊下には、均等な間隔で並んだ閉じたドアがあった。ほとんどはオフィスや倉庫に続いているものだろう。このブロックはもともと管理区だった。しかしこの病院について彼が調べたことと、ネットで手に入れた情報によると、目的地へは警備兵たちをとおりすぎて、廊下の終わりを右に行かなければならない。そうすれば、患者たちのほとんどが閉じ込められ隔離されているメインブロックに着くはずだった。
二人の警備兵たちについては何の問題もなかった。実際、彼のほうをほとんど見ることもしなかった。彼らは中から逃げ出す者がいないかどうか見張るのに忙しかったのだ。一分もしないうちに、チー・ウォンは施錠され閉ざされた扉の前にたどりついた。ドアには「隔離病棟－関係者以外立入禁止」とあった。

ドアには電子カード読取装置（リーダー）がついている。

チー・ウォンは医師の身分証カードを試してみたが、ドアはロックされたままで、カードは使えなかった。
彼は息を殺したまま悪態をつき、髪の毛をかきむしった。顔も胸も腕も汗でびっしょりだった。彼は手のひらを見た。まだ赤い斑点は現れてなかったが、気分は悪かった。かなり吐き気がしていた。彼は熱を出しはじめていたのだ。彼は横になりたかったが、もしそうしたら二度と起き上がれないことを知っていた。
今でなければもう永遠にチャンスはこない。
近いうちには誰かがここを通るはずだ、とチー・ウォンは考えた。彼ができることは待つことと、質問されないことを祈るだけだ。
チー・ウォンは長いこと待つ必要はなかった。そう考えたすぐあとに、ドアが大きく開き、医師と看護婦が中から現れたのだった。彼はドアを開いておいてやり、二人に丁寧にうなずいた。彼らは挨拶を返して、廊下を歩いていった。
彼は中に入った。
彼は感染防止のために部屋と部屋の間の中間にある空間にいた。どうやらそれは隔離を実施するために最近作られたもののようだった。背中で開いていたドアが閉じる。
消毒されたフェイスマスクが壁の気密キャビネットの中に並んでいた。チー・ウォンはその一つをつけた。自らの身を守ることはどうでもよかった。何しろ彼はすでに感染しており、もう長くなかったからだ。しかしマスクをかぶることにより顔をうまく隠すことができた。これで隔離病棟の中を自由に動き回ることができるに違いない。

マスクをしっかりかぶると、メインブロックへと続くドアをあけるためのボタンを力いっぱい押し、歩いて入る。

中はひどいありさまだった。無表情な看護婦たちがあちこちの病室を走り回っており、廊下は死にかけた病人で一杯だった。汚染隔離室のこちら側の出口には五人の武装した警備兵がおり、ちょっとしたことでもすぐに発砲しそうだった。そのうちの一人が何かを聞いてきたが、マスクでよく聞こえなかった。彼が立ち止まると、警備兵はホールへと彼を押しやった。

最初、チー・ウォンはまるで鮮明な悪夢の中を歩いているような気がした。中のほうが、外よりもずっとひどい状態だった。彼は荷台で運ばれるたくさんの死体に囲まれていた。それはエレベーターで地下まで運ばれ、二十四時間燃えさかっている溶鉱炉で火葬されるのだ。人々は悲鳴を上げ、泣き叫び、唸り声を上げながら痛みを和らげるものをほしがっていた。患者たちは自由を求めて、子供たちや父母の名前を呼んでいた。医師と看護婦たちは慈悲深い天使のようにベッドからベッドへと動き回って、一瞬は効果がある痛み止めを与え、直るかもしれないという希望、あるいは救済を与えていた。彼らが去ったとき、患者には何も残されなかった。なぜなら治療法などなく、希望のない確実な死が待つばかりだったからだ。

チー・ウォンは通りかかった看護婦の腕をつかんで、彼を振り向かせた。

「子供たちは」彼は聞いた。「子供たちはどこにやった？」

彼女の顔はマスクで隠れており、チー・ウォンはその表情を見ることができなかった。疑われているのだろうか？　それとも混乱して、怒っているのだろうか？　しかし看護婦は単に「三階」と答えて行ってしまった。

エレベーターは動作を停止していた。疑いようもなく保安上（セキュリティ）の理由からだろう。だから彼は階段を上って三階まで行った。

一階の混乱に比べると、不気味なほど静かだった。しかし病室へとつながるいくつかのドアの向こうからは、子供たちが泣いているのが聞こえた。彼は左手の最初のドアを開けて、中に入った。

部屋は大きく、それは何十ものベッドで埋め尽くされていた。それぞれのベッドには子供が一人ずつ寝ており、時折二人で一つのベッドを共有していた。年は幼児から十代までいるようだった。ある子供は眠っており、幾人かは母親を探して泣いていて、ある子供は胎児の姿勢で丸まってぬいぐるみを抱きしめていた。何人かは本を読んでいたり、絵を描いていたり、独り言を言ったり歌を歌ったりしていた。子供達は厳しい現実から眼をそらすために、外の世界に注意を払わないようにしているのだった。あと数日の間には、いやひょっとしたら数時間の間には、自分が死んでいるということを忘れるためにだ。もしくは皆もう気がついているのかもしれなかったが、皆事実を無視することにしたのかもしれなかった。

子供にとって死とは抽象的な概念だった。しかし痛みは本物だった。そしてどうやらこの部屋には、ひどい痛みを持った者はいないようだった。病気が進んで痛みを訴えるようになった子供は、どこか別のところに運ばれたのだ。

彼はその部屋を調べたが、探しているものは見つからなかった。彼はホールに戻って、別の病室を調べ始めた。

チー・ウォンは彼の娘のミン・タックを、三番目のドアの中で見つけた。

彼女は眠っていたが、顔と手のひらには痛々しい斑点と炎症ができており、その息づかいは重々しかった。その部屋は静かで、ここの患者たちのインフルエンザはすでに発症段階にあるようだったが、まださほど痛みはないようだった・・・そうでなければ、この子供らには痛み止めのモルヒネがうたれていたことだろう。そこには二人の看護婦がいたが、担当の患者で忙しいようだった。

彼は静かに自分の娘を持ち上げると、外に出た。

彼の息子であるマン・ポーは次の病室にいた。彼は痛みで泣いており、最初父親がそばにいることに気が付かなかった。眼を硬く閉じて、真っ白な顔をしていた。チー・ウォンは胸が痛むのを感じた。あまりにも強い喪失感が肉体の痛みとなって現れたのだった。彼はミン・タックをマン・ポーのベッドに下ろした。

彼女は弟を抱きしめて、恐怖で大きく見開かれた目で父を見た。

彼は医者のバッグを床に下ろして、それを開いた。

痛みはすぐに終わるはずだった。

「すみませんが、何をしているのですか？」

チー・ウォンは凍りついて顔を上げた。

子供のベッドの脇に看護婦が立っており、その後ろに銃を持った警備兵がいた。

チー・ウォンはバッグに手を突っ込み、冷たい鉄に触れた。体に緊張が走る。チャンスは一度だけだろう。

「子供の治療をしている」と彼は言った。

「お名前は？　ここの担当でしょうか？　前に見たことがないですわ、ドクター・・・」

「チェンだ。ドクター・ステファン・チェンだ」

「立ってもらえますか、ドクターチェン」警備兵が言った。「身分を確認させてください」

看護婦はベッドを覗き込んだ。「この娘はここにいるべきじゃないわ。なぜここに動かしたのですか？」

自動ライフルを硬く握りしめながら、チー・ウォンは立ち上がった。彼は銃口を水平に看護婦に向ける。「その娘に触るな！」

すべてはとてもゆっくりと起きた。それはチー・ウォンが好きだった昔のテレビアクション映画のようだった。チョー・ヤン・ファットやジャッキー・チェン、ダニー・リーなどが出ていたやつだ。

警備兵も銃を持ち上げた。彼は軍用のオートマティック小銃を持っており、チー・ウォンのほど破壊力はなかったが、素早く抜けるものだった。警備兵の顔はまるで腹部に痛みがあるように歪んでいた。彼も病気なのだろうか？

彼も気分が悪そうだった。チー・ウォンは、この見知らぬ男を苦しめたことに鋭い罪の意識を感じた。そんな考えや映像の断片が何百万という数で、静かな夜に舞う色とりどりの蝶のように彼の頭の中を通り過ぎていった。チー・ウォンは銃を持ったまま警備兵のほうに向こうとした。

そして閃光と、雨がブリキの屋根をたたくような、しかし何百万倍も増幅された轟音が鳴り響いた。そして世界と病室と看護婦と警備兵、そして彼の子供たちからも色が失われてゆき、すべてが白黒の静物画のようになっていった。

彼の銃が床に落ちた。銃はからからと床を転がってゆき、静かに横たわった。

チー・ウォンはなぜ銃が落ちたのかまったくわからなかった。なぜなら彼はそれをしっかりと握り締めていようとしていたからだ。彼はそれを撃とうとしていたのだったが、なぜか指が言うことをきかなかった。

奇妙だった。

チー・ウォンは突然、ひどい疲労を覚えた。彼は座らなければいけなかった。そうしてはいけないのはわかっていたのだが。彼はまだ何か重要なことをしなければいけなかったのだ。それはとても重大なことだったが、それが具体的には何だったかは思い出せなかった。それは子供たちに関連したことだった。しかしそれも奇妙だった。彼らはもう自宅に帰っており、サン・インと一緒にベッドに入るところだったからだ。

その考えは彼を微笑ませた。座り込むことは悪い考えではなかった。いまは子供たちのことを考えればよかったからだ。二人の遠ざかる顔は、幽霊のようにこだまして戻ってきた。

なんで二人は泣いたのだろう？　サン・インは何をしたんだ？　彼女に言わなければいけなかった。泣いているときに寝かしつけるのはよくないことだった。

座るだけではだめなことにチー・ウォンは気が付いた。彼は疲れすぎていたので、横になって眼を閉じた。

あたりは奇妙なノイズで満ちていた。人々は悲鳴をあげて鳴き声を上げ、走り回っていた。いらいらした。彼はただ眠りたかった。なぜみなそれがわからないのだろう？　なぜみなこう礼儀知らずなのだろうか？　彼はそう言おうとしたが、口を開くと濃く、暖かい液体が頬を伝って耳まで流れた。彼が咳き込むと、液体があたりにこぼれた。

シャツが台無しだ。スン・インはきっと怒るだろうな。きっとしかられるだろう。でも・・・子供たちが寝たあとベッドで一緒になったあと・・・彼女は許してくれるだろうし、キスをしてくれるだろう。そして愛していると言ってくれるだろう・・・。

チー・ウォンは微笑んだ。シャツのことはどうでもよかった。

彼は深呼吸し、そして沈黙がやってきた。

＊＊＊

西暦2017年8月3日　サン・ホセ

夢をまったく見ることがなくなってしまった。悪夢も普通の夢も、どちらも見ることがなくなった。

サラはその事実を喜ぶべきだったのかもしれない。もうあの夢に追い立てられることはないのだ。だが実際には、サラの気持ちはまったく落ち着かなくなり、猜疑心と後悔で満ちた罪悪感にさいなまれつづけていた。

これが何かを意味していることはわかったが、正確にそれが何なのかはわからなかった。これがサラの罪に対する天からの報いとは思えなかった。なぜなら彼女は悪夢が――予知が――終わることをずっと願っていたからだ。しかしこれはサラの願いをかなえてくれたというよりは、やはり罰なのではないかと思えた。特にディビッドの姿を見ることができなくなってからは。

サラは壁の時計にちらりと目をやった。時計は午前三時だったが、眠くなかった。サラは本

当に疲れきっていたが、たとえ家に戻ったしても、研究所に出勤する時間になるまで、ベッドの上で天井を眺めて過ごすことになるということがわかっていた。ここしばらく、睡眠は贅沢な行為となっていた。それにサラは一人ではなかった。助手のカレン以外にも、五・六人の同僚が統括チームから参加してきていた。もちろんエリックも職場に来ていた。この数ヶ月間、彼はほとんど建物から外に出ておらず、その表情は日を追うごとに病的になりつつあった。

感染症（アウトブレイク）はすべての人の命を平等に奪いつつあった。だが彼——エリックはこの事件が自分に責任があるということを決して認めなかった。これはただの偶発的な事故であり、ちょっと運が悪かったのだ、誰もこのような結末を予測することなどできなかった、と主張していた。

この感染症が発生したことを知ったあとも、サラは彼を問い詰めなかった。そんなことをして何になるだろう。「だからそう言ったでしょう」と責めても仕方がない。これはもう冗談ごとではなかった。何百万もの人間が亡くなったのだった。この感染の原因となったタイプXウィルスを撲滅できる薬を彼らが開発しない限り、さらに何百万もの人々が絶命することになるだろう。

それに、彼らが作り出した遺伝子操作された蚊が、このインフルエンザのキャリアであったのかどうか知るすべはまったくないのだ。

サラはそれが甘い考えであることはわかっていた——考えられるのは彼らがフランケンシュタインを作ってしまったということだ。数え切れないほどの死の責任は、彼らの良心に重くのしかかっているのだ——だがサラはそう考えたかった。いかに事実とかけ離れていようとも、この感染症は自然に広がった流行病であり、サラとその仲間たちが薬を作ろうと一生懸命働いているのは罪悪感からではなく、病気を治そうという情熱からだと信じたかった。

サラは手のひらで顔を覆ってため息をついた。

少なくともまだ希望はある。ナノ・テクノロジーなしには、治療に有効な薬の開発には何年もかかったに違いない。だがボットを用いることにより、そのプロセスをかなり速めることができるようになっていた。

サラはウィルスの特性の分析にかかった時間があまりに短かったことを思い出すと驚かざるを得なかった。サラが格別に憂鬱な気分なとき、それは偶然ではなかったのではないかと思うのだった——どんな偶然かは考えたくもなかった。なぜなら、それは身の毛もよだつような想像だったからだ。

「サラ？」カレンが心配そうな顔をして、すぐ隣に立っていた。

「どうしたの？」サラは言った。自分の声が本当に苛立たしげで、疲労しきった女の声だとサラは思う。

「ミラー先生がお呼びです。お話があるとおっしゃっています」カレンは何か言いにくそうにしていた。それはいい徴候ではなかった。「急用のようでした」

サラはため息をついた。二人の関係が上手くいかなくなってから、エリックはサラに対して怒りっぽくなっており、彼女は職を失うのではないかと恐れていたのだった・・・だがサラは社が彼女を解雇することを密かに願っていたのだ。それによりサラの罪は免除され、彼女はどこか遠いところまで逃げていって、この悪夢のすべてが終わるまで隠れていることができるようになるだろう。

だが、それも甘い考えだった。サラがどこに逃げようとも、何をしようとも、彼女はずっと

呪われつづけるだろう。少なくともいま彼女は、自分が犯した過失に対する道徳的な、そして医学的な償いを実際に実施できる地位にいるのだから。
「ありがとう、カレン」サラが弱々しい笑みで答えると、カレンははっきりと安心した様子だった。まだ仕事が山積みのこの時期に、わざわざこの娘をいじめる意味はまったくない。
防音されているエリックの巨大なオフィスは研究室の奥、短い廊下を右に曲がったところにあった。
他の社員のオフィスとは異なり、エリックは私物をたくさん置くタイプではなかった。半裸の女性ポスターが一枚と、洗っていないコーヒーカップがいくつか置かれている以外は、その部屋はほとんど空っぽだった。
エリックは机に足を投げ出して座っていた。胸の腕で手を組んで目を閉じている。だが眠っているのではなかった。サラはエリックがこうしているとき、彼が何かを熟考しているか、あるいは考えているフリをしているのだと知っていた。
サラは来客用の椅子の一つに座り、待った。
「遅刻だよ」数分に渡る沈黙のあと、エリックはようやく口をひらいてそう言った。
「あなたもでしょう。何の用？」サラはぶしつけなことを言うつもりはなかったが、気が短くなるのを抑えることはできなかった。疲れでいらいらしており、議論だってしたくなかったのだ。特にいまは。
エリックは椅子を回して足を床に下ろした。その目は血走っていたが、口は笑っていた。「君は怒っているんだろう？」それは質問ではなかった。
「いいえ」サラは頭を振った。「怒ってないわ。いらいらして疲れているし、もうどうしようもないけど・・・怒っていないわ」
「いや君は怒ってるさ。僕にはわかるよ」エリックは立ち上がると、部屋をぐるぐる歩き始めた。「君は僕を責めているのさ。このすべての・・・」彼は研究室の方角を手で振って示した。「・・・いま治癒を見つけようとしている疫病についてね」
「あなただけを責めようとは思わないわ、エリック」サラは答えた。「私は自分も責めている。私にも責任があるわ。私たち皆に責任があるわ。私は自分たちが火遊びをしているのだと知っていたわ。私は止めるべきだったのよ」
エリックは笑った。「止めるべきだったって？　何を止められたというんだい。そんな力が君にあったとでもいうのかい？　いとしいサラ、科学は前進しなければいけないのさ。そうでなければ僕らは停滞するのみだ。ファーマテックは立ち止まることを認めない。停滞は選択肢ではありえない。もし立ち止まれば、僕らは腐ってそこで死ぬのさ」
「私たちのせいで何百万もの人が死んだわ、エリック。何百万の人よ。この会社の将来が、それほどの犠牲を払うほど大事なことなの？」
エリックはサラに振り返った。その目は燃え上がるようだった。「僕らは何も悪いことをしていない。何一つだ！　僕らは自分たちに責任があるのかどうかさえ知らないし、その上僕らはこの疫病のために時間と人員を裂いて薬の開発をしているんだ。この世界を救おうとしているのは僕たちなんだよ、サラ。僕が罪の意識を感じなければならないなんておかしいだろう」
「だけど、あなたは罪の意識を感じているんでしょう。違うの？」サラはエリックが彼女を呼んだ理由を理解した。「あなたは真実を知っているのよ。だから罪の意識を感じている。あなたは自分が犯した過ちを、私に許してもらいたがっているだけよ」サラはそう言うと立ち上が

った。「無理よ、エリック。あなたはその罪の意識をもったまま生きるのよ。私もそうするわ。あなたは仕事することで報いることができるかもしれない。そうすれば私たちもいつの日か許されるときがくるのかもしれないわ」サラは言葉を切って、続けた。「だけど・・・私たちが許される日は決してこないと、私は思ってる」

エリックは体をひねるとコンピュータ端末を殴りつけた。

端末は床に落ちて粉々になった。エリックの裂けた拳から飛び散った血が、壁の巨大なポスターに降りかかる。血はモデルの整ったバストを深紅に染めたが、エリックはそれに気がつかないようだった。彼はばらばらになった端末を、なぜそれが床に落ちているのかわからないというように眺めていた。エリックは何かぶつぶつ言っており、サラはそのとき初めて彼の正気を疑った。エリックはこれまで働きすぎてきたし、彼がどう主張するにせよ、罪の意識を感じていたのは間違いなかった。エリックが悪い人間ではないことをサラは知っていた。だが彼はあまりに自分に野心的であり、内的な衝動に激しく駆り立てられていた・・・熱狂的なまでに、ファーマテック社に身を捧げてきた男なのだ。

サラは何も言わずに立ち上がるとドアまで後ずさりした。

エリックは自分の怪我をした拳を、どこで切ったのかわからないというように眺めていた。彼が突如口を開いたとき、サラは彼が誰に向かって話しているのかよくわからなかった。

「やらなければいけないことをやっただけだ」エリックはつぶやいた。「必要なことだったんだ」彼はそう言うと、椅子にどさりと体を落とした。その視線はどこを見ているのかよくわからなかった。「それだけだ」彼はサラを見つめた。「サラ？　仕事がたくさんあるだろう・・・職場に戻ってくれ」

サラは頷いて、彼に背を向けた。彼女が部屋を出るとき、すすり泣きを聞いたかもしれないと思った。だがサラは一度も振り返らなかった。

その朝、サラが血走った目で何度目かわからないウィルスのシミュレーション映像を見つめていたとき、彼女はある啓示を授かった。

もしかしたら、夢を見なくなった理由というのは、そもそも夢を見始めた理由とまったく同じなのかもしれなかった。もしかしたら物事の道筋はいま決まってしまい、サラが心の中で繰り返し見つづけてきた予知映像は消え去るほかないのかもしれなかった・・・これまで、それはただの夢だった。これから、夢は現実になるのだ。

もしそうであれば、サラたちがいまやっている仕事は何の結果も生まないということだ。なぜならほとんどの人間は、孤独で残酷な死を迎えることになるからだ。そして世界は、終わらない冬に覆われた、冷たい絶望の土地となるだろう。だが、そこでサラが産む最初の子供こそが、いつしかその血筋の中で、新しい救世主を連れてくることになるのだ・・・

ディビッドを。

サラが夢の中で見たその表情。

数限りない悪夢の中で見た幽霊の姿。

サラは微笑み、机に頭を置いて目を閉じた。やがて彼女は眠りのようなものに落ちていった。夢も見ずに――悪夢に襲われることもない眠りの中に。

第七章

宛先：kathryns@newsdesk-int.cnn.com
差出人：jlloyd@roaming.cnn.com
件名：大スクープ！

キャシーへ

この話をすぐにでも放映しないと！　僕らのリードタイムはきっかり一時間だ。だがどうも僕のいる場所からは、どうしても音声通信にも衛星ブロードバンドにもアクセスできそうにもない。だから僕はこの独房で、メールを送る前にこのリンクが突然ぷちっと切れないことを祈るほかない。アトランタからの次の定時放送まであと二十四分ある。だから君がこれを「大至急」で出してくれれば、僕はドナがこの記事をここ北京時間の午後八時に読み上げるのを見ることができるはずだ。この記事の情報は百パーセント間違いない筋からきている。お願いだ、うまくやってくれよ、キャシー。以下がその記事だ。

中国で最初のインフルエンザ患者が見つかってから十二ヶ月になる。これまで世界じゅうが、ことの成り行きを固唾を飲んで待っていたのだ。僕らのパラノイアと恐怖に終止符を打つもの、この病気に対する治療薬を。

さて、ＣＮＮは次のような情報を得たことを発表したい。それはいまから数時間のうちに、ファーマテック社――シリコレンバレーを拠点にしたバイオテクノロジー企業――がその特許製品であるナノ・テクノロジーを用いた、治癒薬を開発したというのだ。（キャシーへ：ここで映像をいくつか入れてほしい。ファーマテックのナノ・ボットの成果などのビデオがいい）その薬はあのタイプＸウィルスからの感染を防ぎ、致死的なインフルエンザのこれ以上の拡大を防ぐものだというのだ。

専門家たちは、次の数年のあいだに何億もの人間がこのウィルスに感染するとしており、香港と北京、そしてボンベイは軍隊により隔離されつづけなければいけないとしていた。しかしこの薬の完成により、これ以上の死者を防ぎ、隔離された町々をやがて開放できる望みが出てきたのかもしれない。

ファーマテックや関係者からの公式な発表はこれからとされているが、ＣＮＮが得た情報によると、薬一式はすでに危険度の高いエリア、人工の五十パーセント以上が感染しているとされているところに搬出されはじめている。

薬の開発は空前の速度で行われ、ＦＤＡ（食品医薬品局）はこの製品を最低限の試用期間を経ただけで認定したらしい。専門筋によると、このナノ・テクノロジーの利用により（キャシー

へ：これを言わせるためだけでも専門家を呼んでくれ！）、伝統的な薬の研究や開発に比べて、問題や副作用が発生する可能性はかなり低くなっているとのこと。

僕らはこの記事を次の数日間でまた追ってゆくつもりだが、新しい開発のニュースが入り次第すぐにお伝えしたい。さきほど伝えたように、公式な発表は夕方前になるだろうとされている。そしてメディアに発表するのはファーマテックだけではなく、合衆国やＥＵ連合、中国とインドなどの政府代表も発表に参加するのとこと。また記者会見も開かれるとのことだ。ＣＮＮのチャンネルはそのままで、等々。

キャシーへ：もう一回念を押すけど、うまくやってくれよ！　僕はこの場所で安定したブロードバンド回線を手に入れられるよう、生放送ができるように努力する。でも失敗したにしろ、放映は十五分後にはじめてくれよな！　頼んだぜ！

——ジェイク

西暦2018年3月21日　香港

彼の三十七年間の医師としてのキャリアの中でも、ドクター・ニコラス・リーにとってそれはほとんど奇跡に近い出来事だった。。

注射をしてから数時間もたたないうちに、患者たちは治癒の兆候を見せていた。数日間後には、その症状は軽減されており、一週間の間にはほとんどの患者たちが完全に回復し、あの致死的なインフルエンザにかかっていたことすらわからなくなっていた。

この病院のほとんどの患者たちはまだ注意深く隔離されてはいたが、大多数の中国軍兵士たちは病院での任務を終え、町の通りで治安を維持する陸軍の姿もまばらになっていた。戒厳令は解かれ、物事は落ち着きを取り戻しつつあった。人々はまた希望をもち始めていた。香港にようやく平和がやってきたのだ。

ドクター・リーは、奇跡にしか見えない出来事というものは、だいたい誰かが精一杯働いた結果なのだということを良く知っていた。この場合、奇跡は神の手によってもたらされたのではなく、ファーマテック社によるものだったのだ。しかしそれがこの町に与えた効果を考えれば、まさに本物の聖なる奇跡といってもよいものかもしれなかった。この一年の間ずっと、香港の空には黒い影がかかっていた。ドクター・リーも、すべての希望が失われたと思ったことは一度ではなかった。

彼がどれほど祈ろうとも、患者を助けるための数限りない治癒のための試みもすべて無駄に終わり、死は避けがたいものに見えていた。

ドクター・リーはある事件のことをずっと覚えているだろうと思っていた。ほぼ一年前、この疫病が野火のように広がりはじめ、町の人々がパニックに陥りはじめていたときのことだ。精神に異常をきたしたある男が、インフルエンザによる疲労と脱水症状により知能障害を起こしたのかもしれないが、男の死にかけていた子供を殺すためだけに、警備兵をやりすごして武装したまま病院に侵入したことがあったのだ。

死は人々をおかしくさせ、香港そのものが狂気の縁にあった。兵士たちは道々の市民たちを見境なく射撃していた。死体は昼も夜も燃え盛る薪に積み上げられ、それは何週も何ヶ月も燃えつづけていた。黒い煙が摩天楼の壁に、ここ一年間ずっとへばりついていた。そしていま、瞬きをするぐらいの短い間に、それがすべて終わろうというのだ。

「ドクター、どうかしましたか？」

声が彼を回想から現実へ、現在へと引き戻した。

見ると看護婦が心配そうにしていた。ドクター・リーは頭を振って微笑んだ。

「なんでもない。僕らはこれまでラッキーだったなと思っていただけだ」

看護婦も微笑んだ。彼女は若く、かわいらしかった。その体は彼のすぐ近くに立っており、心臓が少し跳ね上がるのを感じた。そして古い情欲が下腹部で燃え上がるのを感じた。

この好色め、とドクター・リーは思った。この娘より四十歳も年上だっていうのに。

彼は咳をした「患者を・・・見なければ」

看護婦は頷いた。「ドクターはたいへんな仕事をされたのだと思います」

「私たち全員がそうさ」

彼女はまた微笑んで、歩いていった。

若い看護婦が受付につながる角を曲がるまで、その姿から眼を離すことができなかった。情欲をまた持てることは良いことだと思った。これまでの十一ヶ月、そういったものは何もなかった。自宅でもそうだ。死は性生活の大きな妨げだった。そして彼の生活にはあまりにもたくさんの死で満ちていた・・・彼の私生活においても、この悲劇から逃れられたわけではなかった。ありがたいことに彼がもっとも大事にしていた人間は死なずにすんだ。そして彼の仕事について言えば・・・。

彼は患者達の終わりのない苦しみを終わらせるために、いったい何本のモルヒネ注射をしたのか推測すらできなかった。彼の病室から運び出した無数の死体の数。何百も、何千も。

それはあまりにも多すぎた。

彼はまた回想にふけりかけていた。

彼は頭を振って、腕時計を見てあくびをした。時間は午後十一時をすぎており、そろそろ遅くなってきてはいたがまだ夜勤があり、カルテを作らなければいけなかった。何人かの患者にとって、薬が遅すぎたのだった。彼らは死にかけており、彼らの苦しみを少しでも減らすことが、彼の目下の仕事だった。

そして、まだこれからワクチンを投与される人々がいた。実際のところ、薬が足りないということはなかったが、注射器のシリンジが看護婦と医者に行き渡るにはまだ時間がかかり、何百人かはまだそれを待ちつづけているのだった。しかし彼らは死にはしないだろう。救済は確実だった。

彼は心の中で、ファーマテックが雇った名もない天使に感謝した。その天使たちは香港と世界に、本物の奇跡をもたらしたのだ・・・そしてドクター・リーは歩き出した。

電話は夜もふけたころ、彼が妻と抱き合って眠っているとき、何か楽しい夢を見ていたときに鳴り響いた。

彼はふらつきながらナイトスタンドのほうに体を起こし、携帯端末をぱちんと開いた。病院をしめすアイコンが真っ赤に点滅していた。彼はため息をついて、取り乱した看護婦が、病状

の悪化した患者をどう扱ったらよいかわからないので電話をしてきた姿を想像して、イヤフォンのスイッチを入れた。
「ドクター・リーだ。どなた？」
　向こう側では短い間があった。ニコラスは一瞬、電話が切断されたのかと思ったが、息の荒い声がどもりながら話し始めた。
「看護婦のリエンです、ドクター・リー。あなたに来てほしいんです・・・すぐに来てください、ドクター・・・いますぐに！」
　ドクター・ニコラス・リーは心臓が跳ね上がるのを感じたが、久しぶりに安らかに眠れるはずだった夜を、たった一人の取り乱した看護婦のために犠牲にするつもりはまだなかったので、簡単に次のように聞いた。「そこにいる担当の医師でどうにかならないものなのかね？」
　また間があった。そして彼は聞いた。その背後の騒音は、まるで悲鳴や叫びのように聞こえた。彼は眉をひそめた。
「みんなに・・・すべての医師に電話をしています」彼女はどもった。「状況は・・・本当に悪いです、ドクター。みんなが必要なんです」
「何が起こっているんだ？」もう彼は目覚めていた。彼の隣では、妻が体を動かして暖かい手のひらを彼の腕においた。彼の口調は心配そうだったに違いない。
　ニコラスは背骨に冷たいものが走るのを感じた。
　いったい何が起こっているんだ？
「患者たちが・・・ドクター・・・患者たちがみな死にかけているんです！」
「どの患者たちが？」彼は自分が一行の台詞も思い出せずに舞台で立ちすくむ、主演俳優のような気分になった。わけがわからなかった。
「治癒を行った患者たちです！　あの薬を使って治癒をしていたインフルエンザの患者たちが、みんな死にかけているんです！」
　ニコラスは看護婦の言葉を理解しようと試みたが、考えがぐるぐると回ってまとまらなかった。「インフルエンザは弱っていたはずだ・・・最初の患者たちはすでに退院している。インフルエンザがまた発症したのか？」
「インフルエンザじゃありません、ドクター。見ていただかないことには・・・ここは患者だらけです」
「インフルエンザじゃないのか？」
「犠牲者たちはまず目が見えなくなって、大量の失血と臓器損傷の症状を起こしています・・・私たちの目の前で死んでゆくんです・・・あまりにも症状が早すぎて・・・ドクター、来てください！　なんですって？」看護婦の電話が床に落ちて、ニコラスは走り回る足音と、用務員の叫びを聞いた。
　恐怖で真っ白になりながら、彼の頭は混乱していた。ニコラスは妻に向き直った。彼女は彼を目を見開いて、心配そうに見つめていた。
「いかなければ」彼はつぶやいた。「呼ばれている」
「何が起こったの？」彼女はささやいた。
「わからない」彼は言って、頭を振った。「本当にわからない」
　悪化の原因がなんであったにしろ、良いことであるわけがなかった。そしてファーマテックが贈った奇跡の正体がなんであろうとも、それがかりそめのものであるとは一度も考えたこと

がなかったのだ。
　ニコラスは立ち上がって支度をはじめた。それはこれまでの医師としてのキャリアの中で、もっとも恐ろしい試練になるのではないかと彼は思った。

＊＊＊

　西暦2018年3月23日　サン・ホセ

　サラが一週間にわたる長い眠りから、ぐちゃぐちゃになってしまった世界の中で目覚めてから、何が本当に起こったのか気が付くまでさほど時間はかからなかった。
　あのインフルエンザを治癒するために製造した薬だ。彼女自身がほとんど丸一年にわたって作りつづけてきたあの薬が、実のところ殺し屋であり、トロイの木馬であり、犠牲者たちがそれを信じて安心していたところを狙って、宿主の肉体はぼろぼろにされてしまったのだった。
　この新しい災害は最初のものとはまったく違った。それは恐るべき速度で地球を覆い尽くし、町々の人口をほとんど殺戮し、どのような検疫も薬も役にはたたなかったのだった。
　それはたった二週間の間のことだった。その間に一億人以上の人が絶命していた。その数は一日ごとに、一時間ごとに増えつづけていた。そして放送は次々に新しい情報を伝えていた。パニックを起こしながらもまだ放送を続けようとするプロたちの声が、この信じられない出来事にくぎ付けになっている視聴者たちとリスナーたちに、災害の新しい被害地を伝えるのだった。すべての声がやむまでさほど長くないだろうことを彼女は知っていた。それが始まってしまったときから・・・。
　終末はすぐそこだった。サラはそれを知っており、もう何の驚きも感じなかった。
　皆大きな計算間違いをしたのだった。自分たちがボットを完全にコントロールできていると過信し、技術力を過大評価していたのだった。しかしこのボット（キャリア）は製作者の意図を上回り、宿主の体に恐ろしい速さで順応してしまった。この生きている薬は人間の体を内部から食べ尽くしてしまい、一度活性化するやいなや、数時間で宿主を殺してしまった。それは苦痛に満ちた残酷な死だったし、誰一人として生き残れなかった。なぜならその活動は早く、その順応性は高く、そもそも知性を持ち自己回復機能を持つように作られていたからだった。
　そうだ。それは生み出された目的を達成したのだ。ボットはあの致死性のインフルエンザの原因だったウィルスを殺した。しかしそこで止まらなかったのだ。ボットは飢えており、ウィルスの次は肉体すべてを食べようとしたのだった。それは単に不活性化したり、宿主を去ったりはしなかった。それは自己繁殖することを求めており、自分にとってそれが大事だと考えたのだ。しかしそうするためには、燃料が必要だった。このアイロニーはあまりにもはっきりとしていた。一つの脅威を打ち倒すために、別の脅威を作ったはいいが、それは最初のものよりはるかに恐ろしいものだったのだ。
　驚くにあたらないが、サラは笑うことすらできなかった。
　薬が出荷された日、彼女はベッドに倒れこみ、そのまま真っ黒な空白の中へと眠りに落ちた。彼女が起きたのはあの夜のさなか、久しぶりに夢を見て起きたときだった。インフルエンザが流行りはじめてから、夢を見たのは初めてだったのだ。

それは以前と同じ夢ではなかった。同じだったのはやはり悪夢の舞台が、大災害後の暗くゆがんだ世界だということだった。その夢の中でサラは男の子を見た。彼はサラよりもはるかに若かったが、その顔を見るのは初めてだった。ある家の中で男の子は風邪を引いており、汚染された水と乏しい食料のせいで、ほとんど死にかけていたのだった。彼の周りの世界は灰色であり、雪は汚れておりあちこちは廃墟だった。そしてあたりには死体が大量に、うちすてられたぬいぐるみのように、庭や道路、そして公園に散乱していた。

サラは自分が彼のところに行って慰めるのを見た。そしてまた自分がその男の子から離れて、北東へ、はるか北東へと歩き去ってゆくのも見た。彼女はひとりぼっちだったが、もう一人ではなかったのだ。

サラは身ごもっていた。

その夢は何度も何度も、あの長い眠りのあとは毎晩のように、災害が始まってから毎夜繰り返し戻ってくるのだった。

そして毎回、それは同じ内容だった。

サラは妊娠し、歩きはじめるのだった。そして毎回、彼女はぼやけた無の中へ、不確かで希望のない未来の中へと歩いてゆくのだった。彼女とあの終末を生き延びた者たちのための、希望のない未来へ。最後の希望は、彼女の子供のために残されていた。サラがその母となる、その血筋のなかに。

その血筋がいつかディビッドを生むことを、彼女は知っていた。

いまサラは、他の何千もの従業員と同じように、ファーマテックのキャンパスの壁の中に閉じ込められていた。厳しい検疫は全国的に施行されていたが、ここではそもそも危機が始まる前から完全な厳しいセキュリティが敷かれており、この中は安全だった。日々の生活は、被害が少しずつ自宅に近づいてゆくのを、最新のニュースを不安な面持ちで眺めることに費やされた。ネットワークやＣＮＮは夜も昼も放送を続けていたが、遠くからの報告は少しずつ数が減ってゆき、やがてすべてが停止してしまった。

すべてが無に還ろうとしているとき、この災害と最後まで戦いつづけたのはこういったヘッドセットを身につけたレポーターたち、デジタルカメラを持って衛星通信を使い放送を続けた人々だったが、彼らもやがて自分たちの生命でつけを払わなければならなかったのだ。

災害は数限りなく行われてきた戦争のように、メディアに対して何の容赦もしなかった。

それが意味のないことだとわかってはいたけれども、サラはそのグロテスクな眺めから目をそらすことができなかった。それは殺人者が自分の犯した罪の犯行現場に戻るのに似ていた。サラも毎日のように、自分が原因を作るのに一役買った破壊の結果をモニター越しに見続けていた。巨大な焚き火で燃やされる、黒いプラスティックに包まれたたくさんの死体、災害で引き起こされた混沌に、彼女はやがて無感覚になってしまった。無感覚になると同時に、彼女は他人と接触することをやめてしまった。そして毎朝ベッドですごす時間がどんどん長くなり、日が過ぎてゆくにつれ、サラはアパートから外出しなくなり、携帯電話やメールに答えることも嫌になってしまった。

母親が死んで親戚も全員亡くなり、そして古い友人のシェリーも死んだことを知ってからは・・・もはや誰とも話す理由がなくなってしまった。サラはこれまでここですごしてきた日々の間、一度も後ろをみようとしなかった。選択したのは彼女自身であり、サラは飛ぶことを選

んだのだ。自分の家や親族は、その重要性を少しずつなくしていっていたのだ。そして今サラはその冷たさのつけを支払うことになった。あえていうならば、サラは自分の冷淡さにより家族を傷つけてきたのだった。

災害が発生してから三週間目に、客が来た。

エリックが複数の人間を連れてやってきたのだった。その顔は青かったが落ち着いていた。彼はここ一年間ほどの間そうであったよりも、ずっと理性的で、安らいでいるように見えた。それ自体身の毛のよだつようなことであったが、それで終わりではないはずだった。もっと恐ろしい事実があるはずで、サラはそれが何なのかある程度推測できていた。

「おはよう、サラ」彼は勝手にドアから入りながらそう挨拶した。彼女は頭を上げたが、ソファーから体を起こさなかった。ビデオが後ろでぎらぎらと流れていた。「今日は友達を連れてきたんだ」

二人の人間が前に足を踏み出した。一人はアンナ・リヴェラだった。彼女は心配そうだったが、サラに近づきはしなかった。そしてもう一人はサラの知らない人間だった。彼は背の低い、ずんぐりとした赤い巻き毛の男だった。彼は満面の笑みを浮かべていた。その眼は深い青で、サラは彼の言葉の中にグラスゴー訛りがあるのに気がついた。

「こんにちわ、サラ」彼は言った。「僕はジョージ・マッキニーだ。僕らは君と話をしにきたのさ」

彼女はティッシュに手を伸ばして鼻をかんだ。彼らと話したくなかった。多分エリックとは話したかったかもしれないが、他の人とは話したくなかった。その三人の来訪者の後ろ、ドアのすぐ外には二・三人警備兵たちがいた。サラが何かをすると思っているのだろうか？　無理やり連れて行くつもりなのだろうか？

「何がしたいの？」彼女はエリックを見ながら言った。「一人にして」言いながら言葉に力がないと思う。

エリックは頭を振って、彼女を向かい合った椅子に腰をおろした。他の二人、アンナとマッキニーはドアのそばから動かなかった。おそらく二人は邪魔をしたくなかったのか、彼女のことを怖がっているのかのどちらかだったのだろう。どちらにせよ、それは彼女にはありがたかった。「僕は君に言わなければいけないことがあるし、それまでは出て行かないよ」彼は言った。「それに君はこれを聞かなければいけないだろう」

「いやよ」彼女は言った。しかしサラは知っていた。彼の話がどんな内容であろうと、彼女はそれを聞かなければいけなかったのだ。

「まず話を聞いてくれ。選ぶのは君だ」彼は後ろのアンナとマッキニーをちらりと見て、アンナは頷いた。「僕らと一緒に来るか、ここを去るか、それは君次第だ。君にここから出てゆくための許可証を上げよう。もちろん」彼は追加した。「その場合二度とここには戻ってこれないだろう。ドアが君の背後で閉まれば、もう中には戻れない。君は一人でやってゆくしかない」

「嘘よ」彼女は言った。

「嘘じゃないって誓うよ」

「じゃあ、なぜ？」

「サラ、すべての物事にはちゃんとした理由があるんだ」彼は椅子からソファーへと近づいた。彼女は抗議しなかった。「すべてがだ」

「災害は」サラはため息をついた。「私たちのせいよ」奇妙なことに、口に出したときそれは

もうさほど痛まなかった。
「部分的にはね」その答えに、サラはもちろん驚きはしなかった。そもそもの発端から、サラはそう疑っていたことだったからだ。「僕らは物事を軌道に乗せただけだ。自然が残りの仕事をしてくれたのさ。インフルエンザウィルスも、あのナノ・ボットによる災害も・・・すべてはファーマテックの長期戦略の一部に過ぎない」彼はそれを株価市場を述べるように、あるいは広告をしているような口調で述べた。とても何十億もの人間の死を話しているようではなかった。「すべては箱舟計画（アーク・プロジェクト）の一部だ」
「なんですって？」彼女はそう言って顔を上げた。「箱舟計画？　冗談でしょう。そんな名前を考えたのはどこの誰よ？」
「ドレイクだ」マッキニーがそう言った。マッキニーの顔は見えなかったが、サラは彼が微笑んでいることを確信した。「彼は僕らの未来の創造主さ」
「私たちの未来よ」アンナは最初の単語を強調して繰り返した。「あなたも、この計画の一部になれるのよ。サラ、あなたは選ばれたのよ。あなたはほんの一握りの、幸運な選ばれた人間なのよ」
「幸運なというのは、あなたが殺したすべての人々と比べて、ということなんでしょうね？」彼女は息をついで続けた。「私たちが殺したすべての人々と比べて？」
「どちらにせよそれは避けられないことだったんだよ」エリックは言った。「地球はこれ以上の生命体を維持することができなくなっていたし、人間という種はこの数百年間ほとんど進歩しなかった。僕らはジレンマにはまり込んでいたんだよ、サラ。一歩進んで二歩下がっていたんだ。工学や医学、そして科学的な進歩はこの二十年で、ここファーマテック以外の場所ではほぼストップしてしまっていたし、僕らはいまだに千年前と同じ、エゴイスティックな野蛮人であることに変わりはない。僕らは戦争をし、お互いに殺し合い、五十年も前に治療法が見つかっている病気や飢餓で、何十億もの人間がなすがまま死んでゆく・・・」彼は立ち上がって窓へと歩いていった。「僕らは動物と変わりない。サラ、ただの動物だ」
「だから無差別に殺したというの？」わけがわからなかった。「それが動物でなくなる方法とでも？」
「いや」彼はサラを見ながら言った。その表情は優しく、むしろいとおしげな雰囲気すらあった。サラはこんな彼を見たことはほとんどなかった。彼は安らぎを手に入れていたのだ。「いや、僕らはまだ動物だ。僕らは人間という種を滅ぼしたが、それは安楽死だったんだ。僕らが生き残るためにはそうするしかなかった」
「冗談でしょ」彼女は言った。「それがあなたの言い訳なの？」
「言い訳はしない」彼は頭を振った。「僕らは当初からそうしないと決めていた。言い訳などしないし、そもそもそんなものは存在しない。ただし説明というものはある。それを君に説明したかった。ジョージ？」彼はマッキニーを見た。「お願いしていいですか？」
「もちろんだよ、ドクター・ミラー」ジョージ・マッキニーがそう言ったとき、彼女はこの男の全身から放たれる自信と感受性、そしてカリスマに説き伏せられそうになる自分を感じた。この男が何を言うにせよ、それは聞く価値があるものだという感じだ。「サラ、僕らは近いうちにこの世界から姿を消す。そして長い、長い間戻ってはこないつもりだ。その間、世界は自分を癒すだろう。僕とドクター・ミラー、ミス・リヴェラのほかにも数千人の選ばれた従業員、

そして市民たち・・・僕らはここを去り、冬眠に入る」彼は肩をすくめた。「たとえだけどね。僕らは眠りにつくわけじゃなく、起きて元気に活動しているだろうから。しかし僕らの活動もまた鈍くなることも事実だ」
「私たちはもう老化しないのよ！」アンナは興奮したように口をはさんだ。「それが彼らが数十年間の間やってきたことなのよ、サラ。そもそもボットを作った理由なのよ。私たちは不老不死を手に入れるのよ！」
　マッキニーはうなずいた。「事実上ほぼそう言っていいだろうね。僕らは長い長い人生を生きることになる。この世界がもはや昔と見分けがつかなくなるほど変貌するのにかかる時間よりも、ずっと長くね。もちろん、良い方向へ変わるんだ。僕らはそれに干渉しない」
　サラはその事実を知ってもまったく驚かなかった。いまとなっては、どんなことでもありえただろう。「つまり、地球を去るってこと？」彼女は聞いた。
「いや・・・正確には」エリックは言った。「僕らは地球の中深くへ、特別に建築した洞窟に行くんだ。その地中世界では僕らが必要なものはなんでもそろう。人工の太陽光だってある。結局のところ、僕らはそこで長い長い間過ごすわけだからね」
「どのぐらい？」
「最低でも千年」マッキニーが答えた。「時が来るまでだ」
「その間ずっと・・・年を取らないの？」
「僕らの研究が正しく、ボットが計画どおりに動作し続ければ」
「あんたたちはみんな気が狂ってる」サラは言った。「不老不死なんてなれっこないわよ。あなたたちはただの人間でしょ！　それは正しくないわ」
「誰が正しいことと悪いことを決めるんだい？」彼女はエリックがそこを突っ込んでくるだろうと思っていた。「何が正しいかは僕らが決めるんだ。人間のために」
「じゃああなたはいま神になったというの？」
「違う」マッキニーがしっかりと否定した。「僕らは神じゃない。しかし僕はこれが神の意志であると信じている」
「それはあなたが一番気が狂っているからよ」彼女はささやいた。サラは自分が正しいことを知っていた。もし神がいたとしても——彼女はしばしばその存在を疑ってはいたが——これが神の意志であることはありえなかった。
　エリックは彼女の隣に座ってその腕をつかみ、彼女をそちらに向かせた。「サラ、君も不老不死になれるんだ。僕らと来てほしい。僕らには君のような人間が必要なんだ・・・それに君がいないと、さびしくなる」彼の目はほとんど真摯であると言ってよかった。「君に加わってほしい。そうでなければ、ここを去ってもらうことになる」
「何よ、私が誰にもこの話を言わないって信じてるの？」彼女は笑った。「だとしたら相当の馬鹿か、嘘をついているのかのどちらかね」
「誰に言うというんだい？」マッキニーは両手を広げた。「誰が信じるんだい？　僕らが災害の原因だって？　僕らは世界を破壊しようとしているって？　そんなことを信じるのは狂人だけだよ」
　サラは彼の言う通りだと思ったが、同時にそれを認めたくないと思った。彼らとは絶対に一緒には行かないだろう。サラが見つづけている夢が気になっているからだけではなく、彼らが殺人者であり精神異常者たちだからだ。彼らと一緒に永遠を過ごすなど冗談ではなかった。

本当の地獄があるというのならば、それがそうなのだ。罪人と嘘つきたちで一杯の地獄。この嘘つきどもは彼女を愛しているふりを装って、許してもらおうというのだ。許されざる罪を犯したことを許してもらえると思っているのだ。エリックがサラに来てほしがっている理由はそれなのだということに彼女は気がついていた。自分が犯した罪に対する罪悪感を減らそうというのだ。なぜならサラはエリックの良心だったから。しかし彼女は彼を決して許さないだろう。

決して。

「じゃあ私はここを去るわ」彼女は言った。「あなたたちがしたことに、罰がありますように。あなたたちの永遠の命が、永遠の死になるように私は願う。狂犬病にかかった犬のように、自分で作った石の牢獄でお互いを食い合うがいいわ。あなたたちが、自分たちで壊した地球を受け継ぐなんてことは永遠に許されないでしょう。決して」

サラは自分が言っている言葉がどこから出てきたのかわからなかったが、それは彼女に立ち上がる力を与えてくれた。彼女はコートと財布をつかむと、マッキニーとアンナの脇を通り過ぎてドアへと向かった。ドアには黒いスーツを着た男たちが立っており、どうしたらよいかわからないというようにマッキニーを見た。

彼女がにらみつけると、マッキニーは頷き、男たちは道を開けた。

「サラ」エリックが言いかけたのを彼女はさえぎった。

「やめて。何の意味もないわ。あなたを止められるならどんなことでもしたでしょうけど、自分に力がないのはわかってる。あなたはすでに手を打ってあるでしょう、わかってるわ。いったい何で私があなたと一緒に行くなんてそもそも考えたの、エリック？　あんたはサディストで、怪物よ。あなたを愛したことは一度もなかった。あなたの強さを愛したのに、あなたはそれすら無くしてしまった。いまのあなたはからっぽよ。強さをなくしたのは、あなたがそれを使い果たして、それを悪用したから。もうあなたの魂には何も残っていない。あなたは死んだのよ」サラは彼らを一人一人にらみつけた。「あなたたちみんなは死人よ」

そういい捨てると、きびすを返して外に出た。一度も後ろを振り返らなかった。門で止められることはなかったが、サラが外に出た瞬間、ゲートが後ろで大きく音を立てて閉まった。

冷たい風が背中に吹き付けた。サラはファーマテックキャンパスから一年間、いやそれ以上長い年月、一度も出たことがなかったのに気がついた。

外には大きな世界が広がっていた。そしてサラは自分が災害の被害者にはならないであろうことを知っていた。なぜならそう夢を見たから。彼女はこれから起こることをすでに夢見ていたのだ。

サラは北の方角を見た。まず、車を見つけなければ。そして・・・。

やるべきことはあまりにも多く、見るべきものはあまりに多かった。そしてこれからもたくさんの夢を、サラは見ることになるだろう。

＊＊＊

西暦2019年6月30日　中国北京市

ほとんどの地域で、検疫をなんとか実施しようという試みは完全に失敗していた。空と陸の

交通機関はその働きを止め、国境は即時に閉鎖された。

しかしすべては手遅れだった。この惑星上のほとんどの国と、その首都はすでに感染していたのだった。大災害は発展途上国も、先進国もわけ隔てなく襲い掛かったが、西半球の国々でその被害はもっとも早く広まった。その交通とコミュニケーションの利便性が、皮肉にも仇となったのだった。

パニックが広がるにつれ、人口が多い地域にすんでいた人々は大災害から逃れようとしたが、それは病気を田舎へと広げる結果となってしまった。安全な地域などもはや存在せず、大災害は無差別に人々を襲った。

最初の数週間は、電気や水道などといったインフラはまだ機能しており、医者と科学者たちは毎晩のように研究を続け、ウィルスの被害を免れた人々がいる謎を解き明かそうとしたが、彼らは生き残ったものたちに何の共通点も見つけることができなかった。生き残るものと死ぬものをわける何かは、ほとんど恣意的なものにすら思えた。

夏がその盛りになるころには、地球上の七十五パーセントの人口がすでにこの世を去っていた。残りの二十五パーセントの人々はなんとか秩序ある生活を保とうとしていたが、それは不毛な試みでしかなかった。

パニックが大きく広まったため、暴動や強盗、そして悲劇的な事件により何十万もの人々が死んでいった。生き残った者たちは頭がおかしくなりつつあった。多くの人々が武装し、生き残っていた家族などと安全な場所に閉じこもった。家や倉庫や車など、彼らが隠れられる場所の中に。皆が缶詰や飲料水を求めており、どこの町でも散乱している腐った死体から距離をおこうと努力していた。

すでに苦しみに抗うことをやめた者たちにとっては、世界の終わりがとうとうやってきたのだった。

しかし、こういった厳しく劣悪な状況にも適応できるのが、人間の強みの一つでもあるのだ。

少しずつではあったが、ばらばらになった共同体と共同体の間に、秩序のようなものが戻りつつあった。発電機はまた稼動しはじめ、停電していた地区にふたたび電気を供給しはじめた。いくつかの店は再開し、生活必需品を超高額で、あるいは燃料や水と物々交換で販売しはじめた。連絡網は復活し、臨時政府があちこちで作成された。

そうして人間という種はこの危機を乗り越えられるのではないかと思えた。世界の人口は大幅に減ってしまったが、それでもほとんどの人々は人間がこの傷を癒し、世界を再建できるものだと信じていた。

しかし、世界のあちこちの孤立した地区において、過激主義者（ラディカリスト）とカルト宗教グループがその規模を大きく膨らませつつあった。彼らは約束された救済に対する熱狂的な狂信に駆り立てられるようにどんどん大きくなっていた。彼らの視点では、大災害は神や悪魔、もしくは遠く離れた星々からやってきた宇宙人たちの侵略の証拠であった。また政府や多国籍企業等々の陰謀によって始まった大災害により、人類は滅亡する運命だとされていたのだった。彼らは再度社会を構築するつもりはなかったのだ。彼らは生き残ったものも破壊しようと考えていた。

しかしほとんどのカルト集団や過激派、政治団体はそこまで意欲的ではなかったし、重要なことには彼らの予言を実現するだけの力量がなかった。ある集団を除いては・・・。

背の高い、カリスマ的な雰囲気を漂わせたその男は壇上に身を乗り出した。男は部屋に集まった人々の顔を一人一人じっくりと確認しているようだった。その視線は貫くように鋭く、よう日焼けした顔の中で眼だけが白く輝き、見る者を盲目にする光を放っているようだった。

心の底までつきとおすような眼だわ、と彼女は考えた。本音まで見破られてしまうのは、信者達にとっては喜びであったに違いない。もし彼に称号が与えられるとしたら、預言者（プロフェット）がそれだった。もちろん預言者は弟子達も従えており、資格は十分といえた。

「友よ、同志たちよ！」彼の言葉は、静まりかえった何千もの公衆が集まる巨大な講堂にこだました。ここに集まった多くの者にとって、自分達が信じそして自らの命を捧げ、その未来を投影してきた男を見るのは初めてのことだったのだ。

尊師は言葉の効果を確かめるように言葉を止めた。

その沈黙はそこに集まった人間の数を考えれば恐ろしいほどに不気味であり、男は自分に寄せられる畏怖の念を楽しんでいるように見えた。なぜなら彼の唇には笑みが浮かんでいたからだ。それはかすかでほとんどわからない微笑で、ほとんどの人は気がつかなかっただろうが、彼女は気がついた。あの男のことは良く知っていた。彼が何を考えているかよくわかっていた。

「私たちはこの時が来るのを長いこと待っていた」やがて彼はそう言った。その低い声は立ち並ぶ席を、地震のように揺らしながら進んでいった。

誰かがボリュームを上げたのだろうか？　彼女は講堂の後ろのスタジオで作業をしているオペレータたちを見やった。

彼はきっとそうするよう指示を送ったに違いない。しかし指示に気がつかなかったのはうかつだった。彼のバリトンの効いた声は神の声のように響き、電気的に増幅されていること明らかだったが、その手法は巧妙だった。

ファーマテックは高額な音響機器を惜しげもなく購入していたのだ。尊師がそれを使いこなしているというのはよいことだった。

「私達の運命（さだめ）に敬意を払わねばならない」彼は続けた。彼女は両手で耳をふさぎたくなる本能的な衝動と戦わなければならなかった。「とうとう私達はここまでやってきた。この時が終わる瞬間に、終末（エンドゲーム）を開始するために」

彼は再び間を置いた。

男のスピーチはプロのそれであり、それは彼女も認めざるを得なかった。もちろん、男は彼女の力無しには何もできなかったし、与えられた資金なくては何の力もなかったが、男が自分の力を過信することを彼女は黙認していたし、皆が男を神とあがめるのを止めるつもりもなかった。彼らはみな彼女の手の中で、企業の手のひらの上で食い物にされながら生きているに過ぎなかった。そしてそう考えることは彼女を満足させた。しかし尊師の存在自体はいまだにワイルドカードのようなもので、事態がここまで進行した現在においてもそうだった。男は自分の計画を持っていたし、その計画を実行するためにならどんなことでもすることだろう。

彼女はすべてが計画どおりに行くことには自信があったが、それでも胃のあたりにはちょっとしたしこりが残っていた。もし彼が最後の瞬間にカーブボールを投げたとしたら？　手遅れになる前に、物事を修正することができるだろうか？

「私には君たちの心がすべてわかる。君たちの愛を感じることができる」
　そんな安っぽいレトリックに聴衆はひっかかるだろうか？　彼女は疑わしげにあたりを見回したが、そうなのだと判断せざるをえなかった。彼らはすでにひっかかっていた。皆愚かな羊のようにそれを食いつぶしていた。
　彼は本当に上手だったのだ。そのぐらいは彼女も認めてやろう。
「私は興奮と畏れ、不確かな未来に対する君たちの恐怖を感じる。しかし恐れるなかれ！」
　恐れるなかれ？　まるでルネッサンス時代の祭りか何かではないか。彼の話し方は完璧だった。実際彼もオックスフォード卒ではあった。しかし、恐れるなかれ、とは。
　これも彼の戦略の一部なのかもしれなかった。メロドラマ的な芝居が一番効果的なのかもしれない。
「私たちは一緒に永遠に生きつづけるだろう、いとしき友人たちよ！　人類はすでに裁かれた。そして生き残った私たちは価値ある存在として認められたのだ！　私たちはあの大災害の中を無傷でやりすごした。他の人間たちは母なる正義の審判によって打ちのめされたのが、私たちはあの審判を生き残ることができた人間なのだ。私たちは、我らの母に対して限りない暴虐をつくしてきた奴らを裁くだろう、そしてその判決は完全なる滅亡だ！」
　天に神がいると？　やりすぎだった。男はふざけているに違いない。これでは高校の演劇部だ。しかし熱心な聴衆は針にかかった魚のように、糸だけでなく錘まで飲み込もうとしていた。皆叫びをあげて、狂喜乱舞して拍手をしていた。
「私の周りにいるのは私の家族だ」彼は続けた。「私は愛されている。私たちの仲間の間には見えない喜びがある。あなたたちの限りある命を私に預けてくれることに、涙が湧き上がるのを感じる。喜びの涙だ」
　尊師シャオは、その両手を彼のもっとも小さな子供二人の肩に置いた。二人は誇らしげに彼の両脇に立ち、よく訓練された笑顔を聴衆に振りまいていた。男はこういったことが、どういった効果をカメラとその向こうの大衆に与えるかよく知っていた。最後の瞬間には彼自身の子供たちですら、犠牲になると言っているのだ。
　これは本当に効果的だった。彼は上手すぎた。彼女は喉がつまったようになってしまった。誰よりも彼を良く知っている彼女ですらそうだったのだ！　尊師の誘導にもっともひっかかってはいけない彼女が、この奇怪なショーの立役者であり影の裏方である彼女すら、信じてしまいそうになっていたのだ。
　信じられなかった。話されている内容によるものではないはずだった。その台詞は陳腐だったからだ。今回は、彼女が提供したスピーチライターの原稿を明らかに使用していなかった。
　だからどうだというものでもなかったが。
「偉大な母は汚されたのだ、仲間たちよ。何年も何年も、ずっと汚されつづけてきたのだ。そして母が最後の審判を私たち皆に下したとき、それは迅速で致命的なものだった。しかしそれは十分ではなかった。まったく十分ではなかった。なぜなら、もっとも価値無き者たちが生き残っているからだ。そして私たちは彼女の仕事を終わらせなければならない」
　男は突然彼女の方角を見た。彼の目がこの世のものではない光でぎらりと輝き、彼女は恐怖が体を駆け巡るのを感じた。
　いったい何が起こっているの？
「どうやら私たちを不届きな目的のために利用できると考えている者がいるようだ」

彼は目をそらしたが、彼女は講堂から逃げ出したいという強い衝動を消すことができなかった。もし逃げ出せば皆に気が付かれるだろう。彼女は匿名でなければななならかった。

クルーズに連絡しなければ、と彼女は考えた。いますぐにだ。もし何か変更があったのだとしたら・・・彼女は自分が鎖の最後の輪であることを、パズルの最後の一ピースであることをよく知っていた。ここが成功しなければ、計画は失敗に終わるであろうことも。

「企業というものはもっとも罪深いものだ」と尊師は続けた。「彼らは人間を奴隷にし、大地ガイアを搾取し、そして自らが魂と自然に与える傷の大きさを知りながらも、なお支配しつづけようとする」

男が伸ばした腕が指差しているのが自分であることに気がつき、彼女は巨大な穴が足元で開き、自分の全身を飲み込もうとしているように感じた。顔の血の気が引き、胃がぐるぐると回った。

男は彼女を指差しているのだ！

逃げなければ。今すぐ逃げなければいけなかった。

立ち上がると複数の強い力で引き戻された。両側に座っていた二人の男は、明らかに彼女を逃がさない目的でそこに座っていたのだ。

「君の汚らわしい神は君を裏切った」彼は言った。男は自分に直接語りかけているのがわかった。「君らすべてをだ！　さて、明日になれば処刑人の斧は、君の悪の帝国の上に振り下ろされ、それはただの塵芥になるだろう。ガイアと私たちの母は大きく傷つけられるだろうが、彼女は大災害からは自由になるのだ・・・人間から自由になるのだ！　いつか楽園は再び現れる。そして私たちの魂はそのとき復活し、母の暖かい腕に包まれた永遠を、楽しむことができるようになるだろう！」

大衆は拍手喝采したが、彼女は自分が冷たくなるのを感じた。もし逃げられなかったら・・・

もし箱舟（アーク）が彼女を置いて行ってしまったら・・・。

心底怯えきりながらも、アドレナリンで普段出せない渾身の力を出した彼女は捕らえていた手を振りきり、ドアに向かって走り出した。

もしクルーズに連絡が取れさえすれば、助け出してくれるだろう。尊師は彼の計画を今日から成し遂げるだろうし、彼女のここでの仕事は終わったのだ。彼は自分に求められている仕事をやりとげるだろう。男が勝利と思っているものは、彼らの手のひらの中で遊んでいるにすぎないのだ。そして今もし逃げおおせることができさえすれば、彼女の安全は保たれるのだ。もし今そうできたら。

床が不自然に傾き、彼女は顔からそこに叩きつけられ顎が砕けるのを感じた。

それはまるで誰かが壁を彼女の上に乗せたようだった。何も見えず、息ができず、しかも感触がなくなっていた。彼女の体はのた打ち回るたくさんの手足と関節の下にうずもれていた。それは怒り狂って叫びを上げる狂信者たちの、血に飢えた手足だった。頭の中でぶんぶんいう音が少しずつ大きくなり、肺から空気が抜けていって、何も見えない視界に赤い火花が散り始めた。

左手が一瞬自由になり、その手でベルトにしまわれていた携帯を彼女はつかんだ。それが倒れたときに壊れたかどうかわからなかったし、そもそも声を出すことができるかどうかすらわからなかった。喉は岩でも噛んでいるように感じられ、血のようなものを飲み込んでいるよう

だった。ごつごつとした指が心臓を握り締めるようなパニックの中で、彼女は携帯のスイッチを入れてアネット・クルーズの個人携帯への短縮ダイアルボタンを押した。
　耳元で回線がジリジリと鳴る。
　回線が開いた。携帯はまだ動いていたのだ。
　動悸が早くなり、彼女は自分の命がどんどん失われてゆくのを感じた。周りの肉体による暴力は止まっておらず、罠にかかった動物のように、彼女は死にかけていた。
「もしもし？」クルーズの声だった。
　彼女は話そうとしたが、肺に空気が残っていなかった。搾り出されるような湿ったうめき声しか。
　何かが床にばらばらと落ちたが、それは彼女の歯の一部だった。
　もうどうでもよかった。
　夜が来ようとしていたが、それもどうでもよかった。
「ノリコ？　ノリコ、何が起こったの？」クルーズの声が遠ざかっていった。「大丈夫？」
　大丈夫です。すべて完璧に上手くいっています。
　ノリコは眼を閉じた。

＊＊＊

　西暦2019年6月29日　メキシコ　テコム

　アネット・クルーズは携帯を閉じると、それをポケットに戻した。
　この三十分ほど何度かかけてみたのだが、返答はなかった。残した留守番メッセージへの返答もなかった。何も返答しないというのはノリコらしくなかった。アネットは心配だったが、別にノリコ本人の安否を心配していたわけではなかった。現場の諜報員（エージェント）というのは危険な仕事なのだ。いや、アネットが心配していたのは、計画の最終段階のことだった。いまのような最後の仕上げの段階では、すべてがスムーズに動いてなければいけなかった・・・そうでなければ、数年いや数十年に渡る準備すべてが無駄になるかもしれない。
　そして、掛け金に上がっている彼女自身の運命でもあった。上席委員会は箱舟計画（アーク・プロジェクト）の最終段階を、中国の失敗成功如何に関わらず進めるだろうが、もしノリコの仕事がうまくいっていなかったとしたら、他の人間たちと一緒に取り残され死ぬことになるのはアネット自身になるかもしれないのだ。
　箱舟は、彼女を置き去りにして文字通り出航するかもしれない。死そのものよりも、アネットはそうなることを恐れた。
　彼女は自分の質素極まりない自宅に帰って、部屋から部屋へと歩き回り、壁や家具、そして絵画の額縁にたまっていた埃を手ではらった。それは数ヶ月の間、鑑賞されるどころか触れられることすらなかったものだった。
　アネットはすべてを置いてゆき、何一つ持ってゆかないことに決めていた。それにどんな意味があっただろう？　ここに戻ってこられないわけではない。だがもしも・・・いや、彼女が

いつの日かここに戻って来たとしても、そのときここには塵しか残っていないことだろう。
　食堂の大きな窓からは、青々とした丘がなだらかに下ってゆくのが見え、晩夏の午後の風の下を、黄金色の川がくねくねと走っていた。
　彼女はユカタン半島で育ったのだった。そしてここは失望したときや落ち込んでいるとき、アネットが孤独を切実に求めているときにいつも訪れる場所だった。
　そしていま、彼女はもちろんこの地に別れを告げるためにやってきたのだ。
　南西に取り付けられた窓に、大きなオレンジ色の太陽が緑色の地平線にゆったりと沈んでゆく姿が映っている。彼女は深呼吸し、自分が大好きだったこの場所の匂いと感触をすべて記憶にとどめておこうとした。
　そして踵を返すと、彼女は裏口からファーマテック社の小型ヘリコプターが待っているところへ歩きだした。
　今晩は長い夜になりそうだった。明日はもっと長い夜を迎えることになるだろう。やがて、この計画がうまくいったかどうかわかるはずだ。仮にうまくいっていたとしても・・・まったく時間はなかった。
　時間はぜんぜん足りなかった。

＊＊＊

　西暦2019年7月31日　イギリス　ロンドン

　そのやつれた男は地下鉄に乗り込むとドアの近くの席に座った。
　その膝の上にはブリーフケースが乗っていた。彼は汗をかいており、白い半そでシャツはびっしょりだった。地下では空気が淀んでおり、腐った生活臭がした。臨時政府は大災害がややおさまってから、中央線と環状線を動かすことには成功したが、空調システムは毎日のようにおかしくなっていたのだった。
　ロンドンは住むのに楽しい場所ではなかった。彼は合衆国の北東海岸の塩気のある風と、冷たい雨を懐かしく思った。だが、彼にはやることがあった。近いうちに、この熱も汗も、騒音とそこに住む野蛮な住民たちも、すべて気にならなくなるだろう。何ひとつ問題ではなくなるだろう。
　電車は動きはじめた。車内はこんな事態になったいまもなお混んでおり、大災害前はいったいどれほどの混んでいたのだろうかと思った。
　この数ヶ月、人々は群れをなしてこの街へと戻ってきていた。それはネズミが群れるのに似ていたのかもしれない。ロンドンの中央区は急速に人口を取り戻しつつあった。地下鉄は多くても一時間に一本しか走っていなかった。アイロニーとは、地球全体の人口は四分の一以下になってしまったというのに、ロンドンの地下鉄ではほとんど座ることができないという事実だろう。
　彼は席の上で身をよじり、隣に座ってきた太った女性に眉をひそめた。彼とその左手に座っていた黒人の少年との間に体を無理やりねじ込んできたのだ。おかしなことに、女性は彼よりも不機嫌なようであった。女性は顔を自分の手であおいでおり、そうすることで少しでも快適になれると思っているかのようだった。

彼はブリーフケースの取っ手をさらに強く握り締め、眼を閉じた。

顔の右側で玉のような汗が、濃い眉毛から口元まで流れてきた。彼はそれをなめた。塩辛いその味を感じると、冷たい飲み物が欲しくなった。アイスクリームコーンがあればもっといい。チョコレートチップをふりかけて、イチゴ味とヴァニラ風味で・・・。

携帯が鳴った。

ネットワークは一番初めに復旧されたものの一つだった。それは最優先で復旧され、ほとんどの中継地点はすでに稼動していた。この街の地下鉄内部でも使用可能になっていたのだ。

彼は携帯を耳に当てた。それは古いモデルで、分割可能な新タイプの携帯ではなかったのだ。

「テリー」と声がした。

「始めるんだ」

それはたった一つの言葉だったが、彼は自分の頭が爆発するように感じた。

「わかった」彼は言って、「どうも」と電話を切った。

彼は携帯をしまおうとして、ふと考えなおし、それを隣の女性に手渡した。彼女は当惑しながらもそれを受け取った。

「誰か大事な人がいるかね？」彼はそう聞いた。

「なんですって？」彼女はそういって、混乱したようだった。手の中の携帯を、これまで一度も見たことがない道具のように見ていた。

「誰か大事な人だよ・・・旦那さんとか、子供とか、両親とかだ」

「なぜ？」彼女は目を大きく見開いた。彼の言葉に含まれた重みに、どうやら気がついたようだった。

彼はすぐには答えなかった。電車が次の駅に近づくにつれ、ゆっくりと減速してゆく。彼は立ち上がった。電車がゆっくりと停止し、ドアが開く。彼はこう言った。「なぜなら、もうあまり時間がないからだ」

彼女は口を開いて何か言おうとしたが、やがて頷き、携帯を見てどこかに電話をしはじめた。

彼は電車を出て階段を表の通りへと上りはじめた。急ぎ足で上る人々に囲まれながら。

はじめるのだ。

彼はそう言われるのをずっと待ちつづけていた。そしてようやくそれを聞いたとき、彼は何も感じなかった。安心すらも感じなかった。何の感情もなかった。

彼は焼け付くような熱と湿気の中に出て、都合のいい場所を探した。大きな石像の下に、いくつかのベンチが並んでいた。彼はその石像が誰なのかまったくわからなかった。またこの国の歴史にも興味はなかった。ベンチには誰も座っていない。

彼は日陰になった席に座り、ブリーフケースを隣に置いた。

なぜ皆、おとなしく命令を聞いているのだろうか？　他の者もおそらくは、同時に同じ命令を受けているはずだった。彼は全部で何人いるのか知らなかったが、この計画の説明を受けたときには五人の同志たちと一緒だった。彼らは皆ヨーロッパに行ったはずだ。

彼は爆発の瞬間、それを見ることができるかどうか考えた。空は虹色に輝くだろうか？　彼はそれを見ることはできないだろうが、彼の仕事の成果がどれぐらい遠くから見ることができるのか知りたいと思った。皆それが見えるだろうか、地球の反対側から？　それは疑わしかった。しかし、どちらにせよあっちでも同じような光を見ることができるはずだ。美しく神聖な花火を。

彼はブリーフケースを開けて、もう何百回目かになるが、その神体を眺めた。
それは完璧なまでに簡潔な物体で、彼が想像したものとまったく異なっていた。その物体の特徴はほとんどなく、磨かれた鉄の表面に鍵穴が一つ空いているのと——彼はどうしてか鍵穴は二つあるべきだと思っていたが——キーを挿した瞬間にカウントダウンを始めるタイマーが特徴といえばそうであった。
鳩の群れが数メートル離れた場所に降りてきた。
鳩の群れは彼のほうを何か期待するような、飢えた眼で眺めた。彼は一瞬、パンか何かを持ってくればよかったと後悔したが、自分が考えていることの馬鹿々々しさに気がついて笑い出した。
道を行く人々が彼に疑わしげな視線を向けた。彼らはブリーフケースにも注目していたので、彼は口を閉じた。いま人目を引きたくはなかった。
彼はシャツの下から鍵を出した。それは細い鎖でつながれており、この数週間彼が肌身はなさず持っていたものだった。
鍵は磨かれた鉄の表面の鍵穴にぴったりとはまった。それをひねると、神体は活動しはじめた。ディスプレイに照明がつき、オレンジ色の光が数値を表示する。
カウントダウンは5分間続くようだった。
その時突然南東の空が、マッチで火をつけられたかのように光った。美しかった。
彼は息を呑んでその恐ろしい光景を眺めた。一瞬、自分が持っている神体のことを忘れていた。
つまりあの聖なる指令を、貴い尊師の指令を受け入れたのは彼だけではなかったのだ！　彼らもまた、自分たちの命を捧げていたのだ。死ぬ準備ができていたのだ。
荒涼とした、しかし美しい光は波のように頭上をとおりすぎてゆき、通りでは人々が立ち止まって叫びながら、それを指差していた。幾人かは走り出していた。他の者は立ちすくんでおり、その聖なる光をただ不思議そうに眺めているだけだった。
彼らは幸運な人々だった。見ることができたのだから。
あと三分。
彼に心残りがあるとすれば、それは尊師本人に会うことができなかったことだ。しかし中国はあまりに遠かったし、聖なる真実を教えてもらうためだけに救世主に会う必要もなかったのだ。
あと二分。
彼は少しだけ、アメリカにも火はついたのだろうかと考えた。彼の飼っていた犬はどうなっただろうか？　苦しんだだろうか？
あと一分。
小さな女の子がベンチの隣に座った。その娘は微笑んだ。少女は可愛らしい笑みを浮かべ、何か期待しているかのように彼を見た。彼も微笑み返した。彼が持っていた神体を指差すと、「それ綺麗にできる？」と聞いた。
彼は優しく笑うと、娘の髪の毛をなでた。「ああ」と答える。「綺麗にできるよ」
ゼロ。

第八章

西暦2019年8月1日　カリフォルニア　ロサンゼルス

眼がくらむほどの熱と風が止んでからたったの数時間後には、あたりは冷え込みはじめた。それはまだ日中だったが、外はすでに暗くなり始めていた。しかしそれは夜の心地よい暗さではなかった。それは灰色の、死の暗さだった。その暗闇とともに、毒を含んだ雪が降ってきていた。

これが終わりなのだ、と彼は思った。火と煙の中ではなく、葬式のような陰気な雪の中で滅びるのだ。おかしなことだ。こんなことが起こるなんて一度も想像したことがなかった。

少なくともここカリフォルニアでは。

彼はまだ壁紙が残っている壁の隅に体を寄せて、薄い毛布を体を巻きつけた。

死を待つ以外にできることはなにもなかった。それがどのような形でやってくるかはわからなかったが、もしついてなければ、放射線により病気になるまで生き延びてしまうかもしれない。髪の毛が抜け落ち、吐き気が始まり、肌が剥がれて焼けただれるのだ。どう考えてもそれは楽しい死に方とはいえなかった。

しかし、ひょっとしたら風邪で先に死ねるかもしれない。もしくは狂犬病か、それとも狂った人間にやられるか、もしくは・・・。

死ぬための方法はあまりに多く、生き延びるということはすでに選択からははずされていた。自殺について言えば、彼は何時間も前にそれを諦めた。怖くてできなかったのだ。そしてもし天国や地獄があるのだとしたら、永遠に呪われる危険を犯すことはできなかった。こういった追い詰められた状況下では、少しでも安全なほうを選ぶべきだった。彼は自分の罪をあがなうために祈るだろう。そして最悪の時がやってきたとき、死が目前にせまったときは、どうにかして気を紛らわせるのだ。どうにかして・・・。

それについては考えないほうがよさそうだった。だが奇妙なことに、死について考えることは、数日前そうであったより恐ろしいものではなくなっていた。ひょっとしたら自分が地球上でいま生き延びている、ほんの一握りの人間であるということと関係していたのかもしれない。彼が知っていた人間はみな死んでしまった。死はもはや終わりではなかった。なぜなら終わりは彼をおいてどこかに行ってしまったからだった。彼は終幕のあと、誰もいなくなってしまった舞台でぐずぐずしている役者のようなものだった。聴衆もいなくなり、照明は消されてしまった。もうあとは死ぬ以外にすることはなにもなかったのだ。

この数分で風の音が強くなってきていた。それは何千マイルも離れた場所で起こった爆発のせいかもしれないし、理由もなく風が強くなっているだけなのかもしれなかった。どこまでが自然現象で、どこまでが人のしたことなのかもう区別がつかなかった。いま世界を覆った力のことを考えれば・・・。

原子爆弾だ！　彼はつぶやいた。空から火が降ってきたぞ！　伏せろ・・・隠れるんだ！

彼は一人笑ったが、笑いはやがて咳に変わった。彼は口を覆って、体の震えが収まるのを待った。ようやく止まったあと、彼は手のひらを見た。

まだ血はなかった。これはいい兆候なのだろうか？　彼にはよくわからなかった。
人間は自らの力をひけらかすように自然に戦いを挑み、間違いなく勝利したのだろう。もうこの惑星上では、何一つとして未来など期待できない。
これではゴキブリですら新しい環境に適応できないだろう。これから十年間、やつらは何を食って生きていけるというのだろう？　百年後は？　そして千年後は？
やがて、この地球はただの不毛な石ころになるだろう。それはもう避けられない。火星のようになってしまうのだ。ひょっとしたらいつか、他の惑星からこの地球に着陸する宇宙船があるかもしれない。土壌のサンプルを取得してビデオ撮影をしたとしても、彼らはここにかつて栄華を極めた文明があったことなど何も気づかずに離陸してしまうに違いない。
彼らは彼の骸骨を発見するかもしれない。写真を取って、それを自分たちの異星に持って帰り、人間たちがどのような姿をしていたのか想像し、人間の生活風景を再現しようとすらするかもしれない。
悪くない考えだ。異星人から、人間という種のモデルとして選ばれるというのは。しかもこの個体はその種の平均的な特徴を備えていた、という説明つきでだ。
彼は激しく笑ったが、すぐに口に手を当ててそれ以上の声を押し殺した。実際のところ、大きな音を立てるべきではなかった。万が一に備えて。
しかし彼のような、野球のチームを作るときいつも除外されてしまうような体格の少年が、人類の代表として異星の博物館で陳列されるというのは、非常に可笑しなことではあった。もしクラスメートにその話をしたら、どんな顔をするだろう？
彼は皆の傷だらけの、死んだ顔のことを思った・・・。
外はますます暗くなってきているようだったが、それは彼の視界が暗くなっているだけなのかもしれなかった。彼は昔テレビでやっていた程度の知識しか、放射線の人体に対する影響について知らなかったのだ。視覚が失われるというのは、ひょっとしたら放射線による症状の最初の段階かもしれなかった。盲目になることを考えると本当に気が滅入ってきた。結局のところ、彼にできることはほとんどなく、見るべきものもなかったのだが、少なくともいま残っているものまで失いたくはなかった。
つまるところ、もし死後の世界というのものが、今持っている記憶だけで永遠にすごすことだとしたらどうだろう？　もしそうだとすれば、彼は記憶できるものはすべて記憶しておきたかった。暗く荒廃した土地の上に降る灰色の雪の眺めは、ずっと記憶しておくべきような光景ではなかったかもしれないが、それでもないよりはましだった。
無よりはどんなものでもあったほうがよかった。
彼はため息をついた。自分でも怖くなるほど、他の人間の声が聞きたいと思った。これまで彼は一人になりたいと願っていた。突然その願いがかなえられ彼は本当に、真の意味で一人ぼっちになってしまった。そして今、彼は絶望的に仲間が欲しいと思った。
なんて皮肉なんだ、と彼は思った。
いつか音楽が蘇ることがあるのだろうか？　古臭いバンドの曲を彼は覚えていた。彼の妹が聞いていた、くだらないセンチメンタルな曲だ。オアシスだとか何とか。そうでなければ前世紀の、すでに忘れられたポップの流行歌か何かのはずだった。その曲は最近になって、再び大流行していたのだった。
まったく、本当に皮肉なことだった。

彼は大災害をうまく生き延びたのだった。彼の両親と、妹はそれぞれ後を追うように、数時間ごとに息を引き取った。なぜかは理解できなかったが、彼は生き延びた。彼はこの二年間、風邪すら引いたことがなかった。そして突然彼は一人になった。しかし食料などはあったので、ほぼ一年の間、家の中に犬と閉じこもることができたのだった。

もちろん、近所にはまだ人々が住んでいた。彼の知人や、顔だけは知っていた人々だ。しかし彼は自分の家族が薪で焼かれてからは、誰ともつきあいたくなくなってしまった。物事がようやく落ち着きを見せ、近所が戦時中の難民キャンプのような状態から抜け出しつつあったころ、彼は外に出ようとして幾人かの隣人と話してみた。しかし彼らは自分たちの生活を元に戻すことに手一杯であった。そして自分たちの子供を亡くしてしまった夫婦や、年老いた夫婦などは彼を引き取ろうとしたが、それを断ったのだった。

そして今、犬も死んでしまった。皮肉なことに（また同じ言葉だ）、犬は四週間ほど前、車に轢かれて死んでしまった。そうでなければ犬はまだ生きていただろうか？　それともあの爆発で死んでしまっていただろうか？　運がよかったのだろう。その瞬間、彼は地下室でラジオを聞いていたのだった。何の警告もなかった。巨大な、明るい光。彼は直接それを見なかった。そのあと恐ろしい衝撃と、鳴り響く轟音、そして最後に熱波が来た。焼けるような、痛みを伴う熱が。

彼は大災害も戦争も、両方生き延びた。しかしだからどうだというのだろう。どちらにせよ、今の彼はただ死ぬのを待つだけだ。しかも完全にひとりぼっちだったのだ。

少なくとも彼の両親は、死ぬとき息子がそばにいたのだ。あの苦痛に満ちた晩を、できる限りの世話をしてくれる者とすごしたのだ。妹もそうだった。だが、妹は死ぬまで時間がかかったのだった。最後に、彼は五十錠の睡眠薬を溶かした水をグラスに入れて妹に手渡したのだった。それが効いて死んだのかどうかはわからなかった。だが薬は妹を眠らせることができたし、願わくはその痛みも軽減することができたのだ。

彼はまたため息をついた。

これは・・・本当に退屈だった。いったい彼はなぜここに座っているのだろう。もし誰かに見つかって、殺されそうになったらどうする？　きっとあっという間に殺してくれるに違いない。

しかし、彼は本当にあの外に出るべきだろうか？　瓦礫と燃え尽きた家々の廃墟の中へ？　もし外で足の骨でも折ってしまったらどうなるだろう？　野ざらしで、汚れた雪が降りしきる中、体を横たわらせたままみっともない死を迎えるのか？　いや、ここにいたほうがましだった。ここは彼の家だったし、ずっとここに住んでいたのだ。彼は死の瞬間までここにとどまるだろう。

何か読むものでもあればよかったのだが・・・。

彼はふと思いついた。

彼は毛布の下から抜け出して、かつて寝室だった場所へとびっこを引いて歩きだした。彼はもう出血していなかったが、足の感触はなく、体重をかけるとやはり痛んだ。

彼の所持品はほとんど残ってはいなかった。彼は一瞬、自分が持っていた漫画のコレクションが詰まった箱を思い出し、それを失ったことを悲しく思ったが、今はそれより大きな物事を考えなければいけないと思い直し、探し物を続けた。

彼は灰だらけのスタートレックのランチボックスの後ろで、ようやく探していたものを見つ

けた。ありがたいことに、ほとんど無傷だった。ほとんどの本は自分の部屋に置き去りにしていたが、このもっとも大事にしていた本だけは、最後に読んだときに床においておいたのだった。

彼は急ごしらえのシェルターに戻ると、座り込んだ。そんなに悪くなかった。実際、ほとんど快適と言ってもよかった。

さて、第一章からだ。

「待ち望まれていたパーティ」彼は声に出して読み上げて微笑んだ。そして読書を始めた。

彼女は次の日の夜遅く、最初の冬の風がとうとう吹き始めたときに現れた。

その日は恐ろしく寒く、彼は自分の指とつま先の感覚をほとんど無くしてしまっていた。本は床に落ちてしまっていたが、それを拾い上げる元気もなかった。

彼は誰かが近づく足音を聞いた。彼のまぶたは凍りついて閉じており、彼は感覚のない指をつかってそれをもみほぐし、ようやく眼を開いたときにそのぼやけた姿を見たのだった。

彼女は彼の前にひざまずいた。

「こんにちわ」彼女は言った。「私はサラよ」

「僕はアレックスだ」彼はそう言おうとしたが、彼の口と舌は両方とも麻痺しており、喉は渇ききってうめき声しか出せなかった。

またかよ、と彼は思った。可愛い女の子が来ているというのに、恥をかくなんて。

女の子は彼に微笑んだ。その彼女は本当に綺麗だった。彼女は柔らかい顔の輪郭と、長い金髪、ぽっちゃりした唇と、澄んだ青い瞳を持っていた。

アレックスは彼の母親のことを思い出した。

その女の子サラはどこからか出したナップサックを開いた。中から背の高いアルミニウムの魔法瓶を取り出すと、蓋をひねって開けた。湯気が液体から立ち上り、部屋を温かいハーブ茶の香りで満たした。

いったいどこでそんなものを手に入れたのだろう、と彼は思った。だがそんな考えも長いこと続かなかった。サラがカップを彼の唇につけて、甘くほろ苦い液体を飲ませたからだ。数口飲んだだけで、彼はずいぶんと気分がよくなった。

「ありがとう」と彼は言って、咳き込んだ。咳は長いことおさまらなかった。少し血が出たが、たいした量ではなかった。あとになって彼はまたお茶を飲み、サラは焼きたてのバナナブレッドを彼に与えた。ナップサックから服をいくつか出すと、分厚い冬用のコートと毛糸の毛布で彼を覆った。

彼が食べている間、サラは些細なことを話しており、世界に何が起こったのかは一言もしゃべらなかった。彼女は自分がどこから来たのかしゃべった。自分が何歳で母親と親友がロンドンにいて・・・アレックスはそれを真剣に聞き、一言も聞きもらすまいとした。いま彼はもっとも望んでいたものを与えられたのだ。人間の仲間だ。しかし彼はサラがいつまた出発するのか知らなかった。だから彼女が滞在している間は、話を聞きつづけるべきだった。

彼がお茶とブレッドを食べ終えたあと、彼女は薬をいくつか取り出して手渡し、彼はそれを何も聞かずに飲んだ。これより悪いことはもうないのだから。

「その薬でだいぶ気分がよくなると思うわ」彼女はそう言った。彼はそれを信じた。なぜ嘘をつく必要がある？　「ずっと一人でいたんでしょう？」

彼はうなずいた。「大災害がカリフォルニアを襲ってからずっとそうなん。家族がみな死んでしまったから。僕はずっと家にいた。ストライダーと一緒に」
「ストライダー？」
「犬だよ。僕が飼っていた犬だ」
「ふうん」彼女は言った。「ストライダーって、アラゴルンに出てくる？」
彼はまっすぐ座りなおした。「本読んだの？　映画のほうを見たの？」
サラは微笑んだ。「両方よ。何度も見たわ。私の大好きな作品よ、アレックス」
「僕もさ！」信じられなかった。なんてついているんだろう。「ストライダーは僕が一番好きなキャラなんだ。誰が一番好き？」
彼女は長いこと考えていた。「サムね」最後に彼女はそう言うと、うなずいた。「彼が一番のヒーローだと思うわ」
「なんで？」
「だって彼は自分がもっとも愛するもののために死ねる人よ。謙虚で、誠実だわ」
「そうだね」彼は恋に落ちていた。「僕もそう思ったよ」
「もう少し、そこ場所開けられる？」サラは彼の返答をまたずに、彼の脇に滑り込んだ。
彼は硬直した。彼は女の子とこんなに近くに接近したことがなかったのだ。しかし彼女が腕を回して、彼の頭を胸の上におき、髪の毛をなではじめたので、彼はやがて落ち着きを取り戻した。
「私ももうずっと、長いこと一人ぼっちだったのよ」彼女はそう言った。「最後にあなたが見つかってよかったわ。もう少し早くこれたと思うけど、場所が昨晩までわからなかったのよ」
「何が？」彼はささやいた。
「あなたがどこにいるかよ、おばかさん」彼女はそう言って、彼の耳にキスをした。その柔らかい唇は温かく、彼は体に奇妙な衝撃が走るのを感じた。 それは欲望ではなかったが、それに近いものだった。しかしもっと、もっと強い何かだった。
彼はそれが恋に違いないと思った。
サラは一晩彼と一緒にそうして過ごした。そしてもう夜と昼の区別もなかったが、日が昇る前に彼にキスを許した。そして体を触れても良いといい、二人はそうして愛し合った。彼女は一度うめいたが、アレックスはそれが快楽から来るものではないことを知っていた。
二人はその日、二度ほど愛し合い、彼女はその後去っていった。
サラがお別れのキスをしたとき、彼女は泣いていた。大丈夫だ、と彼は言い、行きたくても一緒には行けないと告げた。彼の足はひどく膨れており、痛みは ますます激しくなっていた。咳をすると、濃く黒い血が出てきた。
彼女は何錠かの薬を手渡すと、後ろを見ないで出て行ってしまった。
また一人になってしまったが、今回は前よりも悪くない気分だった。最初のとき彼女が彼を抱きしめながら、花のような吐息とともに言ったことのおかげだったのかもしれない。
「希望は残っているわ」サラは確信したように言った。「人間は生き残る。私がそうさせるわ」
彼はため息をついて、目を閉じた。
最初の雪が降ってから、どんどん寒くなっていた。彼は自分が今晩生き延びられるかどうかいぶかしんだ。彼はサラの無事を願った。どこに向かったかわからない彼女のことを。
いや。願ったのではなかった。彼はサラが無事でいることを知っていた。それは事実だった。

彼女の中には何かがあった。ほとんど天使のような何かが・・・ 。
「女神だったのかな」彼はささやいて、微笑んだ。彼は毛布を体に堅く巻きつけると、彼女にもらったチョコレートのひとかけらを口に含んだ。
　もう彼にできることは待つことだけだ。

　そうして、長い冬が始まった。

「もし冬がなかったら、春がこれほど麗しいものになるだろうか。私達がときには辛酸をなめなければ、幸せを歓迎することができるだろうか」

――アン・ブラッドストリート

第九章

西暦29745年　惑星ルビカ

「オムニの野郎どもが！」彼女はそういい捨てると唾を吐いて、塹壕の中へと這って戻り、とりあえず安全に隠れられるところまで砂だらけの傾斜を降りていった。

仲間たちが何人か、すでに武器を新しい地下基地（バンカー）へと運び始めていた。彼らがいた場所はまたしても戦略的妥協の対象になったのだ。
もはやこれはいらだたしいまでに日常的なことになっていた。
彼女の頭のほんの数センチメートル上を、何かが空気を切り裂き震わせてながら飛んでいった。あたりの空気分子が帯電し、彼女のしばらく洗っていない汚れた髪の毛を逆立たせた。自分の体にアドレナリンがみなぎるのを感じる。オゾンの匂いは彼女を元気づかせたが、それは同時に死を運ぶ香りでもあり、ジェニファー・ブロディにとってあまりに身近なものとなっている死の感触を、楽しむまでにはいかなかった。ジェニファーは十歳のころ目の前で、家族をオムニ公安省（オムニ・ポル）のファシストたちに殺されていたのだった。

つまらないことを思い出したものだ。
それに、自動で動く機械兵士に撃たれつづけ、自分とその周りのものすべてを破壊されそうになるという経験は、そんなに甘いものでもなかったことは確かだ。
彼女の部隊は、ある古い鉱山街の南に地下基地をかまえていた。街はすでに無人だった。オムニテック社の軍隊は前回反乱が起こった際、テロリストを倒すという名目で、街の住人を虐殺したのだった。その理由は街が同社にとって重要な戦略上のポイントでもあったからでもあった。彼女の部隊は新しく基地を穴を掘って作ったところで、ここから傲慢極まりない敵部隊に反撃を加えられるものと考えていたのだった。

クラン反乱軍（クラン）は少しずつ撤退させられながら、その力を少しずつ削られていた。自分たちはすべて虐殺されると信じていたクランの中には、停戦協定を結ぶことに積極的な者もいた。そしてオムニたちは、ますますうぬぼれるというわけだった。薄気味の悪いことに、オムニたちも停戦を望んでいるように見えた。しかしジェニーは心の底では、停戦が決して長続きしないことを知っていた。最後のクランが倒れ、無条件降伏に合意したとき、オムニテック社は彼らの上にハゲタカのように群がり、その死体をむさぼり食うことだろう。
そのときクランは自分の身を守ることすらできなくなり、虐殺のためだけに作られた機械の軍隊の餌食となるだろう。
彼女はなんとしてもそれを止めるだろう。
「ジェニー、大丈夫か？」
ジェニファーは振り返って、相棒のアダムと目配せをした。いつものように、彼はにやりと笑っていた。アダムを怖気づかせるものは何もないようだった。まるで彼は撃たれることを楽

しんでいるかのようだ。

　そういう人間が、とジェニファーは心の中で考えた。ここ前線では、何よりも必要とされているのだ。

「大丈夫、ばっちりだ。あんたは？」

　アダムは手で強化鎧の胸をたたいて、大きなげっぷをした。ジェニーは顔をしかめた。それはひどくすっぱく、何かが腐った悪臭だった。

「どう思う？　ビールを一瓶と、リートの丸揚げを五分前に食べたばっかりだからな。粒子ビームはデザートにちょうどいいね」

　ジェニーは頭を振って、銃に再度神経を集中した。銃はまたおかしくなっていた。今週に入ってからもう三度目で、もし新しい銃が近いうちに支給されなければ、彼女はちゃぶ台をひっくり返してみせるつもりだった。彼女は自分の戦歴が上席の将軍たちから高く評価されていることを知っていたが、もう少し現場からの不平をきちんと聞いてくれればいいのにと思っていた。たとえば、古い銃が暴発事故を起こす前に、新しいものを支給するといったことだ。それは別に難しいことではないはずだった。最近ではどの街でもまともな武器ぐらい買うことができた。

　実際、最近になってアサルトライフルの不具合で若い男が一人死んだ。彼は古い十五年もののオムニテック製の銃を与えられていた。つい最近ぴかぴかに磨かれたばかりで、大口径の弾薬が詰められていた。彼は引き金を引き、そこで暴発が起こった。銃は完全に吹き飛び、若者の頭を半分吹き飛ばして、あたりに鋭い鉄の破片をばらまいたのだった。

　それはまともな光景ではなかったし、さらに悪いことには一人の優秀な兵士を失うという結果になった。少なくとも優秀になる可能性を秘めていた人間を、そんなことで失ったのだ。

　若者をそういう事故で失うというのは悲しむべき損失だった。特に、その若者が正しい理念のために、自ら契約を結んだばっかりであったという背景では。事故は戦場の雰囲気を気が滅入る、憂鬱なものに変えてしまった。若者の両親には、技術的な事故により初陣で無駄な死を迎えたと伝えなければならなかったのだ。それは実にくだらないことだった。

「銃はちゃんと動いてるか？」アダムはしゃがみ込んで聞いてきた。

「ああ」彼女はリロードボタンを押し込んだが、銃は弾薬切れと表示を出した。悪態をつく。彼女は三十分前に弾をチャージしたばかりだったし、ほとんど一発しか撃っていなかったのだ。いったいこの代物はどうなっているんだ。

「ベスターのところに持っていけよ。直してくれる」

「そもそも直るものなのかどうかわからない、アダム。新しいのが欲しい。私を殺さないものがほしい」

「死を免れることはできないよ。ジェニー、君だってね」

「はっ」彼女はアダムに顔をしかめてみせた。「あんたみたいなお子様（キッド）から説教されたくないわ。私はただ自殺するよりいい方法があるかどうか知りたいだけだ。私が死ぬときは必ずオムニたちを道連れにしてやる・・・たまたま私の銃が暴発したとき、近くに立っていたから巻き添えを食うのは不幸だしばかげてると思わないか」彼女はウィンクした。アダムは目を回してみせる。

お子様（キッド）というのは二人の間だけで通用する呼び名だった。ジェニーと彼が初めて出会ったあの新兵訓練の日、アダムより自分が四日足らずだが年上だと知ったのだった。それ以来、その呼び名は彼の愛称になった。他のうまいニックネームがそうであるように、その呼び名は定着した。だが彼女は他の者がまわりにいるときに、そう呼ばないように気をつけていた。アダムは迷惑そうな身振りだったが、彼がひそかにキッドと呼ばれることが気にいっているのを彼女は知っていた。だが誰か他の人間がそう呼んだらアダムは激怒しただろう。彼女に限ってそれはＯＫなのだった。

いくつかの点において、二人は姉弟のようだった。

スパルタにある新兵訓練所（ブート・キャンプ）での最初の困難な数週間の間、当事者の二人だけではなく、皆がこのカップルはそのうち恋人同士になる運命だと思っていた。二人の間にあるきらめきは他人にも見えるようだった。二人は性的に惹かれあっいただけではなく、実際にこっそり数回キスぐらいはしていたし、暗い小部屋で不器用に体を触りあったりはしていたが、結局二人は友達でいたほうがいいと判断したのだった。恋はあらゆることを複雑にしすぎた。特にここ戦場においては。それに加えて、二人は危険きわまりない状況の中で、お互いを信頼しあわねばならないという状況では、恋の成立は難しかったのだ。

彼はハンサムだったし、頭の回転はさほど速くなかったが、その欠点を高い忠誠心とねじくれたユーモアのセンスで埋め合わせていた。もし皆の願いがかなって戦争が終わるときがきたらどうだろうか、とジェニーは考える。またアダムと一緒に愛を育むことを考えてもいいかもしれない。昔のように、相手のことをよく知るために。

いつかは、と彼女は密かに思っていた。身を落ち着けるための理由を見つけられるかもしれない。砂漠から遠く離れた、水と緑のオアシスのどこかに家を建て、犬や猫と一緒に暮らしながら赤ん坊を何人か産んで育てるのだ。

それには男が一人必要だと、かつて聞いたことがあった。

いや、別に必要ではないだろう。いくつかの選択肢があるからだ。しかし、昔どおりのやりかたでも問題はないだろう？　そっちのほうがクローンや体外受精よりもきっと楽しいはずだし。

「新しい知らせを聞いたか？」

ジェニーは頭を振って、妄想を打ち払った。街で平和に暮らす十代の女性のように白昼夢を見ることは、戦場では良い傾向ではなかった。ジェニーはライフルを持ち直し、身を低くかがめて撃つ体勢を取った。戦場は静かになっており、戦車がやってくる前に安全な場所に移動するなら今がよいタイミングだった。

「いや、何かあったのか？」

アダムは唾を吐いて、青黒い塊を吐き出した。噛みマドラの葉で、芳香は強くひどい味がするが、恐ろしく中毒性が高いものだ。彼は手の甲で涎のついた口を拭った。

なんて魅力的なのかしら、と彼女は考えた。心臓がどきどきしちゃうわ。

「いや、オムニどもが何か新しいことを始めたらしい。やつらは恩赦を与えるといっている。すべての兵士、すべての北部人にだ。またその人物が過去に属していた組織や、これまでの行動にかかわらず与えられるらしい」

「本当なの？　くそっ」またしてもクランは手痛い一撃をくらったのだった。完璧なタイミングだった。軍の戦意は、最近の敗北により下がっていたからだ。「悪賢い手だ」嫌々ながらそれは認めざるを得なかった。
「そうだ」アダムはまじめな顔をして頷いた。「あのロスが今朝、全放送チャンネルにそれを流したんだ」彼は腕を広げて、オムニテック社の巨大なメディアネットワークを示した。だが彼の腕がこの惑星全体より広かったとしても、あのメディアネットワークの大きさを正確に示すことは無理だったに違いない。「やつの気取った言葉を聞いたかい。『家族』や『元の鞘に』とか『許し』だの・・・やつは保守的なクソファシストだ。だが奴は切れる。俺もそれを聞いて真剣に考えそうになった・・・俺が放映機（ビューアー）をばらばらにするまではな」彼はにやりと笑った。
　ジェニーはまったく笑う気になれなかった。
「奴は停戦のフリをしようとしてるんだ」彼女は言った。「以前の合意は無駄なものになるし、皆大手を振って街に戻るだろうな。いくつかのクラングループは身を守る手立てを完全に失う」ジェニーは頭を振った。「悪い兆候だ。評議会はどう反応している？」
　アダムは肩をすくめた。「何も。少なくともいまのところは。公式な回答は何も出していない。知ってるだろう、評議会はこういったくだらん出来事に対して、いつも反応は鈍いんだ。俺達は危機的状況では動けないのさ。それに比べてオムニたちは、政治的な策略を数時間単位で打ち出してくる」
「それはやつらが独裁政権だからだ、アダム」ジェニーは辛抱強くそう言った。「私たちには民主主義がある。だから決定や行動が遅くなることもある。でも長い眼で見ないといけない」
「長い眼でみたら俺たちは死んでいる」アダムはうなった。「地面の下深くに埋められたら、民主主義など何の役に立つ？」
「いったい何のために私たちが戦っていると言うんだ？」ジェニーは自分が不必要に物事をややこしくしていることは知っていた。前にも同じような議論をしたことがあり、彼女は疲労を覚え初めていた。
　なぜ彼にはわからないのだろうか。だが、それはアダムだけに限った問題ではなかった。たくさんの兵士たちが、クランもオムニテック社の流儀や戦略のいくつかを採用すべきだと感じていたし、評議会の慈悲深い勅令を無視しようとしていた。それが生む結果はなんだろう？
「クランにオムニたちと同じ存在になれというのか？」彼女は聞いた。「もしそうだとしたら、私たちがここ前線で命を賭けて戦うことの意味はいったいなんだ？」
「わからんよ・・・」彼は鼻で匂い嗅いだ。それは古参兵の癖で、戦車が放つ特有の悪臭を嗅ぎ取ろうとするものだった。ベテランたちはその臭いを嫌というほど学んでいた。「何の意味もないのかもしれない」アダムは落ち着かないようだった。彼女は彼の気持ちがよくわかった。「もう行くべきだ」
「了解。この位置は危険だ。戦車の到着はいつ頃になる？　十分後とか？　やつらの位置はわかるか」
　アダムは傾斜を上って、縁から向こうをのぞき見た。「間違いだね。六分ほどの距離だ。七台見える」
「くそ」ジェニーは身をかがめながら、強化された塹壕の底に飛び降り、主力部隊の後を追うように動きだした。二人以外は、もう誰も塹壕には残っていなかった。「行こう、キッド」

「あれに一発うまくぶち込んでからだ・・・」アダムは背中からライフルを抜いて構えはじめた。
彼女は信じられないというように頭を振った。
馬鹿か！
「アダム！　行こう。命令だ！　殺されたいのか？」
「毎日そう思ってるさ！」彼はにやりと笑って、坂を降りてきた。「毎日毎日さ」

地下基地は混みあっていた。非番のクラン兵士の男女たちがそこに集まっていた。眠っている者、食事を取っている者、読書をしている者、接続（リンク）している者、音楽を聴いている者、映画を見る者——とさまざまだった。三層構造のコンクリートの基地敷地内に、みな一センチ単位でみっしりと詰まっていた。
空気は汗と血、そして尿の強い臭いがする。どこかで必ず誰かが話していた。仕事やプライベートな会話だ。仲間たちは武器を持ったまま、ここ数日間戦場で起こったことを話し合い、戦場での恐ろしい体験を悪夢に変えないために、お互いの苦しみを軽減しようとしているのだった。
かつて、この建物はノータム採掘業務のためのものだった。しかしここ数年間、ノータムが取れなくなってからはここはクランのための良い要塞となった。ジェニーの知っている限りでは、この基地は一度も落ちて占拠されたことはなかった。
もともとの装飾物はほとんど残されてはいなかった。すべての壁や扉、そして窓は強化され、家具はどこかに放り出され、代わりに軍の幹部のためのプラスティックの机がいくつか設置された。そして家具の代わりに武器と寝台が持ち込まれ、建物はその三分の二を地下にもぐりこませ、最後の三分の一は二十四時間カモフラージュされガードされた要塞へ改造された。基地は北部のクラン領土と、南のオムニテック領土を隔てる国境のそばに位置していた。
ジェニーとアダムはひょいひょいと身軽に人を避けて進みながら、下の大本営への階段を下りていった。
二人は戦況の報告をし、新しい任務を得なければならなかった。一回の敗退により、任務が滞ることはありえなかった。特にいまこういった時期においてはそうだった。戦争はなによりも重要なものになりつつあり、戦い続けているクランの人間は休、暇を取って他の人間に代わってもらうことなどできなかった。必要なのは兵士であり、この二人ほど有能な兵士はほとんどいなかったのだ。
「あのひどい現場からよく戻ったな」司令室の扉に立つ警備兵は顔見知りだった。彼が怪我をしてしまう前は、このマハヴィール・パンジャはジェニーやアダムを肩を並べて、戦場を駆け抜けたものだった。
「よお、パンジャ」アダムはそう吼えると、若者の肩を手でばんとたたいた。「ここ養鶏場の様子はどうだい」兵隊用語では、前線ではないところは養鶏場なのだった。
「特に何も」とパンジャは答えた。彼はインド人種の二十台後半の若者であり、兵士特有の疲労を身にまとったまま、パルスライフルを肩にかけていた。彼は閉まったドアを頭で指し示してみせる。「司令の機嫌は悪い・・・それを除けば、農場はいつものように平和だ」
「何があったのか？」ジェニーは状況もわからないまま司令の前に出るつもりはなかった。「な

ぜ忙しくしてるんだ？」

「ロス社長の対応だ。奴が提案してきた内容だよ・・・もう聞いたか？」

「一応な」ジェニーは答えた。

「多くの人が提案を真剣に考えざるを得なくなっている。すでにクランの支持者たちの中からも、武器を捨ててオムニに降伏し始めたものがいるとの報告が入っている。噂では提案は本物で、やつらは武器を没収すると、名前と個人情報を記録し・・・それ以上のことはしないらしい。代わりに与えられるものは、恩赦と新しい仕事だ。もし必要であれば、住居も会社から支給される」

「友と隣人を裏切る報酬としてな」アダムがさえぎった。「かなり法外な代償に見えるがな」

「あんたと僕にとっては、もちろんそうだ。だが・・・」マハヴィールは頭を振った。「多くの人にとって、これはとても魅力的なものに映るだろう。自分の命を賭けて、とてつもなく強力な敵と戦い続ける人生よりも」

「あんたはどうなんだ？　これが魅力的な提案だと思うのか？」ジェニーはこの友人が単に真実を語っていることを知っていたが、それでもまるで裏切り者の発言のように聞こえたのだ。すでに喋ることができない者たちの代わりに、自由のための戦いを毎日のように戦場で続けてきたジェニーのような人間にとって。

「もちろんそんなことはない」マハヴィールは言った。「僕がここで何のためにいると思うんだ、ジェニー？　給料？　食料？　ここ養鶏場は遊ぶのに楽しい場所とは思えないね」

「ごめん、そういうつもりじゃなkった・・・私はただ蜂蜜の匂いは甘いけど、蜂が刺すことを忘れるものだということを言いたかったんだ」

「なんだって？」マハヴィールはわからないといったようだった。「『蜂』ってなんだい？」

　アダムは笑った。「ジェニーは詩人なんだよ、本を読みすぎなんだ」彼は彼女がかぶっていたヘルメットの上部を叩いたので、お返しに不機嫌な蹴りを脛に食らっていた。「入っていいか？」

「もちろんだ。君らを待っているようだ」マハヴィールが左のボタンを叩いて押すと、司令室へのドアが静かに開いた。「うまくやりなよ」彼は二人に曲がった笑みを浮かべると、警備に戻った。

　ドアの向こうの部屋は大きく、完全な正方形だった。鉄の廊下が部屋の四方からどこかへと伸びており、まるでどこかの画廊のようだった。二つの急勾配の階段が五メートル下の床までつながっている。部屋の反対側の壁には、巨大なディスプレイが取り付けられており、惑星ルビカの居住区地図を映し出していた。それは寒々しい色をした青と、赤で塗り分けられており、クランとオムニテックの力関係をそれぞれ現していた。白は中立（ニュートラル）地帯を意味していた。

　部屋には十四・十五人ほどの人間がおり、ほとんどの者は上級将校たちとブリーフィングを行っている将校予備軍たちだった。

　司令室はいつも騒然としていた。そしてここがクランの活動すべての中心だったのだ。

　ジェニーとアダムは入り口の階段を下りると、一回り大きな体格の男に近づいた。男は六十台前半で、背が高く頭が禿げていた。彼は落ち着いた身振りで二人が戻ってきたのを眺めながら、絶え間ない質問に対して吼えるように回答をしていた。二人が近づくと彼は頷いた。儀礼的なことはここでは何も必要なかった。それはオムニたちにくれてやるべきものだった。

「撤退する必要があったのは残念だった」彼は言った。その声はつっけんどんだったが、冷たくはなかった。これがいつもの仕事だった。「撤退しなくてもよい方法もあったかもしれない。だが今は話が別だ。もうＯＴ社のデマ活動を聞いていると思うが？」
「ええ」アダムは答えた。「聞きました」
「フィリップ・ロスは切れる男だ」彼は腕を組むと、ため息をついた。「奴は理性的に和平を求めているようなそぶりをしている。まるで反抗する我々が悪者のようだ。今回の件については、ＯＴ社にはメディアという利点がある。世論は揺れている。毎日戦っているわけではない北部人たちは、オムニたちに引き寄せられている。中立(ニュートラル)でいたい者たちについては・・・」
「そんな者は存在しません、司令」ジェニーは言った。「私たちとともに戦うか、敵になるかの二つです」
　司令は笑って、ジェニーの腕を叩いた。「そうだな。よく忘れる」
　ジェラルド司令は制服を着ていなかった。その必要もなかったのだ。彼はボクサーパンツを掃いていても、その力とカリスマを保持できるタイプの人間だった。彼は制服を着てみせたことはなかったが、ジェラルドから命令を受け取った者はみな、彼が制服を着ていたはずで、二メートルの身長と牛のような体格をしていたと言うのだった。ジェラルドに否という者はいなかった。皆彼の出すすべての質問に答え、指令には皆が従った。それは罰が怖いからではなかった。単に彼の持つ存在感の力と意思の強さが、従わないことをばかげたことのように思わせてしまうのだった。
　ジェラルドは部屋の中央にある会議卓に座るよう二人に促した。彼も座ると、目の前で手を組んだ。ジェニーとアダムは目配せしあった。何かでかいことがあるのだ。
「二人に特殊な任務を与えたい」司令は言った。
「はい」こういった状況では、ジェニーが答えるのが常だった。アダムは口を閉じて、耳に神経を集中させていた。
「ロスを倒してほしい」
「フィリップ・ロスですか？」アダムは自制が効かなくなったようだった。ジェニーは彼がそうなる理由がわかった。これはでかい話で、しかも予想外のことだったからだ。反乱軍は、たった一人の個人をその攻撃の目標にしたことはなかったし、相手が将校クラスであろうとそれは同じだった。特に軍人でない対象は、ＯＴ社の中でその者がどういった役職についていようとも、ターゲットになったことはなかったのだ。「フィリップ・ロスを暗殺するんですか？」
「奴をためらうことなく倒してほしいのだ。奴を消さなければいけない。我らの評判は悪くなるかもしれないが、それはどうでもよい。私たちの支持率は一時地に落ちるかもしれないが、長い眼で見れば・・・ロスがいまより頭が回るようになれば、ゲームは終わりだ。私たちの死で終わるのだ。奴は文句なしに最大の敵だ。そしておまえたち二人の兵士が、私の持つ一番優れた駒だというわけだ」
　ジェニーは麻痺したようになっていた。彼女の一部は司令が二人にこういった命令をくだしたことを喜んでいた。が、同時に掛け金の大きさにひるんでもいた。
　もし成功したとしたら・・・。
　その結果は歴史を揺るがすものになるだろう。ひょっとしたら戦争すら終わる可能性もある。なぜならオムニテックは別のフィリップ・ロスをすぐに輸出するということはできないだろう

からだ。他の人間をただ派遣するのでは意味がなかった。なぜならロスは本当の力を持った人間だった。その権力は勝ち取られたもので、その役職によって自動的についてくるものではなかったのだ。
　多くの者にとって、ロスはまさにオムニテック社そのものだった。彼なしでは・・・。
　これはまったく新しいゲームだった。
「どういった計画ですか？」
　アダムがすでにやる気になっていることに彼女は気がついた。彼はこういったことのために生きているのだ。どういった結果になるか、アダムは考えてもいないに違いない。もしそれが挑戦するに値する重要なことがらで、心臓の鼓動を早められる行為であればなんでもよかったのだ。ネズミに飛びかかる猫のように彼は飛びついていたのだった。彼はまったく子供だった。そして、そんなアダムと彼女のチームはまさに最強だったのだ。
「まだほとんど進んではいないが」ジェラルドは言った。「君らには準備の大事な部分を請け負ってほしい。諜報部の人間は、この恩赦放送が起こる前からこの計画を練っていた。遠隔操作のアンドロイドや、クローンを使うことによってオムニ－１を爆破する方法を考えていたのだ。しかし私はもう少し伝統的なやり方に戻るのがよいと思う。市民の命を危険にさらすのはよくない。もしそんなことになれば、ロスをしとめるのに成功しても意味が無い。そうすれば私たちは戦争に間違いなく負けるだろう。いや、二人の人間だけを送るほうがいい。密やかに、事を荒立てずに潜入するのだ。地味に、安全にだ」
　アダムは誇りで髪の毛を逆立てたようだった。「もちろんです。やりとげてみせます」
「趣旨はわかりますが」彼女は口をはさんだ。「現状には問題が、複数の問題があると思います」そう言ってジェニーはアダムをにらみつけたが、彼は肩をすくめただけだった。「アダムが行きたがっているのはわかりますが、いくつか聞きたいこともあります。たとえば、そもそもどうやってオムニ－１に入るのですか？　当然歓迎はされないでしょうし、私達は記録されてしまっています。すぐに気が付かれるはずです」司令は何か言いかけたが、彼女は手を上げてそれをさえぎった。まだ言いたいことが残っていた。「もちろんいくつか方法はあるのでしょう。それはわかります。ただ、これが本当にうまくいくかどうか疑わしいってことを言っておきたかったんです」彼女は言葉を切った。「それは、この話を断るということではありません。こういった機会を見逃すことなんてできません」
　ジェラルドはゆっくりとうなずいた。「おまえに断らせるわけにはいかなかった。ブロディー、おまえの率直さをありがたく思うぞ」彼は立ち上がり、ジェニーとアダムもそれにならった。「夕食の後にミーティングをする。ちゃんと食事して休憩をとっておいてくれ。数日後には出発してもらう」彼は壁のディスプレイを見た。赤い点が、青い点を食いつくそうとしていた。「友人に別れを告げておくように。わかっていると思うが、これは危険の高い作戦だ。今晩から、他の者から分かれて二人で行動してもらう。君らを信用していないというわけではないが、君らの寝言から計画がもれるという危険性もある」ジェラルドは優しい笑みを浮かべた。「おまえたち兵士の勇気に感謝する。これが終わったら、おまえたちが望む望まないにかかわらずちゃんとした休暇を保証しよう。以上だ」
　そういうと司令は仕事に戻った。ジェニーとアダムは居住区に登って戻った。二人とも空腹だった。戻ってから夕食を取る。
　二人は味気のないリートのシチューをむさぼるようにたべた。時々、意味ありげな視線をお

互いにかわす。
二人はライオンの住む洞窟にもぐりこもうというのだ。二人の行動がこの惑星全体の未来を決めるのだ。
それは彼ら二人が、反乱軍に入ったそもそもの理由でもあった。

＊＊＊

西暦28911年　星々と星々の間で

幽霊たちはこれまでになくしつこくなってきていた。
幽霊たちみな表情のない、真っ白な顔を彼に向けるのだった。その口は音のない悲鳴をあげるかのように大きく開いていた。絶望で理性を失った眼が、血にまみれた彼の罪を責め、解放してくれと懇願するのだった。
眼を背けても何も解決しなかった。幽霊たちは彼の視線が向かう先すべてで実体化したからだ。眼を閉じても、宙をただよう彼らのささやき声を止めることはできなかった。彼は手をよじって神を呪ったが、いくら願っても幽霊たちは消えなかった。
しかしこういった拷問のような生活と、休むことのできない不眠の日々にもかかわらず、ディビッドは接続（リンク）していることにはさらに我慢がならなかった。それが幽霊たちから逃れることができる唯一の方法であったにも関わらず、だ。彼はここ数週間、生体（バイオフォーム）椅子に座って残りの航海の計画を練り、将来船を安全に停止させるための準備をしていたのだった。そしてディビッドは心の底からうんざりしていた。
死者の眼差しと、容赦のない叱責の声・・・。
［見るな！」
誰か特定の人物に叫んでいるわけではなかった。ディビッドは自分の状態を第三者が見れば、完全に狂人にしか見えないことを知っていた。幽霊たちは彼にしか見えなかったし、そのささやきは彼にしか聞こえなかった。
もちろん、それは彼を誰かが見ているというわけではなかった。生きている者はいなかったし、少なくとも人間ではありえなかった。もし誰かがいたとしても、彼は気にしなかっただろう。誰かが回りにいても、彼は幽霊たちに向かって叫んでいたに違いない。
彼のように長いこと生きてきた男にとって、もはや他人にどう思われるかということは何の意味ももたないことだった。ディビッドは何年のも間、惑星全体が注目する人間だったのだ。長い眼で見れば、自分がどう書かれ、どう話されるかということはどうでもよかったのだ。願わくは、と彼は思った。あの血筋の最後の者である彼がリーダーとなってオメガの奴隷だったソリタスを、解放し自由を与えたあの戦いの歴史が、ずっと人々に記憶されていてほしいものだ・・・。
それだけが彼の願いで、他のことは取るに足らないことだった。
かつて狂人と言われたこともあるし、狂人呼ばわりされることは問題ではなかった。耐えがたいのは、真っ黒な眼をした死者たちに見つめられながら生きることだ。ディビッドは戦争で

死んだ市民たちや兵士たちの亡霊から目をそらすことはできた。それはいつまでも記憶に残る悩ましい存在ではあったが、その幽霊の姿が消えるまではただ待っていればよかった。しかし彼が本当に愛した二人の亡霊の声を聞き、その視線を浴びるというのは・・・。

もはや耐えがたかった。

二人のことは良く覚えていた・・・その記憶は鮮やかで、長い長い年月が過ぎてもまるで薄れることを知らなかった。二人は驚くほど美しかった。妻のニカは大きな鴉のようなつやのある長い黒髪を持ち、繊細で柔らかなその身振りで、そのハート型の顔にはふっくらとした唇がついており、小柄な胸と妖精のような肉体を持っていた。娘のアミイは、彼の記憶の中では父親を信じ尊敬している八歳の娘であり、娘と仲違いする前の記憶のそれだった。

実際のところ、ディビッドは大人になったアミイをほとんど思い出せなかった。大人になった娘とは連絡を取り合ってなかったのだ。彼女は母親が死んでしまってから、彼に敵意を持つようになって遠ざかったのだった。そしてディビッドは、アミイがあの事件について自分を責めていることを知っていた。彼の娘は戦争が産んだ子供だった。そして最後に娘の命をうばったのも戦争だった。

戦争に負けて生き残った最後の将軍たちは、彼らの時代がとうとう終わることを知っていた。そして世界がディビッドの下でまとまろうとしていることもよくわかっていた。だがその事実が彼らを絶望的な復讐劇に駆り立てたのだった。ディビッドの娘を誘拐し、世界政府に対して、その領土を手放し、平和維持軍を撤退させるように要求してきたのだ。その不可能な要求を満たなさなければ、彼の娘が死ぬと通知してきたのだった。もしそんな要求を飲めば、また新しい戦争により何百万もの人間が死ぬことになるだろう。ディビッドに選択の余地はなかった。彼は懇願し、脅迫もしたが、結局のところテロリストたちの要求を飲むことはできなかったのだ。彼が人間のリーダーであるあいだは。

彼のえり抜きの精鋭部隊が娘を探し出す前に、彼女の頭部が送りつけられてきた。彼は娘のために涙し、犯人の魂を呪ったが、その死の責任は彼自身にもあったのだった。

母親がそうであったように、ディビッドはアミイが彼を必要としているときに、そばにいてやることができなかったのだ。

そして今、アミイもニカも彼を置いていってしまった。二人の理想的なイメージだけが時をさかのぼり、いまこうして世界と完璧と調和しているかのように戻ってきているのだった。妻と娘は彼自身が生み出した亡霊であることはよくわかっていたが、ときどき彼はその手で二人に触れることができるのではないかと思うときがあった。

しかしそれを試したことはなかった。彼はそうすることにより、何が起こるかを恐れていたのだ。おそらく彼は気が狂うだろう。現実への最後の細いつながりを失って、どこか向こうにある大いなる暗闇へと、足を踏み入れることになるだろう。そうするわけにはいかなかった。

それは、人間という種のためだった。

彼が知る限り、狂気はおそらく救いとなるはずだった。彼が正気にしがみついている理由は、彼がかつての仲間たちに対して負っているものの大きさだった。

それに、たかが亡霊に手を伸ばして何になるというのだろう？　それは本物の幽霊ですらなかったのだ。そんなものは存在しないだろうし、亡霊は単に彼が心の底から会いたいと願っている人間の、ばらばらになった欠片でしかなかった。そんなことをしてなんになるというのだ？

未来へと足を踏み出すために、ディビッドは過去を捨て去らねばならなかった。この船――棺桶の中に何年も何年も閉じ込められて過ごすのは仕方がないことともいえたが、彼が後ろに捨て去ってきたはずのものはやがて彼自信を呪うようになっていたのだった。

もし亡霊がここまで鬱陶しくなく、何度も何度も現れるのでなければよかったのに、と彼は思う。眠りの中だけに現れるのだったら、まだ耐えられたのだ。

先週のある日のことだ。船は目的地へと少しずつ進んでいたため、ようやく目的地である惑星が、壁のスクリーンの望遠鏡で小さな点として見える大きさになったのだった。その点の回りを取り囲む空虚な黒色よりも、ほんの少しだけ明るいその惑星を見て、彼は自分の旅がようやく終わりに、空間的な意味でいえば終わりに近づいていることを知ったのだった。

しかし旅の終わりまでかかる時間はまだまだあった。いわば彼は早く着きすぎたパーティの客のようなものだったのだ。つまり彼は人が集まってくるまで、そこで我慢強く待っていなければいけなかったのだ。人類はその惑星ルビカをまだ植民化しはじめたばかりだった。彼はその惑星の名前を、その恒星系に向けて何度かスキャン捜査をしたときに、偶然受信したラジオ放送チャンネルによって知った。それは無限のように感じられた時間の中で、彼が聞いた初めての人間の放送だった。もちろんその放送は彼が聞いたときにすでに何十年も昔のものではあったのだが。しかし彼は直感的に、どの惑星のことを言っているかすぐ理解したのだった。

時は満ち、星々は彼を正しく導いたのだ。目的地は彼の目の前にあった。

結局、まさにこの惑星ルビカこそが、人類が銀河系へと進出してゆくはるか昔から、ディビッドの究極の目的地だったのだ。

彼はその周波数を定期的にモニターしてきていたが、放送はほとんど行われていなかった。通信手段はもっと新しいものになっているのだろうと彼は気が付いた。すでに光速を越える旅行手段ができてから久しいようだったが、彼はいまだに千年も前の科学技術により作られた船に乗るほかなかったからだ。

ディビッドはため息をついた。最近彼はよくため息をついていた。それは感情を表に出すことができない彼の唯一の代替品だった。

自制と忍耐だ、と彼は思った。常に自制と忍耐を忘れるな。

心配することはほかにもたくさんあり、やるべきことはあまりに多く、時間はまったく足りなかった。感情的になっている暇は本当になかったのだ。

まだ時間はある。もっとも時間というものでさえ、非常に抽象的な概念のように思えてきていた。彼は今年がいつなのかわからなかった。なぜなら彼はそれを知るために必要なものを、地球を去るときに置いてきてしまったからだ。船内の時間の流れは外とは違ったし、もちろん地球やルビカで流れているものとも違った。時は相対的なものだった。そして時に関して言えば、ディビッドはどこにも属さない時間の空白の中に存在しており、彼はやがてそこから出てくることになるだろう。彼はそう願っていた。

実際のところ、彼の船はアインシュタインが予言したようなタイムマシーンであるといえた。彼の船はタイムカプセルであり、彼自身が過去から来た遺物であり、過去から現在の人類へと触れるための存在だった。そこから彼はまた旅立つだろう・・・何に向かって？　未来だろうか？

彼は現在を越えて、時空から解き放たれて、さらに先に行けるのだろうか？

彼はもう自分が言われたことをよく思い出せなかった。それが何を意味したのかも。彼と奇

妙な縁で結ばれている惑星ルビカと、その上で彼が果たすべき使命を除けば、すべてはぼんやりとあいまいで、いまの彼には理解できないものだらけだった。彼の肉体も、その生と死も、やがて科学というものによりねじまげられてしまうだろう。彼はやがて死ぬだろうが、それにもかかわらず生きつづけるだろう。

やがて、彼は永遠に生きることになろうだろうが、本当の意味で生きるということは二度とないだろう。

真実はやがて語られる。彼はいまそう考えるしかなかった。

ディビッドは頭を上げた。彼は柔らかく緩衝材が貼り付けられた床の隅に座っていたのだった。彼の頭上と目の前にはのぞき窓があった。青白い星々が、ゆっくりとそこを通り過ぎてゆく。彼が現状について思いをめぐらせている間に、何時間かが過ぎ去っていた。

なんという時間の無駄だろう。

彼は頭を振り、あたりを見回した。彼は一人ぼっちだった。幽霊たちは今はいなかった。しかし彼らは必ず戻ってくるだろう。

ディビッドは立ち上がり、堅くなった四肢を伸ばした。時々、彼は自分の年の重みを肩に感じることができた。さらにいまのようなときは、彼は自分が列にあまりにも並びすぎてしまった男のように思えるのだった。その列にならんで扉が開くのをずっと待っていたのだ。舞台への扉が開かれ、彼の役目を果たして劇が終わったら、家に帰れるとずっと思っていたのだ。

なぜあれほどたくさんの人間の中で、彼一人が選ばれここにこうしているのか理解することは難しかった。人間という種はどうしてこの銀河の反対側に来てしまったのだろう。すべてのものと人間が、この宇宙のこの地点に集まっているようだった。彼も、そして人類も誰一人としてその正体をしらないこの謎に満ちた惑星に。もちろん、すべての背後に存在するある力を持った存在は、明らかにその惑星のことを初めから知っていたのだろうが。

彼らは惑星ルビカをよく知っていたのだ。少なくとも、人間がルビカと名づけた惑星について、もう大昔から知っていたのだ。彼らはそこに秘められた秘密と、莫大な遺産についてよく知っていた。彼らはそのルビカが、人類の進化に決定的な意味をもつ戦争が起こる戦場になるのだということをあらかじめ知っていたのだ。すべてが終わるか、すべてが生まれるかの戦いだ。そしてディビッドは、戦争がどちらに転ぶのか決める役割を果たすことになるのだ。今後待ち受けている戦いで、彼が相手をすることになる存在が誰なのかもう気がついていた。時の彼方からやってきた人々。遥かに古く、狡猾でおそろしく年季を経た連中だ。やつらはさらにタフに、底なしに悪賢くなっていることだろう。

知らぬ間に、彼はため息を唇から吐き出していた。

ディビッドはかつての精神力と熱意を取り戻すことができたらいいのにと思った。戦うための意志と忍耐力。かつてディビッドが持っていた勝利への信念。ソリタスたちが奴隷であったあの頃、嫌々ながらも人類の救世主であり預言者でありつづけたあった頃の彼の力を。彼の楽観主義は昔は役にたったものだった。いまそれを取り戻すことが何よりも大事なことに思えた。いつかは取り戻せるだろうか。

今この瞬間は、何よりもディビッドはただ眠りたかった。

彼は船体と船体をつないでいるシャフトを泳ぐように進み、居住区へと向かった。重力から自由になれるシャフトの中の数秒間は、心地がよい楽しみだった。彼はそのままベッドに飛び込んだ。彼はただ疲れているだけではなく疲労しきっていたので、何か気を紛らわすものがほ

しかった。同じことをぐるぐると考えつづけるのを止め、ずっと願っている休息を手に入れるために。

ディビッドが頭上のパネルに手を触れると、縦に取り付けられたホログラフ画面に、画像がちらつきながら現れた。十万ほどの番組の選択肢があり、それはエンターテイメントや情報番組、何千年にもわたる芸術の歴史の番組などさまざまなものがあった。物語や歴史、伝説や迷信、古いものから新しいものまで。ほとんどの題材は、あの長い冬が終わってから、解放戦争がはじまるまでの間の歴史から取られていた。戦争の時代にはさほど娯楽的な芸術はなかったし、戦争が終わってから彼が地球を去るまでの時間は、主に社会を再構築するために使われていたからだ。

だがいくつかの物語は存在した。オメガの支配とメディアの抑圧がなくなった穴を埋めるようにして、語り部たちはソリタスの最初の歴史を語り始めたのだった。それは口承でしか語り継がれなかった、つぎはぎだらけの歴史ではあったが、いくつかの物語は繰り返し繰り返し、世代を超えて伝えられてきたものだった。

ディビッドはそういった物語を良く知っていた。彼の本当の母親はベッドサイドで物語を伝えることはできなかったし、エミール・マーリンもそういった話を自分の息子に伝えるつもりはなかっただろう。彼はそういった話をアミイに話して聞かせるときは、妻から聞いた話を元にして話した。ニカの母親がそうしたように。いくつかの物語は本当の史実に基づいていたのだろうが（少なくとも部分的には）、いくつかは作り話だったろう。だがそれを区別する方法はなかった。それに誰がそれを気にしただろうか？

ソリタスたちが <長い冬> と呼ぶ時代は、人類の歴史の中でもっとも暗い時代だった。だがその時代を生き抜いた世代から、オメガ時代のあと地球を再建築する人々の種がまかれたのだった。物語の種子はそのときにまかれ、時とともにその力を強く象徴的なものとなり、真実を越えたものとなっていったのだ。歴史かどうかはともかく、物語は人の心の中には炎が燃えていると語っていた。それは圧倒的な劣勢の中でもあがきつづけることができる魂についての話であり、生き延びそして名を成すための意志についての物語であった。

彼はその冬の時代の中で起きたフィクションを選んだ。彼はその話よく覚えていた。暖かく心地よい暖炉の火の前で、ニカとアミイにそれを話して聞かせたことをくっきりと覚えていた。映像が目の前で実体化し、荒涼とした白い平原が広がった。

そして物語は語られはじめた。ディビッド空想的な映像と音楽に包まれる。ディビッドの眼が閉じられ、彼が眠りに落ちるまで長いことはかからなかった。そして夢が始まった・・・。

「歴史とは物事がかくあったということを記すものであり、物語とは歴史がこうであったならということを記すものである」

――アルフレッド・アンダース

「物語には常に二つの側面がある」

――アイルランドの諺

第十章

アドリエンヌ、最初の物語

西暦2798年　地球

彼女は金髪と、よく日焼けした足、そして天使のような顔を持っていた。その名前はアドリエンヌといった。彼女は銀の湖のそばにある村に住んでいた。僕らが最初に出会ったとき、彼女は僕を殺そうとしたのだった。

僕の名前はヴィンセント。マーカスという兄弟と一緒に、家族のためにゴキブリを狩ることを生業としている。徒歩で遠くまで旅をし、砂漠の平原を越えた海岸沿いに位置する人気のない町まで出かけて、ゴキブリを罠にかけて捕まえるんだ。僕らの旅はだいたいにおいて長く、時には数ヶ月にも及ぶときもあったが、もしゴキブリを見つけられなかったら、僕らの家族全体が飢えることになるのだ。運がよいときは、過去の遺跡の中で何百匹も見つけることもできたが、運が悪いときには一匹も見つからなかった。近年は、運が悪いほうが多かった。

マーカスは僕の弟で、三歳年下だった。僕には二十七人の兄弟たちがおり、十五人の姉妹がいたが、マーカスだけが血のつながった兄弟だった。血のつながったエリーザという名前の妹もいたのだが、去年のちょうどこの月に黄熱病で死んでしまったのだ。エリーザは少しずつやせ衰えていき、僕が長い旅から帰ってきたときには、街の丘にある新しい墓石の下に埋まっていた。女の子が死ぬとき、僕らは将来のことをいつも恐れた。東には人口を増やしつつある部族がおり、僕らは毎年少しずつ数を減らしていた。年寄りたちは僕らがやがて移動せざるを得なくなるかもしれないと言っていたが、僕らはここで長いこと暮らしていたという単純な理由から、ここから動きたくなかった。物心ついたときから、ここは僕らの故郷だったのだ。

アドリエンヌは水集め女だった。汚染されていない水を求めて地面を掘り返す男たちと一緒に、彼女は仕事をしていたのだ。彼女の体はやせていて軽く、男たちは深く掘った井戸のような穴の底に彼女の体を下ろして、水を含んだ土壌を見てもらうのだった。彼女は泉を見つけることにかけてはとても上手で、部族の者たちは彼女には魔力があると信じていた。彼女が属していたその部族は、僕らが取引をしたことがあるどの部族よりも繁栄しており、満月のたびにその数を増やしているほぼ唯一の部族だった。年はもう十七歳だったが、アドリエンヌはまだ子供を一度も産んだことがなかった。そして働きつづけることができる限りは、子供を産まないだろう。なぜなら子を産むことにより、彼女の水を見つける才能が消えうせてしまうかもしれないからだった。彼女のその能力は、自らが女であるということよりも価値あるものだったのだ。

僕らが出会った日、僕は西から帰還する途中だったが、行路が少し南に逸れすぎてしまっていた。そのため僕は銀の湖の反対側にある岸辺に足を踏み込んでしまった。そこでは僕の部族の人間は、物々交換をするときと、部族間の交渉を実施するとき以外は歓迎されていなかったのだ。マーカスは僕より一日先に出発しており、僕は彼に追いつこうとして別の山道を選んでしまい、その結果窮地に陥っていたのだった。僕が自分の位置に気がついたとき、すでに戻る

には遅すぎた。そうすると一週間は余分に旅をすることになってしまい、飲み水がなくなってしまう危険があった。いまのルートで行くと湖の周りを歩いてゆくことになり、当初の計画より一日オーバーするだけで家族のもとへと帰ることができる。だから僕はそのまま進んだ。ただ目立たないように注意を払い、昼間よりは夜に移動することにした。

ある朝、彼女に出会ったのは偶然だった。彼女は一人で、井戸を掘るための地点を探していたのだった。そして僕のほうが先に彼女に気がついた。それはよく晴れた朝で、空はまぶしく、ターコイズ色に光っていた。ここ数週間ずっと吹雪いていたせいで、進むのは大変だった。そのため、彼女に気がついたとき、僕らの距離はすでに二十・三十メートルしかなかった。彼女は分厚い毛皮を身にまとっており、僕は最初彼女を殺してそのコートを奪おうかと思ったぐらいだった。それは家族にとって大きなお土産になるだろうからだ。すると彼女は振り返って僕の目を見た。その眼は真緑で、マーカスが胸にしまっている写真に映っている草のような色だった。その眼に瞬間浮かんだのは怒りだった。僕は逃げ出すために体を引き締めた。彼女が助けをもとめて叫びだすかもしれないし、近くに彼女の部族の者がいるかどうかよくわからなかったからだ。しかし彼女は叫ばなかった。ただその怒ったような眼差しで僕をずっと見ていたのだった。注意深く、僕は手を挨拶のために上げた。僕はもう殺意を抱いてはいなかった。黒髪と茶色の瞳を持った、背が低い僕の部族の女らの中には、こんな美しい女はいなかった。僕は心の中で、すぐにこの女に子供を産ませることを考えていた。

すると突然、女はパチンコをコートの中から取り出すと、僕にねらいをつけた。僕も武器を持ってはいたが、彼女が撃つ前にそれを抜くことはできないだろう。それに、彼女の腕が確かなもので、石ころ一発で僕を殺せるであろうことは理解できた。なぜか、僕はこの女が前よりも欲しくなった。あと数秒で僕を殺そうとしているかどうかは関係なかった。僕は口を開こうとした。

「やめてくれ！　僕の名前はヴィンセントだ。銀の湖の向こうのテントで住んでいる部族の者だ！」

彼女はパチンコを下ろさなかったが、打ち出しもしなかった。その眼は何かを聞きたそうだったが、口は閉ざしたままだった。

「山の向こうから来たんだ」僕は注意深く西の方角の地平線の青い縁を指差した。「冬の嵐のせいで、道を間違った。それでこの湖の反対側に来てしまった。君の部族に危害を与えるつもりはない。名前はヴィンセントだ」と繰り返した。「君の名前は？」

彼女は石を打ち出した。

その後数日間たってから、僕は彼女がわざと狙いをはずしたことに気がついた。だがその当時は、僕は自分が生き残ったのは、幸運だったからだと思っていた。その小さな石は左のこめかみに当たり、そのまま僕は地面に倒れた。すべてが真っ黒になり、ブーンという大きな音がしたが、それもやがて薄れていった。僕が数時間後、暗いテントの中で目覚めたとき、覚えていたのはそこまでだった。

「起きたわ」女性の声だったが、どうやらさきほど出合った女ではないようだった。僕は頭を動かしてそちらを見た。

「いったいわれらの土地で何をしていたのだ？」僕は背の高い男と向き合っていた。男の名は確かトム・フィンといって、かつて何度か僕の部族のテントを訪れたこともある老人だった。

彼の後ろには老婆がおり、僕のほうを心配そうにちらりと見ると、外へ立ち去っていった。
「道を間違えた」僕は説明した。「そして湖のこの側に来てしまった。それについては謝罪するが、道を戻って一週間を無駄にしたくなかった。見つかることなく通りすぎるつもりだった」
「見つかったわけだ」トム・フィンは言った。「われらはこの土地に侵入者が入ることを好まない。殺されていたかもしれないのだ、生きていることを幸運の星々に感謝するがいい」彼は一呼吸おいた。「だが、ここに来たことをおまえは後悔することになるかもしれない。おまえの処遇について、これから話し合うことになる」
　僕は言った。「トム・フィン。僕とあなたの部族は戦争をしているわけじゃない。なぜ行かせてくれない？　行かせてくれるのなら、数日でここを出て行く」
　トム・フィンは頭を振った。その表情は陰気だった。「十八日前のことだ」彼は話しはじめた。「われらの部族の者らが、冷たい河が湖へと流れ込む取引所で、おまえの部族の者らと会った。食物と工具を物々交換するためだ。私はそこにいなかった。妻が身重で、いつ子供が生まれるかわからなかったからだ」彼は言葉を止めて、ポケットを探ってパイプを取り出し火をつけた。その間ずっと僕をじっと見つめていた。彼が続けたとき、その声は重々しかった。僕の背中に冷たいものが走った。「われらの仲間たちは帰らなかった。何が起こったのかわからない。しかし噂は流れている。ほとんどの者は・・・おまえの部族のものが欲深くなり、取引を放棄し、殺人を犯したと思っている」
　僕は背を伸ばして叫んだ。「僕の部族の名誉を汚すのか！」
　来訪者は煙を口から吐き出して肩をすくめた。「そうかもしれんが、何が起こったのかはっきりするまでは、ここにいてもらう。囚人として。このテントを出たら、見張りのものがおまえを殺すだろう」彼は立ち上がり、テントを出る前に最後の警告をした。「もしおまえの家族が私の部族に対して許されざる侮辱を働いたことが明らかになった場合は、捕虜としての取り扱いに則り、部族間で協議する前におまえを絞首刑にする」

　僕は次の二日間を一人ですごした。食事のときだけ人が来たが、誰もしゃべりかけようとはしなかった。外で何が起こっているのかまったくわからなかったし、自分と家族にこれから起こることが心配だった。
　三日目に朝早く起きると、テントの外で声が聞こえた。
「ここにいるのか？」その声には聞き覚えがあった。しかしこの状態ではよくわからなかった。
「入っては駄目だ」それは外にいた見張りの声だった。
「おまえの仲間のトム・フィンから許可はもらっている。そこをどけ！」
　ぼんやりと照らされたテントに誰かが入ってきた。僕は外の明るさに眼を細めて、見覚えのあるその姿を見た。
「ヴィンセント！　ヴィンセント、大丈夫か？」
　それはマーカスだった！　その後ろからもう一人入ってきた。明るさに慣れてきた目で見ると、それはもう一人の僕の仲間であるジョン・プックだった。
「マーカス！」僕は叫んでいた。「ジョン・プック！　君らを見て安心したよ！」
　僕は血のつながった弟を抱きしめ、友人の手を握り締めた。そして後ろに座り、二人にもそうするように促す。
「なにがあったんだ？」僕は聞いた。「ここに閉じ込められてから、ほとんど何も聞いていな

いんだ。しかし奴らは僕らが戦争になるかもしれないと言っていた。君らがここにいるということは、そうではないということかい？」
「同じことが起こったんだ」ジョン・プックが答えた。「俺たちの部族の商人も河での取引のあと、姿を消した。彼らが殺されたのかもしれないと心配していた」彼は言葉を切った。「どうやら不安は的中したようだが、犯人はどうも最初に疑った相手ではなかったようだ」
　マーカスが割り込んだ。「家に着いたら、テントの人間はみな心配していた。五人の男と三人の女が一週間前出発してから、まだ戻っていなかった。戦争になるかもしれなかった。槍やパチンコが準備されていたし、しかも兄さんが戻らないから、兄さんもやられたのかと思っていた」
「俺たちは敵に勝てないだろうことを知っていた」ジョン・プックは続けた。「何しろ敵の数は多く、食料も向こうのほうが多い。だが、俺たちは攻撃を受けているというのに、黙っていることもできなかった。だからこうして南にきた。湖を越えてな」
「湖を越えたって？」僕は驚いていった。「誰もそんなことやったことがない！」
　マーカスはジョン・プックに誇らしげな視線を投げてから言った。「うまくいったよ。三度ほど、氷山に押しつぶされそうになったけどね。だけど何とかやりとげた。この反対岸に昨晩たどり着いた。そしてそのままテントのひとつに忍び寄って、調べようとしたんだ。そこでトム・フィンが自分の心配事を話しているのを聞き、彼らも自分たちの商人を失ったことを知った。家族を失い、戦争をしかけようとしていたのは彼らではなかったというわけだ」
「俺たちは姿を現した」ジョン・プックは言った。「そしてトム・フィンと話した。俺たちは東へと旅することで合意した。二つの部族から人を集めて、商人たちの取引所まで一緒に行き、そこで何が起こったか確かめるんだ」
「そこで兄さんが捕らえられていると聞いたんだ！」とマーカスが言った。「いったいこんな南で何をしてたんだい、ヴィンセント？」
「迷ったんだ」答えはしたが、声は小さくなった。
「なんだって？」ジョン・プックがからかった。「偉大なる冒険家のヴィンセントが、迷子になったって？」彼は笑った。「さて、同志よ、そろそろ行こうじゃないか！　東の河への旅に加わる元気はまだあるだろう」
　外ではたくさんの人が集まっており、そこには旅の支度を整えた三人もいた。トム・フィンともう一人の目だって屈強そうな男、そして三日前僕を打ち倒したアドリエンヌたちがそうだった。彼ら三人とともに、昼になる前に取引所まで出発することになった。
　トム・フィンは部族の者たちに向かって話した。「北より来た友人たちと戦う必要がなくなったことは、まことに喜ばしい！　しかし我々の土地に対する新しい脅威が迫っていることは不安である。それは無差別に人を殺している。ゆえに我々は東に出向き、その脅威の正体を確かめねばならない。もし可能ならば、その脅威を殲滅するだろう。おまえたちの祈りが、我らとともにあるように」
　そして僕たちは出発した。

　最初の一日は、僕はあのアドリエンヌという名前の女の子と何度か話そうとした。その名前はトム・フィンに教えてもらったのだが、彼女はよく仲間たちから距離をおいて、何かを探しているように見えた。三人目の仲間であり彼女の友達であるウィガンドから、なぜ彼女がこの

メンバーに加わったのか教えてもらった。最初の理由は、アドリエンヌは魔法によって守られていると思われていたからで、この旅に幸運をもたらすかもしれないというものだった。二番目の理由は、彼女の血のつながった母親と兄弟たちは商人で、行方不明になった者たちというのはまさにその家族だということだ。三番目の理由は、どうやら僕が一緒に行くことを知ったからだということだったが、ウィガンドは詳細を教えてくれなかった。彼には知らされていなかったのかもしれないが、直感的に僕は何かが隠されていると思った。

二日目の早朝、放尿するために起きた僕は、アドリエンヌが夜の見張りの最後の仕事をしているところに出くわした。彼女は警戒していたが、その目は疲れていた。僕は代わりに見張りをするから少し眠ったらどうかと提案したが、拒否された。僕はその隣に座ると、彼女がしゃべりだすのを待った。しばらく時間がたち、太陽が地平線から姿を見せ始めるころ、彼女はようやく僕を見て話し始めた。僕らにとって幸運なことに、この分ではしばらく良い天気が続きそうだった。

「あなた、私を殺そうとしたでしょう」

僕はしばらく無言でいたが、やがて答えた。「君が誰だか気が付くまでは、そうだったかもしれない」

「本当の私のことなんて何も知らないでしょう！」

「君の顔と眼を見て、殺す気がなくなったんだ」

「なぜ？」

「君の眼が緑で、髪が金色だったから。可愛かった」

「はっ、それしか考えてないんでしょ。私がほしいの？」

「もっとよく君のことが知りたいな」

彼女は黙りこんだ。巨大で、血のように赤い太陽が、せきたてられるような速度で上ってきていた。

「私はアドリエンヌよ」

彼女は僕を見た。

「なぜ僕を殺さなかったの？」

僕がそう言うと彼女は背を向けて、また長いことそうしてしゃべらなかった。「私、あなたが誰だか知ってたからよ」

「前に会ったことがあった？」僕は混乱していた。四日前に会うまでは、僕は彼女など見たこともなかった。

「夢の中で」彼女は答えた。「私は予知夢（トルードリーム）を見るのよ」

僕はショックを受けて立ち上がり、あとずさった。予知夢は突然変異の産物だった。それは呪いであり、同時に祝福の証だった。予知夢を見る者に会ったのは初めてだったが、遠くの部族の話を聞いたことはあった。それは炎の周りでささやかれるような話だったのだ。予知夢を見る者は大きな力を持ち、危険な存在だった。なぜなら彼らは心を読むことができるからだった。考えていることはすべて知られてしまい、願いや希望を奪ってゆく者とされていた。

「座って」彼女はそう命令した。僕は雷に打たれたようにそれに従い、彼女は話を続けた。「私は自分に関わることと、水についてしか夢を見ないわ。私はこの話を誰にもしたことがないし、他の人に言わないで秘密にするって約束して！」僕が約束すると、彼女は落ち着いたようだっ

た。「こういう夢はそんなに見ないんだけれど、あなたのことはよく覚えてるわ。まるで真昼に起こったことみたいにくっくりとね。私はあなたがその日、やって来ることを知っていたわ。だから驚かなかった。だけどあなたが私を殺そうとするかどうかまではわからなかった・・・」彼女の声は小さくなった。彼女は仲間たちが集まっている姿に眼をやった。「それと、あなたが私を殺さなければ、私たちは恋人同士になるってことも知ってるわ。私はどちらをより恐れているのかわからないわ。死か、それともあなたの妻になるか」

僕は言葉を失ってしまった。だから他の者たちが目覚め、食事を取って出発したあとも、アドリエンヌと僕はその日一度も喋らなかった。

次の日の正午を少し過ぎたころ、僕らは取引所のすぐ西にある丘の頂上にたどりついた。ウィガンドと僕は尾根の縁に隠れるようにして、広場のほうを偵察した。眼下の低地には、商人たちが交渉をするために使う小屋以外には何も見えなかった。聞こえるのは、河に浮かぶ氷がたてる古い歯車のような音だけだった。空は曇っていたが、視界はよかった。だが僕らは商人たちの姿をどこにも見つけることができなかった。生きているのかどうか、それすらもわからない。もし商人たちがこの取引所で出会ったのだとしたら、皆ここを去ってしまったようだった。

僕らは残りの仲間に合図をして、斜面を取引所に向かって降り始めた。注意しなければいけなかった。なぜなら僕らは普通の道の上を歩いているわけではなく、積もった雪の下に硬い地面があるかどうかはわからなかったからだ。マーカスは雪の下に隠れていた裂け目に落ちそうになったが何とか縁にしがみついて、トム・フィンに引っぱりあげてもらっていた。それ以外は特に事件はなかった。僕はなるべくアドリエンヌのそばにいようとしていた。またその夢の話をしてもらえるかと思ったのだが、彼女はぼんやりとしたように遠くを歩いていた。僕は前日の朝彼女に言われたことをずっと考えていた。死ぬか僕の恋人になるかというやつだ。理解できなかったが、予知夢を見る者を疑うほど僕は馬鹿ではない。

取引所から数百メートル離れたところで、ジョン・フィンが警告するように手を上げて、皆に止まるように指示した。僕らは止まり、彼が空気の匂いを嗅ぐのを待った。彼は僕らに向き直るとこう言った。

「血だ」

僕は立ったまま凍りつくような冷たい空気を鼻から吸い込んだ。僕にもその臭いはわかった。風は東から吹き始めており、ちょうど小屋の方角から吹いていたのだ。銅のようなその血の臭いは間違いようがなかった。どこか近くに、血だらけの現場があるはずだった。

トム・フィンとジョン・プックと僕は小屋に近づき、その他は雪に隠れて待つことになった。悪臭は少しずつ強くなり、近づくにつれて腐臭になっていった。しかしまだ戦いの現場は見えなかった。僕は小屋の外側の壁に、丸い焼け焦げたような後がいくつかついているのに気がつき、二人にそれを指差して見せた。ただの炎による破壊であればそれはぼやけた形になるだろうが、その焼け焦げた跡はくっきりとしてまるで何かの武器によるもののようだった。しかしそんな武器を持っている者などいなかったし、そんな破壊力を持った武器など存在しないはずだった。

小屋に着いても、僕らの部族たちの姿は見えなかった。まだ何一つ聞こえなかったし、何も残されていないようだった。だが悪臭は残っていた。鉄臭い、むかつく血の臭いだ。何がそんな臭いを出しているのかはわからないが、それは小屋の中にあるはずだった。ためらっていて

も仕方がない。僕らは中に足を踏み入れた。

あたりは血だらけだった。床は血で染まっており、壁は血しぶきで汚れていた。僕は小屋の中をちらりと見ただけで、胃が裏返るのを感じた。僕はよろよろと外に出て吐いた。ジョン・プックもそのあとに続き、朝食を真っ白な雪の上に吐き出していた。トム・フィンだけが中にとどまっていたが、彼の息も荒く気分が悪そうだった。

それはおそらくほんの数瞬のことだったのだろうが、トム・フィンが小屋から出てくるまでずいぶんと長い時間がたったように思えた。彼は沈痛な表情で、その顔は真っ青だった。彼は残りの者に合図を送ると、その惨劇の場で見たものについて重々しく話し始めた。

「商人たちは攻撃を受けたようだ」彼は話し始めた。「それは明らかだが、いったい誰が攻撃したのかについてはまだわからない」彼は外側の壁についた黒い円形の跡を指差した。「この模様が小屋の中にもたくさんついていて、その周りに血がこびりついている。私はこれが強力な武器の残した跡だと思うが、こんな武器は見たことも聞いたこともない。私たちの土地に住むどの部族のものでもないようだ。もしどこかの部族のものだとしたら、遥か遠くに住む部族のものに違いない。しかし私は、これは狩人である部族の者の仕業ではないと思う」彼は小屋の周りの雪を指し示した。「ここ数日間、かなりたくさんの雪が降ったせいで足跡がすべて消えてしまった。だがこの連中が部族の者でないならば、その足跡を見つけることができるはずだ。こんな強力な武器を持った人間は、自分たちの痕跡を消すことに対してさして注意を払わないはずだ」

「死体は？」アドリエンヌが冷たい声で聞いた。「誰だったの？」

トム・フィンは頭を振った。「誰の死体もない。全員が殺されたのか、それとも何人かは生き延びたのか、私にはわからない。だが死体はないし、埋められた痕跡もない。おそらくこの連中は死体を持っていったのだろう・・・なぜそんなことをしたのか、私にはわからない」

「それなら今すぐ行かなければ！」アドリエンヌが叫んだ。「もう一瞬も無駄にできないわ！」

「跡をつけるというのか？」ジョン・プックは言った。「それが賢いやり方だろうか？　トム・フィン、あんたがほのめかした奴らの力――たとえその半分の強さの連中を相手にしていたとしても、俺はそいつらと槍やパチンコで相手をする気にはなれないね」

「誰が戦うといったのだ？」トム・フィンは答えた。「私は後をつけるといっただけで、奴らの正体を知りたいと言ったのだ。もし我々の部族の者たちが捕らえられているなら、彼らを助け出す計画を立てられるかもしれない。よく知らない敵と戦うつもりはない、ジョン・プック。私は頑固だが、馬鹿ではないつもりだ」

「わかっている、トム・フィン」ジョン・プックが答えた。「だが後をつけるだけでもかなり危険を伴うだろう。こんな武器を持っている者が相手ではな・・・」

アドリエンヌは小屋に近づいて、入り口から中を凝視した。その血の悪臭に何を思ったのか、彼女は一切表情に出さなかった。彼女が振り返ったとき、その顔は強張っており、槍を握り締めていたその拳は白くなっていた。

「誰が私たちの部族の者を殺したにせよ」彼女は言った。「私たちの家族を殺した者たちに復讐する義務ができたわ。ジョン・プック、あなたはこの犯罪を犯した者たちに裁きを与えるチャンスを逃して、それを果たさなかったことを知りながら生きてゆけるつもりなの？　私たちの部族の者が奴隷として捕らえられているかもしれないというのに？」

ジョン・プックは視線を下げ、アドリエンヌはわかったというように頷いた。

「よくわかったわ。トム・フィン、道を調べて。暗くなって後をつけることが困難になる前に、何か痕跡がないかどうか調べましょう！」
「全員がそれに同意してからだ」トム・フィンは賢い男だった。彼は旅の真中で仲間を分断するようなことはしたくなかったし、仲間に恥をかかせたくなかったのだ。
　名誉を守られたジョン・プックは同意し、それにならってマーカスとウィガンド、そして僕も同意した。僕らはすぐさまこの連中が運んでいるはずの血まみれの荷物の痕跡を探しにかかった。トム・フィンは正しかった。南東へと向かっている明らかな痕跡を見つけるまでさほど時間はかからなかった。新しい雪がその上に降ってはいたが、古い雪の上にはたくさんの足跡が残っていた。血の跡と一緒に、奇妙な跡があった。それは平行な二本の線であり、まるで幅広のスキーに乗った荷車のような感じだった。
　トム・フィンは跡を詳しく調べた。「こんな跡は見たことがない」彼は言った。「しかし、私は古い写真を見たことがある。雪の上をこういった跡をつけて走ることができた機械の乗り物の写真だ」彼は立ち上がって東を見た。「もしこの連中が火を打ち出す武器を持っているのなら、そういった車を持っていてもおかしくはない。その場合、彼らははるか遠くまで行ってしまっていることだろう。やつらに追いつける可能性は、ほとんどゼロだ」アドリエンヌが抗議しようと口を開きかけ、彼は続けた。「だが跡を追ってみよう。我々の想像どおりならば、さほど遠くまで旅をしてきたわけではないはずだ。商人たちを攻撃した理由は、自分たちの領土を守るためか、もしくは秘密を守るためだろうからだ」
　僕らはまたそれに同意した。僕はこれまで恐怖を覚えたことはなかったが、今回は別だった。この連中は、僕がこれまで出会ったどんな奴らとも異なっていた。この連中の技術は僕らのものを遥かに上回っていた。だが、僕はアドリエンヌと一緒にいるために、その恐怖に負けたくなかった。すでにそれは僕の命よりも大事なことになりつつあった。アドリエンヌと一緒にいること。そして彼女を守ることが。
　僕らはすぐに出発したが、空はすでに暗く、灰色になり始めていた。だが雪は降っていなかったため、痕跡はほぼそのまま残っておりそれを追ってゆくのは容易だった。奴らはまっすぐに進み、丘からは一定の距離を保ちながら、川沿いの谷間をずっと東に向かって、南の古い精製所へと向かっていた。そこまではだいたい一日ほどでつくはずだった。
　その晩僕らは川べりの土手でキャンプをすることになった。僕らは焚き火を点し、僕が西から持ってきたゴキブリのうちの何匹かを火で炙った。最初の見張には僕が立った。やがて皆が眠りに落ちる。しばらくして、月が薄い雲の幕の向こうから姿を見せたころ、アドリエンヌが起きてきた。彼女は黙って僕の隣に座ると、やがて僕の腕に手を触れた。
「もうすこしあなたのことが聞きたいわ」彼女は言った。「そうしないようにしてるんだけど、いつもあなたのことを考えてる。嫌いになろうとしてるんだけど、できないわ」
　僕は自分のことを話した。マーカスとの旅や、一人での旅での出来事や、家のテントに住む両親や、血のつながった妹のことを。彼女は何も言わずに黙ってそれを聞きながら、時折ちらりを僕を見た。僕の目ではなく、僕の口元を。まるでそれは読唇術のようだった。だがほとんどの場合は下を向いて、手のひらを組んでじっとしていた。話し終わっても、彼女は黙ったままだった。だが彼女は地面よりも空を見ているほうがよいようだった。突然、彼女は息を呑んで僕の腕を強くつかんだ。
「見て！」彼女は叫んだ。

僕が見上げると、頭上の空は大きく晴れ上がり、そこには何千もの星々が輝いていた。その空の端から端まで、半透明の赤いきらめきが続いていた。それはまるで風が透明な赤い布を空に広げたようだった。それは本当に綺麗で、そこまでのものを見たことは一度もなかった。その時僕は、これからすべてがうまくいくと感じたのだ。僕らは生き延び、大地をかつてそうであったような姿に戻すのだと。穏やかで綺麗な、美しい大地を。すべての部族の者たちが安心して暮らせる土地を取り戻すのだと。それは僕の生きている間は無理かもしれない。だけど、いつかはできるはずだ。僕はアドリエンヌの手を取って、そう思ったことを告げた。彼女は微笑んで僕にキスをした。

マーカスが見張りの交代に来たとき、僕はアドリエンヌの寝所まで言ってそこで愛しあった。彼女は子供ができるわ、と言った。彼女はそう夢見たのだ。それは現実になるだろう。

僕らは奴らを次の日に見つけた。それは午後も遅くなったころだった。かつて精製所から、河へと汚染水を流し込んでいた巨大な鉄のパイプは完全に壊れていたが、その大きさは大人一人が中を立って歩けるほどだった。僕らは精製所へとそうして見られずに進むことができた。

僕らが跡をつけてきたその乗り物は、暗く巨大な建物の外に、見張りも立てずに置かれていた。乗り物は僕が想像していたよりも大きく、後ろの部分は前の部分と一本の太いケーブルでつながれていた。前部は家のようだったが、堅い外殻と窓がついており、また後部は剥き出しだったが、空っぽだった。後部の床部分はきらきらと輝く素材でできており、その下に何かが隠されていた。僕の内臓が裏返るようだった。やつらが僕らの家族の死体を、遠く離れたここまで運んできたやり方がわかった。

僕らはパイプの中で日が暮れるまで待ったが、誰も戻ってはこなかった。暗くなってから、トム・フィンとアドリエンヌ、そして僕が車両に近づくことになり、ジョン・プックとマーカス、そしてウィガンドの三人は見張りをもとの場所で続けた。車両は汚い黄色に塗られており、氷のように冷たかった。その表面はきらきらとした鉄でできており、まったく錆付いておらず僕が見たどんなものよりも強靭なようだった。車両の入り口には扉がついていたが、それはロックされていた。僕は車両に上って窓から中を見てみた。中にはボタンやレバー、そして操縦桿が並んでいた。前面の窓の下には小さな赤や緑、そして黄色いランプがともっており、それは天井にも取り付けられていた。窓は部分的に霜がかかっていたが、触ると温かく、その中から熱が出てきているようだったが、どうやってそんなことをしているのか僕にはわからなかった。

突然、精製所の上のほうから声が聞こえた。僕は体を隠し、トム・フィンとアドリエンヌも伏せる。そのすぐ跡に黄色い棒状の照明が車を舐めていった。二人の男の声がして、何か言い合っているようだった。

「何もねえよ、ミッキー。幻覚だろう。というか、いったい誰がこんな天気でここまで来るっていうんだ？　凍えちまうぜ！」

その声はひどくなまっておりわかりにくかった。北東部族のそれのようにも思えたが、より粗悪で、かつ僕のまったく知らない単語をよく使っていた。

「ちゃんと見たんだって・・・まあチェックしてみよう。あの不気味な『地べた虫（グラウンドクローラー）』どもが何をしたかわからんからな。奴らは奇妙なことをするし、これ以上目撃者を増やすわけにはい

かない。またダラスをやりたくないだろう？」
「思い出させるなよ！　あの日は死体を焼きすぎたし、まったくひどい一日だった。奴らはずっと歯向かってきていたしな。あの地べた虫ども！　放射線はあいつらを本当に怪物に変えたもんだ」その男は笑った。それは野卑で下品な笑いかたで、僕は突然こいつらのことが怖くなった。こいつらはいったいどこから来たのだろう？　彼らの言葉はまるで外国語のようで、僕にはほとんどわからなかった。「ダラス」？　「地べた虫」とは何だろう？
「ブラスターを持って行こう。ドニーに連絡して、外を調べに行くと伝えてくれ。俺たちが勝手にいなくなっていたことを知ったら激怒するぞ」
「わかったわかった。ちょっと待ってくれ」
　鉄の階段を下りてくる二人の人間の足音がした。僕は顔を上げた。精製所の影の中から、二つの暗い姿が光の棒を持って出てくるのがわかる。彼らは立ち止まり、手にもっていた小さな箱に向かって話し掛けた。
「ドニー、聞こえるか？　アルだ。どうも奇妙なものを見た気がするんだ・・・いや、そうじゃない。たぶん何でもないとは思うが。そうだ。ブラスターがあるから、地べた虫どもがいれば・・・そうだ。すぐ後でな」
　二人の男は歩きながら、光の棒を車の表面に走らせた。僕は伏せて、すぐ隣で横になっているトム・フィンとアドリエンヌにささやいた。
「動かないと！　こっちに来るぞ！」
「急げ」トム・フィンがささやく。「こっちだ」
　彼は腹ばいのまま精製所から離れつつ、数メートル向こうの溝へと進み始めた。アドリエンヌがその後に続く。僕はしんがりで、その痕跡を消しながら進んだ。運が良かったのか、二人の男の動きは遅く、そのほとんどの時間を冗談を言うことに費やしているようだった。また何も考えずに光の棒を振り回しているだけだった。どうやら、彼らは隠密行動という行為をしたことがなく、自然の中で生活したこともないようだった。
　僕らは溝にたどり着き、雪の中に隠れた。この地点から車両がはっきりと見え、その異邦人たちの声もよく聞こえた。だが見られることはない有利な地点だった。
　やつらは車までたどり着き、簡単なチェックをしているようだった。彼らは自分たちが歩いてきた地面を見ることすらしなかったので、僕らが跡を仮に残していたにしろ気が付かなかったに違いない。僕はいくら奴らが部族の技術力を遥かに超えた武器を持っていたにしろ、恐れるに足りない連中ではないかと思った。奴らには思慮深さがなく、馬鹿で下品だった。だが僕はまだ恐れてもいた。なぜなら僕は奴らがどこから来たのか、なぜいままで一度も彼らに会うことがなかったのか、話題にすら上らなかったのか、その理由がまったくわからなかったからだ。そしてダラスという名前が頭にこびりついていた。その場所で何が起こったにせよ、彼らはそういったことをもう一度起こしたくないといっていたのだ。それはいったいなんだろう？それは愉快な考えではなかった。
「問題なさそうだが」最初の男が言った。僕が隠れている場所からだと、その男が太っており、その肌は真っ白なことが見て取れた。あまり健康そうには見えない。
「積荷を調べてみよう」もう一人の、背が高くやせている男が言った。そっちは運動ができそうなタイプに見える。その肌はよく日焼けしており、最初の男よりはましな外見だったが、僕は二人とも大した男ではありえないと思った。二人とも経験を積んだ戦士にはとても見えなか

ったからだ。
　二人は車の後部まで行くと、あのきらきらしたカバーを持ち上げた。そこに照明を当てて下に詰まっていたものに光が当たる。隣でアドリエンヌが息を呑むのが聞こえた。中には想像した通りの死体がつまっており、ばらばらになった血だらけの四肢が黒ずんでいた。死体はすべてかちこちに凍りついており、お互いにくっつきあっていた。視線を逸らせば吐いてしまいそうだった。僕はアドリエンヌを横目で見た。彼女の目は火のように燃えており、その口は音のない言葉を吐き出していた。その時僕は死者の中に、血のつながった母親と兄弟がいることを思い出した。僕は彼女の肩に手を置くと、強くつかんだ。首を振る僕を彼女がまっすぐに見つめる。
「うへ、気持ち悪い！」最初の男が言った。「殺した現場に置き去りにできればよかったのにな」
　アドリエンヌは怒りで震えだした。僕はその肩をまた強く抑えなければいけなかった。僕は彼女が怒りに任せて、隠れている場所から飛び出すのではないかと恐れたのだ。
「だめだろう。考えても見ろよ、ミッキー」もう一人が答えた。「地べた虫どもが疑問を持って調べ始めたりするとやっかいだ。団結したり、そういうアホなことをし始めるかもしれない。証拠はきれいに消しておくんだ。そもそも連中に出くわしたのは事故だったし、他に選択肢はなかった。証拠は残さないほうがいい。言ってることはわかるだろう」
「これを持って帰るのか？」
「そうだな。死体を燃やさないと。行こう、何も問題なかった」
　アドリエンヌは唸り声を上げた。二人目の男は振り返ると、僕らが潜んでいる場所に光の棒を向けた。皆すぐに伏せたが、奴らはその声を聞いたようだった。
「なんだいまのは？」
「ああ。聞いた。何か見たか？」
「待っててくれ」
　二人目の男はこちらに向かってきた。すぐ上までやってくるまで数秒もかからないだろう。僕はばねのように体をかがめて、見つからないことを願った。アドリエンヌをちゃんと抑えておかなかった僕のミスだった。
　溝にその男がたどりついたとき、アドリエンヌは飛び上がるとその喉を掴み、僕が声を出すことができる前に彼を切り裂いた。トム・フィンも立ち上がり、車の近くにいる男に向かって走り出していた。男は叫ぶと、腰に吊るしてあった長い棒をかまえて、それをトム・フィンに向けた。
　夜が燃え上がるように光った。
　トム・フィンは悲鳴も上げなかった。彼は消し炭のようになった頭とともに倒れた。くすぶる肉体から蒸気が立ち上る。僕は次に何が起こったのかよく覚えていない。がどうやら僕は立ち上がり、もう一人の男に向かって突進したようだった。僕の周りで炎が間欠泉のように暗闇を切り裂いていた。男にそのまま突っ込むと、銃が僕に向けられたが僕はそのまま体当たりした。他にも何人かのぼんやりとした影が見え隠れしていたようだった。敵ではなく僕の仲間の姿であればいいと願いながら、僕はそれを無視した。敵の体は鋼鉄の車両に叩きつけられ、男はうめき声を上げた。彼は武器を撃ったが、それは地面に当たっただけで、左足が焼けたがたいした怪我ではないのがわかった。僕は敵の頭を掴むと、そのまま力いっぱいひねった。大き

なごきりという音がして、男は死んだ。
　完全な沈黙があった。他の者も車にたどり着き、マーカスが言った。
「なんだこりゃ？」
　僕はかがみこんで死んだ男の手から棒を取り上げた。それはL字型をしており、曲がった部分に小さな握りがついていた。古い写真から想像するとこれは銃なのだろうが、これは弾丸を打ち出すのではなく、代わりに人間を瞬時に焼き尽くす炎を吐き出すのだった。トム・フィンはその犠牲になった。僕は死んだリーダーのほうを見た。アドリエンヌはその体の隣にしゃがみ込んで泣いていた。彼は地面に倒れる前に死んでおり、何が起こったのかさえわからなかっただろう。
　どこかからか小さな声がした。僕らは飛び上がった。その声は最初の男が持っていた小さな黒い箱から流れてきていた。
「アル、いったい何があったんだ？　ブラスターの放火音が聞こえたぞ！　大丈夫か？　応答せよ！」
「いますぐに行かないと！」マーカスが言った。「まだ仲間がいるんだ。奴らも武器を持っているに違いない！　ここは危険だ。もう戦うことはできない」
「その通りだ」ウィガンドが言った。「だがトム・フィンの体を持っていかないといけない。彼をここに残してはおけない。もし残せばやつらは俺たちの家族を見つけ出し、復讐にやってくるだろう」
「他の者はどうするのよ？」アドリエンヌが食ってかかる。「彼らを残してはおけないわ」
「行かなければ」ジョン・プックが答えた。「ちゃんと埋葬してやる時間はないし、連れて帰ることもできない」
「車はどうなの？　それを使ったらどう？」
「どうやって？」ウィガンドが言い返す。「アドリエンヌ、たとえ運転方法がわかっていて、中に入る方法があったとしても、どうやって車の跡を消すつもりだ？　こいつらは他にも車を確実に持っているだろうし、後を追ってくるはずだ。だめだ。すぐに、こっそりここを離れるんだ。見つかる前に！」
「来るんだ」僕は言った。「マーカス、トム・フィンを運ぶのを手伝ってくれ。ジョン・プック。アドリエンヌと一緒に、その死体を溝に投げ込んで雪で隠してくれ。ウィガンド、僕らの跡を消してくれ。あのパイプの中に戻って、河まで戻るんだ。急ごう！　ほとんど時間はないはずだ」
　皆僕の指示に黙って従ったが、アドリエンヌだけが死体にちらちらと目をやり続け、小さな声で何かをつぶやいていた。僕らが何とかパイプの中へと滑り込んだすぐあとに、精製所から音が聞こえて、階段から複数の男たちが車両へと来たのがわかった。僕らはパイプの中を早足で進み、川岸へと出たあと、痕跡を消しながら以前の道へと戻った。
　しばらくの間、二人の男の名前を叫ぶ声が聞こえていた。光の棒が頭上の雲と空を照らしつづけていた。そして沈黙が訪れ、僕らは逃げ出せたことがわかった。
　僕らはその晩ずっと歩きつづけた。トム・フィンの体は交代しながら運び、朝には前回のキャンプした場所にたどり着くことができた。ひとまずの安全を確保した僕らは食事を取り、短い睡眠を取った。そして太陽が真上に来たころ、また出発した。天候は少しずつ悪化しており、太陽は分厚い灰色の雲の向こうで鉛色のコインのように見えていた。僕は夕暮れまでに雪が降

るだろうと思った。

僕らはほとんど喋らなかった。口にしたのはあの連中のことだった。奴らが誰なのか、どこから来たのか、何が望みなのか、そして僕らの家族にとって脅威をもたらす者なのか。僕らはトム・フィンのことも、死んだ商人たちのことも喋らなかった。なぜなら家に帰れば、そのことを何度も何度も聞かれることになることを僕らはよく知っていたからだ。

二日目も遅くなったころ、僕らは野営地にようやくたどり着き、そこで別れることになった。マーカスとジョン・プック、そして僕は北の集落へと、そしてアドリエンヌとウィガンドは仲間のトム・フィンの死体を持って戻ることになった。僕は手伝おうかと提案したが、アドリエンヌはそれを拒否した。彼らの指導者の誇りを守るために、部族の伝統に従って二人だけで旅の最後の行程をこなすことになっているとのことだった。彼らは故郷でトム・フィンを埋葬するだろう。

別れの間際、僕はアドリエンヌと次にいつ会えるかと考えていた。だが、それはついにかなわなかった。僕はまた西へと旅立ち、ゴキブリを集めなければいけなかったし、僕が戻ったとき、アドリエンヌは娘を産み落とすと命を落としていたのだった。

彼女は僕の恋人になったが、僕は彼女を殺したも同然だった。彼女の予知夢は二つとも当たったことになる。彼女は誤解していたのだ。だが彼女の死の際、アドリエンヌは世界にアリッサを産み落としたのだ。多くの部族の指導者となる女性、母がそうであったように、予知夢（トルードリーム）を見ることができる女性を。彼女はやがて銀の湖と砂の平原の部族をすべてまとめあげ、山の上に偉大なる都市を建築することになるのだ。だがそれはずっと未来の話で、僕の最後の日々のことだった。だがその時は、僕らはお別れを言ってキスをして別れたのだった。軽い新雪が僕らの上に降り積もり始めており、世界を純白な布で覆いはじめていた。

僕はアドリエンヌと二度と会えなかったし、あのトム・フィンを殺した連中にも会えなかった。ダラスと呼ばれる場所で何があったのか知ることはもうないだろう。だが僕の心にはいつも恐れがあった。奴らがあの武器を携えてやってきて、僕らの家族を見つけ出してすることを恐れていた。僕がよく見た悪夢は、夜の暗がりから噴出してくる炎の棒に、アドリエンヌと僕が焼かれて灰になるものだった。

アドリエンヌとウィガンドと別れて、僕は最後にもう一度彼らを振り返った。二人はトム・フィンを間に持って運んでいた。その体はコートに包まれており、二人はそれを運びながら湖の南の丘を上って行った。やがて二人は降りしきる雪の中に飲み込まれていった。僕はその時の彼女の姿を忘れない。太陽の色をした髪の毛と、心と魂を飲み込もうとする悲しみにも負けない、誇らしげな姿を。アドリエンヌはいつも強かった。そしてその強さは僕らの娘に受け継がれた。僕はその強さがその子供に、またその子供に受け継がれてゆくことを信じていた。

僕は西へとゴキブリを狩るために旅を続けた。たくさんの人に会い、さまざまなものを見たが、アドリエンヌと一緒に見たものを越えるものには二度と出くわさなかった。

第十一章

エデン、二番目の物語

西暦2999年　地球

その年、世界が再度新たな千世紀に入ろうとしているということに気が付いている者はほとんどいなかったし、誰も気にしさえしなかった。

前回、それはちょうど千年前ほどのことになるのだが、すべての国々は新しい時代を空に打ち上げた花火で祝い、世界は地球の未来に対しての希望と明るい展望で満ち足りていたのだった。

今はそのどちらも存在しなかった。確かに存在していたものというのは、世界のあちこちにばらばらになって生き延びていた、原始的な部族たちの生き延びようとする本能ぐらいだった。この千年間、未来はどこにも存在しなかった。食料をあさることにほとんどの力を使っていた人間たちは、なぜ人間という種がここまで原始的な状態に退行してしまったのか、考えることすらできなかった。

だが、原始的なものではあったが、進化への足がかりは築かれつつあったのだった。遥か遠い昔に起こったものと同じく、それは緩慢ではあったが確実なものであった。長い冬はおそらく今後ずっと続くだろうが、いまようやく、たくさんの部族が集い、大きな町を作りつつあった。商業が営まれ、食料は以前よりもより多く、様々な種類のものが手に入るようになっていた。町には野菜があり、家畜がおり、清潔な飲料水があった。それは少なくともこの破壊し尽くされた惑星上で手に入る、最も綺麗な水であった。そして麦と牛乳すらあった。

その町以外の場所では物事はもちろんもっと困難だったが、少なくともこの町、この偉大なる <エデン> の町では、文明が復興しつつあった。それは痛々しいまでにゆっくりとした進歩であり、アミーナはしばしば疲れ果ててしまうのだった。

だが、それがエデンの女領主であることに対する永遠の重荷なのだった。

エデンの最初の女領主であったアリッサの一族に生まれるということは、少女にとって過酷な運命であった。アミーナの子供時代は誰からもうらやまれるようなものではなかった。生活のほぼすべての時間は、エデンの過去について、政治や経済について、地質学や地理、マナーや外交作法を学ぶことに費やされた。彼女は自分の母であるオーレアのことをほとんど見たこともなかったし、その父親にいたっては記憶の中のぼんやりとした影でしかなかった。彼は彼女が二歳の時に、東からきた部族の者に暗殺されたのだった。彼が百キロ離れた場所で殺されたとき、アミーナは泣き出し、何日も悲しんでいたという。アリッサの一族がみなそうであったように、彼女もまた共感者（エンパス）であった。それはかつて予知を夢見る能力（トルードリーム）と呼ばれたものであり、その才能は世代とともに少しずつ変化していったが、近い肉親の気持ちや心を感じる能力は消えうせることはなかったのだ。

アミーナがエデンの六番目の女領主になったとき、母は彼女を置いて旅に出てしまった。そ

れは父親の死よりももっと彼女を傷つけたのだった。母オーレアは巡礼の旅に出発しようとしており、アミーナが十八歳になったとき、オーレアはその地位を娘に譲ったのだった。その夜、祝いの席が終わったあと二人はお別れの言葉を交わした。アミーナの心は痛んでいたが、それを表に出さなかった。彼女はすでにエデンの女領主だったからだ。彼女は母親の両頬にキスをし、母がドアを出て、藁で覆われた荷車に乗って旅立って行くのを見送ったのだった。

アミーナは心の中で、母がどんどん遠ざかってゆくのを感じつづけていた。そしてある日、オーレアをどこにも感じることができなくなった。彼女が死んだのか生きているのか、アミーナにもわからなかった。この能力も万能ではなかったからだ。だが年が経つにつれ、彼女はもう母がその旅を無事に終えたのだと信じなくなった。そしてもう二度と会うことはないだろうということに気が付いたのだった。

だがそのころには、彼女にも自分の家族がおり、その痛みはより耐えられるものになっていた。二人の娘と一人の息子、アマヤとアニシア、そしてアイレン。伝統に従って、アリッサの一族に生まれたものは皆名前の最初の文字を、アルファベットの第一番目の文字から取っていた。その名前は彼らの一族こそが、人類の新しい時代を象徴しているということから来ていた。彼女は町の政策で忙しくないときは、自分自身が教えられたことを子供たちに教えるのに忙しかった。だが彼女は自分が母と過ごした時間よりも、より多くの時間を子供たちと過ごすことにしていた。アミーナに許された時間は少なかったが、その母親と違い、より部下に信頼を置き、彼らに頼ることにしていたからだった。なので彼女は自分の個人的な目的のために、ある程度の時間を割いて集中できるようになっていたのだった。

しかしすぐにはできないことが多すぎた。地球の過去を読んでゆくにつれて、アミーナは苛立ちを禁じえなかった。かつては機械の発達が進歩を加速させ、有り余る食料とエネルギー、そして自然資源により、人々はその人生の大きな部分を、読書や睡眠、もしくは音楽といった贅沢なことで埋めることができていたのだった。しかしもうそんなことは二度と人類はなしえないのではないかと思えた。それはよいことなのかもしれなかったが、時折物事が上手くいかないとき、アミーナは現状を呪うのだった。何世代も何世代もの長い時間、過去の人類が犯したあやまちのために罰せられ続けるというのは、とても受け入れられるものではなかったのだ。

いま彼らは新しい千世紀に入ろうとしていたが、それも何一つ変えることはないだろう。少なくとも彼女がエデンの女領主である間は。そしてその娘も、またその娘の代になっても変わらないだろう。皆にとっての未来があるとするならば、それは次の千年の向こう側にあるものだったのだ。

アミーナはため息をついた。手に入らないかもしれないものを欲しがっても意味がない。それに現在の世界のありようについて、かつてあった世界と比べて文句を言っても仕方がないのだ。結局のところ、彼らだってほんの数百年前の人間たちに比べたら、はるかにましになっているのだから。彼女の先祖のうちの一人は、ゴキブリを集めて焼いて食べていたそうだ。アミーナは不快感で体を震わせた。ゆっくりかもしれないが、少しは進歩があったのだ。そして彼女がその座をアマヤに譲る前に、この町をさらに発展させるだろう。

アミーナは今年で四十五歳だった。その母が巡礼の旅に出かけたとき、母は三十七歳だった。だたアミーナはエデンという重荷を、自分の娘であるアマヤに渡すつもりはまだなかった。これまでたくさんの女領主がそうして来たように、彼女は自分が年老い、床に伏せるようになるまでこの仕事を続けるだろう。そうなってから初めて身を引くつもりだった。アマヤはそのこ

ろには今の彼女の年ぐらいになっているかもしれないが、彼女は気にしなかった。今この時ぐらいは、町を統治することの重荷を感じずに、息子と娘達も青春を楽しんでもいいではないか。

彼女は白い丘を見下ろしている窓から顔を背けた。その寝室は最近になって、遠い西からやってきた商人たちが運んできた宝物で装飾されなおされていた。その中には黄金色の小さな少年像もあった。ほとんど消えかけてはいたが、彼女はそこに「・・・賞」という文字が刻まれているのを読むことができた。そして名前も書かれていた。それは間違いなく過去の遺物だった。褒賞だ。もしこの時代に何か賞を作るとしたら、それは優秀な狩人や商人、そして戦士などのものになるだろう。指導者に与えられる賞だってあってもよいかもしれない。だがいくら賞を作ったとしても、実際の行動することの価値を超えることはできないだろう。

アミーナは自分がいつかそういった賞にふさわしい者になるのかどうかわからなかった。彼女の先祖たちが作った基準を、何とか守って行こうと苦労してきたが、やはり伝説になっているような人のように生きるのは難しかった。この町を作ったのはアリッサその人なのだから。いったいどうすればそんな偉業を超えられる？　それに、彼女の人生の目標は異なっていた。彼女はエデンの公正な女領主として生きてゆくように育てられたのだし、彼女はそれに従って生きるだろう。だが、何らかの遺産を遺しておくのはよい考えかもしれなかった。彼女の治世を象徴する何かだ。

彼女は新しい建物を評議会のために建てられるかもしれない。古い建物はアリッサの時代から存在していたが、常に補修が必要なものだったからだ。だが建物は使い古されてはいたが、歴史の重みというものが存在していた。おそらく別のものにしなければならないだろう。もう少し価値あるものはないだろうか。

ドアがノックされるまでの数分間、彼女はずっとそのことを考えていた。

「どうぞ」アミーナは振り返り、息子がドアを開けたまま入ってくるのを見た。「アイレン？何かあったの？」

「母さん、下に来てほしい」アイレンが言った。その声も表情も奇妙だった。

「お願いだ。いいから早くきてほしい」

彼女は頭を振って微笑んだ。姉のように、アイレンは母に考えさせるのを好んだ。二人とも祖母にほんとうによく似ていた。「わかったわ」彼女は言った。「案内して」

二人は三階建ての建物の、幅広い階段を下りてメインホールへと向かった。女領主の家は町にあるどの家よりも大きかったが、贅沢さはいっさいなかた。しばしば遥か遠くからの使者と会わなければいけなかった彼女にとって、この家の威厳と大きさが必要だったのだ。たったの二百年たらずでエデンがどこまで大きくなったかを理解した来訪者たちは、公平な取引の契約と、和平条約を結ぶことになんのためらいももたなかった。彼女がいつも戸惑う古い言い回しで言えば、彼らも棚の「ぼたもち」を欲しがっていたのだ。そして彼らはエデンを、自分たちが繁栄する上での見本にしようと考えていたのだ。

それなのでたとえどのような贅沢をこらしたとしても、彼女の部族の者たちがそれに異議を唱えるということはありえなかった。彼女自身もメインホールの眺めにはいつも心を打たれた。天井は三階上の高さに広がり、床は美しく切り取られた素焼きのタイルで敷き詰められ、そのそれぞれにはエデンの町の紋章が刻み込まれていた。

だがその日は、アミーナの視線は、タイルが敷き詰められた床にも、たくさんの絵画やランプ、そして織物で美しく装飾された、荘厳な灰色の石の壁でもないところにくぎ付けになって

いた。なぜならホールの中央には、呆然と立ち尽くす警備兵や召使、そして家族に囲まれてオーレアが立っていたからだった。彼女の母であり、五番目のエデンの女領主であるその人が。
「母上・・・」彼女はささやいたが、声が震えるのを抑えられなかった。
　オーレアは顔を上げて、娘を見ると微笑んだ。以前よりもずっと年を取ったその顔はしわだらけで日に焼けていたが、他はまるで二十七年前に出ていったときのままの彼女と変わらないように見えた。「アミーナ、元気かい」彼女は言った。「戻ったわよ」

　アミーナは母から目を離すことができなかった。何年もの間、彼女は母が戻ってくれることをずっと願っていたのだが、もう二度と会うことができないとあきらめたのもずいぶんと過去のことになっていた。オーレアはもう死んだものと思われており、旅の連絡がこなくなり、アミーナも彼女の存在を感じることができなくなったとき、その同行者も母と運命をともにしたものとされていたのだ。だが、いま母を目の前にして、母が多少は年を取ったがまだ元気で、その目には輝きがあり、体を支えてもらわずに二本の脚でしっかりと歩いているというのは、奇跡といってよかった。いやまさに奇跡以外のものではありえなかった。
「なぜ旅に出たの、お母様？」
　アミーナはすぐに自分の質問を後悔した。ほぼ三十年にわたる長い旅から戻ったばかりの母に、最初にかける言葉がそれでよいものだろうか？　だが、彼女はその質問を何十年間も考えつづけていたのであり、どうしても聞きたかったのだ。まだ十八歳であった彼女にとって女領主の座に着くのは簡単なことではなかった。母も父もおらず、助言をもらえる相手が誰一人としていなかった彼女にとっては特にそうだった。
　ある意味、彼女は母が去ったことをうらんでいたのかもしれない・・・何も説明をしないで、あっという間に旅立ってしまうには、何か理由があったはずなのだ。もしそうでなければ・・・。
　オーレアは手の中でティーカップを何度もまわして、娘からの質問に対する答えを考えているように見えた。二人はアミーナの仕事部屋に座っていた。その部屋はかつて母が女領主だったころにも使われていた部屋であり、母の母も、そしてアリッサまでさかのぼってずっと使われてきた部屋であった。
　それは広々とした部屋で、南の壁の大きな二つの窓により明るく照らされていたが、中にはほとんど家具と言えるものはなかった。領主の机と椅子、そして来訪者のための椅子が二つ。彼女が顔と手を洗うための水が入った盆と、まだ外が明るいため火がついていない二つの燭台。窓には重い羊毛のカーテンが備えられていた。
　彼女が考えていることを読んだかのように、直接回答することを避けるようにオーレアは言った。「もし、アリッサがまだ生きていたら、二百歳になるということを考えたことはあるかい？」
　アミーナは眉をひそめた。もちろん知っていたからだ。家族の歴史は、物心ついたころから心に刷り込まれていた。アリッサのすべての子供たち、彼女の親やその子供らのことはすべて知っていた。なんというすばらしい質問だろう。そう言おうとした彼女は、母が続けた言葉にさえぎられた。
「娘よ、まだ夢を見ているのかい？」
　オーレアの真っ青な目は、母親でしかできないやり方で彼女を貫いた。彼女がまだ小さな子供だったころ、この眼差しで心の中のことをすべて知られてしまったのだった。その頃から長

い年月が経った今も、その視線には同じ力があった。アミーナは自分が母親に計られているのだと思い、その視線を目の前の机の上に落とした。

机にはたくさんの書類が積み上げられていた。署名が必要な書類に、公布しなければならない法律、考慮しなければならない取引の契約、仲裁しなければいけない法律上の争い・・・そんな重圧を背負っている彼女を、母はまるで短気な娘をいさめるように見つめているのだった。

「そんなにしばしば見るわけでもないわ、母さん」彼女は言いながら自分の声が、まるで十二歳のそれのように、何か間違ったことをして叱られる子供のような響きがあることに気がついた。「あんまり寝ないから。あまりにもたくさんのことがあって・・・」

オーレアは娘の頬に手を当てた。「責めているのではないわ、アミーナ」二人は手を握り締め、オーレアは優しい笑みを浮かべた。「話さなければいけないことはあまりに多いわ。とてもたくさんのことを私は学んできたのよ。それに、時間はあまりないわ」

「なぜ？」

オーレアはため息をついて、椅子から立ち上がった。彼女は背の高い窓まで行き、かつて彼女のものであった町の景色を眺めた。

太陽はだいぶ西に傾いており、空は暗い赤に染まりつつあった。下には町の通りが見え、自分の用事で忙しい人々がそこを行きかっていた。人々の数はかつてないほど多いように見えた。もしエデンに不変なものが、女領主の存在以外にあるとすれば、それは止むことのない成長だった。オーレアはエデンがもっと大きくなることを知っていた。いや、アリッサはすでにそれを知っていただろう。彼女のような者は二度と現れなかった。アリッサの一族にはもちろん他の共感者も存在していたが、その夢は浅く、すぐ近くの未来のことしか観ることができなかったのだ。

しかしアリッサは・・・その夢は遥か遠くまで未来を予知することができたのだった。ほぼ二世紀前、彼女はまさにこの場所で、エデンの町を建設したのだ。自分の夢が予言していたとおりに。この町ができたことで、どのような未来が皆の前に待ち構えていようとも、それに備えるために準備を整え、運命共同体として立ち向かうことができるようになったのだ。

オーレアは目を閉じた。本当に難しいところにさしかかっていたのだ。彼女は二十七年間、遠くの厳しくつらい土地を旅し、ほとんど食事も取れないような環境で、ゆっくりと眠ることもできなかったが、いまこうしてこの故郷に戻ってくるということは、これまでになく難しいことのように思えた。愛していてはいたが過去には時間を割いてあげられなかった娘の下に帰ってきたというのに、母はまたすぐここを去らなければいけないのだった。

しかし犠牲は必要だった。それは夢に現れていたのだ。オーレアの母も、彼女が生まれたすぐ後に起こった戦闘で死亡した。まだ若すぎるアミーナに領主の座をまかせなければならなかったこともそうだった。そういった犠牲は、これから未来に起こることのために避けがたいものだったのだ。

「すぐに出発します」オーレアは娘の顔を見たくないと思いながら言った。娘の顔に失望とやるせない怒りの表情があることを恐れたのだ。ひょっとしたら何の表情も浮かんでいないかもしれない。もう娘は母に何の感情もいだいていないかもしれない。「私はあなたと話をするためだけに来たのよ。最後の話をするために」

アミーナは何も言わなかった。オーレアは続けた。

「これはあなたが私から聞きたいことではないことは知っています。アミーナ、だけど物事に

はすべて理由があるのよ」彼女は言葉を切って、目をまた開き窓の外を見た。太陽は地平線に沈もうとしており、数分後には夜が彼女の町の上に降りてくるだろう。彼女はエデンのことをまだ自分のもののように感じていることに気が付いた。「これから、困難な時代があなたの前に立ちふさがるでしょう。あなただけではなく、部族全体の前にです。暗い時代がそこから続くでしょう。私は旅の途中、たくさんの夢を見て、いろいろなことを知りました。アリッサの一族は生き残り、その血を絶対に絶やさないようにしなければいけませんが、失敗してしまうかもしれません。もし私たちの血筋が絶えてしまったら・・・」彼女は言った。難しいところだった。アミーナに、自分が言うことを信じさせねばならなかったからだ。「ずっと、ずっと後の時代で、アリッサの最後の子孫が、男の子を産み落とします。男の子は成長し、その人物は人類を暗闇から光へと導く人間になるでしょう。私はそれを夢見たのよ、アミーナ。その夢の中で、遠い惑星を見ました。その惑星にむかって、この男の子、いや男が旅してゆくのを、そして彼が人類の未来を決めるのだということを夢で知りました。彼の命は何十億もの人類の命運を決めるのです。そして彼が求められている理由は、私たちの前に恐ろしく邪悪な存在がいるからです」

彼女娘を見なければいけなかった。向き直ると、アミーナは顔を垂れて座っていた。オーレアはその目を見ることはできなかったので、娘がその予言を信じたのかどうかわからなかった。

「彼の名前はディビッド」彼女は続けた。そしてアミーナが顔を上げたとき、オーレアはその目に涙が浮かんでいるのを、そして娘が母の言うことを信じたのを知った・・・オーレアは何も母親らしいことをしてあげられなかったが、それにも関わらず娘は母を信じたのだ。アミーナはまたしても母と別れなければいけないことの痛みを、一族に対する責任を理解して耐えたのだった。

「その子を見たの？」アミーナが言った。

「夢の中で話したわ」オーレアが答えた。「あなたの子供アイレンにそっくりよ」

「あなたの孫ですよ、母上」

「そうね」彼女はまた座った。「時間があればその子だけじゃなくて、子供を皆よく知りたいと思ってるわ。だけどもう時間がないのよ。アミーナ。朝には出発するわ」

「なぜ？」

「なぜかは聞かないで、言うことができないから」

「それは前にも聞いたわ。三十年前にも同じことを」

「前もそうだったし、今も変わらないわ。もしあなたに私が見ているものが見えたら・・・」

「弁護する必要はありません、母上。ただもし留まってくれたら、今、留まってくれればよかったのにと思っただけです」

「時間がないのよ」オーレアは言った。「私はもう死ぬわ」彼女はアミーナが何か言う前に続けた。「おそらくあと数週間の命しかないのよ。そしてまだ成し遂げていない、大事なことがあるわ。行かなければいけない場所があるの。アミーナ、私も毎晩毎朝、最後の日々をあなたと過ごしたいと願っていたわ。だけど行かなければ」

エデンの真の女領主であるアミーナは取り乱さなかったが、オーレアは娘をひどく傷つけたことに気が付いた。

「御付きの者をつけましょうか。旅が楽になるように」アミーナは聞いた。

「だめよ。私は一人で行かなければ」

アミーナは悲しげな笑みを浮かべた。「私は反対すべきなんでしょう、母上。だけどあなたの頑固さは良く知っているし、理由があるのでしょう」
オーレアも笑った。「よくわかっているわね。だけど今晩は一緒に過ごしましょう。あなたの家族とともに。去る前に、少しはあなたの家族のことを知ることができるでしょう。そのあと、寝る前にあなたと二人きりで話すことがあるわ。さっき言ったように、話しておかないことがあるのよ。あなたはこれからの暗い時代に備えなければならないのだから」
オーレアとその娘は二人で私室を出て、アミーナの夫とその子供らと夕食を取った。子供たちがベッドに行ったのは夜もふけてからだったが、二人はまた領主の部屋に戻り、朝があける寸前まで話し続けた。それからアミーナは寝室で眠ったが、オーレアはそのまま起きつづけ、家の東側のバルコニーから、最後となる夜明けを見たのだった。
アミーナが起きたとき、母はもういなかった。警備兵も召使も、誰も出て行くところを見なかったが、町の門番は老婆が夜明けすぐあとに出て行くのを目撃していた。彼によると彼女は北へと、湖へと曲がりくねった古い丘の道をたどっていったとのことだった。彼は老婆を一人で旅に行かせてよいものなのかどうか迷ったらしいが、彼女が行くと主張したので彼は行かせたのだった。罪を犯していない者が、エデンを去るのを止める法律はなかったのだ。彼は老婆が誰なのか気が付かなかったが、あとでかつての女領主だと知って大きく驚いた。三十年前、彼は若者だった。そして彼は老婆が領主の座を捨て、アミーナをエデンの新領主として残したあの日のことを覚えていたのだった。警備兵はあのときと同じように見張りをしていたのに、それが誰なのかわからなかったのだった。
そして毎日がいつのものように過ぎて行き、悲しみにくれるアミーナのもとに、再び新しい仕事が舞い込んできていた。日々がやがて週になり、一月がたち二月がたち、心の痛みは少しずつ和らいでいった。そもそも母が本当に帰ってきたのかどうかすら信じられなくなるのだった。実際、しばしばアミーナはそれがすべて夢であったのではと思って目覚めることもあった。だが子供らは祖母のことを覚えており、祖母はどうしたのかと聞かれて記憶が蘇るのだった。
だがもう悲しむことはなかった。オーレアがどこに行ったにせよ、彼女はより大いなる目的のために旅立ったのであり、幸福であったからだ。アミーナは母が孫に会うことができたことが嬉しかった。そして子供らが、何度も聞かされてきた古い領主に会うことができたのが嬉しかった。

母についての消息をアミーナが聞いたのは、ほぼ一年が経過したあとだった。
北にある山の上の小さな町に住む商人が、オーレアがエデンを去ってから約一月後に、背の曲がった老女が一人で町の東の野原を歩いてゆくのを見かけたというのだ。どこにいくのかと聞くと、どこに向かっているかはよく知っているので案内はいらないと老婆は答えた。商人は助けがいるのではないかと思い、あとをついてゆこうかと考えたが、老婆はよくわかっているようだったし、それ以上行かないように説得することもできそうになかった。老婆がたどっていた道は、人も獣も住むことができない、うちすてられた土地につながっているようだった。
商人はその老婆のことを、つい最近旧女領主オーレアがエデンを訪れてすぐに北へとまた一人で旅立ったと聞いて、思い出したのだった。
オーレアはとうとう生者の世界から歴史の中へとその姿を隠してしまったようだった。アミーナは母の身に起こったであろうことを考えると胸が痛んだが、母がそこまで旅を続けられて

いたことを知って嬉しかった。なぜなら、オーレアがどこに向かっていたにしろ、おそらくその旅は終わっただろうからだ。もし母が死んでいたとしても、その心は安らかであったに違いない。
　アミーナについて言えば、自分の仕事で忙しかったし、未来を作り出して行く必要があった。母が言ったように、暗い時代がやがてやってくるのだ。もし自分たちの血筋を生き残らせたければ、準備を怠ってはならなかった。悪しき力はあらゆるところに存在しており、アリッサの遺産であるエデンを滅ぼそうと画策する者たちがいるのだ。予知夢を見る者たちも共感者たちも、やがて尊敬されることはなくなるだろう。恐怖が人々の心を支配することになるだろう。アミーナには自分の家族を、肥大化する人々の憤懣から守るための時間がなかった。アミーナは未来のことを恐れたが、希望もあった。もしオーレアが望んだことがうまくゆき現実になるのなら、八千年後に、彼らの血筋はある人間のもとで結晶するだろう。彼は人類を暗闇から導き出し、新しく希望にあふれた未来へと連れてゆくだろう。
　その考えはアミーナに生きつづける勇気をくれた。

　オーレアは暗いテントの中に足を踏み入れた。目が慣れるまで数秒を要した。彼女は疲れており、その視力は弱っていた。彼女は自分が死にかけていることを知っていたが、いまようやくその旅は終わろうとしているのだ。彼女はここで心臓が止まるそのときまで休むことができるだろう。
　暗闇から声が聞こえた。「こっちにきなさい」それは女性の声だった。遥かな過去からやってきた力強いその声は、年を経て堅くなった皮の靴のようだった。
　オーレアは近づいた。そして彼女は見た。奥の壁のベッドに座っている、分厚い羊毛の毛布にくるまれたその姿を。
　その女は山や丘よりも古かった。肌は灰色でしわだらけであり、指は棒切れのようだった。だがその目は生きていた。それは明るい緑色であり、その中には若さがあった。そしてその目はオーレアが見たこともないような輝きをたたえていた。
　彼女はひざまずいて、腕を伸ばした。心臓が痛かった。涙が視力の衰えつつある目から流れおち、足元の乾いた砂の上に落ちた。彼女は生き返るような喜びを感じた。夢はやはり正しかったのだ。まだ希望が残っていたのだ。予想よりもずっと。
「アリッサ様」彼女は言った。「偉大なる母上、お呼びにお答えして、いまこうしてはせ参じました」

第十二章
エクソダス、三番目の物語

西暦3332年　地球

ジュアニタはよく洞窟まで一人で探検に行くことがあった。

彼女は十二歳で、町のほかの子供たちと遊びたいと思わなかったのだった。皆の遊びは勝ち負けにこだわりすぎて、乱暴で無神経なものだった。女子の遊びもそうだった。

それに、彼女はキックボールのゲームではチームに選ばれるのはいつも最後だったし、そうなるのが大嫌いだった。なので、放課後の午後はいつも決まって、門を守る警備兵が交代する時間を見計らい、監視の目を避けながら抜け出して、橋を越えて <恐れの森> を突っ切り、その向こうの丘まで行くのだった。

もし両親が彼女が不法に抜け出していることを知ったら、きっと激怒したことだろうが、彼女はいつも戻ったあと用心深く服から埃と土を払い落としていたし、両親には納屋で他の子供たちと遊んでいたと言っておくことも忘れなかった。両親は娘の言うことを信じていたし、娘の友達にそれが本当かどうか確認することもしなかった。もちそんもしそうしていたら、ジュアニタがどんな危険な秘密を持っているか気が付いたことだろう。

洞窟は信じられないほど楽しい場所だった。地中深く何マイルも潜っていくと、外の暑さを忘れるように砂岩はひんやりとしていた。深く行けば行くほど岩は冷たくなり、またトンネルは暗くなっていった。もちろん彼女は松明を持っていっていたが、火が半分になる前に必ず戻ることにしていた。暗闇に閉じ込められる危険を犯すわけにはいかなかった。別に暗闇が怖いわけではなかった。ジュアニタはこの洞窟の中のことを照明がなくても歩けるほど良く知ってはいたが、それでも転んで足を怪我する可能性や、道と道が複雑に交差しあう迷宮の中で迷い、飢えて死んでしまう可能性があったからだ。

彼女は禁じられた冒険に潜んでいる危険を良く知っていたのだった。その危険の感触は楽しいものでもあったが、ジュアニタは馬鹿ではなかった。死にたくなかった。こんな地下で、寒く恐怖に満ちた死を迎えたくはなかった。だから彼女はいつも用心深く、どんな曲がり角を曲がるときにも注意深く道を覚えながら進んでいた。

それでも旅はもちろん危険なものだったので、彼女はやっぱり誰にも言わなかった。

町は彼女がもっと幼かった時代と比べてもさらに大きくなっており、遠くから毎日のように新しい移住者がやってきていたのだった。学校の授業で毎日名前があがるエデンの街のように、彼女の住む町エスペランザ（北の商人の言葉で「希望」を意味するらしい）は、その地域の商業と交通の中継点になるべく建設されたのだった。そのためこの町はいつも新しい人であふれていたのだった。

エスペランザは、巨大な街の廃墟のすぐ南東に建設されていた。その街は千年前、空から落ちてきた火によって、ただの土くれになってしまったのだった。

ジュアニタは地球を襲った災害のことを聞くのが好きだった。女神が土地の上に炎と煙と溶

岩を降らし、河と空気に毒を撒いて皆を病気にしたせいで、何一つ成長することができなくなってしまったのだった。今ようやく、エスペランザやエデンなどに住む人々の祈りと働きによって、女神は再び皆に微笑もうとしていた。雲は少しずつ薄くなり、生き物を育てることがまたできるようになっていたのだった。大人たちにとって毎日の生活はやはり大変なものであったが（たとえばジュアニタの母は毎朝学校に行かせる前に髪の毛をとかしてやりながら、そういうのだった）、皆の生活はゆっくりと、だが確実に向上しつつあった。

ジュアニタはいまの生活が良いものだと思っていた。

エスペランザは安全で清潔な街だったし、彼女は大きな家に住み、気持ちのよいベッドに寝ることができた。学校ではマドラ・マリア先生が世界と動物について、そして水を綺麗にするための方法を教えてくれるのだった。また彼女は犬を飼ってすらいた。犬を飼える者はたくさんいるわけではなかった。マドラ・マリアは彼女に、ほとんどの犬は子犬を作れないからだと教えた。なぜなら犬たちは「不妊」だったからだ。ジュアニタには意味がよくわかっていなかったが。

彼女の犬の名前はノナと言って、茶色の毛と目、ふさふさの尻尾を持った可愛い雌犬だった。ノナはどんな犬なのと聞いたとき、父はそれは「雑種」だと言い、特に特別なものではないと答えた。だがジュアニタは気にしなかった。ノナは彼女にとって特別な存在であり、それが大事なことだったのだ。だが彼女は一度もノナを洞窟に連れてきたことがなかった。なぜなら逃げてしまうかもしれなかったし、犬を手に入れるために父が自分の作った工具をいくつか売りとばしたことを知っていたからだった。また家に誰もいないとき、誰かが入ろうとすると吼えるのも犬の役目だった。

だから今日もいつものようにジュアニタは一人で来ていた。洞窟の入り口にようやくたどりつくと、岩の下のひんやりとした乾いた空気の中に歩いて入る。

その日は湿気の高い暑い日で、冷たい中に入るのは心地よかった。彼女は震えたが、それはいわば儀式のようなものだった。中はいつも少し寒く、おどろおどろしくそして真っ暗でなければならなかったのだ。今日もいつもと同じだった。数歩洞窟の中に入っただけで、一歩先も見えなくなった。太陽は洞窟の入り口を塞いでいる大きな岩によってすぐその姿を隠してしまった（大人たちがこの洞窟を見つけられなかった理由は、彼らが隙間に体を入れることができなかったからだ）。彼女は綺麗に包んだ松明を鞄から取り出し（それは父の工房から持ってきたものだった。父は何十本も、暖炉のそばの箱にそれを入れていたのだ）、火打石で火をつけた。

今日持ってきたものはいつもの松明よりもずっと大きかった。今回ジュアニタはある目標のために、父の松明の一番大きいものを選んで持ってきていたのだった。前この洞窟に来たのは二日前のことだったが、その時それまでずっと無視してきた場所に、新しい脇道を発見したのだった。どこにもつながっていない狭い割れ目としか思っていなかったのだが、ためしに体をそこに滑り込ませてみると、山の深部へと続いて行く空間が中にあり、さらにわくわくするような道へと広がっていたのだった。それは他の洞窟の道よりも広く、また急な坂道になっていて、ひょっとしたら地下の湖につながっているのかもしれなかったし（一年前に見つけた湖には、真っ白でほとんど透明な体をもった小さな魚がたくさん泳いでいた）、もっと良いものを見つけられるかもしれない。たとえば水晶の洞窟などだ。奇妙な形をした岩が天井から床まで敷き詰められており、松明をかざすと何百万もの鏡のように光を反射するのだ。

今回の弁当は大きいものにしてあったし、水筒もそれなりのものを持ってきていた。今回の松明を使えば、新しい道の底までいけると彼女は見積もっており、空腹や喉の渇きのせいで上に戻らなくてもよいようにしてあった。それに、今日は長いこと潜っているのには最適な日だった。なぜなら父も母も夕暮れの都議会に出かけており、遅くまで帰ってこなかったからだ。

例の裂け目に着くまでほとんど時間はかからなかった。体を滑り込ませて反対側へと行く。

彼女が入ると、入り口の岩から小石がぼろぼろと落ちた。小石は暗闇へと転がって行って見えなくなった。それを見てジュアニタは少し怖くなった。この四年間の間、たくさんの洞窟の道を歩き回ってきたのだが、この道は・・・何かが違った。音の響き具合が違い、その匂いも違った。空気にはどことなく金属の味がした。どこか深い深いところから、風が吹き上げてきていた。

この下の地下のどこかに川が流れているのかもしれないと思った。前にも見かけたことがあったのだ。それは細い川だったが、どこかから冷たい空気を運んできていた。どこか遠いところ風を運んできたのだ。

一番重要なことは、ジュアニタがこの道に何かいつもと違うものを感じたということだ。彼女は本当に多くの時間をこの洞窟で過ごしてきた。そして洞窟の中のことは、足元の感触でよく知っていた。洞窟は彼女を心地よく守るものであり、また孤独や恐れ、冷たさを感じさせるものだった。だがこの道は・・・新しかった。うまく説明はできなかったが、何か奇妙な感触が心の中にあった。恐怖と興奮と好奇心が入り混じった感情が。

何かがこの下にあるはずだった。彼女が一度も見たことも聞いたこともない何かだ。これまで生きてきて一度も経験したことがない何かだ。その誘惑はあまりに強く、ジュアニタはそれに抗うことができなかった。見つけなければならなかった。たとえ一晩かかり、暗闇の中を喉の渇きと空腹、そして寒さに苦しみながら戻ることになってもだ。

彼女は歩き出した。やがて傾斜はさらに急になり、彼女は滑って転ばないように注意しなければならなかった。彼女は松明を体からなるべく離して前にかかげて、床に深い裂け目がもしあればわかるようにした（実際、何度かそういう経験をしたこともあり、一度は本当に落ちかけたこともあった。それは本当に恐ろしい経験だったので、新しい道を行くときには彼女はいつも用心深くなったのだった）。

長い道はしばらく同じ幅と高さで続いていった。時折、道は少し曲がったり、天井が低くなっていたりした。そのたびに彼女は岩をよじ登ったり、避けて歩いたりしなければならなかった。だがほとんどその道は平らに続いており、また壁の高さと床の幅、そして天井までの高さはほぼ一定だった。彼女はこの道が昔、人間によって作られたことを疑わなかった。たぶん彼らは黄金や銀、それかダイアモンドを探していたのだ（もしダイアモンドを見つけたらどうしたものだろう？　置いて行くわけにはいくまいが、両親になんと説明したものだろう？　親に嘘をつくのは嫌だった）。彼女はこの道がどこかにつながっていることをほぼ確信した。洞窟の他の道はほとんどが行き止まりだったが、これは間違いなくどこかにつながっているはずだ。

ジュアニタがその音を聞いたとき、松明の三分の一が燃えてしまっていた。

それはかすかな音で、どの方向から来ているのかよくはわからなかった（だがどこか前のほうであることは間違いなかった。なぜならその時まで一度もそんな音を聞かなかったからだ）。その音ははっきりしなかったが、自然の音でないことは明らかだった。その音は父が工房で、鉄を細工しているときの音に似ていた。それが何かの音と混じっていた・・・。

ジュアニタは立ち止まった。
声？
神経を集中させる。数秒後、彼女はそれがどこか前方で誰かが叫んでいる声であることを確信した。言葉は聞き取れなかったが、それは声以外の何ものでもなかった。
この下には人が住んでいるのだ。
ジュアニタはきびすを返して、誰かに見つかる前にすぐ戻りたい衝動と戦った。この人々はエスペランザの人間ではありえなかった（彼女は自分だけがこの洞窟を知っていることを知っていた）。この人々は友好的でないかもしれない。エスペランザと取引をしたことがない部族のものたちは、小さな女の子がこうやってスパイまがいのことをしているのを気にいらないかもしれないのだ。だが好奇心がそれを上回った。この下にあるものを一目みたいという衝動に勝つことはできなかったのだ。それに、隠れて行動するのは得意だった。実際この洞窟で何年も遊んできた実績が彼女にはあるのだ。だから前に進むことにした。松明を低く持ち、光が遠くを照らしすぎないようにする。
目の前の暗闇が暗い赤色に変わるまでさほど時間はかからなかった。良くあたりが見えるようになる。
彼女はすばやく松明の火を消した。まだ暗かったが、どこかから発せられる新しい光源だけで進むことができるようだった。この人々が誰であるにせよ、たくさんの松明を持っているに違いない。この下には村が丸ごと存在しているのではないだろうか。いったい何をしているのだろう？　ダイアモンドを採掘しているのだろうか？　それとも何か別の目的が、ジュアニタの知らない理由があるのだろうか？
彼女はどうあってもそれを知りたかった。もうあとには引けない。
三百十二歩進んだあと（しっかりと数えた）、回廊が枝分かれしているところにたどりついた。右と左に別れており、暗闇の中に隠されていたその道の下には明るく大きな空洞があるようだった。岩には階段がついており、滑ることはなかった。下にはたくさんの照明が存在していりるようだ。彼女は四つんばいになって這うように進んだ。階段の縁から下を見る。
そこに見たもので、ジュアニタの口は開きっぱなしになり、目はその光景にくぎ付けになった。
その空洞は綺麗にくりぬかれた巨大な空間であり（ジュアニタの目にも）、明らかに人造であることが見て取れた。そして約百メートル下にある空洞の底の床には、幅広い道があらゆる方向からつながってきており、自ら光を放っているように見えた。よく見ると太い紐からぶら下がった白くまぶしい球体が、真珠のネックレスのように光っており、それは瞬きもせずに均一な光をあたりに投げかけていた。その照明が円形の空洞をぐるりと取り巻いて取り付けられていた。だがジュアニタをもっとも驚かせたのは別のものだった。
その空洞の真中に、巨大な緑色の金属の箱と樽に囲まれて、銀色の鳥がいた。いや、それは正確に言えば鳥ではなかった。だがそういうように見えたのだった。それは翼と嘴を持っていた。だがその大きさは家ほどもあった。そして爪の変わりに車輪がついており、頭はガラス製でその中に椅子がひとつ見えた。ジュアニタはまだ十二歳だったが、こんなものを見たことはなかった。だが彼女はすぐにこれは何かの乗り物なのだと考えた・・・古い昔話に載っているものだ。大災害の前の物語には、人類は月まで飛んだり、大陸を数分で横断できたのだと書いてあった。

これは空を飛べる機械に違いない（彼女は思い出すのに苦労した）。「飛行機」だ。なんて発見だ！　だが何世紀も何世紀もの長い時代の間、飛行機を保存していたのは誰だろう？　いったいこの地下の村に、まぶしい白い球体に囲まれて住んでいる人々は誰だろう？　一つ確かなことがあった。これを見たのは彼女が始めてだ。このことを知るものは誰もいないのだ。もし誰かが知っていたら、マドレ・マリア先生は皆にそう教えていたはずだ。

ジュアニタは人を探したが、誰もいないようだった。空洞は空っぽだった。だが声は、よりはっきりと聞こえていた。それは真中の空洞のフロアから伸びているトンネルの一つから聞こえてきていた。彼女はもう戻ったほうがよいことを自覚していた。遅くなっていたし、ここにいれば危険かもしれなかった。もしこの人々が飛行機を隠していたのなら、他にどんな秘密を隠しているのかは神のみぞ知ることで、しかも小さな女の子がそれを嗅ぎまわっていることを、この人々が快く思わないであろうことは明らかだったからだ。

だが、このまま何も調べずに戻るのはジュアニタのプライドが許さなかった。少なくとも会話の一つぐらいは盗み聞きできそうだ。何か重要なことを話しているかもしれない。

彼女はその階段の上でしばらく待っていたが、誰もいないことを確認すると、立ち上がって階段を音を立てないように、だが可能な限り早く降りていった。影があればその中に隠れたが、それ以外のときはもし空洞のトンネルから誰かが見たとしたら丸見えだった。ジュアニタは目と耳に神経を集中させて、誰も近づいてきていないことを確認した。そしてようやく空洞の床にたどり着いたとき（ほんの数分しかかからなかった。洞窟を探検することについては、他にかなう者がいないほどすばやかったのだった）、彼女はすぐに鉄の箱の後ろに隠れて、しばらくあたりの様子をうかがった。心臓がしばらくどきどきして止まらなかった。

彼女は自分が怖がっていることを認めないわけにはいかなかったが、いまやこの冒険には目的ができつつあった。それはこれまでの探検の、目的のない旅とは違った。彼女はこの人々が誰なのか調べに来ているのだった。なるべく多くの情報を集め、誰にも見つからないように逃げ出すのだ。彼女はいわば・・・チョウホウインだった。どんな言葉だっただろう？

そうだ。諜報員、スパイだ。

ジュアニタはにやりと笑った。確かに怖さはあったが、同時にわくわくしてきていた。どう考えても、他の子供と納屋で遊ぶよりは面白い！

彼女はそこで数分待った。そして体をかがめながら、一番近くの外につながるトンネルへと足を運んだ。その方向から声が聞こえてきていた。それに加えてその通路には、あの奇妙な松明が他の通路よりも少ないため暗かった。うまくゆけば気づかれることなく奥まで進んで、何が話されているのか調べることができるだろう。

はっきりとした最初の言葉はこんなものだった。「・・・あの谷の町か？　ホープ？」それは男のしゃがれ声で、陰気だったが理解できる言語だった。発音は奇妙で、いくつかの単語はまったく理解できなかった。だが彼女は話されていることのほとんどを理解することができた。そして背中を冷たいものが走るのを感じた。

この人々は彼女の住む町について話していたのだ！

「エスペランザだな」もう一人の声が言った。それも男で、最初の声と同じような方言のようだった。だがもっと若く、はきはきとしていていた。

彼女はそんな風に話す人間と会ったことがなかったので、この二人は本当に異邦人なのだろうと思った。彼女は通路をもう少し奥に進み、さらによく会話が聞こえるようにした。頭上に

裸の松明がぶら下がっていた。それは太く黒い紐で等間隔に結ばれており、その紐は通路に沿って前に伸びていっていた。通路は曲がっており、彼女は先を見ることができなかった。だがそのおかげで見つからずにすんだ。

彼女は冷たい壁に背中をつけると、膝を少し曲げて聞き入った。

「最初の作戦の時にあの街を基地として使ってほしいんだと思うけどね」最初の声が続ける。

「できるだけ多くの地べた虫（グラウンドクローラー）どもに影響を及ぼさないと」ジュアニタはその単語を理解できなかったが、あまり良い印象は受けなかった。「できるだけ早いうちにだ。奴らの住むところを中継点にするんだからな」

「エスペランザはずいぶんとにぎわっているね」二人目の男が言った。「交通量がすごい。北のエデンみたいな感じか。もう少し小さいが」

「エデンは重要な役割を果たすだろうと聞いた。一番上の連中は、そこに直接出向くと聞いている。人口が多いところだから影響力も大きい。だからそこまで早くたどり着くことが必要だ。少なくとも俺はそう聞いている」

「まあ、そうなんだが」二人目の男がまた口を開いた。「ここから出て、外に出るのは本当に楽しみだ。俺はこれまでの人生で本物の太陽の光を五回ぐらいしか見たことがないんだ。戻るには完璧なタイミングだと思う」

「『外』にはまだ何もないと思うがな」と最初の男は笑った。「すべての準備が整うまでかなりかかるはずだ。施設の準備はできているが、まだテストがすんでいない。まあ、あと五百か六百年は、何もできないだろうよ。少なくとも俺はそう思っているがな」

「奴らは二百五十年以内にやるといってるぜ」

「そうだが、奴らは自分の手を汚してないだろう？　少なくともそれは二倍したほうがいい。さっきも言ったが、そのぐらいはかかると俺は見ている」

「少なくとも俺たちには自由に使える大量の人員がある」声はだんだん近づいていたが、ジュアニタは凍りついて動けなかった。彼女は二人が何を話しているのかわからなかったが、それが何かとてつもないことなのは理解できた。とんでもないことだ。「この大陸だけで、一千万を越えているという最近の報告があったな」

「ウサギみたいに繁殖してるな！」二人は笑って、ジュアニタは身をすくませた。二人は彼女の仲間のことを言っているのだ！　「だがそれが問題になるかもしれない。奴らは地べた虫どもの繁殖具合を厳しく取り締まるらしい。支配するのを容易にするためだ。結局のところ、技術力と武器がなければ俺たちは・・・誰だ！」

ジュアニタは飛び上がった。彼女はほんとうに集中して聞いていたので、二人の男がどれほど近づいていたのか、そして二人が角を曲がって彼女を見つけたことに気が付かなかったのだ。三人はそこで無限とも思える長い時間の間そこでにらみあっていたが、ジュアニタは身を翻すと通路を走って大空洞へと向かった。一瞬、二人の男はあとを追ってこないように見えたので、彼女がほとんど逃げおおせられるかと思ったとき、二人が追ってくる音が聞こえた。

彼女は全速力で走り、いまやとてつもない長さに感じられる階段をさっきとは逆に駆け上った。だが遅かった。

首の後ろが荒々しい手でぐいとつかまれたとき、ジュアニタは階段を半分ほど上ったところだった。悲鳴をあげると、口を抑えられた。そしてさらに二本の手が、あたりを蹴り付ける足

を抑え、彼女は下まで連れ戻された。
「地べた虫だ」背の高い男が言った。年上の男のほうだった。きほど盗み聞きしたとき最初に話していた男だ。「いったいここで何をしているんだ？　どうやってここに入ったんだ？　こういう時に警備は何をやっているんだ。このせいでひどいことになるだろう」
「ただの子供のようだ」もう一人が言った。二人は彼女を床に下ろすと、最初の男が口から手をはなした。彼女は声をあげなかった。悲鳴をあげても何にもならなかった。誰にも聞こえないだろう。少なくとも彼女を助けてくれる者の耳には入らない。「たぶん洞窟を走り回っていて秘密の入り口を見つけたかなにかしたんだろう。そういった侵入はあまり気にしていないからな」
「だがこの娘の家族はどうだ？　探しにくるんじゃないか。いや、これはよくない兆候だ。それにタイミングは最悪と言っていい」
「まあそのとおりだが、どちらにせよあと二週間のうちにはどうせ始めるんだ。この件によって本当に大きな違いがでると思うか？」
「まあ・・・ないだろう」背の高いほうの男は背を伸ばした。ジュアニタは彼をよく見ることができた。その男は奇妙な赤い素材の服に全身を包んでおり、その肌は真っ白で髪の毛は銀色がかった灰色だった。その表情は厳格だったが、その肌は赤ん坊のように柔らかそうだった。だが手のひらはごつごつしており、父のように手作業で労働をする者の手のようだった。
　彼女は涙がこぼれそうになるのを感じたが我慢した。この男たちの前で赤ん坊のように泣き出したくなかった。この男たちに怖がっていることを知られたくなかった。
「しかし、こいつをどうする？」
　若い男も年上と同じような奇妙な服を身にまとっていたが、その左胸には異なったマークがついていた。彼の肌も真っ白だったが、その髪の毛は赤かった。彼女はそんな色の髪の毛をそれまで一度も見たことがなかった。そして彼の手のひらは、その顔のようにつるつるとしていた。彼はまるで病人のように見えた。ジュアニタは彼らがずっと地下に住んでいて（彼らの外見とその会話から）、ほとんど、いや一度も外に出たことがないのではないかと思った。
　年上の背の高い男は、彼女をじっと見つめた。ジュアニタも男を見つめ返す。その視線は暗く、何の感情もこめられてはいなかった。彼女はこのとき突然恐怖を覚えた。あの通路を冒険しようなどと考えるんじゃなかったと思った。そもそも洞窟なんて見つけるべきではなかったのだ。納屋で他の子供たちと遊んでいればよかったのだ！　だがこんな時間では、もう子供らはみな家に帰って夕食を食べていることだろう。彼女の両親もそろそろ戻ってきているころだろう。そしてジュアニタがどこにいったのか不思議がっているに違いない。両親は彼女を探して村全体を調べるだろうが、彼女の行方は誰も知らないだろう。そして誰一人として、彼女を見つけることなどできないだろう。なぜなら彼らはあの裂け目を見つけて、その中のトンネルに入ることなどできないからだ。
　彼女は自分の無謀さが愚かだったのだと思った。これからどうなるのだろう？
「始末しよう」年上の男は言った。
　ジュアニタは息を飲んだ。それが意味するところはわからなかったが、良い意味であるはずがなかった。
「待って！」彼女は叫んだ。二人の男が彼女を見つめる。「誰にも何も言わないわ」彼女はどもった。自分の発音が理解してもらえるかどうか不安だった。

二人の男は顔を見合わせると、また彼女を見た。
「どこから来たんだ？」若いほうの男が言った。「どうやってここまで来た？」
彼女は階段の上を指差した。「上にある通路から。潜り抜けてきたの。私みたいな子供しか入れないわ。洞窟のことを知っているのは私だけよ。私よく行くのよ。だけどここまできたのは初めて。これが秘密の場所なんて知らなかったわ。スパイのつもりはなかったの。お願い、帰させて！」
年上の男が首を振った。「それはできない。誰かに言うかもしれない」
ジュアニタは泣きはじめた。「誰にも言わないわ。神様に誓って言わないわ！　誰にも言わない」
若いほうの男が笑った。「神様だって？　いやいや、人を説得するのがうまい娘だな。だが秘密を持ってしまった者にとって、それを喋らないのは難しいものさ。子供は誰にでも喋ってしまう」
「だけど私は四年もこの洞窟を秘密にしていたのよ！」ジュアニタは叫んだ。「誰にも言わなかった！　お願い、帰らせて。家に帰りたいのよ。お願い」彼女は激しく泣きはじめた。母親の温かい腕の中で、父の厳しい叱責を受けたかった。彼女は強くぶたれるだろうが、それでもいま帰らせてもらえれば神様に感謝するだろう。
背の高い男はため息をついて、しゃがみ込んだ。彼はさきほどより怖くはなくなっていたが、ジュアニタはそれでも恐れていた。
「おちびさんはなんて名前？」彼は聞いた。
「ジュアニタよ」ジュアニタは言った。
「ジュアニタね」彼は繰り返した。「可愛い名前だ。どこに住んでるんだい？」
「エスペランザ」彼女は鼻声で答えた。
「なるほど」彼は立ち上がると、考えるように天井を見上げて、若い方を見やった。背の高い男はわずかに首を振ると、歩いて行ってしまった。
若い男は眉をひそめた。どうするべきか迷っているようだった。彼は最後にかがみこんで、ジュアニタにささやいた。
「運がよかったな、おちびさん」彼は立ち上がって歩き出した。そしてさきほど顔を鉢合わせた通路までゆくと振り返った。「一言ももらすんじゃないぞ！」彼女を指差してそう警告する。「さもなくば・・・」彼はそれを最後まで言わなかった。そしてそのまま通路の奥へと、仲間を追って消えていった。
ジュアニタは心の底から安心したが、彼の最後のコメントは余計だったと思った。いくら自分がまだ十二歳だといっても、このことを誰にも言ったりはしない！
なんとか立ち上がると心臓が激しく動悸を打っていた（足と腕は強く掴まれたので痛んだ）。びっこを引きながら階段を上る。
彼女は階段を上りきると、最後にもう一度振り返った。
銀の鳥はまだ眠っているようにそこにあった。近いうちにそれが飛ぶのを見られるだろうかと、彼女は思った。二人の男が話していたことから推測すれば、そんなに遠い未来のことでもなさそうだった。それは恐ろしいことであったが、なぜか待ち遠しくもあった。
ひとつ確かなことがあった。彼女の住む世界は変わろうとしていた。そして彼女はそれを目撃しようとしているのだ。実際のところ、それを最初に目撃したのは彼女だったのだ。だがそ

れを誰にも言うことはできないだろう。彼女は生きている限りそれを秘密にしておくだろう。

ジュアニタはその光景に背を向けて目の前の暗闇へと、松明に火をつけて進んでいった。

戻りは長い道のりで、空腹なものだった。

十一日後、町の上空で雷のような音が鳴り響き、ジュアニタは目覚めた。

彼女はベッドから飛び起き、下着しか身に着けないままで通りに飛び出た。そしてやはり皆の頭上にあったのは、巨大な腹部から火を噴きだしている銀の鳥だった。それは雲のように空に浮かび、あたりの人々は皆それを指差し、叫び声をあげていた。だがジュアニタは静かだった。彼女は微笑んでいた。なぜなら彼女はその鳥を前にも見たことがあったからだ（前に見たときは地面で飛んでいなかったが）。そして誰がやって来ようとしているのか、彼女は知っており、それがそんなに悪くないものだとも思っていた。

二人の男は恐ろしかったが、悪い人たちではなかった。ジュアニタを見逃してくれた彼らは、今度は大きな変化を世界にもたらそうとしていたのだ。

もう二度と同じ日々はやってこないだろう。

第十三章

西暦28911年　星々と星々のはざまにて

ディビッドは自分がどこにいるかわからないほどのパニックを起こして、空気を求めながら目を覚ました。シャツは汗でぐっしょりだった。それは生ぬるい感触で胸にへばりついている。彼は落下していたのだった。黒く深い虚無に向かって。その虚無は声で満ちていた。夢の中で聞いた言葉がその中でこだましていた。

アドリエンヌ、エデン。地べた虫に予知夢。

彼は自分が空っぽになったような気持ちがしたが、恐怖はやがて少しずつ収まっていった。

ただの夢だ。これはただの夢なんだ。

彼の目の前のスクリーンには、長い冬を舞台にした、オメガ時代が終わったあとのメロドラマが流れていた。そのデジタル人形たちは擦り切れた動物の毛皮を身にまとい、廃墟と化した塔の中を太ったゴキブリを求めて探し回り、放射能で汚染された水を飲み下していた。

彼が手を振ると、映像はゆっくりと消えていった。あとには帯電した空気が残り、頭の後ろの髪の毛を逆立てる。

それは一晩中流しっぱなしになっていたのだ。ああいう鮮烈な夢を見ても何の不思議もなかった。

彼は喉をきしませて大きなあくびをした。両足を寝台の縁から下ろして、まっすぐ座る。光で目が痛んだ。彼は自分がぼろぼろに擦り切れているように感じ、自分がとても年を取っていることを感じた。

ただの夢だ。あれはただの夢だったのだ。

だがそのあとにこう思った。それはパラドックスじゃないか？　ただの夢なんて、なんで夢についてそう思う必要がある？

夢の中に真実があるのか、それとも夢が真実なのか・・・。

現実では彼はいつもこの場所に舞い戻ってきていたのだった。自分の世界を何も言わずに旅立ったのは、眼を閉じれば浮かぶ目的地を夢見たがためだった。夢がその理由であり、それは単純な事実だった。

幸運な未来視たちは自らを呪うというわけだ。私は夢を見るときに、自分を鏡で見るだけでではなく、それ以上のものを見ることができるのだ・・・なぜ私はこういった能力を授かったのだろう？　いったい誰が私の目を開かせ、その精神を作り変えたのだろう？　誰が私に、この聖なる能力という呪いをかけたのだろう？

ディビッドはエンパスやテレパスの能力を与えられて人生を生きてきた。テレパシーは、敵に対して彼の優位を確実にしてきた・・・友人であったはずの人間に対しても、その能力は使われた。彼はいつも皆の感情が理解できたし、何を見ているのか知ることができた。彼は交渉のタイミングや、どこをどうやって攻撃すべきかということを熟知していた。それは感じることができる具体的なものであり、夢ではなかったしまた予知でもなかった。それは占いというよりは、本能的な直感だった。

だがディビッド自身も、もちろん夢を見てきたのだ。そして彼が夢見るとき、それはいつも予知夢だった・・・。

予知夢（トルードリーム）か、と彼は考えた。いったいその言葉はどこから来たのだろう？

ディビッドはそのとき突然理解した。それは晴れた空から落ちた突然の雷のように、予想を越えたものだった。すべてが音を立ててかちりとはまったように感じた。彼は予知を与えられたのだ。さきほど見た夢はただの夢などではなく、意味があるものだったのだ。夢の中で彼は、貴重なものを手渡されたのだった。壊れやすいそれを、自分の旅の終わりまで一緒に持ってゆくようにと。

彼は真実を見せられたのだ。その夢の中の出来事を細かく思い出すことはもうできなかったが、人々の情熱とその人生は、彼が生きている限り彼の中で生きつづけるだろう。

彼は本当に起こったことについての夢を見たのだった。それは驚くようなことではなかったのかもしれない。以前も未来についての夢を見たことがあったし、それはいつも本当に起こった。だが今回の夢は未来についてではなく、過去についてのものだった。夢の中の出来事は、過去が変えられないように、実際に起こったことだったのだ。彼が見たものはとっくの昔に塵となってしまった町とそこに住んでいた人々のものだったが、だからといってそれに価値がないというわけではなかった。もし過去のうちに未来が含まれていないとしたら、また逆に未来のうちに過去が一切含まれていないとしたら、人間の行動はすべてお互いに何の関連もないものになり、長い時の連鎖の中で偶発的に起こる出来事や事件でしかなくなってしまうではないか。もちろんそうではなかった。あらゆるものはつながっていたのだ・・・過去と現在、そして未来が。

より正確には過去と未来がつながっているのだ。現在はその二つをつなぐ水路でしかない。

彼は自分の人生の中で初めて、パズルのすべてのピースがそろったと感じた。

その夢の中で彼は幽霊たちと経験をともにしたのだった。夢の中の人々もまた亡霊ではあったが、それはこの船にとりつき彼を呪っている幽霊たちとは違った。彼らは死者でありながら彼自身よりもいきいきとしており、彼に新しい目的を注ぎ込んだのだ。この宇宙がどのような苦難の場所であろうとも、立ち向かっていける元気をもらったのだ。

まあ、ほぼあらゆる苦難にだ、と彼は心の中で訂正した。たとえば小惑星群にぶつかったりすれば、彼の計画に狂いが生じる可能性もあるだろう。

まだいくつかの物事は幸運と偶然まかせだったのだ。

彼は居住区を登って、二つの船体をつなぐシャフト通路を浮遊して操縦室に向かった。生体椅子は彼を待っているだろう。それを見るだけで彼の頭は痛んだ。

夢は大事なものだったのだ。ディビッドは気が付いた。遠い昔に見た夢も含めて。未来は過去によって形作られ、過去は未来のあるべき姿を渇望していたのだった。すべてが、この現在に集約しようとしていた。いまこの時間に。

この場所、この時間の一点にだ。

彼はそれが何なのかはっきりとはわからなかったのだが、夢が何か貴重なものを彼に教えようとしていることはわかった。彼は直感的にそう確信した。それは未来を求めるための方法であり、具体的な時と場所についての何かだった。あるいはこの旅の終わりに、円を断ち切るために必要なものだった。過去を現在とつなげるために。

激しい痛みが頭蓋を突き抜けた。彼は両手を耳にあてて体をかがめ、歯を食いしばった。彼は苦痛で悲鳴をあげないようにするのがやっとだった。その背筋が凍る数秒間、彼は痛みがずっと続くのかと思った。世界は灰色の布につつまれたようになり、そこを星が飛び交っていた。そして永遠にも感じられた数秒間のあと、鋭いトゲのような痛みは少しずつ治まり、なんとか絶えられる痛みにはなった。彼は最近よく頭痛を覚えたが、これほどの痛みは初めてだった。

本当に痛かった。

彼は痛みのうめき声をあげ、唾を口からこぼした。するとあのささやき声がまた始まり、彼はもう一人ではなくなった。

彼が頭を上げると、部屋は幽霊たちでいっぱいだった。ほとんどが知らない人間たちだった。彼は亡霊たちがかつて彼の前を行進していた兵士たちの亡霊であるか、もしくは毎朝のように自分の机で見なければならなかった、数え切れない死亡者と重傷者のリストの記憶なのだろうと思った。

今彼らは全員が戻ってきたのだった。

そのささやき声は、かすかで小さく個別ではほとんど聞こえなかったが、一つにまとまると大音量のコーラスとなり、真っ白なノイズと化して彼の思考を侵食するのだった。

彼は両耳に手をあてたまま、生体椅子へと向かった。彼は幽霊たちを避けて通ろうとしたが、彼らはほとんどの場所にぎっしりと詰まっており、体のどこかがその青白い亡霊たちをかすめるのだった。ディビッドは自分の皮膚がおぞけだつのを感じた。冷たいものが背骨の根っこから首までちくちくとした痛みとともに上って行く。

彼は自分が悲鳴をあげるのを感じた。すると亡霊たちはその汚らわしい叫び声で答えるのだった。だが彼の心はどこかに遠ざかってゆき、その痛みや悲鳴、そして恐ろしい光景からどこか深くうずもれた場所へと、心の奥へと向かってゆくのだった。

生体椅子にたどり着いてログイン処理が始まったころ、ディビッドはすでにそこにいなかった。

「偉大な組織を形作る信念はしばしば、たった一人の個人の自信と経験から生まれる」

――トーマス・ワトソン・ジュニア

第十四章

西暦29475年　惑星ルビカ

彼はほとんど夢を見なかった。

彼が眠っている間は（確かに眠る時間は少ないほうだったが）、その体の移植臓器（インプラント）が無意識に働きかけることにより、前日の出来事の分析などを行い、最新の政治情勢を取り込み、事実と推測をないまぜにして理解するのだった。彼の魂の中には、率直にいって夢のための余裕はなかった。それに、ときおり彼も夢見ることはあったが、その夢はいつも実用的なものであり、建設的で抑制されたものだった。なのでこんな夢はみたことがなかったのだ。

フィリップ・ロスは世界を見ていた。ロスがいつも自分のものだと思っていた世界を、彼は誰かの視点を借りて見ていたのだった。それは美しかったがぞっとするような眺めだった。まるで野生の動物を見ているようだった。美しかったがどこか痛々しかった。

直接自分が手を下していたのかどうかわからなかったが、彼がその痛みの大きな原因だったのだ。

その朝、いつもと同じようにロスは軽めの朝食を机で取り、ティアの街の現地からのニュースを見た。それはいつものようにクラン反乱軍びいきの編集部による偏った内容だったが、彼はそれを発禁扱いにしようとは一度も考えたことがなかった。彼はいつも社の部下たちに対して、現在の出来事に対して一つの意見に固執しないように、そして自社の放送番組だけにこだわらず、惑星ルビカの住民に対する理解をより深めることができるようにすべきだと言っていたのだった。

そしてロスは、口に出したことは実行する男だった。

それに加えて、クランのエンターテイメント番組はオムニ社のよくできてはいるが面白みのない番組よりもずっと面白いと言えた。クラン番組にはきらびやかな映像も、魅力的なアナウンサーもいなかったため、聴衆に満足してもらうために、より内容を充実させなければならなかったのだった。だが不思議なことに、この海賊中継は、オムニテック社の超高給の人気キャスターたちが放映する番組よりもずっと面白い内容のものを放送していたのだった。

ひょっとしたら彼は本気で、この番組のディレクターたちと話し合わなければいけないのかもしれない。もしかしたらクラン放送局の人間から引き抜いてもいいんではないだろうか？おそらく駄目だろうが、やってみる価値はあるかもしれない。

だがこういった気晴らしをしながらいつもの朝を迎え、たまっている仕事のことを考えていても、彼の心はあの夢について考えはじめるのだった。北部地方で起こっている事件についての考えはまとまっており、また彼の敵を理解し、常に分析を続けなければいけないという責任感はあったのだが、彼はニュースにも朝食にも集中できなかった。彼はいつも同じところに、自分が見て聞いてしまったもののことに戻ってゆくのだった。

ロスはこれまで夢といった取るに足らない事象について考えつづけたことなど一度もなかった。それは本当に時間と労力の無駄であると思えた。だが今回はなぜか違ったのだ。なぜな

ら彼は自分がまるで予知夢を見たように思っていたからだった・・・だがそれはばかげた考えだった。しかし夢はどこかから来たのであり、おそらくは彼の一部分はそれについてずっと考えつづけていたのだろう。それはたぶん、これまで彼の中に根付くことがなかった何かなのだ。

結局のところ、彼は自分の支配している民衆のことをいつも考えていたのだった。だが彼は自分を彼らの立場において考えられたことがなかった。おそらくそこに彼の一番の弱点があるのだ。

彼はセラミックの食器を向こうに押しやると、ナプキンで口を拭った。輸入もののコーヒーカップは口をつけずにおかれていた。カップには芳醇で香り高い黒い液体が湯気をたてている。彼の地位から得られる利点はもちろんあったが、彼はそれを必要以上に悪用しないよう細心の注意をはらっていた。食事は彼が自分に許したほとんど唯一の贅沢といえた。だが彼は小食だったので、それも頻度は少なかった。

「電源を切れ」彼は言った。するとチャンネルは切断され、彼は完全な静けさに包まれた。

彼は椅子を回転させる。街は今日渋滞しているようだった。もっともこの建物のそばでは渋滞はありえなかった。保安上の理由のため、この建物の近辺は厳重に警備され、車の飛行は一切許されていなかった。窓には雨が叩き付けられるように降っており、視界は限られていた。どこかで事故があったのかもしれない。交通制御システムはすべて自動化されてはいたが、それでも無茶なパイロットは、自分の能力を過信して手動で車を動かそうとするものだ。

ロスは旅行するときはいつも陸路だった。彼は急ターンや急降下が多いオムニ－１の空の交通経路があまり好きではなかったのだ。それに実際のところ、心の底ではロスは都会派ではなかった。彼は田舎の清浄な空気と、広々とした野原のほうが好きだった。惑星ルビカには自然はありあまっていたが、不幸なことに彼自身はそれを楽しむ機会があまりなかった。彼の人生は均一で都会的であり、鉄とガラスとプラスティックでできていたのだ。

この暗い建物郡を抜けて、荒涼とした摩天楼の下をくぐりぬけた向こうには、彼にとっていまだ未知の広大な世界が広がっているのだ。人々が生きてそして死んでゆく世界が。この惑星は彼だけのものではなく、人々のものでもあったのだ。だが彼はその重要性を理解することができなかった。彼らのこの惑星に対する愛と情熱の大きさは、彼には理解できかねた。

クラン反乱軍たちはテロリストなのかもしれないが、その信念はゆるがなかった。彼らは自分の星を愛する者たちなのだ。クランは、正義は間違いなく自分たちとともにあると考えていた。

信念というものは、おそろしく重要なものなのだ。彼はしばしば、オムニテック社は信念を欠いていると考えることがあった。

小さな警備艇が彼の部屋の窓のそばをゆっくりと飛んでいく。すべすべとした黒い車体を避けて雨が落ちているように見えた。それは背後の単調な景色に溶け込み、ほとんど透明に見える。カメレオン技術の一種で、その強力な火力を近距離で使役するために発見されにくく作られているのだった。彼はそういった高性能の機械に囲まれていることを感謝すべきなのだろうが、そういう気にはなれなかった。それは彼が一切関与したくないと思っている戦争のことを思い出させた。それにも関わらず、彼が毎日戦わなければならない戦争のことを。

それは難しいとしかいえないのだった。誰にもその難しさはわからないだろう。彼は子供を殺したし、彼の命令によって家族が引き裂かれ、善良な市民は家をなくし、混沌と破壊、そして死の原因が作られているのだった・・・だが何のために？　どういった目標のために？　暫

定的な休戦協定をクランと結んだとしても、すぐにまた敵意がその醜い鎌首をもたげるのだった。一発の銃声、侮辱の一言が民衆を激昂させ、休戦が破られすべてが振りだしに戻るというわけだった。

　それが戦争だった。

　うまく言葉にできないがそれは本当に・・・非生産的だった。ロスは自分がそれをクランのせいにしていることを認めないわけにはいかなかった。頭に血が上った反抗的な連中であるクランにとって、妥協は選択肢ではなかったのだ。彼らはオムニテックから自由になりたがっていた。それが不可能であることを理解できずに。彼はこの連中と交渉する準備はできていたが、彼らの要求は理不尽なものだった。彼らは外交を望んでいなかったのだ。その望みは勝利であり、完全かつ完璧な勝利以外は認められなかった。

　彼はその人生の中で初めて、その理由を理解した。夢のせいだ・・・。

　彼は立ち上がった。雨はこれまでになく激しく降っており、五十メートル先がもう見えないほどだった。彼は自社がいつちゃんとした天候操作システムを作るのだろうかと考えたが、自分自身この予測できない天候を楽しんでいることに気が付いた。そういったものが人生をより面白くするのだ。それはフィリップ・ロスの生まれ故郷である地球のことを思い出させたからだ。

　故郷（ホーム）か。

　それは奇妙な概念ではあった。その単語はいつもおかしなタイミングで頭をよぎるのだった。故郷とはいったいなんだろう？　なぜ彼は、自分がこの仕事を選んだときに捨てたはずのものを、何度も思い出すのだろう？

　彼が見た夢は故郷についてだったが、彼が生まれた場所についてではなかった。その夢は惑星ルビカについてだったが、それは彼の支配するルビカでもなかった。そこには家族もいたが、彼の家族ではなかった。彼は天涯孤独だった。もう誰もいないのだ。会社の人間は家族ではないし、彼が夢に見た家族はそんなものではなかった。この会社では何の愛もなく、ただ義務があるだけだった。情熱はなく、ただ恐怖があるだけだった。そこには犠牲といったものは存在せず、もしあるとするならばそれは後ろから刺すナイフや強欲さのことを意味していた。

　この会社では誰一人として他人のために自分の人生を捧げようなどとは思わなかった。そんなことは直接命令されたのでなければ誰もやらなかっただろうし、それも服従しなければ死よりつらい運命が待っているという前提においてだけであっただろう。

　だが彼の夢では・・・その夢の中では・・・。

　警備艇はスピードを上げて遠ざかっていった。遠方への指令があったのかもしれないし、ひょっとしたらこの地域は安全なので別のところを見回りすることにしたのかもしれなかった。

　ロスは広い仕事部屋にまとめて設置された家具の脇を通り抜すぎ、保安アンドロイドと向き合った。その生気の無い眼は部屋を休まずに監視しつづけていた。その視界は外の雨で曇ることはなかった。おそらくその目には晴れているときと同じような視界が広がっているに違いない。

「田舎で散歩したいと思うときはないのかね？」彼はそのモノに聞いた。「ピクニックだよ。家族や親しい友人とだ。北の湖に泳ぎに行ってもよいし、夕日を見たり、洞窟を探検したり、狩りをしたり・・・」アンドロイドはそのセンサーの注意をロスに向けることすらしなかった。

信念とはなんだろう？　信念が正義を作るのだろうか？　間違っているのは彼の信念なのだろうか、それともクランの信念なのだろうか？　誰が間違っているのだろう？　すべての破壊とすべての死の責任は誰に帰せばよいのだろう？

彼は保安アンドロイドをにらみつけた。アンドロイドは、いつまでも続く戦争のことを彼に思い出させる程度の役にしか立っていなかった。いま現在も、遠方で広がりつつある前線では、少なくない紛争の水が湯気を立てており、誰かが温度を少し上げればいつでも沸騰し吹きこぼれるだろう。

「下がれ」彼はそのモノに言った。「出て行け」

アンドロイドは何も答えなかった。そうはできないことを彼は知っていた。それは彼のそばを離れないようにプログラムされているのだ。だがそれを知っても、彼の怒りはおさまらなかった。

「出て行け！」彼は叫んで、その体をどんと押した。アンドロイドは完璧に体のバランスを保ちながら、部屋に危険がないかどうか探りつづけるのだった。彼は無視されていた。

エレベーターのドアが開いて、二人の人間の兵士が部屋の中へと駆け込んできた。二人は重装備で銃をかまえ、いつでも撃てる体勢だった。眼がぎらぎらと飢えたように光っている。

ロスには二人の見分けがつかなかった。

「大丈夫ですか？」警備兵Aがロスを見て言った。彼は銃口を部屋のあらゆる方向に向けつづけていた。もう一人も同じことをしていた。この連中はアンドロイドと同じだった。どちらかというとアンドロイドよりも悪かった。この二人には何の言い訳もないからだ。

「大丈夫だ」彼は言った。「戻っていい」

二人は疑わしげに彼を見た。まるで彼が脅迫されており、本当のことを言っていないとでもいいたげだった。

「本当ですか？」警備兵Aが言った。「私たちは保安ユニットが攻撃を受けたという記録を検知しましたし、誰かが叫んでいるのを聞きました」彼はロスを通り過ぎて家具のほうへと向かった。「あなたはここで一人でしたか？」

警備兵Bは彼が答える前に近づいてきて言った。「ドアから少し下がっていただけると助かります」

「なぜだね？」ロスは聞いた。だんだん疲労を覚えてきていた。

「このオフィスは危険かもしれません」

彼は冷たく二人に言った。「私のオフィスに危険は無い。私の『保安ユニット』は攻撃を受けていないし、私も攻撃されていない。叫んだのは私だ。そのロボットを押したのは私だ・・・いますぐにここを出て行ってくれたまえ」

二人の兵士たちは顔を見合わせると、彼のほうをまた見た。二人は非常にがっかりしたようだった。

「なぜ保安ユニットを攻撃したのですか？」警備兵Aが聞いた。

「なぜ叫んだのです？」警備兵Bが聞いた。

ロスは頭を振った。「もういいんだ。さがってくれ」

二人の警備兵は明らかに銃を何に対してでもよいから撃ちたがっているようだったが（ロスは一瞬、もし指示を出せばこの二人はアンドロイドを喜んで撃つのではないかと考えた）、いやいやながらその場を立ち去った。エレベーターのドアが再び閉じる。そのドアは彼のオフィ

スへと通じている唯一の入り口だった。彼はいつもこういった保安上の規定が、こんな建物の中でも必要なのかどうかいぶかしんだものだった。彼は檻の中に、テクノロジーで守られた牢獄に閉じ込められているように感じた。
　彼には自由などなかった。
　いつもであればこんなことは気になどならなかった。だが彼の見た夢はあまりに鮮明で影響力が強く、あまりにもくっきりと残っていたため、心からいつまでも去らないのだった。
　彼は自由についての、奪われた自由についての夢を見たのだった。

　男が、緑と金の色で縁取られた白い景観の町を、崖の上から見下ろしていた。青々とした緑がまだらに砂漠に散らばっている。緑のオアシスが不毛な砂の中から生まれていた。双子の太陽は彼の頭上高くに輝いている。男はその二つの太陽がいつも一緒に行動していることを知っていた。太陽はシャムの双生児の、お互いを重力の抱擁で永久に縛りあっているのだ。空は真っ青な青色だった。それは異邦の青だった。
　彼は両手を顔の前に持ち上げて、手のひらをみた。それは奇妙な感覚で、まるで自分の手ではないようだった。彼はその場所を誰か別の人間の目で見ているようだった。だが彼は熱い砂漠からの風を頬に感じられたし、緑蒸すオアシスの匂いを鼻に感じることができた。また服のごわごわとした生地を手で触れることもできた・・・どんなシミュレーションもここまで現実に似せることはできなかった。
　ここまでリアルなものは現実だけだ。少しずつだったが、夢は必然的に現実へと変わっていった。
　彼はその分身の中にいた。男の思考や野心、そして希望と夢・・・それはもう彼自身のものとなっていた。
「オムニの怪物どもは呪われるがいい」彼は、本気でそう言った。「私たちの住む世界をどれだけ傷つければ気がすむのだ」
　彼はその男が見ていたものを、本当に見てしまった。
　地平線に煙が立っていた。なだらかな丘陵の向こうに、ぼろぼろになった煙突から立ち上っているかのような、黒く太いもくもくとした煙が一本立ちのぼっていた。彼はそれが何を意味するか知っていた。
「奴らが基地を攻撃したんだわ」彼女が言った。
　彼は後ろを振り向いて妻を見た。妻はおびえており、同時に怒っていた。彼が手を伸ばすと、妻はそれを握り締めた。妻は感謝の眼差しで彼を見る。二人はそうして昼の見張りを終えて、一緒に帰ったのだった。
　丘の向こうのどこかで、皆の希望は少しずつやせ衰えていたのだった。彼らはもう長いこと戦わずにすんでいたので、まるで自分たちが自由になったかのように思っていたのだった。自分たちが自由に生きることができ、子供達を育て隣人たちと助け合い、確かな未来を築くために共に働くことができるのだと思っていたのだった。
　彼らは戦争に関わっていなかったし、過去にそうしたこともなかった。彼らはただの農民だった。彼らはクラン反乱軍の言い分には同情的だったが、その手段までは認めていなかった。だが、状況が逼迫してくれば、彼らもただ唯々諾々と従うことはない、ということも確かだった。彼らは自分たちがその手で作ってきたものを守るだろう。自分たちの町を、畑と資産を守

るだろう。いまこうして丘の向こうのどこかで、彼らの子供たちがそうしているように。
　彼らは戦士ではなかったが、もしやむにやまれぬ事情があれば、立ち上がって血を流して戦い、クランたちと共に死ぬこともできるだろう。彼らもオムニテック社が大嫌いだった。それは彼らがその企業政治にどうしても納得がいかなかったり、また権力を望んでいるためではなかった。またそれは投票権を求めたり、社会に自分達の存在を知らしめたいからではなかった。違うのだ。彼らは干渉されない生活を望んでいたのに、オムニテック社がそこに戦争をもたらしたがゆえに憎んでいたのだった。
　オムニテック社は彼らから自由を奪おうとしていた。
「イザム」妻は言った。それは彼の名前だった。「イザム、どうしたらいいの？　もし次にやつらがここに来たら？　キリアンは大丈夫かしら？　ちゃんと撤退できたと思う？」
　それはないだろう、と彼は思った。彼の息子は決して撤退したりはしない。
「わからない」彼は言った。そしてそれはほぼ真実だった。
「やつらはなんでやめないの？」妻はそう言ったが、その声は泣いているようだった。だが妻の顔を見た彼は、一滴の涙も見つけることができなかった。その表情は厳しく、握り締めた手には力が入っていた。
「やつらが外道だからだ」彼は言った。そしてそれは奇妙な感覚だった・・・彼の一部はいまだフィリップ・ロスであり、彼の分身（アバター）であるイザムの目を通してそこに存在していたからだった。「やつらは我々全員を殺すまでやめないだろう。やつらは平和が嫌いなのだ。支配しなければ落ち着かないのだ。やつらは私たちが這いつくばって敗北を認めることを望んでいて、私たちに奴隷になってほしがっている。だが私たちはもう奴隷ではない」
「だけどどうすればいいの？　やつらと戦うことは無理よ、イザム」
「エリン、私たちは戦っているよ。息子たちもやつらと戦っている。この戦いには勝てないだろうが、戦争にはいつか勝つ。私たちは決して屈しない」
「あなたは死の覚悟ができているのかもしれないけど、キリアンが死んでしまってみいの？
あなたは私たちが作ったものすべて、持っているものすべてを戦争に勝つための犠牲にしようというの？　イザム、あなたは私も犠牲にしようというの？」
　イザムは妻エリンの顔を見た（ロスはその見知らぬ男の目を通して、もう一人の見知らぬ女の顔を見た。その中年女性はよく日焼けした肌と黒い髪の毛を持っており、その表情は絶望で疲れていて、目の周りの皺には不安が刻み込まれていたが、まだ彼女は驚くべきほど美しかった）。彼はその頬に優しく触れた。
「私は君に死を求めたりはしない」彼は言った。
「だけど、あなたは私に、夫と息子が死ぬのを見ていろというのでしょう？」彼女は言った。「オムニたちが私たちの家と農地を焼き尽くすのを見ていろというのでしょう。降伏よりも戦いを選べというのでしょう。イザム・・・あなた・・・私たちは勝てないわ！　死ぬことには何の勝利もないのよ！　やつらは無理難題を要求しているのではないわ。やつらは私たちが降伏すればそっとしておいてくれるわよ」
「エリン、何に対して降伏するというんだ？」彼は苛立ちを隠すことができなかった。その意見にも一理あると気がついていたからなおさらだった。「奴らに屈して奴隷になるのか？　無理やり移住させられるのか？　私たちの土地と仕事を捨て去って、オムニテックに私たちの運

命をまかせようというのか？」彼は頭を振った。「妻よ、それは出来ない相談だ」

　妻がそれに答えようとしたとき——どちらにせよこの話の流れでは否定的な意見以外の何物でもなかっただろうが——丘の向こうでまぶしい円錐形の光が空に向かって放たれた。半透明のその光は反対側の空を歪ませ、それは緑の斑点が広がる砂漠の上に急速に広がりつつあった。

　それは最初音もなく広がっていたが、やがて目もくらむ光の円錐がたくさん近づいてくるにつれて、雷のような音が聞こえてきた。それは小さくなることなく、どんどんその音量を上げていった。

　イザムは本能的にしゃがみこみ、妻をひきよせた。

　音はとてつもない大きさになった。

　その光の壁が風に散らされる朝霧のように蒸発したとき、それは二人のすぐ上まで来ていた。光の消滅とともに、音も消えていった。

　二人はもうしばらくの間しゃがみこんでいた。妻が泣いていることに気が付くまで、一分ほどかかった。

「みんな」彼女の口調は苦かった。「死んでしまったわ」

「キリアンはまだ・・・」

「キリアンも死んだわ」彼女は答えた。「やつらはすべて破壊してしまった」

「逃げていたかもしれない」彼は続けたが、それが正しくないことを知っていた。イザムはそれを知っていたし、ロスも知っていた。自分の息子のことを（彼の、ではない。イザムの息子だ）よく知っていた彼は、キリアンがオムニに降伏するぐらいなら死を選ぶであろうことを知っていたのだ。

「すべて」彼女は繰り返した。「あなたの犠牲になったのよ」

　彼は立ち上がった。あたりはぞっとするほど静かだった。たったいま目撃したあの完全な破壊は、この世界に何も残さなかったように思えた。少なくともここには。だがあの広がる丘陵の向こうでは、街の見張り台に守られた基地があるはず、いやあったはずだった。そこで若者たちは違法な銃器を用いて、北からやってきたクランのメンバーたちに厳しい訓練を受けていたのだった。感受性の高い若者たちはそこでイデオロギーや政治の議論を戦わせていたのだった。

　この丘の向こうでは、戦争の爪あとは今後ずっと残りつづけるのだろう。

　そして彼は大声で叫んだ。その絶望の叫びは丘や街の城壁を越えてこだまし、人々から同じような叫びを引き起こした。それはかつて自由であった男たちや女たち、決して望んだわけではない戦争に、無力なため巻き込まれてしまった人々の叫びだった。

　足元では妻が泣いていた。

　もはや中立な立場（ニュートラル）などありえなかった。

　そしてその声は彼の頭の中でこだましつづけた・・・。

　フィリップ・ロスは戸惑うように、顔を上げた。すると目の前に彼自身の姿が映っていた。オムニ−１の上空にかぶさった黒い影にできた割れ目から顔を出した二つの太陽のぎらぎらとした光を防ぐために、ガラスは暗く色を変えていた。彼のおぼろげな写像が、どこまでも広

がる街の上に重なって浮かんでみえた。
　彼は白昼夢を見ていたのだった・・・いや、どちらかというとあのひどい夢をもう一度見ていたかのようだった。なぜあの夢のことをずっと思い出しているのだろう？
　静かな声がどこかからか響いてきて、彼はようやくそれに気がついた。「エヴァ・プーレ様がお見えになられています」
　彼は気持ちをあらためて、インタフォンに答えた。彼はミーティングの予約があったのをほとんど忘れていたのだった。エヴァは一週間に一度しかないミーティングの機会を逃すことを快く思わないだろう。それにこのミーティングは特に重要だったのだ。

「どうしたの？」エヴァは二つの来客用椅子のうちの一つに座るとすぐにそう言った。彼女がいつも同じ椅子を選んで座っていることにロスは気がついた。決めたことはずっと守る彼女の性癖なのだろう。「眠れなかったように見えるわ。悪い夢でもみたの？」

　ロスは心の中で歯を食いしばった。彼はこのオムニ更生省（リフォーム）の長に敬意を払ってはいたが（結局のところ、任命したのは彼自身だった）、もっと深い本能的なところではロスは彼女を恐れ、同時に軽蔑していた。彼女は彼とはまったく正反対の人間だった。ぶしつけなまでに傲慢でうぬぼれており、特別扱いされつづけなければいけない・・・だが、さまざまな面において、二人は良く似ていた。高い知性と優れた感性を持ち、カリスマ性を兼ね備えていた。正反対ではあったが、二人は同じコインの裏表のようなものだったのだ。ロスは二人の関係が良好なのはそのせいではないかと思っていた。
　エヴァがこれほどまで勘が鋭くなければ、そして歯に衣を着せないタイプでなければよかったのだ。組み合わさったその性癖は不愉快なものだった。
「眠れなかった」彼は答えた。「考えることがたくさんあってね」
「そうでしょうね」エヴァはそう言うと、探るように彼を見た。ロスは落ち着きのなさを感じたが、視線を逸らすことはしなかった。彼には良くわかっていたのだ。
　数秒の間のあと、彼女は微笑んでうなずいだ。「さて、それじゃあ短い報告と長い報告と、どちらがいい？」
「聞く必要があるのかね、エヴァ？」
　彼女は笑うと、長い報告をはじめた。彼は熱心に耳を傾け、必要な情報を自分のデータバンクにしまいこみ、不必要なものはそのまま寝かせておく。
　エヴァはほんの数日前に開始したばかりの、最新の広報キャンペーンについて話した。それは恩赦をすべての人に与えるというものだった（もちろん、指名手配になっている犯罪者を除いてだ。新聞のちらしや広報掲示板、また放送局で流されつづけている恩赦の内容に関わらず、テロリストとされる個人については、身分が特定出来次第、即逮捕することになっていた。結局のところ、オムニテック社は殺人者たちを街中に野放しにする気はなかったのだ）。恩赦は、武器を捨てて一番近いオムニテック受付で登録を済ませた者すべてに与えられた。反発はほとんど予想されておらず（少なくともほとんどのケースでは）、暴力も必要なくなるはずで、そもそもの計画はそうだった。
　もちろん、すべてがそのようにうまくいくわけではない。
「私たちの提案に対しては、過激な反応がいくつかあったわ」エヴァは言った。「私たちはそ

れぞれのマーケットに合わせて提案を作った」（エヴァは社会学的な政策について、まるで広告について喋るように話した）「そしてその情報の爆弾を各地域に投下した。各地域の田舎者たちにもっともよくわかるような形でね。だけれども、一つ大きな不信という問題があると思ってるわ。たとえば・・・」彼女は言葉を切って、彼を見た。
「なんだって？」彼は言った。
「明らかに」彼女は続けた。「クランたちはすぐには餌に飛びつかないようね」
「『餌』という言い方はやめてもらいたい。エヴァ、私たちが自分の目標を信じなくて、いったい誰が信じるというのだ？　私たちは物事を落ち着かせようとしているのであって、怒らせようとしているのではない」
「でかい魚である犯罪者を釣り上げる目的もあるわ」彼女は言った。「ロス、正直になりましょう。これは慈善事業じゃないわ。すべての大小さまざまな反乱軍のメンバーが皆一列に並んで、高価なマシンガンや手榴弾をこちらに差し出してくれる代わりに、私たちが彼らを許して、皆は平和に暮らしました、なんてことができればすべてが丸く収まるのは間違いないのよ。だけど実際のところは、もっとも悪質なアナーキストたちを見つけ出そうとしているわけでしょう・・・彼らのことを本当によく知ることができるようにね・・・それ以外のことはただのおまけみたいなものよ。だけれども」彼女は続けた。どうやらこれからがポイントらしい。「そのためには、もっとも疑い深い連中にも、この提案を受け入れてもよいんではないかと考えさせることが大事よ。このいわゆる餌に食いつかせて、不信感という大きな問題を解決しなければならないわ。それに、他にも問題はある」
「他にどんな問題があるというのだ？」彼は聞いた。彼はエヴァの思うとおりに反応している自分に気が付いていたが、どうでもよかった。彼はゲームに疲れていたのだ。
「はっきりとしているわけではないけれども・・・猜疑心は、非常に人間らしい犯罪の元になっているようね」
「エヴァ・・・もう少し説明してくれ」
「クランのメンバーの一部は激怒したようなのよ、ロス。彼らは激しく怒っているわ。あなたを暗殺しようという計画もある」
　ロスは笑った。それが可笑しかったからではなく、オムニ更生省の長が、彼の死を望むものがいると警告している状況が奇妙だったからだった。もちろん、皆が彼の死を望んでいるに決まっている。何百万もの人々が、彼がこの役職について、惑星ルビカのオムニテック社の業務を取りまとめるようになったその日から、ロスの死を望んでいた。彼はむしろ暗殺の計画がこれまで一度もなかったと知ったら驚いただろう。
　彼がそう言うと、彼女は首を振った。
「誤解しないで」彼女は言った。「これは単なる願望じゃないわ。あなたに死んでほしいと口で言うのと、実際に行動を起こすのはまったく違う」
「何らかの行動を起こしている者がいるというのか？」彼にはよく違いがわからなかった。彼はいつでもそういった暗殺計画があるものと思っていたのだ。この仕事を引き受けたときから、その覚悟はできていた。

「そうよ」彼女は言った。「その誰かは『新しい夜明け（ニュードーン）』から派生したグループの人間らしいわ。グループは活発に戦闘を行っており、おそらく総勢二百人程度で、アセンの南西のどこか

都合のよい場所に基地を作っている。居住には向かない地域で、たくさんの廃坑とゴーストタウンに囲まれている場所よ・・・クランのねぐらには最適の場所ね。ここしばらくその地域を掃除するための活動をしていたのだけど、彼らはなかなか優秀だわ。兵士たちはよく訓練されているし、ゲリラ戦術にも長けている。しばしば川を越えて南へ進軍し、すぐに攻撃し、すぐに撤退できる」
「どこにでもある反乱軍グループの一つにしか聞こえないが」彼は言った。「そのグループの何が特別なのかね？」
　エヴァはそれが二人だけの内緒話であるかのように体を乗り出した。「やつらの組織は優秀で、その地域のＯＴ社の動きをよく把握しているわ。私はやつらがどこからその情報を得ているのかわからないけど、それを見つけるつもりよ」彼女は一呼吸置いた。「やつらの内部にスパイを一人入れているのよ」
　ロスは感嘆したというように眉毛を上げげた。過激派のクランたちの中に忍び込むのは容易なことではなかった。その壁は普通堅固で、外部の者を信じることはほとんどなかった。ありえない話だった。
「このスパイは」彼女は続けた。「定期的に報告をあげてくれるわけではないわ。それは危険すぎる。男か・・・女か知らないけれど——私は実際にどんな人間だか知らないのよ——この人物の使命は、ＯＴ社の内部から情報を漏らしているのが誰か調べることで、反乱軍の一味の活動を妨害することではないわ。私たちは自分たちの組織の穴を塞ぐためにこの反乱軍を利用しているわけ。そしてそれが終わったら・・・」彼女は微笑んだ。「ボタンを押して、さようなら。このスパイは」彼女は彼が何か言うまえに続けた。「更生省の社員なのよ。そして私が関わっている理由は、情報が漏れている元がどうやら私の省だからよ。つまりそれは私の責任というわけ。誰だか知らないけれども、その裏切り者は社のはしごを高く上りすぎたわ。降りることができないところまでね」
「その漏れの元を断つことはわかった」ロスは言った。「だが私はそれが暗殺計画とどう関係があるのかわからない」
「昨日私たちのスパイから暗号化されたメッセージを受け取ったわ。いつもやることじゃないのよ。危険だから。だけどどうやらそれは危険を犯す価値があるものだったのよ」
「なるほど」彼は言ってうなずいた。
「メッセージには詳しいことは書いてなかった・・・おそらくその計画は部隊の中でも秘密扱いなのよ。そしてわかったのは貴方がターゲットだということで、計画は実行に移されているということ。実行部隊はたぶん少人数で、目立たないように徒歩で旅をするか、公共の乗り物を使うかしているはずだわ。途中で捜査されてつかまりたくないでしょうから」
「私たちのデータベースに記録が残っていると思うか？」
「ほぼ間違いなく。少なくとも犯罪予備軍としての登録はされているはずよ。だからもし彼らがオムニ－１に近づいたら、すぐに尋問することができるでしょうね。だけど、もっと古臭い手段で移動している場合や、変装している場合はその限りではないわ。その場合彼らは気づかれずに街に入ることができるでしょうね。だけどここまで来るにはかなり時間がかかるはずだし、ルビカも彼らにとって居心地のよい場所ではないでしょうしね。それでも・・・彼らは最高に訓練された兵士たちに決まっているし、私は彼らが今週中には来るのではないかと思っているわ」

　ロスは立ち上がって、部屋の中を歩きまわりながらこの問題について考えた。彼自身について言えば、ほとんど何も心配はいらなかった。彼の警備は完璧であり、街は軍隊と警備兵によりがっちりと守られていた。この反乱分子が誰であろうと、またどういった装備をしていようと、どんな人物に変装しようと、彼らはこの建物の中に入ることさえできないだろう。たとえ入ることに成功したとしても、ロスの警備兵たちも倒さなければならない・・・さらに、彼はつぶやいた。あのいまいましい保安アンドロイドもだ。ひょっとしたら、あのアンドロイドの価値を知るいい手段かもしれない。
　いや、と彼は結論づけた。何一つ心配することはない。
「何を考えているかはわかるわ」彼女は彼が座るのを見て続けた。「そして、それにある程度は同意するわ。街を絨緞爆撃でもしないかぎり・・・そんなことはそもそも不可能だけれども、この計画が上手くいく可能性はほとんどないでしょうね。だけど可能性はゼロというわけではないわ。ロス、更生省はあなたという存在が生きていることが必要なの。私たちが貴方のイメージを良くするための活動を本腰ではじめてから、貴方の支持率は目に見えて上昇したわ。貴方の権力に対して、人々は好意的に受け止め始めているはずだし、いまそれをすべて失うということは・・・」彼女は頭を振った。「何年も後戻りすることになるわ」
　ロスはほとんど感嘆していた。エヴァは彼が生き残ることを、単なる支持率に対する影響という観点でしか見ていなかったからだ。彼は広報のための道具以上のものではなかった。
　エヴァ・プーレは、確かにオムニ更生省がもっとも必要とする長官と言ってよかった。彼女と比べたら、ロスは大甘のリベラルに過ぎなかった。
「つまり？」と彼は聞いた。心の中で日々の仕事に影響がなければよいと思いながら。
「つまり、明日から貴方の警備をさらに厚くしなければならないということよ。それと、貴方の行動を制限もしなければいけないわ。この建物を出てほしくないの。だけれども」彼女は妥協した。「これは私の担当じゃないわ。警備部が具体的な指示を出すはずよ。更生省の立場としては、貴方の安全がきちんと保たれて、必要な広報を今後もしてもらえることが大事なの。それに皆が、貴方が恐れていると思って——」
　フィリップ・ロスはマホガニーの机に拳を叩きつけた。
　その瞬間保安アンドロイドの頭部はその方向に急回転した。だが警備機械はその場所から動かなかった。エヴァはほとんどすくみもしなかったが、その目は可能であれば外へ逃げ出すために、ドアとの距離を計るかのようにちらちらと動いた。
　彼はまだ彼女を驚かせることができた・・・だが、正直なところ、彼は自分自身の反応に驚いていた。彼は自分が最後にこんな気持ちになったのがいつだったか思い出せなかった。やるせない怒りが、苛立ちと後悔と交じり合っていた。
「私は恐れてなどいない」彼はかみついた。
　その考えは彼という人物にとって、彼の倫理にとっての侮辱そのものだった。いったい何を恐れるというのか？　なぜ彼が恐れなければいけないのか？　恐怖そのものが、恐るべき最悪の敵だった・・・恐怖は自信のなさを産み、自信のなさは暴力を産み、暴力は戦争を産むのだった。
「私はクランどもに自由を与え、この抗争を平和的に解決するための機会も与えてきた。私が自分の生命を守るために、過激な手段を取るのは間違いだ。あの・・・」彼は言葉を捜した。「あのごろつきどもの警備は問題を悪化させるだけだ！」

「もちろんです」エヴァは言った。突然感情を爆発させた彼に対し、彼女は驚くほど平静だった。「そのとおりだと思いますが、どうするのですか？」

「私は外に行く」彼は静かに宣言した。そしてこの突然の決意は、エヴァの提案をすべて断ることになるし、自分の判断ですら裏切ることになるのだと気が付いて彼は二度驚いた。どうやら今日は驚くことがたくさんある日だった。

　夢で見たものと関係があるのだろうか？　本当に何の関連もないのだろうか？

　彼はその考えをわきにどけて続けた。「私は単なる仮定や脅迫により拘束されることを拒否する。また彼らが私を怖がらせるからといって、隔離されることも拒否する。それとあのモノだけが」（彼はアンドロイドを指差した）「私の話相手だというのはごめんだし、行動を制限されるのも論外だ。私はあまりにも長いこと一人でいすぎた。私は守られていたが、それは物理的な脅威からだけだった。その外に出ることができなければ、私の被害妄想が私を殺すだろう」彼は窓の外に見える、オムニ－１の暗い摩天楼と、そこを飛び交う飛行機を手を振って示した。

　エヴァは蒼白になった。「それは良い考えではありません」彼女は説得しようとした。「もし大衆の前に姿を見せるのであれば、私の省がその仕事を・・・」

　彼はまた彼女をさえぎった。「公に姿を現すつもりはない、エヴァ。外にはどこにでもいる一般人のように出ていって、街の通りを歩いて、その風を浴びながら観光をするつもりだ。このオフィスに閉じ込められているのはもううんざりだ。ここはひどく疲れる・・・クランたちは私のことを怪物だといっているが、ここにいるとそのその怪物になってしまいそうだ。あれだよ」また彼は命の無いボディーガードを指差した。「あのプログラムされた自動機械になってしまう」

　エヴァはため息をついた。フィリップ・ロスが決断を下したとき、それに反論することが無駄なことを彼女はよく知っていたのだ。

「少なくとも警備兵と保安アンドロイドを連れていってください」彼女は言った。「それに放映クルーも準備させてもらいたいわ。もし本気で外に行きたいなら、この機会を使ってすごい番組が作れるかもしれない。たとえば、ＯＴチャンネル用にだけれども、貴方が一般人の太郎さんや花子さんと触れ合う機会を求めているという趣旨のものとか。いいわ、大衆受けするような内容のものを複数の報道チャンネルで流すことだってできるかもしれない」彼女は明らかに元気づいていた。鮮烈な虚像を作り上げるという考えは、彼女にとってはどうあっても逃すことができない機会のようだった。「いくつかの反乱軍の放送局にそれを流させることだってできるわ——私たちと密接な関係にあるいくつかの放送局でね——そこでクランのコメンテーターたちに、いくらでも好きなコメントを流せればいいのよ。そういったまともなＰＲ番組が悪い印象を与えることは少ないわ」彼女は肩をすくめた。「私たち自身でもその番組は流せるでしょうし、クランたちにはそもそも繊細さや、メディアに対する知識がないわ。だけどこれは彼らも放送したがるでしょうね。これは私たちにとっていい番組になるわよ。それに、こういった時代ではいいことがいいのよ。そういうものが必要なの」

　彼はその独白を聞いてますます不機嫌になった。彼女は彼の頑固さを上手く迂回する方法をいま見つけたようだった。彼女にかかるとまるで彼の外出はそもそも彼女の考えであり、またしてもエヴァ・プーレが監督する更生省の効果的なキャンペーンの一種であるように聞こえるのだった。私たちの指導者は人民の中の一人！　暗殺計画なんてどうでもいいじゃないか、こ

れでＯＴ社の支持率はまた上がるのだ！
「だめだ」彼は言った。「レポーターもカメラも、警備兵も特番もなしだ」彼はじっと警戒を怠らないロボットに対し、まずい顔でうなずいた。「あれは連れていくが、それだけだ。それを置いて行くことはできそうにないからな。どこにいってもそいつはついてくる」
エヴァの興奮は一瞬で冷めたようだった。彼女は反論しはじめようとしたことがわかったので、彼はそれをさえぎった。
彼は辛抱強くだかしっかりと駄目だと彼女に説明した。そんなことはどうでもよかったのだ。皆は現在更生省主導の大掛かりなキャンペーンのまっただなかであり、数字で言えばそのキャンペーンは、恩赦のプログラムだけで反乱軍の頭数を十三パーセントは減らせることになっていた。彼女はそれに集中すべきだった。彼は外に出て行くだろう。匿名でだ（なるべくそうするつもりだったが、約四メートルの身長がある鉄の怪物に付きまとわれていては難しいかもしれない）。惑星ルビカでもっとも有名な男であるフィリップ・ロスが、数百万の一般市民たちに混じって通りを歩いたとしたところで、世界には何の変化もないに違いない。
長い数分間のあと、彼はエヴァをオフィスから追い出すことに成功し、出かける準備をはじめた。
ある意味、彼はわくわくしていた。彼がこの数年間見てきた街は、すべて乗り物の窓から見た光景だけだった。オフィスと彼のアパートメントの間を何度も何度も往復するだけの生活だった。彼は最後に雨を顔に受けたのがいつだったか思い出せなかった。雲の裂け目からはまぶしい太陽の太い光が天から地上へと降り注いではいたが、まだ雨は降りつづけていた。
大変よろしい。

＊＊＊

その最初の朝、二人は歩いて出発した。地下基地から出ている南東へのまっすぐな道をゆき、なるべく地形に隠れるようにして進んだ。そして混んだ道や人がいるようなところはできる限り避けた。
焼け付くような熱さは正午になって、北からの涼しい風と薄い雲により少し和らいだ。風はゆっくりとその強さを増し、二人はその中を砂漠を抜けて、川の三角地帯へと近づいた。
二人は普通の服装を身にまとっていた。ジェニーは遊牧民の薄いケープを体に羽織って、頭にフードを被り砂と太陽から目を守るためのゴーグルを身につけていた。アダムは暗い灰色のチュニックと、膝まである皮ブーツを身につけていた。だが二人ともその普通の服装の下に、軍用の鎧を着込んでいたのだった。外からはわからなかったが、二人は近いうちにそれを活用することになるだろう。
道を進むのは困難だった。なぜなら二人は誰も行かないような道をたどる必要があったからだ。特に地下基地からまだ近いうちはそうだった。二人は交通手段を使う危険を犯すことはできなかった。南の方角へと向かっているうちは、特にそうだった。あちこちに監視の目と、捜査センサーがしかけられており、北部と南部を行き来する人間はたくさんいたが、そのほとんどのオムニテック社の諜報部の網の目により自分たちの行動が把握されているとは知らなかったのだった。行程の記録は把握され、行動は分析されていたのだった。社の偏執的な姿勢は、留まるところを知らずに惑星中を覆いつくそうとしていた。ノータム鉱石の貴重さは何にも代

え難いものだったし、社はどんな手段を用いてもその利権を独占しようと試みるだろう。百を越えるクラン派閥が常に戦いの機会をうかがっており、オムニテック社の競合企業がその弱みを見せる瞬間をいまかいまかと待ち構えている間は、特にそうであった。

惑星ルビカは病んでいた。人は友人を売り飛ばし、政治は金権で腐敗しきっていた。

ジェニーとアダムは人目につくわけにはいかなかった。二人の変装には問題はないかもしれないが、調べられる機会が増えれば増えるほど、作戦を始める前に身分が割れてしまう可能性も増えるのだった。もし失敗すれば、彼らの仕事を続けるのはさらに困難になるだろう。もっとも、二人にはたった一回のチャンスしかないと思われた。現在、オムニたちはうぬぼれており、その支持率の急上昇を喜んでいることだろう。今、こういった過激な行動に出ようとするクランが、飼いならされた負け犬の中から出ることはありえないと思っていることだろう。

最初の一日で二人は砂漠を越え、重々しい車両の轍がついた道々を通り過ぎて進んだ。その轍は北西部地帯からオムニテック社の採掘機器を運び出したときについた跡だった。このあたりにもまだ大量のノータムが眠っているとされていたが、状況は時とともに悪くなっており、また鉱山員たちも自分たちの身の安全と保障を要求するようになっていた（クランが達成したことのひとつに、惑星ルビカ上での労働条件の改善があった）。すでにこの土地で作業をすることは、コストのかかる危険なものになっていた。

ミュータントと化してしまった野生の生命体もそれに一役買っていた。皮肉なことに、もっとも危険な怪物はオムニテック社が作った生物が逃げ出したものだった。もちろん彼らはそれを決して認めなかった。オムニ医療省（オムニ・メッド）の生物研究所で何が行われているかは誰でも知っていたが、それは公式には秘密ではあったのだ。

クランたち、特に小さく活発なクラン派閥は訓練と隠れ家のための場所を求めていた。そんな彼らにとって、社の支配テリトリーが南東へ後退したということは、たくさんの鉱山や街、前哨地や基地となる建物をそのまま使用することができるということを意味していた。確かにこのあたりは荒廃した砂漠だったかもしれないが、オムニテック社の軍隊はこの遥か北部まではほとんどやってこなかったし、もし来たとしても見慣れぬ場所にとまどいながら行動することになった。

ここはクランたちにとって、完璧な遊び場だった。

だが同時に二人の兵士にとっては、有名なクラン占領地を通ることも避けながら、注意しながら旅をしなければならなかった。それは単に過激派クランたちの間に不和があったからだけではなく、オムニテックは馬鹿ではなかったｋらだった。彼らは土地を軍事的に占領することはできていなかったかもしれないが、定期的に衛星や飛行機などで監視することを忘れていなかった。誰が通行していたにしろ、後をつけられる可能性はあった

隠れながらの旅だったが、最初の夜が来るまでには二人は砂と岩の地帯を抜けて、最初のボーラの森の陰へと入ることができた。中に入ると、毒のある腐敗した真緑の葉っぱの匂いがむせ返るようだった。それは悪質な香水のように、二人の服にまとわりついた。アダムは薬物中毒ではあったが、その彼ですら咳き込むような場所だった。

だがしばらくすると、その奇妙な野生の赤い植物は少しずつ数を減らしてゆき、その代わりに背の高い黄色の草と花々、そしてごつごつとした岩の大地が代わりに現れた。急な坂は風と水により侵食され、丘も谷も丸く削られていた。ボーラの木々はまだあちこちに生えていた。

それは誘惑するように青々しく、人の頭ほどある分厚い緑色の葉っぱを持ち、その甘い果実は強い匂いを放つのだった。ここではその木々はトネリコの木やナナカマドの木と交じり合って生えていた。それは多少なりとも改良された地球の草の亜種であったが、この気候ではこういった水に近い場所でないと生き残れないのだった。

夜明けの最初の光が射す前に、二人は河までたどりついた。二人はこれまでになくゆっくりと歩いていた。あたりはまっくらだったので、二人は遠くから河の匂いを嗅ぎ、その音を聞くことができた。

東から太陽が昇る前に、二人は土手に座って言葉少なく朝食を取った。赤と黄色の光がゆっくりと流れる水に反射しており、星々のように輝いていて、まるで流れつづける深宇宙を表しているようだった。

河は幅広く、反対岸までほぼ半キロメートルはあった。だが特に深くなったところはないはずだし、早くなっている流れもないはずだった。だが泳いでわたるのは論外だった。戦争がはじまる前からオムニテック社は河のこの近辺を生化学薬品の廃棄場として使っており、テラフォームにより作り出された、豊かであった生態系は被害を受け・・・変化を遂げていた。さらに下流に行くと、自動ボットたちが毒物を除去しており、生態系はそこまでゆけば蘇りつつあったが、この内陸では、水の中には何かがいるとされていた。それはもっとも勇気ある兵士たちに悪夢を見せるようなものだった・・・もちろん、その悪夢を生き残ることができた者たちにとっては、だ。

だが二人は泳がなくてもよさそうだった。準備をしてきていたからだ。

アダムは膝を就くと彼の荷物を降ろして開き、拳の大きさほどの小さな四角い箱を出して、それを地面に置いた。

「下がってろ」彼は言うと、プログラムをＮＣＵ（ナノ・コントロール・ユニット）にアップロードする。

目に見えないナノ・ボットが彼の指先から流れ出て、プラスティックの小包の中に入ってゆく。すると瞬時にその箱が巨大化しはじめ、花が咲くように開き始めた。花びらから花びらが出現し、もとの大きさの十倍ほどになるまで大きくなりつづけた。アダムは生体プラスティックから小さなカヌーが出現するのを見とどけて、後ろに下がった。その船体は薄く透明だったが、柔軟で鉄のように強く、壊すことはほぼ不可能だった。

ほとんど五秒もかからぬうちに、感覚を備えた何百万ものロボットが河を渡るための道具を作り出した。二人は船を手に入れていた。アダムは立ち上がったがよろめいた。ジェニーが歩みよってその体を支えなければ倒れるところだった。

「大丈夫？」彼女はきいた。「座ったほうがいいんじゃないか？」

「ああ、いや」その肌は冷たく、瞳孔は開いていた。生体プラスティックを扱うのは簡単なことではなかった。ボットの宿主としての複雑な操作のために、精神と肉体を強く集中する必要があったのだ。

「行かないと・・・」彼は言葉を飲み込むと彼女を見た。

彼女はうなずくと、彼の体を支えてカヌーまで歩いた。彼はかがみこむと、きれいに形作られた物質の上に手を置いた。その手が置かれた生体カバーの周りから蒸気がかすかに立ち上がるのに彼女は気が付いた。それはアダムの体に触れるときらりと光り、ボットたちが宿主に戻ったのがわかった。

アダムは才能のあるナノ技術者だった。彼女について言えば、一番簡単な熱耐性プログラムを動かすこともできなかったのだが、彼は本当に才能があった。不運なことに、他のアダムの才能と同じように、彼はそれをうまく活用することができなかった。例外はこの生体彫刻だった。ボットの力を借りて、彼はプラスティックからほとんどあらゆるものを作ることができたのだった。この能力はいつも使い道があるというものでもなかったが、ジェニーはいま彼がそれを生かせる機会を見つけたことが嬉しかった。
「大丈夫だ」彼は言った。確かに少しは具合がよくなっているようだったが、ジェニーは彼にカヌーの後ろに座るように、力を取り戻すまで休むように指示した。彼女が漕ぐことになるだろうが、二本の櫂を物質化することを彼は忘れてはいなかった。その櫂はすばらしく軽く、薄かったが、ちゃんと両刃が硬く仕上がっていた。
「反対岸についたとき二人とも疲れているのは避けなければ」彼女は言った。「この生体プラスティックをまたしまわないといけないのを忘れるな。河を渡るのに多少時間がかかっても、昼間にキャンプをするような事態だけは避けたい」
見得っぱりな彼は本当に嫌々それに従った。東の下流に広がる朝霧の向こうから太陽が昇り始めたころ、二人はカヌーを水へと押し出して河を渡り始めた。
アダムは後ろですぐに眠りにおちて、大きな鼾をかきはじめ、ジェニーは一人になれたことを嬉しく感じた。彼女は櫂を左から右へと持ち替え、カヌーがまっすぐ南の反対岸へと進むようにした。数分後には鼻歌すら歌っていた。それは彼女が小さいころ、母に教えてもらった古いフォークソングだった。
母のことを思い出した。
ジェニーはここしばらくの間母について考えたことはなかった。そんなものについて考えをめぐらせることなどなかったのだ。ほとんどの時間、彼女は忙しすぎて、訓練と作戦のこと以外のことを考えるひまなどなかった。人を殺すのに忙しすぎたのだ・・・それはある意味、彼女が常に自分の家族のことを考えているということだった。なぜなら家族こそが、彼女がここにいる理由だったからだ。あれが起こる前・・・あの前、彼女が天涯孤独の身の上になる前は、人形などが好きな典型的な女の子といってもよかったのだ。彼女は自分が銃器を持ち、戦いに疲れている姿など一度も想像したことがなかったし、その両親もクランを熱心に応援していたというわけでもなかった。
いや、オムニテック社が彼女を作ったのだ。罪をあがなわせるために、復讐のために生きる兵士を。奴らが彼女の家に戦争を持ち込んだ。そして、普段ジェニーが家族について考えないようにしていたとしても、その事実はあらゆる行動を支える力だったのだ。いつか、もしこれがすべて終わったとしたら——オムニたちが自らの敗北を認め、自由な民衆に惑星ルビカを返却して消え去るときがもし来たとしたら——彼女はようやく新しい一歩を踏み出すことができるだろう。過去を忘れ、そして許すための第一歩を。
母のことをあまり思い出さない理由にジェニーは気がついた。それは母に対して怒っていたからだ。みんなに対して怒っていたからだ。彼女は皆がなぜ死ななければならなかったのか怒っていたのだ。皆がオムニの兵士たちに殺されたことに、彼女を一人きりに、完全にひとりぼっちにしたことに、燃え上がるような空虚を心に抱えたまま生きなければいけないことに怒っていたのだ。その空虚は何度も何度も埋めてゆかねばならず、彼女はそれを怒りと暴力で埋めようとしてきたのだった。そして暴力と憤怒に食い尽くされた彼女はもはやジェニファー・ブ

ロディですらなかった。彼女は復讐に生きるロボットだった。だが復讐そのものもすでに凍りついていた。彼女の怒りは本物だったが、その記憶は・・・思い出は彼女をこの道で生きてゆくことを強制した。だが思い出はもう現実のものとは思えず、まるで夢のように、消え去ってゆくだけの亡霊のように思えた。

五年前、すべては変わった。五年前、彼女は死んだのだ。

彼女は櫂を持ちかえると、静かな水面にそれを突き入れてカヌーの速度をあげ、少し左へと進路を変えた。櫂を持ち上げて反対側にやろうとしたとき、突然櫂は何かにぶつかり、カヌーは止まった。

彼女は眉をひそめて反対側を見た。

何も見えなかったが、櫂はまだ何かにひっかかっていた。浅瀬に入ってしまったのだろうか？　アダムをちらりと見るとまだ眠っている。彼女はカヌーの縁から体を乗り出して、幅広の刀状の櫂を短く持つとそれを引っ張った。すると櫂は抜けて、彼女はにやりと笑った。それと同時に暗い怪物のような姿が水から飛び出して、彼女を掴んだ。

ジェニーは悲鳴を上げる暇もなく水中へと引きずりこまれた。カヌーはぐらぐらと揺れて、彼女が最後に見たのはアダムが硬いプラスティックの縁で頭を打って血を流す姿だった。水は血で煙るようになり、そして冷たい水が彼女の喉へと流れ込んできた。彼女は世界が暗くなるのを感じた。闇夜のように真っ暗に。そしてその恐ろしい何かが、真っ黒なそれが彼女を奥へ奥へと、水の暗い底へと引きずり込んでゆくのだった。

第十五章

西暦9999年　イタリア　フロレンス

ジョナス・ステンバーグ博士は死ぬほど疲れきっていた。

彼はこの千年間ずっと疲れを感じてはいたが、最近のものは違った。彼はよく思い出せなかったが、おそらくこの数十年間になってからのことだ。彼の実年齢の重さが彼を押しつぶし、彼の擦り切れて引き伸ばされた魂を苦しめるようになったのはつい最近のことだった。

少しずつではあったが、彼は自分が石のようになっていくのを止めることはできなかった。冷たく硬い、生命の無い石ころに。彼の肉体は死ぬことがなかったが、その魂はすでに埋葬されており、すでに塵と化していた。

それはいつのことだったのだろう？　それはゆっくりとした腐敗だったのだろうか、それともある日目覚めたとき、彼の魂は夢のようにどこかに飛び去り、残された体に何の感情も残さなくなったのだろうか？

彼は自分の魂の死がいつだったのかまったく思い出せないことに、何らかの意味があるはずだと思っていた・・・だが、何も見つからなかった。彼はそれを懐かしく思うことすらできなかった。もう意味があるものなど何もなかった。本能が感情に取って代わり、決まりきった日常が情熱の貧しい代用品となった。

最後に何かを感じることができたのは、彼にとって（そして彼の仲間たち全員にとって）人の一生ほどの時間、昔のことだったように思えた。ひょっとしたらそれより長いかもしれなかった。なぜなら人間の一生の長さは、 <オメガ> という存在にとってたいした長さではなかったからだった。そのような存在であった彼ら、終わることなく生きつづける彼らにとって、時間とは新しい意味を持つものになっていた。一世紀以下で終わるようなことはささいなこととされ、普通の人間の一生など昆虫のそれと大して変わらなかった。

たぶん魂は不死であるように作られてはいなかったのだ、と彼は苦々しく考えた。たぶん彼らが理解できなかった唯一のことがらがそれだったのだ。それは技術や薬でなんとかできるものではなかった。死は単に物理的なものではなく、感情的なものだったのだ。そして今彼らはみなゾンビとなり、生ける屍となっている。

しかしもっとも大きなアイロニーとは、彼が不死でありながら自分の子孫を遺すことができなかったことだ。彼は子供を作れなかった。

彼は何人もの恋人を、箱舟計画の発案者とその子孫である不死のオメガたちや、奴隷たちの中から選んで作った。最初は快楽のため、あとになって反復行為に飽きてからは、子供を残すために。だがすべて徒労に終わった。なぜか種から芽が出ないのだった。だが種には悪いところはなかった。それは健康で活発であり、彼の肌を滑らかにし、臓器を結構に保ち、脳を最適な状態に保つ処理と同じ技術により、常に活性化していた。それはなぜか・・・うまくいかなかったのだ。

彼はもちろん、体外受精などといったあらゆる既存の手段を試してみた。ファーマテックはその分野の経験は豊富だったからだ。だが、どんな手段も何一つとしてうまくいくものはなか

った。
　その失敗は科学的に確認されたが、その原因は科学では説明できないものだった。
　クローン技術ですら失敗し、遺すことができる子孫といえば、捻じ曲がった体をよじらせる、人間とは似通わない化け物だけだということがわかったとき、彼はようやくその呪いを理解した。
　それは彼の仲間たちについても同様だった。彼らはあの長い冬を、地下の牢獄で過ごした者たちだった。あの自分たちで閉じこもっていた時期と、それに続く数世紀、そして数千年の間は子供たちがまだ生まれていた。もっともそれもたくさんではなかったし、やがて子供を作ることは評議会の許可がいるものになり、役職によって許可がおりるかどうか決まることになった。
　そして出生率は少しずつ下がってゆき、やがてゼロになった。オメガの最後の子供が生まれてから、もう千年になる。正確にいつこうなったかは・・・誰も知らなかった。太陽の照りつける地上世界に姿を再び現してから年月がたつにつれて、物事の記録を取る頻度はどんどん少なくなっていったし、彼とその仲間たちはますます怠け者になり、過去を軽蔑するようになっていったのだった。
　そしていま、オメガの支配力は日々小さくなりつつあった。奴隷たちが恐ろしく健康で元気な子供たちをどんどん産んでゆくのと対象的だった。奴隷たちは新しい人類だった。短命だが活発で創意工夫ができ、傷つきやすく野心的な、才気あるこの新しい種族は、ほぼ七千年の長さにわたって続いたオメガの治世をおびやかそうとしていた。
　小さな小さな毛むくじゃらの猿が、かつて最強の恐竜たちを滅ぼしたように、オメガも少しずつこの新しい人間たちにとってかわられようとしていた。ホモ・ソリタスたちだ。
　ソリタスはほんの少しばかり才能のある猿にしかすぎないはずで、限られた寿命しかもたないはずだった。オメガの帝国が彼らによって打ち崩されるのは大いなる皮肉といえた。だがソリタスたちは進化の梯子を確実に上りつつあることを示していた。それをおおっぴらに認める者はだれもいなかった。そう認めることは裏切りに等しかったからだ。しかし、それは真実だった。
　ソリタスたちは、長い冬をぼろぼろになりながら生き延び、そして進化したのだった。彼らこそが地球の真の後継者であった・・・その一方、オメガはすでに忘れ去られた過去の遺物であり、ただのまがい物でしかなかった。
　オメガはもう彼ら無しでは生きていけなかった。少なくとも現在は。彼らはその奴隷たちに依存しきっており、その種を滅ぼすことはもうできなかった。
　ジョナスは椅子に体を沈めた。彼は数値や証拠を集めることに疲れていた。彼の人生とその仕事に疲れきっていた。彼は冷たいカフェイン飲料を口にしたが、それも苦々しいだけだった。その飲み物は奴隷たちが豆とその実を収穫し、湖から水を運び、牛からミルクを絞っている行為の上に成り立っていた。彼らは水とミルクを煮立て、豆を挽いて毎朝それを彼のもとに届けるのだ・・・。
　奴隷たちなしでは、オメガはもう生きていけなかった。この毛のない猿たちに、彼らは頼りすぎていたのだった。
　また、この猿たちは反抗心を抱き始めていた。うわべはそうではなかった。今のところは。だが裏で彼らは集まり、支配者たちを叩き落す相談をしていることだろう。明るい日の下では、

彼らはひたすら従順だった。だがその眼差しには独立心が宿りつつあり、その光は日増しに強くなりつつあったのだった。ソリタスたちは自分たちの労働力に依存しているオメガのことをよく知っていた。オメガが彼らなしには生きていけないということも。だから彼らはただ待っているだけでよかったのだ。

ソリタスは賢かった。待つことを知っていた。すでに何千年も待ってきたのだ。彼らの時代は、遠からずやってくるだろう。それはもう疑いようがなかった。

ジョナスの研究所のドアがきしみながら開いた。

振り返ると、妻のエミリーが廊下に立っていた。挑発的な形をした乳房の上で腕を組んでいる。外見は二十五歳ぐらいに見えたが、本当の年は千歳に近かった。

二人は一秒ほど見つめあったが、彼女は目をそらした。完璧なまでに皺の無いハート型の顔の、あらゆるところに疲労がにじみ出ていた。二人はほとんど喋らなかった。この四百年の間、何も話すことがなかったのだ。かつては、妻を愛したこともあったのだろうと彼は思った。だがそんな感情は彼にとってすでに異物だった。彼は何一つ感じられなかったし、これからも何一つ感じることはないだろう。

彼は山と同じぐらい古い人間であり、この古い丘陵のように、ずっとそのまま存在しつづけるだろう。時代の流れに関係なく。

もはや彼には自己憐憫しか残っていなかった。残っているのはもうそれだけだった。

「誰かが会いに来ているわよ」妻は言った。「奴隷よ」間があった。「女の奴隷」

彼は立ち上がった。たずねてくる客などほとんどいなかった。オメガは自分たちだけで住むことがほとんどだった。お互いの顔を見るのに疲れきっていたのだ。同じ議論をし、同じつまらない会話をすることにうんざりしていたのだ。

エミリーの反応について言えば、嫉妬をしているかのように、彼をどこか責めているように思えた。

だがその嫉妬は本能的なものであり、感情的なものではなかった。それはあるデータに対して特定の反応をする機械のようなもので、妻の反応も単に客観的なものでしかなかった。彼と同じように、彼女の感情も失われていた。結婚してから彼が千人を超える愛人を作ったとしても、別に驚くようなことではなかったのだ。妻も同じようなことをしていた。魂が死んでしまう前は、セックスも逃避の手段となりえていたのだった。今やそれは肉体の反射運動でしかなかった。この憎しみに満ちた世界のあらゆることがそうであったように、死ぬほど退屈なものだった。

彼は玄関まで歩いて客を迎えに行った。妻は彼の後についてきた。別にそれを止める理由などなかった。この単調で何一つ起こらない、無限に続く日々に何かイベントを起こせるのだ。少なくともそれは妻のおかげといえた。

奴隷は若い女で、十八か十九歳ぐらいに見えた。ぽっちゃりしていたがなかなか可愛らしい。彼は数ヶ月か前自分が飼っていた奴隷だということを思い出した。たしかティナという名前だったか、と彼は思う。いやリサだったか、キャサリン？

しかし名前が重要だろうか？　女は人間ですらなく、ただの奴隷でしかなかった。

その少女は入り口から玄関まで、名前もない私設警備兵の一人に付き添われてやってきていた（ジョナスはエミリーが入ることを許可したのだろうと思った。それ以外に入れる理由がなかったからだ）。少女は長い灰色のサッシュを身にまとっていた。両手を腹部で組んでおり、

その目は赤かった。泣いていたのだろう。
　いったいなんだろうと彼は思った。思い出せなかった。誰かのために涙を流したことが、彼にもかつてあったのだろうか？　おそらくなかっただろう。
「なんだい？」彼は言った。
「ステンバーグ博士、あなたに直接会いたいと言ってきたのです」その名無しの警備兵は言った。「何か話したいことがあり、あなたが自分のことを知っているはずだと」
「わかった」彼はいらいらしたように言った。「中に入るんだ」と言って名無し警備兵に下がるように告げる。
　少女は中に入ると、大きく見開いた目であたりを見た。
　二人が住む邸宅は高価な装飾をふんだんに施しており、それは妻が改装のたびに前よりも豪華にすることに楽しみを見出した結果だった。楽しみというのは言い過ぎだったかもしれない。おそらく妻がそうしてきた理由は、夫が贅沢な住居などというものが大嫌いだったからだろう。
　だが下の居住区で育った少女にとって、何十人もの同じ年かさの人間と共同の家に住んできた彼女にとっては、この建物はまさに天国のように見えたにちがいない。
「水でも飲むかね」彼はぼんやりと歓迎する意思を見せようとしたが、その気遣いは彼自身にとってもそらぞらしく聞こえた。
　少女は頭を振った。
「わかった。何をしにきた？」
　彼女は下を向いて、腹部で組んでいた手をどけた。下腹部のあたりに、見間違いようのないふくらみがあった。最初ジョナスはそれがなんであるかまったくわからなかった・・・何かの奇形か、腫瘍ではないだろうか。
　そしてジョナス・ステンバーグは突然それがなんであるか気が付いた。
「妊娠してるのか」彼は言った。
「ええ」
「なぜここに来た？　そのための病院は・・・」
　彼はそれ以上続けられなかった。その答えはあまりも明らかだったが、それを言葉にすることができなかったのだ。
「妊娠したのは」彼は言った。「私と・・・」
　言葉はやはり出てこなかった。
「ええ」少女は言って、顔を上げて彼を見たがまたすぐ床に視線を落としてしまった。彼女は怖がっており、その瞬間、本当に短い一瞬ではあったが、ジョナスは自分のことが恥ずかしくなった。
　そして物事をようやく理解することができた妻が、後ろで息を飲むのがわかった。ジョナスは振り返って彼女を見る。エミリーの口は大きく開いており、その目はぎらぎら輝いていた。妻がそもそも嫉妬していたとしても、それは新しい興奮によって完全に隠されていた・・・いやそれは希望の光だったのかもしれない。ジョナスにはわからなかった。
「最後にセックスしたのはいつ、ジョナス？」その質問はぶしつけだったが、悪意はなかった。
「思い出せない」
「妊娠したのは五ヶ月前です」少女は目を逸らしたまま、従順な奴隷として回答した。「他の人とは寝ていません。もしそれを気になさっているのなら。私は処女でした」

「テストをしないといけないわ」エミリーは少女を無視して、考えに没頭したままつぶやいた。「ジョナス、あなたに生殖能力が残っていたのだとすると・・・まだ希望はあるかもしれないわ」

　希望か。ジョナスはさっき妻が見せた感情を理解することができた。数え切れないほどの世紀が無為に過ぎていった。だが、魂はまだ忘れ去られた感情を、必要になれば呼び出すことができるのだ。

　希望、それはいったいどんなものだったのだろう？

　最初、少女はここに留まることを嫌がった。それならなぜこの家までやってきたのか疑問ではあったが、最終的には食料とお金、そして子供の面倒を見ると約束されてからは、ジョナスの書斎でエミリーに検査を受けることに少女は同意した。

　彼自身でもその検査はできただろうが、少女はどちらかというとエミリーといたほうが落ち着くようだった。同じ男とベッドを共にしたということは気にならないようだった。ひょっとしたらそれがこの女達の関係が良好な理由かもしれなかった。彼はずいぶんと長生きをして、何度も何度もセックスをしたが、まだ女というものがどういう生き物なのかまったくわからなかった。

　妻はちゃんとした医師ではなかった。少なくとも書類上では。だが年を取るということはそれなりの利点があったし、時間は問題ではなかった。エミリーの場合は、時間を広い事柄について学ぶのに使っていたのだった。エミリーは芸術から薬学まで幅広く学んでいた。もちろん移植臓器（インプラント）を効率的に使うことにより、外科医の専門技術と、内科の全般的な知識を兼ね備えることができた。既知のあらゆる伝染病と疾患について、エミリーはデータバンクから自由に参照することができたのだった。

「確かに妊娠してるわね」エミリーは数分もしないうちに言った。二人は少女を書斎に残し、エミリーのオフィスに移ってきていた。「子供は健康なようね。だけど確認のためには病院に行く必要があるわ」

「ここでできるテストはないか？」ジョナスは聞いた。

「たとえばどんな？」

「そうだな・・・たとえば・・・」彼は考えをめぐらせたが、やがて結論を出した。「エミリー、これは内緒にしておくべきだ。少なくともしばらくの間は。まず何が起こったか確かめて、この子供が私の子だとはっきりするまでの間は内緒にしておくべきだ」

「彼女ははっきりと、セックスをした男性はあなただけだって言ってるわよ」

　ジョナスは否定するように手を振った。「やつらはただの奴隷だよ、エミリー。正直な奴隷がいるのかね？」

「実際には奴隷は正直だと思うわ。少なくともあなたや私よりはね」

「私たちは自分の利益のためなら嘘をつける。それはわかるだろう。女は私が彼女と結婚したり、我々の仲間に加われると考えているのかもしれない」

　エミリーは笑った。「そんなに自信づくものじゃないわよ、ジョナスは可愛いひとね。あなたはそんなにもてるわけでもないでしょう。私の見るところ彼女はただお金がほしいか、単に子供の安全を確保したいだけよ・・・食料と住居をね・・・そんなものでしょう。彼らは単純

だわ。奴隷たちは、そんなにたくさんのものを欲しがったりしない」
「もし彼女が我々の現在の苦境を救う鍵となるとしたら」彼は言った。「私は彼女に世界をやってもいい。もしオメガがまた生殖能力を手に入れたとしたらどうだ・・・彼女はそれと知らずに、自分の一族の未来を破滅させることになるだろうな。彼女は私たちにとって救世主となり、自分達の死神となる」
「まったく皮肉なことね」彼女は言った。
「そうだ」彼はその言葉を味わった。それは新鮮で、興奮する味がした。それは新しい可能性をここにもたらしたのだ。「皮肉だな」

カテリーナは目を閉じて、四肢を伸ばした。高級な香りがする空気を吸い込んで、静寂に耳をこらす。
彼女はこういった完全な静寂に慣れていなかった。下の居住区では、あらゆる音が存在していた。人々は喋り、議論をし、涙を流していた。世代は変わり、奴隷たちが生まれそして死んでいった。生きている者の生活の音は止まることがなかった。静かな瞬間などなかった。それにやがて慣れてゆくのだ。その音は頭のどこか後ろに、常に響いているようだった。
しかしここでは・・・完全な静寂だった。彼女は自分の心臓の音を聞くことができた。彼女は自分が考えている音を聞けるように思った。すばらしい感じだった！　もし彼女の子供がこんな場所で育つことができるとしたら・・・きっと天国だ！　もし子供に明るく幸せな未来が与えられるならば、自分の身になにが降りかかろうと彼女は気にしていなかった。
子供の父親が誰であるかはどうでもよかった。魂のない怪物、堕落したオメガ人だ。奴隷として生まれ、奴隷として常につらい人生を歩むよりは、どんなものでもましだといえた。彼女の子供はどんな者よりも優れた人間になるだろう。なぜなら、彼女の子供はアリッサの一族に連なる子供だからだ。その男の子、女の子かもしれないが、この大海に変化をもたらし、新しい治世を、オメガの滅亡と奴隷たちの解放を成し遂げる者になるよう運命づけられているのだ。
彼女はそう夢見たのだった。彼女は夢が正しいことを知っており、やがて現実になることを知っていた。
もちろん、その子が生き延びることができればの話だが。
彼女は博士とその妻がどういった対応をするのか恐れていたが、なぜか二人はものすごく喜んでいた。カテリーナはオメガには子供を作る能力がない不妊症であるということはは噂で聞いていたが、子供がどれほど重要な存在であるかということには気がつかなかった。もし気が付いていたら、ここに来る前に考え直したかもしれない。
だがもう手遅れだった。彼女の運命は博士とその妻に握られていた。それに、これは正しい選択だと言えた。子供にとって正しい選択なのだ。彼女の友人や家族はこれについていろいろ好き勝手言うかもしれないが、皆にはわからないのだ。皆何も知らないから。
カテリーナは子供をここに連れてこなければいけないことを知っていた。このオメガの邸宅に。ステンバーグ博士とその妻の元に。それは計画の一部であり、彼女が夢見たとおりだった。
閉じたドアの向こうからささやき声が漏れてきたのをカテリーナは聞いた。博士とその妻だろう。エミリーという名前だっただろうか。二人は何かを話していたが、言い争っているようだった。彼女の処遇について・・・いや、子供をどうするかについてだ。
彼女はまた目を開けた。この部屋は少し・・・大きすぎた。本物の木でできた天井など、誰

が必要とするのだろう？　プラスティックのほうが便利だったし、強度も上なのに。木材は腐るがプラスティックは腐らない。
　彼女が住む町では、頑丈な五階建て建物が、狭い通りに並んで立っていた。どれも見た目はまったく同じだった。彼女はそれしか知らなかった。いくら仕事をしてもこんな邸宅に住むことなどまずできなかった。全般的なテストを受けたあと数ヶ月間学校に通った彼女は、すぐに工場へと連れて行かれ、組み立て作業に八時間勤務させられることになった。それは機械でもできるような仕事だったが、奴隷労働はコストがかからず、容易な労働力だった。それに奴隷たちはあまり間違えなかった。なぜなら彼らは間違えた結果どうなるか良く知っていたからだ。
　オメガたちは、地下深くからこの世界の地表へと現れたその日から、強制労働によって文明を再構築したのだった。それがオメガの弱点でもあることを彼女は知っていた（誰かにそう教わったのかもしれない。カテリーナは自分があまり頭がよくないことに気がついていた。そうでなければ工場にずっといなくてもよいはずだった）。だが彼女も、他の者もどうすることも出来なかった。彼女はただの奴隷に過ぎなかったからだ。
　だが今、その人生の中で初めて彼女は誰よりも優位な地位に立っていたのだった。彼女はオメガの子を身ごもっており、そんなことは一度も起こったことがないことだった。これから何が起ころうとも、それは彼女とその子供にとって進歩に違いない。そうに違いなかった。
　カテリーナはステンバーグ博士とその妻が戻ったころには、ほとんど眠っていた。彼女は起き上がって座ろうとしたが、エミリーは胸に手を置いて静かに寝ているように、力を使わせないようにした。その女性は微笑んだが、それは本物の笑みだとカテリーナは思った。希望と興奮の微笑みだ。
　二人とも幸せなのだろうと彼女は思った。博士とその妻は彼女が妊娠していることに喜んでおり、博士が子供を作れたことが嬉しいのだ。オメガがまだ子供が作れることがわかって嬉しいのだ。
　カテリーナは体の力を抜いて、二人が実施したいという様々なテストの話に耳を傾けた。赤ん坊が健康かどうか調べたり、博士の子供かどうか調べたり、出産予定日がいつか調べるなどといったことだ。心配することはなにもなかった。彼女は赤ん坊に何も問題ないことを知っていたし、博士以外の男と寝たこともなかった。
　もし機会があったとしても、彼女は二度と博士とセックスすることはないだろう。だがもちろん、主人であるオメガの命令は絶対だった。それは屈辱的で、苦痛に満ちていたし、またすべてが終わったあと、彼はなぜかカテリーナにに怒りを覚えていたようだった。
　だがいまは・・・それは簡単に忘れ去ることのできる過去の一部でしかなかった。博士と妻はテストをするだろうし、それに満足するだろう。二人は彼女にこの家で住むことを許し、赤ん坊を育てさせるだろう。未来は彼女にとってはっきりとしていた。それは明るく希望に満ちており、美しかった。そう考えると彼女は微笑まずにはおれなかった。

　エミリーは夫をちらりと見て顔をしかめた。いったいなぜこの少女は突然馬鹿みたいに微笑んだのだろう？
　まったく、と彼女は思った。この女が知恵遅れでなければよいのだが。もちろん赤ん坊もだ。そうなったら二人の夫婦にとっていい恥さらしだった。奇跡のような解決策と思えたものも、最悪の幻滅となることだろう。

ともかく、生体スキャンはあらゆることを調べることができる。機材が届くのはもうすぐだ。彼女は地元の病院にすでに注文を出しており、名目は従者の女のうちの一人が、妊娠による情緒不安定に陥ってしまったので、それを個人的に調べるためというものだった・・・ある意味、それは嘘ではなかった。だが、近いうちに母親になるこの少女の運命について言えば、生まれた子をエミリーが取り上げたあとは、いまよりも遥かにつらいものが待っているだろう。一番可能性が高いのは、この奴隷女のカテリーナはどこかの研究所でその一生を終えるか、もしくは品種改良センターかどこかで、その才能を最大限に生かすために利用されるというシナリオだった。

エミリー自身もずっと母親になりたいと思ってきた。彼女にはその資格があったし、この子供が彼女自身のものではないにしても、少なくともその子の存在により、彼女もいつかは自分の子供を持つことができるかもしれないという希望を持てるようになったのだ。もしオメガの男性が再び子を持つことができるのなら、女性にも同じことが当てはまるはずだ。彼女は自分が母親になるところを夢想した・・・もちろんそれは間違いなくジョナスの子ではないだろう。それについてはすでにはっきりと決めていた。だが裏切られたからと感じていたからではなかった。彼女自身、不義はもう何千回も行っていたのだ・・・彼らみながそうだった。生涯一妻一夫制を守るというのは、数百年間同じ相手と結婚しつづけるという世界では無意味なものとなっていた。いや、エミリーがジョナスを憎むようになったのは別に不倫のせいではなかった。それは彼の傲慢さや、自意識過剰な性格だった。その笑い方は気持ちが悪かったし、食事をするところや寝ているときの鼾、その話し方に呼吸の仕方・・・すべてだった。たしかに彼女はかつて彼を、短い間ではあったが愛したことがあるのかもしれない。だがそれはずっとずっと昔のことで、それに彼を好きになった理由は彼が権力を持った男であったという事実以上のものではなかったのだ。かつて彼はより高い地位へと続く長い梯子を、ゆっくりとではあるが登ろうしていたのだ。だがエミリーはいま、決断を下すことができずに去りかねていた。もしエミリーが子供さえ作ることができたら、もし体の中に新しい生命を育み、それを糧に生きていくことができたら、彼女はすぐにでもここを去ることができる。そうしたらエミリーは誰か優しく、繊細な人物を探すだろう。別に奴隷でもいい（もちろんそれは明らかに会社法に違反していたが）。妊娠したら彼女は一人になり、自分の子供を育てるのだ。

そう、彼女はそれを望んでいたのだ。彼女だけの喜びや満足のためだけではなく、子供のために自らを捧げる未来・・・。

もしそれが自分のものになるのなら、あらゆることが上手くいくだろう。

一週間が過ぎた。カテリーナという名前のその少女は二人のところに留まり、博士と妻は必死になってその謎を解き明かそうとした。だが、結局二人は壁にぶち当たったことを認めないわけにはいかなかった。

複雑な生体スキャンを様々な観点から実施し、あらゆる遺伝子テストを行った。少女に検査のためのボットを注入し、胎児の表皮サンプルを取得した。彼女に質問し、その家計図を問いただした・・・だがそれにも関わらず、燃え上がるような好奇心を満足させる明快な答えはなかった。なぜこの少女だけが、いまこのときに、このオメガの子供を身ごもることができたのか？

子供は彼の子だった。それはすぐにわかった。そしてその胎児は、いや男の赤ん坊は健康で、

五ヶ月の一般的な胎児が持つ特徴をすべて備えていた。だがそういった基本的な事柄は多少なりとも知識がある者なら誰でもわかるようなことだったし、二人の調査による結果はゼロだと言えた。

　最初の週が終わったあと、ジョナスとエミリー・ステンバーグは自分たちだけではこの謎を解き明かせないことを、認めないわけにはいかなくなった。オメガの研究員たちは毎日のように不妊問題の調査にあたっているし、二人には彼らの力が必要だった。だが彼らは、ステンバーグ一家がここまで長い間報告しなかったことと、自分たちだけで答えを見つけようと試みていたことを快くは思わないだろう。特に箱舟計画（アーク・プロジェクト）の継続がかかっているといっても過言ではない、ここまで重要な問題について二人が黙っていたことが露呈したら・・・。

　ステンバーグ博士は、ファーマテック評議会の反応におびえていた。会社規定でははっきりと、あらゆる研究はその規模の大小に関わらず、適切な許可をもらわなければ実施できないとされていたのだ。そしてこの調査はあきらかに、どのような観点からも小さいものではありえなかった。はっきり言うと、この調査の内容はボットそのものが開発された二十一世紀からの長い時間の中で、もっとも重要なものであった。

　だが・・・しかたがない。もうどうにもならなかった。彼は判断をくださねばならなかった。エミリーがすぐそばに立っている。もしすべてが解決して、これがオメガたちにとって救済となりうることが判明したら、彼がこそこそと調査していたことはすぐに忘れ去られ、その代わりに二人はオメガの社会を大きく進歩させた主要人物として、記録されることになるだろう。

　妻は反対した。「もしこれを自分たちだけの手で解決することができれば」彼女はそう主張した。「それは私たちにとってもっともっと大きな利益を生むことになるわ。わざわざ評議会の了承を得なくても、もっとたくさんの子供を作ることだってできるはずよ。私たち自身の子供をね」彼女はそれが一番重要なことであるかのように追加した。

「もし私たちがこの問題を『解決』することができたとしても」彼は言った。「評議会は私たちが突然たくさんの幼児を家族に迎えていることに対して疑いを抱くんじゃないか？」

「問題にはならないわ。彼らにはただ奴隷から養子をやとったと言えばいいだけよ」

「それは重罪だということをよく知っているはずだろう、エミリー。それでどうなる？　評議会に目をつけられたくはない。特に今は。それにもし真実がばれて、私たちが嘘をついていたことがわかったら・・・」彼は計らずも身を震わせた。彼らにとってもっとも厳しい罰とは、若返りのための施設を利用できなくなることと、新しいボットを与えられないことだった。「いや、これは会社に報告しなければならない。報告が遅れたことを謝罪して、罰がないことを祈るしかない」

「赤ん坊を連れていってしまうわよ！　ジョナス、私たちで育てることができなくなるわ」

「だからなんだというんだ？　この赤ん坊は君の子供ですらないだろう」

　私の子供よ！　とエミリーは思った。生物学的にはそうでないかもしれないが、他のあらゆる意味でこの子は彼女の子供だった！　ジョナスはエミリーの夫であり、子を作ったのは彼の種なのだ。なぜ子供が彼女のものでないわけがある？

　いや、と彼女は思った。子供は私のものよ。子供を自分のものにするためなら、彼女は殺人もいとわないだろう。この一週間、エミリーは赤ん坊が奴隷の少女の腹部で動いているのを見てきた。栄養物を食べて眠り、ひょっとしたら夢さえすでに見てるかもしれない赤ん坊を。彼

女の気持ちはすでにこの子とともにあった。その子はエミリーが心の底から望んでいた未来の象徴であった。いつかは自分自身でも子供を持つことができるのかもしれないが、いまこの時は、その子がエミリー彼女のすべてだったのだ。

確かに、もしファーマテックの医師たちが妊娠について報告を受けず、テストも実験も行えななければ、オメガが不妊な原因の判明は遅れるかもしれない。だが彼女に時間はあったし、待つこともできた。もし一度でもソリタスとオメガの間に子供ができたのだとしたら、再度起こる可能性があるということだ。

彼女は母親となることができるかもしれないこの機会を逃すつもりはまったくなかった。いま報告したとしても、いつかは判明する謎が解明されるのを少し早める程度の役にしか立たないのだ。

今のところは、この赤ん坊の男の子は彼女自身の子供の代用品かもしれないが、エミリーは何に代えても誰かに赤ん坊を渡すつもりはなかった。それは彼女のものだった。子供が生まれたらすぐにそれを母親から取り上げるつもりだった。赤ん坊は自分の血筋のことを知ることは決してないだろう。

エミリーはすでに彼女の可愛い子供に名前すら考えていた。

ディビッド、と。

＊＊＊

カテリーナはホールへとこっそり、裸足の足で柔らかいカーペットを踏みしめながら、息を注意深く殺して降りていった。邸宅は静まり返っており、ステンバーグ夫妻は眠っていた。外には警備兵がいるだろうが、その見張りルートはもう把握していた。見つからずに外に出ることができるはずだ。

そもそも中から出る者を見張っているわけはなかった。ほとんど見張りの必要すらなかったのだ。まともな頭の持ち主なら、オメガの住居に忍び込もうなどと考えるわけなかったし、それに警備兵たちの数の規模は小さな軍隊と言ってよいものだった。いったい何をそんなに神経質に恐れているのだろう？　自分たちの仲間も信じていないのだろうか？

彼女は自分がステンバーグ邸に出産まで留まるべきだとは思っていた。そんなことはここに来ることがわかったときから知っていた。彼女の子供は、奴隷であるソリタスたちには決して与えられない教育を受けられることだろう。だが彼女にはもう絶えられなかった。エミリーがしょっちゅう見せるあの飢えた目つきにも、ステンバーグ博士のちょこまかと動く手にも耐えられなかった。二人とも怪物だった。二人はつまらない人間であり、貪欲で残忍だった。そしてカテリーナは自分の子供が彼らのようになって欲しくないと思ったのだ。

出産予定日まで数日だった。これがおそらく地下へと逃げ出す最後のチャンスだった。自分の仲間に助けてもらうために。

下の階にいくと監視スキャナーが彼女をターゲットして分析しはじめた。柔らかい緑色の光が水のように彼女の体に波紋を投げかける。彼女はよく夜になると、赤ん坊が腹を蹴るのに眠れなくなって、屋内を歩き回っていたので、監視スキャナーは警告を発しなかった。

光は音もなく消えると、彼女は暗闇に取り残された。

廊下の窓の向こうで警備兵が一人通り過ぎた。彼はおそらく壁に囲まれた庭に行ってからタ

バコを吸うだろう。彼の名前はエヴァンといって、やはり奴隷だった。だが彼女は助けてもらえないことを確信していた。永久にありえないことだ。だが彼を責める気にはなれなかった。ここの仕事はいい待遇だっただろうからだ。

彼女は大理石の床の上をこっそりと歩くと、台所の入り口へと向かった。食料庫からは地下へと続く階段があり、地下からはボート小屋へのトンネルが続いていた。その中では二時間に一度しか警備兵は通らない・・・ようやくこの堕落した、邪悪な場所から逃れることができるだろう。

カテリーナは自分のことを誇らしく思った。彼女はいままで生きてきてはじめて、物事をきちんと考えることができたのだった。普段はただ本能に従うか、奇妙な夢に従うだけだったが、いま彼女は自分の意思で何かを成し遂げようとしているのだ。彼女はこの脱走を数週間かけて計画したのだった。警備兵たちのことを研究し、こっそりと話し、一番警備兵が少ない日を理解し、脱走ルートと荷物を確保したのだ。

荷物！　彼女はいらだちでほとんど足を踏み鳴らしかけた。彼女は二階の部屋に鞄を忘れてきたのだ！　鞄はやっぱり必要だろうか、とカテリーナは数秒考えた。必要だわ、と彼女は考えた。あれには食べ物と温かい衣類、そして盗んだ宝石が入っていた（盗みについてはあまりいい気分はしなかったが、エミリーは一度もそれを身につけてないようだった）。それを売って食べ物と旅費に変えるつもりだった。奴隷は書類なしでは遠くまで旅することを許されていなかった。だが必要であれば書類を手に入れることもできた・・・もちろん買うだけの金があればの話だが。

それを部屋に忘れてくるとはなんて馬鹿なことをしたのだろうか！　なんて間抜けなことだ。自分が突然賢くなったと考えたばちがあたったのだ。

カテリーナはこっそりと広間と階段を戻った。行きよりも心臓はどきどきと激しく打っており、廊下を通って寝室へと戻ったあともそれは続いた。

彼女に与えられた大きな部屋には柔らかいベッドが置かれており、快適に過ごすためのほぼあらゆる設備が整っていた。それはカテリーナがこれまで決して手に入れることができなかったものだったが、彼女を幸せにするものは何もなかった。もちろん食べ物はよく、日が照っているときに外の美しい庭に座るのも気持ちがよいものだった。彼女はこの環境を無くしたくはなかったが、このすべては彼女のためのものではなかった。これは子供のものだった。この家にいると、まるで自分の子供が彼女のものではないかのように思えるのだった。エミリーは何度も、子供の名前はディビッドがいいと言った。まるでカテリーナが自分自身で赤ん坊に名前を付ける資格がないかのようだった。

は自分の部屋のドアを空けてすぐに、何かがおかしいことに気が付いた。

ベッドサイドの明かりはつけっぱなしだった（電気を切るのを忘れたのだろうか？　彼女には思い出せなかった）。それにカーテンが閉まっていた（彼女はそれを閉めたことがなかった）。だがカテリーナは背を向けて逃げるわけにはいかなかった。どうしてもあの鞄が必要だったのだ。

彼女が部屋の真中まで差し掛かったとき、部屋の隅に座っていたエミリーが話し掛けてきた。「どこにいこうとしていたの、カテリーナ？」穏やかだが冷たい声を聞いて彼女はその場で凍りついたが、振り向かなかった。「赤ん坊がもうすぐにでも生まれるというのに？　少なくとも子供を見せてくれるぐらい、私達に恩返しをしてもいいと思わない？」

「どこかに行くなんて」カテリーナは涙声で言った。「私はただ・・・家の中を歩き回っていただけです」
「じゃあこれは何？」エミリーは聞いた。カテリーナは振り返った。
女は膝の上にあの鞄を置いていた。鞄は開けられており、エミリーは中から盗まれたネックレスを引っ張りだした。「私に黙ってこれを借りていったのね」彼女は答えを待たずに続けた。「あまり良いことではないわね。私たちは何ヶ月も無料で貴方をここに住まわせてやったというのに」
カテリーナはその場できびすを返すとドアへと走った。ドアを叩きつけるように閉めると、エミリーがその向こうで悪態をつくのが聞こえる。彼女はおなかが動きすぎないように手で抑えながら廊下を出来る限り早く走った。階段のところにたどり着いたところで寝室のドアがばんと空いてエミリーが飛び出してきた。
「馬鹿な娘」と女は叫んだ。「私の赤ちゃんに何かあったらどうするの！」
私の赤ちゃん？　カテリーナは呆然とした。エミリーが考えていたのはそういうことだったのだ。これが彼女の赤ん坊であると？　カテリーナはもうこの不気味きわまりない場所に我慢ならなかった。すぐにでも逃げなければ！
階段を三段ほど降りたとき、スカートが足にからまったことにカテリーナは気がつかなかった。彼女は自分の叫び声も、エミリーの悲鳴もほとんど聞くことができなかった。階段が眼前に迫ってきて、彼女は何度も何度も転がりながら落ちていった。最後に気持ちの悪い音がして、体が動きを止めた。

エミリーは階段を駆け下りた。床にぶつかった馬鹿な娘の頭からは血が流れており、その命の無い体は醜く捻じ曲がって横たわっていた。彼女はすぐにカテリーナの脈を調べたが、それが無いことがわかると夫を呼ぶために悲鳴をあげ始めた。
彼は数秒後に現れた。さきほどからの大騒ぎでとっくに目を覚ましていたのだ。二人は一緒にだらんとした体を書斎まで運んだ。あまり時間はなかったし、赤ん坊を救う必要があった。出産まで数日しかなかったのは本当に幸運だった。もしこれが奴隷娘の来訪のすぐあとに起こっていたとしたら、赤ん坊を救う方法はどこにもなかった。運がよければ子供を救うことができるかもしれない・・・もし子供が先ほどの落下で怪我をしていなければの話だが。
手術は十分もかからなかった。夫は死体を切り開くと、帝王切開をほどこし、カテリーナの腹部と子宮を切り裂き、妻がその中から泣き叫ぶ赤ん坊を取り出した。それは良い兆候だった。夫がへその緒を切る。
奴隷娘が階段から転落して三十分もしないうちに、エミリーは男の赤ん坊を、彼女の子供を腕に抱いて、限りない優しさであやしていた。赤ん坊はようやく彼女のものとなった。この夜は突如として記念すべき夜となった。死から新しい命が生まれ、彼女はカテリーナの殺害に対して何の罪の意識も感じずにすんだ。彼女の計画とは違い、都合のよいことにカテリーナは自分で死んだのだ。
なんて馬鹿な娘だろう、とエミリーは考えた。彼女はこの子が父親の知性を受け継いでくれるように強く願った。

「評議会に報告しなければ」夫は言った。「もう選択肢はない。私たちは娘を失って、もうこ

の赤ん坊しか・・・」
「ディビッドよ」彼女は言った。「名前はディビッドよ。自分の息子の名前ぐらい覚えて」
「とにかくだ」彼は言った。「僕も嬉しいとは思っているよ、エミリー」だが本当のところそうは感じていなかった。彼はまだ何一つ感じられなかった。妻のようにはいかなかった。妻は子供をまるで自分の子供のように抱いていたが、それは単に子供を手放したくないというわがままな思いの表れだった。彼はこのチャンスの重要性を理解していたが、ファーマテックの研究者たちの助けなしでは、チャンスはこのまま消えて終わるだろう。この赤ん坊がいつまで生きるのか誰に予想できる？　これはオメガよりもソリタスに近いのか、それともまったく別の生き物なのだろうか？　二人はそれを理解する知識も道具も持っていなかったし、この子供を手放して罪を認めてしまったほうが、すべてのオメガにとってよいことに決まっているのだ。
「本当に冷たいわね、ジョナス」彼女はぴしりと言い返した。「そんなこと言わないで。ディビッドを医師たちの実験のために差し出すというの？　私たちは堕落したかもしれないけど、まだ人間よ。私たちは人間のように行動すべきだわ」
「だが皆のことはどうなる？　私だけが子供を作れた唯一のオメガでよいのか？　エミリー、私たちという種はどうなるんだ、オメガ全体は？　私たちがもし死んだら、その代わりはどこにもいないんだ。私たちはゆっくりではあるが確実に滅びつつある。いつまでも不老不死ではいられない。私たちもいつかは消えうせる。もし子供を作れず、数を増やせないままだったら！　地球は奴隷たちの犠牲になるんだ・・・わからないのか？　奴らは違法にその数を増やしているし、毎日のように数を増やしている。君は私たちの種族のために協力することを拒むというのか？」
　彼女は聞いていなかった。なぜならそれは正しかったからだ。ディビッドを彼女のものにすることが良いことでないことは知っていた。オメガが子供を作れるかもしれない機会を奪うことになるのだ。良くないことだったが、彼女はかまわなかった。彼女はディビッドがほしかったのだ。自分の息子として。もし評議会に報告すれば、ディビッドは永遠に失われるだろう。
「持ってゆかせないわ」彼女は言った。「許さない」
　彼はうなずいた。「それでは私だけで報告に行く」彼は答えた。「箱舟計画を頓挫させることは許さん。ただ母になりたいからといって、単なる君気持ちだけでそんなことをさせるわけにはかない。それがどんな結果をもたらすか考えるがいい、エミリー」
　彼は背を向けて、彼女から遠ざかった。そして彼女はそれがどんな結果をもたらすか考え、一つの結論にたどり着いた。その結論はあまりにもはっきりとしており、彼女はいますぐそれを行動に起こさなければいけなかった。
　不老不死の人間を殺すことはもっとも罪深い行為とされていた。もし奴隷がその罪を犯した場合、その奴隷にはもっともゆっくりした残酷な死が与えられた。公開処刑場での、ボットの働きによりずっと死ぬことができない永遠の絞首刑などだ。それはこの六千年間でほんの三・四回しか起こらなかったが、その罰はもっとも反抗的な奴隷に対しても、主人殺害など決して思いつかないようにするに足りるものだった。
　だが不老不死の人間同士の殺人は・・・微妙な問題だった。
　不老不死そのものは確実なものではなかった。ボットと再生処理チャンバーの組み合わせと、定期的な投薬と注射により、肉体がきちんと再生されているかどうか確認する必要があった。組織は劣化しなかったし、病気も癌も感染症も存在しなかった・・・彼らはみな小さなロボッ

トの働きにより守られていたのだった。外傷ですらボットは直すことができた。たとえば胸に銃弾が打ち込まれたとして、その傷はすぐに修復されることだろう。ボットの交換を怠っておらず、肉体にボットを動かすのに必要なエネルギーが蓄えられていれば。だがそれはたいしたことではなかったし、あらゆるところに再生処理チャンバーはあった。またどんなオメガであっても、医療施設に通わないほど愚かではなかった。

だが、不老不死の人間を殺す方法はあった。それは彼らが本当のところ完全な不死ではなく、ただものすごく長生きできる存在なだけということを意味していた。不死という称号は奴隷たちを従えるのに役だったし、よくよく用心していれば、オメガは実際のところ永遠に生きることも可能だった。自殺する者はほとんどいなかった。ただし絶望とやりきれなさ、そして目的を失った者はたくさんいた。だが彼らほど長生きをしてしまった者は、すでに死という不確かなものに身を投じることはできなかったのだ。自殺という行為は、短くつらい命しか持っていないソリタスのものだった。すでに八千年間生きてきたものにとって、三十歳で死ぬかそれとも八十歳で死ぬかは何の違いも意味しないのだった。奴隷にとって、人生はとてもとても短いものだった。短すぎると思うからこそ、彼らはその短い生涯をあれほど忙しく生きるのだ。

だが殺人もかつては起こった。なぜなら感情は抑えることができないものだし、それにより死者も出たこともあったのだ。長いこと同じ人間と付き合ってゆく間にはそういうこともあった。他の不死の人間に対する殺人を犯した不老不死の人間を罰することは、非常に難しい問題ではあった。普通、その殺人者は単に新しいボットを与えられず、また再生処理部屋の使用権も奪われ、自宅に軟禁されたまま年を取り、自然死を迎えるようにされていた。

オメガにとって、それは絞首刑と同じぐらい恐ろしいものだった。

エミリーはだがこれはその危険を犯してでもやる価値があると思った。

オメガを殺すには、非常に短時間のうちに、その肉体に大ダメージを与える必要があった。そうしなければボットが肉体を修復してしまう。脳に酸素を長時間送ることさえ出来た。蘇生技術を手に入れた彼らにとって、数時間それを続けるのは簡単なことだった。もっといやなやり方（そしてもっと残酷な）を選ぶ場合は、どこかにその人物を隔離し、ボットが機能するのをやめるのをじっと待てばよいのだった。そうすれば肉体はやがて老化し、傷つきやすいものとなり、死を避けることはできなくなるだろう。

エミリーは後者を選んだ。

部屋を去りつつあった彼を追いかけて後ろに回り、鋏を左耳から中へと叩きこんだ。彼が苦痛の叫びをあげて床に倒れる。エミリーはそのもっとも致死的な傷が治ってしまうまで数秒しかないことを知っていた。彼女は鋏を抜くと彼を蹴って転がし、その胸を膝で押さえ込んだ。彼女は外科医の正確さで、彼の左眼と右目を切り裂いた。そのまま手を休めずに、鋭い刃で臍から胸部まで気だるげに切り開く（彼女は匂いが強くなったことに眉をひそめた。それに自分がやっていることへの嫌悪も増しつつあった。いったい私は何をやっているのだ？）、そして鋏を脇に投げ捨てると肉を掴んで夫の腹部を大きく引き裂き、内臓をむき出させた。彼女は両手でつかめるだけ内臓を掴むと立ち上がり、強くそれを引っ張った。

湿った悲鳴と引き裂く音はそっくりだったので、彼女はどちらがどちらかわからなかった。運よく彼はすぐに気絶したので、彼女は鋏を取るとすべての臓器が見えるようにして、次の手を考えた。

彼を完全に動けないように、しかも長い間そうしておく必要があった。ボットは臓器の修復

をすでに開始しており、ようやく自分の力を発揮できることに幸せを覚えていた（と彼女は想像した）。十分か十五分後には、彼は目覚めるだろうし、これについて何か話し合いたいとはおそらく思わないことだろう。もし今彼にとどめをさせなければ、明日の朝には彼女は評議会に対して釈明をしなければいけなくなるだろう・・・そしてその罰は間違いなく過酷なものになるだろう。さらに悪いことは、ディビッドが連れ去れてしまうということだ。そうなればすべてが無駄になってしまう。

彼女は気を取り直して、最後に肋骨を切り脈打つ心臓を切り取った。あたりに血が飛び散った（これが終わったあと、と彼女は考える。明日掃除しなければならない。恐ろしく骨が折れるだろうが、奴隷女にこの掃除をやらせるわけにはいくまい）。彼女は血で真っ赤に染まり、血しぶきはカーペットに染み込み壁に飛びちった。

彼女はすぐにそのぴくぴく動く夫の体を引きずって、ドアからホールへと運んだ。絶望は彼女に力を与えた。彼女は半分それを担いで、半分引きずるようにしてその重い体をキッチンへと、食料庫を抜けて運んだ（それはカテリーナの思いついた見事な逃走ルートであったことに彼女は気がついた。それは日記に書かれていたのだ。なんて知恵の足りない娘だったことだろう）。そして地下へと体を運び、その体をコンクリートの床に下ろし、あたりを見回した。

奴隷が置き去りにしたセメントミキサーがそこにあった。もちろんもっと優れた建築技術はすでにあったが、いくらでも労働力があり、いくらでも時間があり、裏庭に何千ものピラミッドを立てられるというときに、わざわざ金をかける必要はどこにもなかった。

ミキサーの脇に置いてあったはずのものは確かにそこにあった。踏鍬だ。

これをやるのはあまり気が進まなかったが・・・やらなければいけなかった。彼が悪いのだ。この愚かな男が原因を作ったのだ。

彼女は踏鍬の刃を意識のない夫の（だが活発に活動している）喉に当てて、足を平らな部分に乗せて眼を閉じ、踏み込んだ。

首が落ちるまで四回押す必要があった。

彼女が目を開けたとき、彼女はボットの働きを実際に見ることができた。ボットそのものというよりは、その仕事の結果だった。筋肉の腱と表皮はすでに切り落とされた頭と首の間に尾を引くようにつながろうとしており、ボットはその頭が体とつながり動脈によって血液を送られるようになるまで、脳に酸素を作りつづけるだろう。

ジョナス・ステンバーグは頭を無くしていたが、死んだとはとてもいえなかった。

エミリーは口を袖で拭うと、踏鍬を脇に放り投げた。彼女にはおそらく二時間ぐらいしか時間がないだろうが、おそらくそれで十分なはずだった。

彼女は奴隷の働くところをよく見ており、何をすべきかはよくわかっていた。彼女はミキサーにコンクリートの粉を入れると、機械に何杯かバケツで水を入れてスイッチを入れた。それは何度も何度も回り、粉と水を攪拌し灰色の粥のようなものを作った。彼女はまた踏鍬を手にとり、それをすくうと夫の頭からかけはじめた。

終わったあと、床にはかすかに人間を思わせるふくらみができていた。コンクリートはすぐ乾くはずだが、おそらく十分に早いというわけではなかった。エミリーは奴隷たちのことをよく観察していたのだ（彼女は男たちの顔に見とれていたのだが、それでもちゃんと見るものは見ていた）。彼女はミキサーの脇の棚を探し、すぐに目的のものを見つけた。それはほとんど医療器具のように見えた。何の特徴もないその灰色の箱は、二十五センチメートルほどの黒い

ケーブルを二本たらしていた。その先には銀色のプラグがついている。箱には二つのボタンがついていた。赤いのと緑のだ。

そのプラグを体を覆っているセメントに差しこみ、赤いボタンを押した。

割れるような音がして、セメントが一瞬のうちに完全に固まった。まるで肌のようになめらかだった。彼女がそのプラグを引き抜くと、その穴はすぐにふさがって固まり、その装置の残した跡はなくなった。

彼女は満足してそれを脇に放り投げた。

さて、これでカタがついた。彼はまだ生きているだろうし、しばらくはそうだろう。ボットは酸素と栄養物を肉体に供給しつづけ、傷ついた肉体をすべて直してしまうだろうが、いつかはボットは動きを止め、やがて・・・。

彼女はほほえんだ。

エミリーはその始末を完璧に確認するだろう。ちゃんとした埋葬をするのはそれからだ。もちろんそれは内密にやるのだ。大げさにする必要はないし、ジョナスはそもそも集まりが大嫌いだった。

そしてもし夫がどこに行ったのか聞かれたら、彼女は可能な限り何も知らないふりをして、わからないわと答えるだろう。彼は巡礼の旅にでも出たのかもしれないわ・・・おそらくもっとましな言い訳を考える必要があるだろうが、考える時間はたっぷりあった。

だが最初にしなければならないこと、そしてもっとも重要なことは、彼女の息子ディビッドだ。世話をしなければならない。

彼女は地下から食料庫への階段を上ると、後ろ手にドアを閉めた。

＊＊＊

「お父さんのことをまた話してよ」少年は言った。

「いいわよ」母は答えた。「あなたのお父さんは本当に勇敢な人だったわ・・・たくさんの人を治療したのよ」

「お医者さんだったんでしょ？」少年は熱心に聞いた。彼は母が答えるであろう言葉を知っていたが、それでも聞きたかったのだ。それをよく知っているということを確認したかったのだ。

「お医者さんだったわ」母はそう答えた（それは何度も練習しつづけてきた台詞だった）。「良いお医者さんで、皆を助けようとしたのよ・・・オメガとソリタスの両方をね・・・」

「彼は奴隷も治したの、母さん？」

「奴隷もよ、ディビッド」エミリーは言った。「彼は誰に対しても優しかったわ。それはつまりあなたも、誰に対しても優しくしなければいけないということよ。奴隷相手だとしてもね」

息子のディビッドは彼女の膝の上に座って、目を大きく見開いて信頼の眼差しを母に向けていた。それはいつもの会話だった。この六歳になった少年が不在の父の話を聞きたがるようになってからは、しばしばエミリーはそういった話をしていたのだった。

彼女は罪の意識を意識的に排除して、完璧な父親の、理想の夫イメージを作り上げ、息子に伝えた。もちろんそれは真実よりもずっとましなはずだった。

二人は邸宅からほとんど外に出なかった。彼女は召使の数を半分にして、生活に必要な必要最低限の労働力しか雇わなかった。彼女は聞かれたら子供は必ずカテリーナの遺児であると、

女中として雇った奴隷娘は事故で死んでしまったのだと答えた。もちろん子供は仕事ができる年になるまでは貧民街で生活させるのが普通だったが、彼女はディビッドが病気で、きちんとした療養が必要だと主張してきたのだった。
　それに、奴隷たちは自分たちの仲間を彼女が育てている事実はどうでもいいと考えているようだった。また彼女が知る限り、この少年のことを知るオメガは一人もいなかった。
　オメガたちは夫の行方について問い合わせてきてはいた。最初、ステンバーグ博士は何か用事があって出かけたという彼女の作り話をそのまま彼らは信じたのだった。彼女は用がいったい何なのかはわからないと、そして彼がいつ帰ってくるか具体的には知らないと言った。そんなに仲がいいわけではなかった、と。だが彼の不在が長引くにつれ、数ヶ月が数年に変わり、誰一人として彼の行方を知る者がいないということが明らかになったとき、それは噂になった。最近になって、彼らはようやく調査に本腰を入れ始めたのだった。
　六年間はオメガにとっては瞬きするぐらいの時間でしかなかったが、オメガの一員にとってこれほど長いこと不在なのはおかしかった。特に行方不明になる前、再生処理室をしばらく使っていなかった者にとっては、特にそうであるはずだった。どこにステンバーグ博士がいるにしろ、その体は老化しつつあるはずだった。そしてどれほど秘密主義を保ちたいオメガだろうと、老化を受け入れる者など一人もいないはずだった。
　ファーマテック評議会は彼が殺されたことを確信していた。そして妻がそれに関与していることも。
　だが、それには証拠が必要だった。罪を犯した奴隷については、法的な保護はほとんどないといってよかったが、オメガの法体系は、彼ら自身に適応されるときは公正で偏見のないものでなければならないとされていた。なので調査員たちは念入りに調査をはじめていた。事件が明らかになれば、数週間から数ヶ月かけて関係者からの聞き込みと、邸宅の重箱の隅をつつくような調査が実施されるだろう。
　エミリーは彼らが証拠を遅かれ早かれ見つけるだろうと考えていた。それまでは、彼女はディビッドと出来る限り長いこと一緒に過ごそうと考えていた。なぜなら彼は取り上げられてしまうだろうし、そうすればもう彼女には何もないのだ。彼女は死は怖くなかった。もうそれは怖くなくなっていた。だが彼女は自分の息子が奴隷としてではなく、またオメガとしてでもなく、その特別な命にふさわしい人生を歩ませるのだと決意していた。
　だから彼女は彼がどうして他の子供と違うのか、オメガとソリタス両方の立場を理解することがどれほど重要かをできる限り教え込んだ（それでも彼女はどちらの種が勝っているのかはっきりとさせた。彼はオメガの一員であることを誇りに思うように、と）。
　彼女が逮捕される前の日の晩、ディビッドとまた父のことを話していたある夜、一人の来客がやってきた。
　その皺だらけの年老いた男は、女中に待っているように言われた通りに、ホールに立っていた。エミリーが入ってくると、彼は敬意を込めてお辞儀をし、丁寧に挨拶をした。ディビッドが客間の入り口で聞き耳を立てていることに彼女は気がついたが、それを追いやる気にはならなかった。この男が何を言いに来たにしろ、聞かせてあげればいいのだ。
　だが彼女が何の用なのか聞く前に、彼は放し始めた。
「ステンバーグ夫人、私はディビッドを引き取りにきました」
　彼女は凍りつき、言葉を失った。ディビッドを引き取るとはいったいどういう意味だろう？

子供を誘拐すると脅迫しているのだろうか？　なんて馬鹿な男だろう、この邸宅は警備兵に囲まれているのに。
「心配はご無用」彼は続けた。「彼を傷つけるつもりはない。彼は特別な子供です。それはわかっています。彼は唯一の存在なのです」老人は肩越しにディビッドを見るとウィンクした。
「いまわかることは、明日貴方が逮捕されるとき、子供も一緒に連れていってしまうということです。そして彼らは子供を、貴方が望むところには連れて行かないでしょう」
「逮捕されるとはどういう意味？」彼女はようやく声を出すことができたが、ひどく気分がわるくめまいがした。こんなひどい知らせを持ってきた、この客はいったい誰なのだろう？
「彼らはあなたの夫の死体を明日の朝見つけるでしょう」彼はディビッドに聞こえないようにささやいた。彼は一歩近づき、彼女は逃げたいような衝動に襲われたが動けなかった。「貴方は殺人の罪で有罪になり、この家に軟禁されるでしょう。貴方は老化して死ぬでしょう、私たち奴隷と同じように。そして子供を手元に置くことも彼らは許さないでしょう。貴方はそれがよくわかっていると思いますが。もし貴方がその子供が奴隷の子供だと言えば、子供は下層街に追いやられるでしょう。そしてもし真実を言えば・・・そんなことは貴方はしたくないでしょうね。彼らがどんなひどいことをその子にするかわかりませんから」
「なんでそんなことがわかるの？」彼女はささやき返した。「どうやって？」
「私はただのメッセンジャーに過ぎません」彼は答えた。「指示を受けているだけです」
「どうやって？」
「夢です」彼は言った。「そのお子さんと同じように、私もアリッサの一族の最後の生き残りなのです・・・その子もそうです。カテリーナの息子」
　エミリーは真っ青になったが、老人は手を振った。
「私は貴方を裁くためにここにきたわけではありません。我々は、ある偉大な力のために働くのです」彼は少し上を見上げると、瞬きをしてまた彼女を見た。「そしてもし貴方が許しを求めるのなら、貴方は許されるでしょう。だがその子供のために行動しなければいけません・・・そうでなければ貴方は自分のことを許すことが永遠にできなくなります」
「彼はいったいどうなるの？」奇妙なことに、老人が真実を語っていることを彼女は理解できた。何かが彼女を包んでおり、彼女は何か晴れやかな気持ちでそれが唯一の選択なのだと知った。これこそが彼女がディビッドを育ててきた理由だったのだ。彼はより偉大な者になるために生まれ、彼女はそのために、この可愛い我が子のために自分ができることをすべてやったのだ。今、この子を誰か別の者の手にゆだねる必要があった。ディビッドが自分の運命をまっとうできるように。
「彼は私たち皆を解放するのです」老人は言った。その目は子供のように輝いていた。「そしてそれはただソリタスだけの話ではありませんよ。人間全体のことです。彼の未来こそが、これまでの出来事のうちもっとも重要なことなのです。だから私は彼を引き取りに来たのです」
「お別れを言わせて」エミリーは答えた。そうは言ったが、自分が何をしているのかよく理解できなかった。だがそれはなぜか正しいことのように思えた。それは本当に残酷でひどいことだったけれども、また彼女がやってきたことのなかでもっとも悲しいことだったけれども、それは正しいことなのだだと、エミリーは思った。
　彼女はディビッドの前にひざまずくと、落ち着いた声で彼が老人が行く場所について行くように、身の安全のためにそうするようにと言った。ここにいては危ない、と。ディビッドは一

言も喋らなかった。涙もこぼさなかったし、耳を閉ざすこともしなかった。彼はただ聞いていた。そして彼女が話し終わると、息子は彼女の頬に手を触れて言った。「母さんのことが大好き」そして彼は老人のところに行くと、二人は出て行った・・・そういう決まりだったかのように。

　二人が玄関にたどり着いたとき、老人は振り返って聞いた。「この子をどう呼べばいいですかな？　ディビッドだけではいかにも不十分だし、ステンバーグではだめでしょう？」

「マーリン」彼女は言った。彼女は泣きそうだったが、まだその時ではなかった。「私の旧姓よ」

「ディビッド・マーリン」老人は答えて微笑み、頷いた。そして二人は外へと出て行ってドアが閉まり、エミリー・マーリン・ステンバーグはこの千年間で初めて、涙を流して泣きはじめた。

第十六章

西暦12305年6月7日　スイス

「ロンドンの第一中継点（ハブ）より、ＤＮｅｔ速報をお届けします。お好きな司会者と言語、方言をお選びください。
　ご利用ありがとうございます。私アニータ・ベルグが標準英語でお届けするＤＮｅｔ速報です。
　おはようございます。世界評議会のディビッド・マーリン大統領がスイスのチューリッヒの自宅から行方がわからなくなった事件ですが、その筋の情報ではマーリン大統領は巧妙極まりない手口で誘拐された疑いがあるとのことです。ＤＮｅｔが得た独自の情報によると、今日未明、大統領を守っていた五十人の警備兵のうちの六人が、官邸で気を失っているところを発見されたとのことです。マーリン大統領は防音装備のついた飛行車（フローター）により空へと連れ去られた可能性があり、深夜過ぎに三人の来訪者が車で官邸の施設エアポートへ来たことが確認されています。その飛行車は今朝チューリッヒから百キロ南の地点で乗り捨てられているところが発見されましたが、目撃者は現時点ではおらず容疑者も固まっていない状態です。
「官邸のモニク・カヴァン代理人は、今朝開かれた記者会見で次のような原稿を読み上げました。現時点ではマーリン大統領に何が起こったか言うことはできないし、また犯罪に巻き込まれたという証拠もない。ですがカヴァン代理人は以下のことを強調しました。マーリン大統領の身の安全を心配しており、公安省は全地球で大統領の居場所を突き止めるのに全力を上げるとのことです」
「世界評議会は緊急会議をこの午後に開き、パオラ・サンチェズ現副大統領がマーリン大統領の責務を即日引き継ぐことを決定します。専門筋は大統領が行方不明になった事実により考えられる影響として、世界的な株価の低落と、不安定なアジアと南アメリカ地域の反政治活動の活発化が懸念されるとしています。この事件について最新情報を欲しい人は、ＤＮｅｔのデータバンクを起動して検索をかけてください。
　ご利用ありがとうございます。ＤＮｅｔデータバンクを起動します。最新情報が今後随時配信されます。
　ロンドンＤＮｅｔのアニータ・ベルグです——」

　ディビッドは目を閉じて、柔らかい革張りの椅子に体を沈めた。
　古めかしい水素エンジンの柔らかい音でうとうとしていた彼は、自分が半分夢の中にいるように感じた。そこで彼は、実際にあったことではなく、こうであってほしかったことを考えるのだった。
　窓の外に見える雪に覆われたスイスアルプスの山々の景色が、少しずつフランスのうねるような緑の丘陵に変化してゆくように、彼も過去を置き去りにして未来へと進むのだろう・・・

まあしかし、未来とは不確かなものだ。
いまディビッドはただ、長いことぐっすりと眠りたかった。本物の眠りだ。いつもの浅い眠りではない。彼が指導者となってから、世界が彼の双肩にかかっていたせいで、ほとんどちゃんと眠れたことがなかったのだ。だがすぐにでも、彼をここまで連れてきたとある力のおかげで、彼はちゃんと眠れるようになることだろう。
彼は大人になってから初めて、すべての関係と責任から逃れられたように感じた。もちろんいつまでも続くものではないだろうが、彼はこの自由が自分のものであるあいだ楽もうと思った。再び運命が彼を捕らえるまで、もしくは彼が運命に追いつくまでの間は。ディビッドはどちらになるのか判断ができなかった。彼はこれから幾億の星が広がる空間でひとりぼっちになるのだ。真の意味で一人ぼっちに。
なんとすばらしいことだろうか。
彼がもっとも親しいと思っていた知人や親友たちも、誰一人として彼に共感できなかったし、彼の苦しみを理解することもできなかった。不老不死の体に死すべき魂を持つと言うこと——その心は一度もきちんと眠ることができずに、どんな人間の心よりも疲れきっているのだ。
ディビッドは特に死を願っていたわけではないが、ずっと安らぎを求めていた。誰も理解できないほど強くそう願っていた。おそらく最悪のアイロニーとは、彼のもっとも古く残酷な仇敵たちだけが、彼の苦しみを本当に理解できるであろうということだった。ファーマテック社の古い守り手たちがどこに逃げ隠れているにしろ、彼らもおそらく疲れ果て、呪われているように感じているだろう。
だがもちろん連中は疲労と痛みを和らげる方法を知っていることだろう。この長すぎる人生と、うまく付き合ってゆく方法を。何千年も生きてきて、さらにこれから何千年も生きて行く彼らなら。
ときおり、ディビッドは彼らと話してみたいと思うことがあった。教えるためではなく、教えを請うために。彼らと比べたら、彼はまだ幼児に過ぎなかった。
だが彼がオメガたちと会う機会はまずないだろう。一つ目の理由は、彼らがどこかに完全に消えうせてしまったからだ。だがディビッドは、あの連中が裏でどういった糸を引いて、どういった小道具を使って、再度優位に立とうと試みているか知っていた。彼自身の顧問であったアナーハ・シングはファーマテックの諜報員に誘惑され、イスカリオテのユダのように銀貨で自らの魂を売りとばしたのだ。
もちろん、それは避けがたいことだった。ディビッドはこうなるのをずっと待っていただけだった。それがいつ、どうやって起こるのかは彼も知らなかったが、ゲームのルールがすでに決められており、その駒も準備されていることは知っていた。そしてゲームは終盤に入っていた。
彼が連中の顔を見ることができない二つ目の理由は、いまディビッドがここを去ろうとしているからだった。彼はこの世界を去り、二度と戻ってこないだろう。
もうここには彼が望むものは何もなかった。彼の家族はとっくの昔に死んでいたし、友人は彼を裏切り、彼の地位は日々その重要性を失いつつあった。世界評議会は彼なしでもうまく動くだろう。実際のところ、評議会は彼がいないほうがうまく動くだろう。彼は皆がなんとか忘れようとしている過去を、常に思い出させてしまう存在だった。大統領として働いたこの数年間、ディビッドは意識的に政策に直接関わらないようにしてきたのだ。

もし去るのによいタイミングがあるとするならば、今日がそうなのだ。彼の地球での仕事は終わった。

そして最後の仕事が彼を待っていた。この長い道の向こうに、遠い未来にある異世界のどこかで。

まじめに考えて、その考えが実におかしなものであると彼は思う。だが彼のこれまでの人生も、実に奇妙でおかしなものであった。彼の出生も、育った環境も・・・彼は皆に人類の救世主となるよう育てられたのだ。皆が夢で見た予言、その仮説により彼は崇拝されつづけてきたのだった。

こんなにひどい人生を歩まなければいけなかったのも無理はなかった。彼はオメガでもソリタスでもなかった。主人でも奴隷でもなかった。彼はどこにも居場所がない人間だった。

なぜわれはこの顔で生まれしか、と彼は皮肉っぽく考えた。なぜわれは他の者と異なって生まれざるや？

ウィリアム・ブレイクの詩だった。詩人もまた呪われた魂であり、だから彼が一番好きな詩人だった。

だがディビッドは運命に対して恨み言を言うタイプではなかった。それはつまらない行為であったし、また思い上がりとさえいえた。まるで彼が受け継いできたものが、初めから存在しなかったと言っているようなものだった。だがしばしば、彼は運命というもの以外すべてなくしてしまったように感じるのだった。

これまでの人生の中でつちかってきたものと、他人が自分をどう思っているかが、いまの自分を決めるのだ。

いったい人々は彼のことをどう思っていたのだろう？　解放の日（リバレーション）から何世代もの時間が流れて、オメガをのぞいては（そしてもちろん彼自身も）、彼が人類を指揮することが皆に望まれていたあの重要な意味を果たした日々のことを思い出すことができる人間は、今日一人も生き残っていなかった。それは試練の日々だったが、少なくともそのとき彼には目的があった。

今、目的がないというわけではないが・・・だが彼は自分が再び歴史に参加できるようになるまでには、長い長い旅に出なければいけないような気がしていた。彼は自分の運命を呪ってはいたが、少なくとも自分の行動が何らかの結果を生んだことを見ることができていたのだ。

オメガとの最後の戦いと新しい世界を構築した時代の間には、いつまでも続いた国同士の戦いと、完全な混沌に叩き込まれた世界があった。彼はいつのまにか目的を完全に見失っていた。

彼は誰に対しても怒っていた。同盟を結んだにもかかわらず武器を収めない将軍たちに怒っていたし、彼が直接動かねば何一つまともなことができない世界評議会に対しても怒っていた。

もっとも腹立たしかったのは、彼が誰よりも愛していた二人の人間を失ったことだった。彼自身が始めた戦争が、二人を連れて行ってしまったことに激怒していたのだ・・・。

彼は自分に対して、たくさんの車輪を動かてしまったことに怒っていたのだった。

だがいまはもう彼の中には怒りすらほとんどなかった。年月はそれを彼から奪った。世界がますます繁栄してゆくなかで、怒りの使い道はなくなり、彼は自分に閉じこもるようになった。思い出の中に浸り・・・ただ待っていたのだ。

いったい何を、誰を待っていたのだろう。彼はいつかそれがやって来ることを知っていた。今彼らはようやく姿を表し、彼は旅立とうとしていた。彼の世界から、彼の過去から離れた場

所へと。ずっと逃げようとしてきたが、いつまでもまとわりついて離れなかった彼自身の過去から・・・。

＊＊＊

西暦12101年6月9日　エルサレム

「『真実の声』の時間だ！　みんなよく聞いてくれ！」
「ある理由により、これを一度しか放送することができない。だからいまこの番組を聞いている人は、これを忘れないでくれ。いまから流す言葉を他の人に、すぐに伝えてくれ！　光陰矢のごとし！　僕らの意思をちゃんと、間違いなく、すばやく伝えることがなによりも大事なんだ。この活動に参加しないソリタスが少なければ少ないほど、僕らのチャンスも小さくなる。この戦いに負けたら、どうなるかは言うまでもないだろう。僕らに二度目のチャンスはない。少なくともすぐにはこないだろう」
「さて、僕はすでにもうこの場所がばれていると聞いている。なのであと数秒あるかないかかもしれない・・・だがそれで十分だ。同志たちよ、今すぐ近くの基地に行くんだ！　どこにあるか知らなければ、知っている者を探すんだ！　武器を取って仲間を探すんだ。ためらうな！　何も言わずに決められたリーダーのいうことに従うんだ！　民主主義が大事な時代と、従順さが求められる時代がある。君たちにはこれがすべて終わったら発言する自由が与えられるだろう。いまはただ命令に従うんだ！　それだけが勝つための方法だ。僕らの敵は組織的であり強力で、命令一つで軍隊を動かすことができる。僕らは数が多く、そして僕らはもっとも重要なもののために戦っている！　僕らの自由のために、だ。だがそれも僕らが協力して、命令をきちんと聞かないことには成し遂げられない！　オメガには失うものがたくさんあり、彼らは簡単に降伏しないだろう」

ゼーブは椅子を回して端末に背を向けると、窓の外を眺めた。
すでに門はオメガ軍により集中砲火を受けていた。あの火力では門は長いこと持たないだろう。
オメガは彼が予想したよりも早く気がついたようだった。だがいまやそれはどうでもよかった。言葉はすでに放送されており、ディビッドは安全な場所にいた。ジーブ自身に何が起ころうと、彼は革命が成功することを確信していた。一年前であれば、それはかなわぬ夢だった。その時彼らは組織としてまとまっていなかったのだ。一万年もの間、奴隷として過ごしてきたにも関わらず、彼らには共通の目的がなかったし、まとまることもできていなかった。いまはそうではない。いまはディビッドがおり、不安だったジーブの予想を裏切って、彼はほとんどのソリタスにとって本物の救世主になったのだった。その事実は彼をオメガ軍の標的にさせたが、見つけることなどできはしない。連中はどこを探したらいいかわからないだろう。
彼は続けた。
「僕らはいま包囲されているが、さしあたっては大丈夫だ。僕らは持ちこたえる。僕らは生きている限り生き延びつづける・・・だがへまをやらかしたとき、僕は助けることができない。さっき言ったように、自分の仲間のところに留まり、リーダーの命令を聞くんだ。彼らの指示

はディビッドその人から直接来るものと考えてくれ」
　大きな爆発があり、門が倒れた。兵士たちが大量にそこを通って侵入してきていた。ジーブは背を向けて、コンソールに向かった。
「さて、そろそろ時間だ。行くんだ！　この放送は続くが、もう言うべきことは言った。僕はこのメッセージを出来る限り繰り返すつもりだ。ここまで聞いていた人のために・・・もう始まったんだ！　戦うんだ、後ろを見ないで！　決して諦めるな！　ディビッドを言葉を思い出すんだ・・・」
　彼は言葉を切った。この戦争のどうやら救世主らしい男が果たさなければいけない役割と、彼が強制された義務について、一瞬怒りを覚えた。
「『私たちは奴隷として生まれたが、世界は私たちのものだ。私たちは人類の未来なのだ』さて、行くんだ、子供たち。オメガの砂の城を洗う波となり、新たな建築への礎となってくれ」
　ジーブはマイクを一瞬オフにすると、白くなるほど握り締めた拳を広げた。喉に何か詰まるものがあった。彼は強くある必要があった。

　彼はスイッチを「生放送（ライブ）」に戻すと原稿を最初から読み始めた。

＊＊＊

　西暦12120年11月3日　ウランバートル

　戦争はいつ終わるとも知れずに続いた。
　かつてモンゴルと呼ばれた地域では殺戮が続き、金属でできた恐竜はあらゆるものを壊し、山となった骨の上を踏み潰しながら街を廃墟にし、その住人を皆殺しにした。だがその冒涜行為を目撃したものは誰もいなかった。機械に魂はなかったし、オメガの将軍たちによって遠隔操作されていただけだった。この冷たく不毛な土地にかつて集まったソリタスの軍隊は、とうの昔に消え去っていた。
　現状のところ、オメガは優勢であるようだったが、それも長続きしないだろうとされていた。ヒビはすでにあちこちに入っており、休むことを知らない献身的なソリタスたち、もっとも偉大な指揮官であるディビッド・マーリンに率いられた彼らは、かつて奴隷だった人々の心を鼓舞し、軍隊の士気を高め、春に最初に咲く花の香りのように、勝利を確実なものにしつつあった。もう命運は決まっていた。オメガには敗北以外の道はなかった。それはもはや時間の問題であり、命運が決するまでにあと何人のソリタスが死ななければいけないかという計算だけであった。
　何万人も、いや何百万もの死者が出た。そのほとんどはソリタスだった。オメガの死者は千に対し一ほどだったが、オメガと違ってソリタスはその目的と家族のために死ぬことを恐れなかった。オメガが人工の永遠の命にこだわり、不老不死を失う危険を避けたため、その勝利の機会は失われていたのだった。
　真っ青な肌をしたエイリアンのように地球の奥底から現れてから一万年の間に、オメガはこの世界を自分達のための楽園に変えた。青々とした美しいアルカディアに。それは進歩というものがまったくない、彼らの視点からすれば具現化した完璧さであった。

いまその楽園は空から降る炎のあられによって引き裂かれ、前に進むことをやめない機械の軍隊が放つ弾丸と爆弾が、青い草原を深紅の血で染めているのだった。
だがどちらも降伏するつもりはなかった。
過去の奴隷にとっては、得るものはあまりに大きく、かつての主人にとっては失うものがあまりに大きかった。戦いはまだ数年は続くと見られており、軍の数は多く武器弾薬も豊富だった。その間にも野営地や焼け野となった都市、そして地下で指導者となるべく立ち上がる者たちがいた。彼らは何千人もの人間に命令を下すことができ、自分の軍を毎日のように戦いへと駆り出していた。そのほとんどはディビッドの名前を承諾なしに利用していた。避けがたいことだったが、争いは彼ら同士の間でも起こった。だがほとんどの場合においてはオメガの軍隊に対する戦いであり、時折は不老不死の人間たち本人たちとの戦いだった。
この将軍たちには共通の理念があった。彼らはその点で、かつて古代の地球にいたモンゴルの軍たちと異なっていた。彼らは盗みを働いたり、富を得るために戦っているのではなく、彼らを縛り付ける鎖から人々を解放するために戦っていたのだった。いつの日か、将軍達も自分の王国を手放さなければいけないことを知っていた。だがディビッドが生きており、彼らの忠誠を受け入れる限り、それは難しい選択ではないだろう。ディビッドこそは唯一の、未来の王であった。彼はソリタスの失われた部族を纏め上げ、残ったオメガたちをあぶり出し、人類に対して犯した罪を裁くための法廷に送り込むだろう。彼は地球を解放して、新しい時代を、新しい暦を始めるだろう。時計はゼロ年へと巻き戻され、勝者が歴史を書き換えるだろう・・・かつて勝者が常にそうしてきたように。
そして戦争は果てしなく続いた。惑星を覆う真っ黒な雲は、近いうちには晴れそうにはなかった。

＊＊＊

西暦12120年11月4日　パキスタン　ヒーダラバード

ディビッドはゴーグルを下げた。
夜空は地平線いっぱいに広がる光で照らし出されていた。それは本当に美しく、彼が六歳のころ母と参加した新年祭の花火を思い出させた。だが今回その光は再生の前触れではなく、死の光でしかなかった。
ディビッドの周りでは二十四時間、三百六十五日間、彼が一度も望まなかった戦いと、避けられない戦争がいつまでもつづいており、彼はそのすべての中心にいたのだった。
彼は肩に誰かの手を感じたが、振り向かなかった。その心は頭上の空に広がるような光でいっぱいだった。それはいとおしさと不安と、悲しみに包まれていた。
「サンダースの軍はまた東に移動しているようだ」彼は言った。「奥まで進軍させるべきではないのに」
妻は腕を彼の腕に通すと、彼に体を預けた。その体は温かかった。さっきまで眠っていたのだ、と彼にはわかった。彼女はまだ目覚めておらず、その心は夢から出ていないだろう。
「すべての人間を心配することはできないわ、ディビッド」
いつものように、その柔らかい声は彼をすぐに落ち着かせた。彼は自分の心が彼女のそれと

重なり合うのを感じ、その思考が重なり合った。妻にはそういう能力はなかった。だがそんなものは彼女には不要だった。彼女は彼が何を感じているか、何を考えているか、彼自身よりもよく知っていたのだ。
「できるさ」彼は答えた。「みんなのことを一人一人心配に思うし、これからもそうする。俺がみんながあそこで戦っている理由なんだ、ニカ。彼らは戦って・・・死んでゆく。彼らは僕を信じてくれたし、それを無視できない」
　ニカは自分のほうに彼を向かせると、その濃い茶色の目で彼を見上げた。
　その顔は丸く、暑く湿気の高い防空壕で眠っていたため頬は真っ赤だった。髪の毛は長く、鴉のように真っ黒で、腰のあたりまで伸びていた。体は大柄で、やせていたわけではなかったが均整が取れていた。彼は妻のすべてを愛していた。その顔には戦争による疲労があった。彼女は毛布を肩に巻いていた。ここは寒く、風が吹いていたのだ。
「無視できないのかもしれないけど」彼女は言った。「あなたにいつも心配していてほしいなんて誰も思ってないわ」彼女は口をすぼめてわざと訛らせて言った。彼はそれを聞くたびに笑いをこらえるのが大変だった。彼女は彼をにらみつけると、その体をふざけて向こうに押しやった。
「まじめな話なんだ。ふざけないでくれ」
　彼は彼女の両腕を掴むと、体を遠ざけた。
「わかってるよ、ニカ。だけど知識と行動はまったく別だ。この戦争が明日にでも終わらない限り、安心して眠ることはできそうにない」
「この戦争は明日やあさってには終わらないでしょう」
「終わらないな」彼は本当に疲れていた。彼はただ横になって、千年ぐらい眠りたかった。「戦争が終わるまでには長い時間がかかるだろう。わかっている。今僕らはうまく戦えていない。組織もうまく動いてないし、正しい選択もできていない。毎日何千もの人が死んでいる」
「それはあなたのせいじゃないわ、ディビッド！」彼女は怒り出していた。この話題になると彼女はいつも怒ったのだった。彼はその心を熱い、光を放つ火の玉のように感じることができた。それは彼女の感情が強く、本物であることを指していた。「皆あなたを尊敬してるくせに、そのあなたの命令を聞かないのはわけがわからないわ！」
　言葉の一部がまた訛っていたが、彼は笑わなかった。そういう気分ではなかった。
「僕が命令できる人たちじゃないよ、ニカ」
「いいかげんにして」彼女はいらだつように両手を上にあげた。「ディビッド、あなたは何でも知覚できるのに、なんでそんなに馬鹿なの？」彼女はそんなことを彼に言える唯一の人間だった。彼はそこが好きだったのだ。「あなたが命令するのを彼らは待っているのよ！　なぜそこで内気になって逃げるの？　何をすべきか命令すれば、みんなあなたの言うことを聞くわ！」
「僕は言ってるよ」
「いわゆる委員会に対してでしょう。あなたは将軍たちに直接話すべきだわ。あなただって軍隊の指揮官なのよ！　みんな貴方のことをもっとも偉大な軍師だといっているわよ。なんでそんなに回りくどいことをしているの？」
　彼は背を向けた。答えは明白だった。彼は責任をとりたくなかったのだ。彼は世界のあらゆる死に対する責任を一人で負いたくなかったのだ。だがすでにそうだった。彼にはすでに責任

があったのだ。委員会や将軍たちの後ろに隠れても、事実を曲げることはできなかった。彼女は正しかったが、そんなことはわかっていたのだ。だからといって何かが変わるわけではなかった。彼はただ影の中から出ていって、かつて予言が指し示した偉大な指導者になるためには、心の準備ができていなかったのだ。

「もう食べたのか？」彼はそう聞いて、話題を変えた。いつものことだった。

彼女はため息をついた。「いいえ、おなかは減ってないわ。だけどあなたは食べたほうがいいわ。ちゃんと睡眠もとらないと」

「それが必要ないことはわかっているだろう」

「そうかもしれないけど」間があった。「彼女は貴方がいないからさびしがっているわ。もう少ししたら学校に連れて行くけど、あとで会っておく？」

「もちろんだ。」疲れきっていた。「様子はどうだ？」

「彼女はここが好きじゃないみたいよ。それは知っているでしょう」また間があった。「私も好きじゃないわ」

「ニカ」

「わかってるわよ！」彼をさえぎった。「ディビッド、わかってるわ。だけどどこか別のところで娘と過ごすぐらいならあなたと一緒にいたほうがいいわ。だけどこんなことがいつまでもつづかなければいいと思うのよ」

彼はまた彼女に背を向けた。

十年前、難民たちが並ぶ道の中に彼女は立っていた。彼は彼女とその家族がペテルブルグに送られるように取り計らった。戦火はまだその街までは達しておらず、食料と水が豊富にあったからだ。彼はすぐに彼女に夢中になったが、どうやって近づいたらよいのかわからなかった。かつての奴隷たちにとって、彼は謎めいた人物であり、救世主だった。皆が彼を尊敬の眼差しで見つめ、人間扱いしなかった。まるで彼が具現化した自由であり、皆の祈りに対して与えられた答えであるかのようだった。彼はそれが気にいらなかった。彼がほしかったのは軽蔑であり、彼の言動を問いただし、彼を現実に引き戻してくれる何かだった。彼は彼女から距離を取って過ごしたが、難民キャンプにはしばしば足を運び、彼女の心を感じようとした。それは個人的な考えを探るものではなく、彼のことをただの男として、神様ではないという考えを持っくれているのではないだろうかという期待からだった。

彼が参加したとある町の打ち合わせで、二人の力ある将軍たちの間で議論が起こった。彼は調停役として、二人の間で動きが取れなかったのだが、そのとき彼が望んでいた事が起こった。

彼女が立ち上がり、彼に反対意見を述べたのだ。その父はすぐに彼女を黙らせたが、あとになってから彼は彼女を探し出した。彼女の提案に興味があったし、彼女が黙っているのを嫌い、彼を軽蔑していることがわかって安心したからだった。

そのあと二人はお互いを必要とするようになり、一年後ニカは女の赤ちゃんを産んだ。

ニカの中に彼は求めていたものすべてを発見した。友人と生涯の伴侶。それは、どこかへと流されつづける彼の人生の中に置かれたしっかりとした岩であった。それまで彼は人と親しくすることを避けてきた。なぜならいつかは彼の周りの人間は死んでしまい、彼だけがいつまでも生きつづけることはわかっていたからだ・・・おそらく永遠に、だ。だがいつしか彼も、人生と愛は貴重なものなのだということを理解するようになっていた。そしてほんの少しでも友情を感じることができるのならば、まったくそれを知らぬまま生きるよりも遥かにましだとい

うことを理解した。
　もし彼の部下たちがなぜ戦っているのか、生きていることに価値を見出しているのがなぜかということが理解できなければ、彼がどうして指導者としてやっていけるだろうか。
　いつか彼女も年老いるときが来て、その時も彼は年を取らずに若いままだろう。もしそうなったら・・・過去に彼の友人がそうなったとき、それは苦痛だった。彼は少しずつ皆から距離を置いていった。彼らの目に嫉妬と絶望を感じたからだった。ニカとその娘はどうだろうか？二人は彼の痛みを自分のもののように理解してくれるだろうか？　彼はそう願うことしかできなかった。いまは、ニカが心配していることを彼は知覚できた。彼女の愛も、未来への恐れも理解できた。そして彼は彼女の痛みを取り除くことができることを知っていた。
　彼は微笑んだ。「娘と遊んでやろう。だいぶおなかが減ってしまった」
　彼女も微笑み返した。「二人にお粥を作るわ」
　彼が無理やりしかめ面を作ったので彼女は笑った。その時はすべてがうまくいっていた。希望もあったし、未来は二人の手の中にあった。何がやってこようと、二人でうまくやっていくことがきっとできるはずだ。

＊＊＊

　西暦12127年8月1日

　戦争は妻の死と共に終わった。
　ディビッドはそれが起こった瞬間を知覚することができた。それは遠い場所で起こったことだったが、彼は真っ白な光と、砂がガラス化する瞬間を、勝利を祝っていた兵士たちの顔が、瞬時に焼き尽くされてゆくのを見た。
　彼は妻が幸せで涙を流している姿を見た（感じた）。涙は壁が爆発して彼女を押しつぶした時、千分の一秒で蒸発した。即死だった。彼女が最後に考えていたのは夫の顔だった。
　その時の記録を見せられたとき、彼はその光景に耐えられなかった。皆はこんなことがどうして起こり得たのかわからないといった。これを予想することは不可能で、防ぐことはできなかったという言葉を彼は座ったまま聞いた。彼は頷いてお悔やみの言葉を受け入れ、必要であれば口を開き、自分たちの勝利に祝いの言葉を述べて皆を送り出した。
　だいぶあとになって、部屋で一人になったディビッドはその記録を最初から最後まで見てみた。
　部下は防空壕の部屋を映し出す保安カメラが残した映像をまとめてきたのだった。ある部屋では彼の仲間たちが動きまわって笑い、お互い握手しあっていた。そして・・・暗転。その爆発はあまりにも突然だったので、カメラの映像ですら捕らえることができなかったのだ。
　二回目に見たとき、彼は妻を見つけた。彼女は人がたくさんいるホールの後ろのテーブルに座って、ノートに何か書き記していた。彼は再生を一時停止させて、その部分をできるだけズームしてみた。だが解像度をいくらあげても、彼女が何を書いていたのかはわからなかった。
　その顔をズームアップすると、彼は妻が泣いていたことに気が付いた。涙を流していた。彼が感じたことは事実だったのだ。
　彼女を守ることができなかった。だがもしその場にいたとして彼女を助けられただろうか？

妻を守れなかったあの力は、彼を守るためなら介入しただろうか？
　妻の命は誰よりも大事なものではなかったのだろうか？
　その夜、彼は娘に起こったことを告げた。娘は悲鳴を上げて泣き出し、彼のことが大嫌いだと言った。他の人をみんな救ったのに、と娘は叫んだ。なんで母さんを救ってくれなかったの？
　彼は答えることができなかった。

　次の日、追悼会場に向かう前、彼は現状を確認した。ほとんどのオメガは姿を消していた。何人かは捕まえていたが、その数はあまりに少なかった。そのために戦ったソリタスたちは皆死んでいた。そしてオメガ軍のほとんどを占めていた機械兵は破壊されていた。
　だが彼らは戦争を戦争の道具にしたに過ぎなかった。共同の敵なしでは、将軍たちはお互いに対立をはじめるだろう。それは遠い未来のことではない。
　だがディビッドにとってそれはもうどうでもよいことになっていた。彼が戦争を家に持ち込んだせいで、家族はばらばらに引き裂かれていたのだった。
　彼はいつか幸せになれるのだろうか？

＊＊＊

　西暦12127年8月13日　パリ

　ブルースは集まった人々を注意深く観察した。
　いかに友好的に見えようと、たくさんいる人間というものは信用ならないものだ。自分の仲間たちに囲まれていても、警備兵が何十人も必要なのは頭のおかしい連中がいるからだ。それに、オメガが実のところ何人生き残ったのか知っている者がいるのか？　すぐ目の前にスパイがいるかもしれない。考えてみれば、それは間違いないことなのだ。だがもちろん、もしオメガがここまで出てきていれば、おそらくそいつは目立ちたくないと考えていることだろう。
　だが、用心にこしたことはない。
　なのでブルースは一人一人顔を眺めわたし、最悪の事態を予想していた。彼は自分たちのリーダーがこういった場所に姿を現すことをよいことだとは思わなかったが、その理由は理解できた。人々はリーダーの姿を見たかったのだ。それがたとえ・・・不幸のどん底にいる人間だったとしても。
　彼のすぐ後ろで、ディビッド・マーリンが墓石に向かって歩いていた。彼は十二人の警備兵に囲まれており、何十人もの将軍たちを引き連れていた・・・いや、いまはそういう言い方をしなくなっていた。大臣（ミニスター）だ、とブルースは言い直した。彼らは戦争が終わった後、自分たちの領土を差し出した代わりに、新設された世界評議会のポストを入手し、降伏した数少ない将軍たちだった。警備兵と大臣たちの後ろには、墓地に入ること許されない何万もの市民たちがいた。彼らもまた死者に対して敬意を払うために、またもっとも偉大なリーダーの姿を一目見るために集まっていたのだ。
　ブルースは彼のボスがここしばらくひどく疲れていることに気が付いていた。何年も続いた地球規模の内戦の指揮をとり、その妻は非業の死を遂げていた。すべて彼の肩にのしかかって

いたのだろう。ブルースにはそれがわかった。奴隷からの解放は、何百万もの人々に自由をもたらしたが、ディビッドにとってそれは苦痛でしかなかったのだ。

あの解放の日の夜、オメガたちは最後の攻撃を、ディビッドがいたはずの指揮本部に対して実施した。ただ彼はそのときたまたま上空におり、最後の戦場となったベルリンを視察しているところだった。幸運なことに娘もそこにはいなかったのだが、彼の妻のニカはその本部の中にいたのだった。その衝撃波は半径十マイルにあったものをすべて吹き飛ばし、あたりをガラス化した砂漠へと変えてしまった。そんなことは可能でないはずだった。予防措置はちゃんと取られていたのだ。ブルースは、オメガたちも切り札を隠し持っていたのだろうと思った。どちらにせよ、その切り札を使ったタイミングは遅すぎたが。

不老不死の連中のうち、逮捕されたのはたったの十八人でしかなかった。彼らは人類に対する罪により、今月にも裁判で裁かれるだろう。判決は陪審員が選ばれる前から決まっており、死刑が妥当となることだろう。それはもうわかっていた。人々は復讐の血を求めてはいたが、これですべてが終わるのだ。

だがソリタスたちは、もっとたくさんのオメガが生き延びていることに気がついていた。公正な裁きを受けずに、変装してどこかに潜んでいるのだ。おそらく何人かは炙り出すことができるだろうが、全員を捕らえることはできないだろう。この殺人者たちのうち何人かは、自由に永遠を罰を受けずに生きることになるだろう。だが彼らが安心して暮らせることはもう無い。戦争を覚えているものが生き延びている限り、オメガは狩られる対象なのだ。

オメガは古い人類の最後の生き残りだった。

確かに、彼らはその種族の最後の生き残りではあったが、オメガが最後の人類であることはもうないだろう。

何かがブルースの目にとまった。コートを着た男だ。右手を隠しているように見える。

ブルースは心の中でスイッチをいれて、その男をよく見た。男は四十代後半の白人で、よく日焼けした肌に無精髭を生やしている。ブルースはその顔をデータバンクで検索してみたが見つからなかった。オメガではないのだ。どちらにせよ彼らがここまで姿を現すことはあるまい。だが可能性はある。

彼は一番近くの兵士にメッセージを送った。兵士はすぐに人の群れを離れると、男を見つけ出して尋問をはじめた。問題を取り除けるのに数秒しかかからなかった。男の身に何が起こったにしろ、また無実なのかそうでなかったのか、ブルースには興味がないことだった。市民の身を案じるのは彼の仕事ではなかった。彼の仕事はボスを守ることであり、そのために何人かの足を踏みつけなければならなかったとして、それがなんだと言うのだ。

彼の後ろでは、ディビッド・マーリンが娘と共にひざまずき、妻の墓石に花を添えていた。おそらく涙を流しているのかもしれない。その涙は本物だろうが、それはカメラの格好の材料だろう。人々は世界中でこのニュースに食いつくに違いない。もともとその支持率は爆発的だった。ディビッドはそんなものを必要としていなかったが、その支持率は九五パーセントを越えていた。そして彼自身がその地位を手放さそうと思うのでない限り、誰一人として彼にかなうものなどいないことだろう。民主主義は確かに存在していたが、どんなほかの候補者も、かつて人類史に存在したもっとも偉大な男に対して勝てるわけがなかったのだ。イエス・キリストですらこの男に比べたらただの蝋燭持ちでしかなかった。ブルースはこの男がそもそも人間なのかどうかよくわからなかった。時折、ディビッド・マーリンは具現化した救世主であるか

のように思えるのだった。だが彼を守る人間は必要だった。彼は官僚たちの働きを陳腐化させないために、しばしば公の場に姿を現さねばならなかったからだ。ボスが真中に座る行政組織は広大であり、そして彼らは皆ディビッドの判断を必要としていたのだった。誰もそうでなければ動けなかった。

ディビッドの後ろには将軍たちが、いや、大臣たちが並んでおり、みな一人一人墓石に花を捧げ、死者に弔いの言葉を述べた。そして彼らは飛空艇（フローター）に戻っていった。これから大聖堂で、戦争で死んだすべてのソリタスたちのための記念式典があるのだった。その数は恐ろしく多かった。そのあとに、式典に参加した大臣たちと高官たちとの間で会議が予定されているのだった。

ブルースの長い一日はまだ始まったばかりだった。

彼はまた人々を眺め渡した。あの少女が持っているのは何だ？　彼はため息をついて、心のスイッチをオフにした。

悪人は眠れない。

＊＊＊

西暦12127年10月　地球の地底奥深く

結局また地下に戻ってきたのだ。なんて笑い話だろう。

結局、とアンナは思った。一万年はたいした長さではなかったが、エデンの庭園はたったそれだけの時間ももたなかったのだ。エデンは永遠に続くはずだった。いま後ろを振り返ってみると、一万年の時間などは目の瞬きでしかなく、一瞬射した太陽の光でしかなかった・・・つまりこの一万年は、地下に永遠に幽閉されるという現実から逃避するための、一瞬の気休めでしかなかったのかもしれないのだった。

楽園での生活の記憶は、宇宙全体が死んで冷たくなり、あちら側の暗闇にすべてが飲み込まれるその日まで、オメガを呪い続けるに違いない。

オメガたちは神々の地位から、呪われた（そして狩られる対象の）悪魔の地位までたったの数年で引きずり落とされてしまったのだった。

だが、彼らは諦めないだろう。これまでそうであったように。たとえいまここに生き残っているのがアンナを含めてたったの十七人だとしても、もし生き延びることができるのであれば、何らかの計画を立てることはできるはずだった。物事が落ち着くまで、人々がすべてを忘れるまでにはしばらく待たなければいけないかもしれない。おそらく数世代、百年か二百年ほどの時間は。そのころには奴隷たちは肥満した怠け者になっており、その短く意味のない人生に満足しきっているに違いない。

刈り取られるその日まで、せいぜい太っておけばよいのだ。そうなれば再び時代はめぐり、地球の正当な後継者であるオメガは再びその姿を日のもとに現すだろう。

そう考えてアンナは凍りついていた骨の芯が温まるように感じた。目には目を、歯には歯を。奴隷達の傲慢さによる屈辱と、耐えがたい痛みに対する礼をするのだ。

だが、どうしてもアンナの頭を離れない考えがあった。それはほつれた糸のように、彼女の

頭に引っかかっていたのだ。いったい、ファーマテック評議会の九賢人（ナイン・エルダーズ）はどこにいったのだ？　彼らが逮捕されたり、殺されたりする可能性はゼロといってよかった。賢人たちはあまりに長く生き、あまりにいろいろな物を見てきた人間だ。たかが戦争に負けるぐらいの事実は、彼らにとって小さなことだろう。

いや、賢人達は間違いなく生きているに違いない。つまり彼らはどこかに隠れているということだ。アンナは彼らが逆襲の準備をしていることを、自分の貴重な人生を賭けてもいいぐらいに確信していた。彼女は自分の計画が、賢人達の邪魔にならないように注意しなければならないだろう。

アンナは確かに自分の能力に自信があったが、彼らに並ぶような存在かどうかというと、そこまで不遜なことは一瞬でも考えられなかったからだ。

彼女は他の人間を見渡した。彼らは部屋の隅に固まって、分厚い毛布をかぶって震えていた。いったい、こいつらはどこまで堕落するつもりなのか？　彼らは暖房パネルを一枚入手することに成功し、そのスイッチを入れて動かしていたが、それ以上の危険は犯せなかった。検索者（ハンター）たちはすでに動き出しており、すでに捉えられたオメガの捕虜たちは口を割らないだろうとアンナは思っていたが、この場所を見つけられてしまう可能性はあった。

少なくともこの世代の奴隷たちが死ぬまで、五十年か六十年の間は、検索者たちの汚らわしいテレパス能力をずっと用心しつづけなければいけないだろうとアンナは思った。

彼女は対策をよく考える必要があった。猟犬は肉を食べずにいる時間が長いほど、より飢えて獰猛になるのだ。彼らに一時的な餌を与えて満足させるのはいいアイディアかもしれない・・・誰かをだ。偶然にも、アンナはブルーナーにはうんざりするようになっていた。彼が文句を言わないのは性交している間だけで、しかもその行為には何の意味もなかった。

いや、ブルーナーは猟犬たちにとっては格好の美味しい餌になるかもしれない。喋らなくさせることができ、かつ検索者たちにこの男が一人でいたのだと信じさせることができれば完璧だ。

そうだ、彼はまさに適役だった。

ルイーズ・コクレーンがまた咳をしていた。その聞きなれないがらがらした音はアンナをいらだたせた。こんな状況は耐えられなかった。彼らの肉体はいま病原体や病気に対して守られていないのだ。ボットを定期的にリフレッシュしないと、古いボットから恐ろしい速度で死んでゆくのだった。アンナはこれが本当の危機となるまでにはあと数ヶ月はかかると見ていたが、そのころにはどうしても再生施設まで行かなければいけないだろう。幸運なことに、彼らの中で一番近くの研究所の場所を知っており、施設を動かすことができるのはアンナだけだったので、皆にとって彼女はかけがえの無い存在だった。彼女はそれでリーダーになったのだ。彼女はもともと人をまとめる能力が高かったので、どちらにせよ皆彼女の指示をあおぐことになっていただろうが。問題は、彼女はトンネルまで足を運ぶ気になれなかったことだった。もちろん施設の場所を知っているのは、信頼されていた一部の人間だけではあったが、検索者たちは獰猛だった。

彼らは心の中をじっくりと探るのだ・・・。

アンナは我知らず体を震わせた。一月前、彼女はそのうちの一人と接触したのだった。彼女

はその冷たい指が、彼女がもっとも秘密にしたい考えを探っていることに気が付いた。彼女はその指が掴まるところを探しており、彼女の肉体を乗っ取ろうとしていることがわかった。彼女にパニックを起こさせて、悲鳴をあげさせることで、その居場所を調べようとしていたのだった。だが彼女は耐えた。彼女はその犯人を突き飛ばしたのだった。意外にもアンナはその時、自分も微弱ではあるが、その能力を持っていたことに気がついたのだった。いつもはその能力は眠っており隠されていたが、それは確かに存在していた。

突然彼女は自分が全身に熱いシャワーを浴びたように感じた。いくら微弱とはいえ、心の中に超能力を持っているという事実は、何か汚されたような感じがあった。検索者たちはミュータントであり、自然の生んだ奇形児だった。だがそれは使える道具でもあった。それは否定できなかった。あの戦争で敵の将軍たちはそれを最大限活用したのだった。奴隷たちはそんな力を使わなくてもやがては勝利しただろうが、戦争はより長いこと、より多くの奴隷の死者を出して続いたに違いない。

アンナは一度も戦いの前線に立ったことはなかったが、彼女は戦争も死ぬことも怖くなかった。ほとんどのオメガは本当に臆病で、自分の人生が何よりも大事であるかのように生きていることにこだわっていた。いったい死の何がそれほど怖いのだろう？　向こう側には何かが待っているか、それともまったく何もないかどちらかしかないではないか。

どちらにせよ、彼女にとって物事はよくもわるくもなりはしないのだ。

アンナはほとんどの人間よりも長く生きることができるかもしれないが、彼女は自分が不死なのだという幻想はまったく抱いていなかった。理論的にはそうかもしれないし、重症さえ負わなければ何百万年も生きることができるのかもしれないが、結局のところ終わりは来るのだ。それに、自分の心がそれほどまでに長く生きられるかどうかはわからない。彼女は平均的オメガよりは若く、まだ数千年しか生きていなかった。彼女はタンクに冷凍されていた胎児に奴隷からの遺伝子を混ぜて作られたのだ・・・アンナは実験の産物として生き残ることができた、数少ない子供の一人だった。

それは運命に抗うための戦いの一つだった。自分達の種の存続をかけた戦いの結果であった。

だが彼女が生まれて間もない頃、この計画はすべて白紙に戻った。百万もの胎児から、ちゃんと成長したのは八十五体でしかなく、幼児期を生き延びて大きくなることができたのは、さらにそのうちの七人でしかなかった。子孫を作るためにどれほどの労力を費やそうとも、オメガという種は間違いなく絶滅の道を歩んでいるように見えた。

アンナは個人的に、それは本当の熱意が研究者に欠けており、間違ったところに焦点を当てているせいではないかと思っていた。オメガたちは年老いて疲れきっており、彼女は自分の新しい考えを採用することができれば、何らかの前進はあるのではないかと思っていた。だが彼女が大人になった頃、すべての生殖研究は中止させられたのだ。その理由の一部は、あの裏切り者ディビッド・マーリンのせいだった。オメガたちはまたああいった人間が現れることを恐れていたし、無理のないことだった。あの男こそが、奴隷たちが戦争で優位に立つことができた理由であり、奴隷達がいかに数で勝っており、お互い団結して戦争に挑んだとしても、あのメシアの代理人であるディビッドなしには何も成し遂げられなかっただろう。あともう一つの理由は、ファーマテック評議会がそう決めたからだった。

評議会の決定に意義を唱えるものはただの一人もいなかった。

率直に言って、彼女はその決定には疑問を感じていた。生殖研究のような重要な研究を途中

で放棄することは、評議会の決定とは思えなかった。また、彼らは早急な決断というものとは無縁だった。決断にはたいてい長い長い時間をかけるのが普通だった。長い冬を越えてきた者にとっては、すべての物事には時間がかかるという認識があったのだ。いったい、何が彼らをあんな早急な決断に走らせたのだろう？

それは確かに考えるに値する問題だった。ひょっとしたら彼らが姿を消したことと何か関係があるのかもしれない。彼らは自分たちの後継者のことなどどうでもよいぐらい、重要な計画を密かに動かしているのだろうか？　アンナは彼らがどこに隠れているか知らなかったが、評議会と合流したいと切に願った。もちろん彼女には判断する権利など何一つ与えられないかもしれないが、そこで意見を言うことはしっかりとした結果に結びつくはずだ。

こんな馬鹿どもと一緒でなければ。

時間が経つ前に、一番悪い部分を切り捨てる必要があった。彼らは他人の足を引っ張るだろう。特にブルーナーだ・・・そしてあの咳が止まらなければ、コクレーンがその次になるだろう。

あの女も奴隷と対して変わりはしない。あんな病気にかかるとは。

アンナは手榴弾の最後の破片を足から抜き取った。あまり気持ちのよい眺めではなかった。ボットの動きが鈍くなっているのは事実だった。肌の修復は不安になるほど遅くなっていた。彼女の判断は間違っていたのかもしれない。ひょっとしたら予想よりもずっと早く再生処理施設に行かなければいかないかもしれない。

彼女は足の力を試してみた。何とか立ち上がって歩けそうだ・・・短い距離なら走ることもできるだろう。だが感染しているかもしれない。いまこの足を失う危険を犯すわけにはいかなかった。計画を作りあげるまでは。

アンナは皆が集まっているところに、足を引きずらないよう注意して歩いて戻った。彼女が弱っていることを気づかせることはない。彼らは弱いところから彼女を引き裂こうとするかもしれない。アンナはもし機会があれば、彼女の仲間がためらわずにそうすることを疑わなかった。自分は間違いなくそうするだろう。すぐにでも。

「みんな、聞いて！」彼女はブルーナーに優しい微笑みを向けた。アンナに背中から刺されるその時まで、彼は彼女の一番のお気に入りなのだ。「今日のプランはこれよ・・・」

＊＊＊

西暦12127年11月　イタリア　ベニス

仄かに明かりが点されたホールの床は灰色の大理石で敷き詰められており、そこに座る九人のかすかな動きに石の壁がこだまを返していた。松明がちらちらと光っていた。よい明かりだ、とテーブルの最後に座る男は心の中でつぶやいた。結局、松明を使うように指示したのは彼の提案だったのだ。彼はこの神秘的な、秘めやかな雰囲気が気にいっていた。その雰囲気を、限りなく本物に近い形で複製された装飾品が完全なものにしていた。

ある目的とその実現のために、彼らは一万一千年の時を超えて集まったのだった。

テーブルの上座に座った男は左から右へと、樫のテーブルを眺め渡した。青白い顔が彼を見返した。何人かは目を伏せ、何人かは表情の無い目で彼をぼんやりと見た。何人かは微笑み、

一人か二人は眉をひそめた。殺意をこめた視線だった。
　すべてはあるべき姿と言えた。皆は自分の役割のためにここに集まったのだ。
　驚くことは何もなかった。彼らは皆この地下室で安全に守られていた。この地下は古代ベニスの地下に沈んだ遺物だった。ファーマテックの忘れさられた地下ネットワークの一部だ。彼らは戦争がはじまる前からここに隠れていたのだ。だが最近の予想外の展開により、何人かは苛立ちを隠せないようだった。だがそれも予想の範囲内だった。実際のところ、皆がどれほど危険に身をさらすことを恐れているかは面白いといってもよかった。一万年もの間ずっと保身を続けてくれば、それなりに反動もあるのだろう。そのうちのもっとも悪い影響は、精神力の低下により、しかるべき機会を逃してしまうことだった。
　ローマン・ドラコヴィッチ・ツボォフ（他の八人はテーブルの上座に座る彼のことをローランド・ドレイクと思っていた）は機会を逃さなかった。もちろんその機会というのは計算により導き出されたものであり、賭けはいつも彼に有利に動くようにできていた。だがそうであっても、やはり賭けは賭けであり、失敗する可能性はあった。いままでは一度も失敗したことはなかった。ローマンは彼が見守られていることを知っており、それに加えて計画を綿密に準備することの重要性をよく知っていた。絶対者の地位から叩き落とされて、この洞穴に屈辱的な撤退を余儀なくされたにも関わらず、またかつて彼らの支配下にあった青々とした大地はいまやソリタスのものとなった今においても、ローマンがいまだに皆の指導者でいることができる理由はそれだった。他の者も熱意や野望は持っていただろうが、彼の忍耐力には誰もかなわなかった。彼は恐れずに賭けることができる意志があった。そして冷静に、誰も真似できない正確さでそれを実行できた。
　そしていまその恐れを知らぬ意志は大きな結果を招いてしまったようだった。彼らの治世は終わってしまった・・・少なくとも今のところは。だが、それは起こるべくして起こったのだ。どんな楽園も永遠に変化なく続くわけではない。そして彼らはようやくローマンに、瑞々しい未来の姿を描き出してみせたのだった。その未来においては、いまここに座る九人のうちの誰か一人が、より高い地位を手に入れるだろう。ローマンはそれが彼になることを疑わなかった。
　彼はそれを確実なものにするために全力をつくすだろう。
　だがまずは、協力しあうことが必要だ。裏切りとナイフはもっと後のためにとっておけばよいのだ。今ローマンには他の八人の力が必要だった。彼と同じように、皆が長老であり不老不死であった。八人は優れた知恵と直感力、野心と残酷さを併せ持っていた（残酷さが大事だ、と彼は思った。残酷さを忘れてはいけない）。人間としての感情を脇にどけておける能力は貴重だった。いま必要なのは何よりも残酷さであった。
　目の前には細く緩慢な道があり、すべての糸が織り合わさるには長い長い時間がかかるだろう。だが時間こそ彼らが有り余るほど持っていたものではなかったか。かつて世界を支配した会社は、彼らの存在無しでも再度蘇るだろう。少なくとも日々の一般業務に彼らが関わることはないだろう。そして今度は、この会社は形を変えてあらゆるところに存在するようになり、大衆は怒ることすらできなくなるのだ。
　奴隷たちは奴隷のままだが、今度彼らはそうであることすら気がつかないに違いない。
　自分たちの行動が、どんな結果をもたらすのか考えないのは愚かなことだ。たとえば革命が成功しないなどと考えることがそうだった。何百万もの人間を、彼らがやってきたようなやり方で永遠に抑圧できるわけがないのだ。ローマンの心は、オメガがソリタスにしてきたことを

考えてもまったく痛まなかった。奴隷たちは衣食住に困ったことはないだろうし、戦争前の生活は今の窮状よりもずっとましであったはずだ。いまや長いこと続いた血みどろの戦いにより世界はぼろぼろになり、飢えと貧困が世界を覆っている。

オメガがその箱舟から初めて姿を見せたとき、彼らは切実に必要とされていた富と平和を世界にもたらしたのではなかったか？　だが人々は自由を求めた。少なくとも自由という幻想を求めたのだ。彼はいまそれを理解できた。彼は大衆に自由を与え続けるだろう。その自由が完全に腐敗し、人類を堕落させ一切の進歩が止まり、倫理的にも宗教的にも何の進化が遂げられなくなるその日まで。

その間、彼は世界を越えた帝国の建設をはじめるだろう。それは企業のような存在であり、すべてがうまくゆけば、それは銀河を超える規模に成長するだろう。ファーマテックのようなものではない。ファーマテックは独裁国家だった。そして一人の人間が成し遂げられることは限られていた。彼のように有能な操り人形士であっても、だ。いや、この新しい獣は、より大きく、より力を持った存在になるだろう。

ファーマテックの灰から、数限りない頭を持つヒドラが、自己増殖できる怪物が生まれるのだ。すべての頭が同じように思考するが、それぞれが独立した考えをもつことができ、怪物は一体となって宇宙を見下ろし、もはや誰一人として隠れつづけることができない世界を作り出すのだ。

それは全能（オムニポテント）で、あらゆるところに偏在（オムニプレゼント）する。

オムニ。それはあらゆるものを包含するだろう。

それだ。彼はその単語をずっと探しつづけてきたのだ。よりよい単語を見つけられない彼の代わりに、霊感が彼にふさわしい言葉を与えてくれた。

一万年前不老不死への旅に出発したローマン・ドラコヴィッチ・ツボォフであり、ローランド・ドレイクである男は声をあらためた。

そろそろはじめる時間だった。

＊＊＊

西暦12305年6月8日　フランス

ディビッドは耳が痛くなるような静けさで目を覚ました。

彼は体を起こして、目をこすった。彼はまだ車の後部座席に座っていたが、車体はもう動いていなかった。彼は体を前に倒して窓の外を見た。

車は巨大なホールの真中に駐車されていた。いや格納庫かもしれない。どうやらあたりは夜のようで、少なくとも三十メートル頭上に並んだ窓はすべて暗かった。

彼はドアを確かめると、それを開けた。

外に出てあたりを見渡す。飛行車（フローター）が車のすぐ後ろにとまっている。それは彼が見たどの飛行車よりも小型ですっきりとしたデザインだった。一人用で他の乗客は乗れないようだ。

彼は用心深くそれに近づいた。

「おはようディビッド」声がどこからか響いた。「来てくれて嬉しいよ」
　その声はあらゆるところから、何もない空間から聞こえてくるようだった。ディビッドはこの声の持ち主が遠くにいるのではないかと疑った。
「選択肢はあまり無かった」ディビッドは答えた。「ここでの仕事は終わった。おまえは誰だ？」
　どんな機械を使って通信しているのかわからなかったが、どうやらそれは双方向通信はできないもののようだった。「この飛行車で西に行ってもらう」声は続けた。「これで大西洋まで出てもらうことになる。今回の旅は三十分ぐらいかかるはずだ。海の上にある島についたら、新たな説明がある。よろしく頼む」それはそういい残すと、静かになった。
　こういうふうに指示されるのは奇妙な感覚だったが、何か自由な気持ちがした。それは彼がすべての責任から解放されたからだろう。起こったことはすでに起こったことなのだ。彼が過去を変えられないように、すぐ先の未来のことはわからない。彼はこの飛行車に乗ることを拒否もできるだろうが、それでは何も変わらないだろう。
　結局のところ、このドラマの脚本は彼が書いていたのだ。監督は誰か別にいるようだったが、これがどういう結末を迎えるか彼は知っていた。ストーリーの紆余曲折も含めて。
　もしここで指示を無視したとしても、チューリッヒの自宅に戻り、仕事を続けるのはぞっとしない考えだった。疑い深いジャーナリストたちに質問攻めにあうのはごめんだ。
　彼は飛行車の扉を開けると中に入った。

＊＊＊

　西暦12272年4月2日　インド　ボンベイ

　アナーハ・シングは、自分が大統領の代理としてここに居ることが良くないことであると知っていた。だが彼は同時に、ディビッド・マーリンであればこの提案を即座に却下し、この使者たちに一切弁明するチャンスを与えないであろうことも知っていた。
　彼はこの男たちが持ってきた提案を受け入れることが正しい選択であり、唯一の選択であると思っていた。ディビッドがそれをどう考えていようと、だ。だから彼は大統領の代わりとして、この男達からの会議への招待を自ら受け入れたのだった。
　だが完璧な報告書を作って、実際に物事を動かしてしまえば、ディビッドに承諾させるのも難しいことではなかっただろう。ディビッドは最近になっていままでになく影響を受けやすい男になっていた。いや、ディビッド・マーリンはすでにちょっと邪魔な男に過ぎなかった。もっとも難しいことは、世界評議会の席に座っている様々な派閥の長をすべて説得するということだった。彼らは納得しないだろう。そして「納得しない」というのは一番楽観的な観点から言ったときの話だった。
　大臣たちや官僚たち、そして年かさを経た顧問たちにより作られている世界評議会のメンバーはほとんど全員、ファーマテックの一万年にわたる地球支配に関連したことに対しては、激しい反発をするのが常だった。戦争が終わったばかりだというのに（オメガとの戦争はもう百五十年以上も前に終わっていたが）、オメガの遺物である古い施設をまとめあげて、一つの巨大な、あらゆるものを包含できる可能性がある、世界規模の企業に管理させたらどうかという提案は、間違いなく評議会の反発を招くことだろう・・・。

これを受け入れればただではすまないだろう。ひょっとしたら事実上、これは彼の政治生命の自殺を意味しているのかもしれない。
だが、この提案は間違いなく意味あるものだと言えた。世界はいま何にもまして骨組みを必要としており、伝統的な工業技術（インフラストラクチャー）を可能な限り早く復活させる必要があったのだ。将軍たちが老衰し、内戦がほぼ終息へと向かっている今、ようやく一世紀に渡る抗争も終わりつつあったのだ。その中でも飢餓と疫病が北アメリカ大陸、アジア、オーストラリア、そして東ヨーロッパを襲っていた。このままでは多くの人々の命がただ失われることだろう。彼らにはちゃんとした技術が必要だった。薬や工具、医療器具、そして食料を製造しなければならなかった・・・これらの必需品を効率的に素早く作るには、生産拠点をどこかに作る必要があった。少なくとも最初はそれで十分であるはずだった
この男たちの提案は、数年かけてオメガの遺した技術を市場に再現しようというのだった・・・たとえば創造機（ビルダー）といったものや、ある程度までのナノ・テクノロジーの復活も可能だろうという。いちばん重要な機密は姿をくらましたオメガたちと一緒に失われてしまっており、ソリタスの科学者たちがその技術の解析を終えるまでには時間がかかるだろうが、それでも何百万種類もの技術情報が市場に解放されるのを待っており、それは早ければ早いほどいいのだ。
だからもしディビッドの合意さえ得ることができれば・・・誰一人としてこれに反対することはないだろう。大統領は近頃どんどん公務から遠ざかっており、ほとんど姿を見せなかった。大統領に評議会で話しをしてもらうだけでも一苦労だった。彼らは皆リーダーの意見を、彼が道を指し示してくれるのを待っていたのにも関わらず、だ。皆は眼の見えない羊のようだった。
いつか近いうちに、皆もディビッドなしにやっていかなければいけないという事実に気が付くときがくる。その結果は明らかで、派閥は再度分裂し、古い国境線は引きなおされ、かつてのライバル意識が復活することになるだろう・・・復帰した将軍たちによる新しい戦争が起こる可能性もある。だがもし地球規模の工業化を推し進めることができたらどうだろう。世界は一人の指導者の下でまとまり、当然世界評議会の合意の上で運営されるのだ（アナーハは自分が権力と政治の最高位にゆったりと座っている姿を想像した）。そういうことが可能であるならば、まだ希望はある。豊かさは平等さをもたらすし、生活必需品を与えられた人々は革命を起こそうなどとは考えなくなるだろう。地球をかつての栄光ある姿まで、少なくとも表層的にでも回復させることができれば、その次は——。
宇宙空間はすでに技術の限界点ではなくなっていた。アナーハは太陽系外への植民政策に情熱を抱いており、時間と資金さえあればいつでも実行できると思っていた。この惑星はそれを必要としていた。地球はすでに数え切れない戦争で引き裂かれており、古い支配階級の最後の遺産が消えうせ、生活状況が改善されれば、人口は爆発的に増加することだろう。
それが今、彼がこの会議に参加している理由だった。
彼は来客を評議会のカフェテリアに連れて行った。カフェテリアは真っ白な壁と、背の高い窓で囲まれており、そのスタイルは二十世紀のインド建築を模していた。彼はこれを公式すぎる形式にはしたくなかったのだ。彼はまだ来訪者に対してどういう態度を取るべきか決めかねており、まだディビッドがこのことを知らないからだった。
これは彼に対する背信行為ではない、とアナーハは思った。彼はただ提案を聞き、ノートを

取って行動の準備をするためにここにいるのだ。
　彼も結局、一人の政治家だった。
　彼の左に座った男が「貴方の存在が鍵になるのです」と言った。背が高く幅広い肩の上に、よく日焼けした顔が乗っている。男は完璧な着こなしだったが、どことなくだらしない雰囲気があった。彼はここ数十年、太平洋の前線で戦ってきたのだろう。世界評議会の忠実な戦士として将軍達と戦ってきた、歴戦の勇士と言ったところだった。やがて来る未来に対してずっと投資をしてきた人間なのだろう。アナーハはそれが気にいった。彼は人を信じることにかけては熱心だった。「貴方の助け無しには上手くいかないでしょう、シングさん。私たちは大統領とも個別に話したいと思いますが・・・」と彼は言葉をぼやけさせた。
　それ以上続ける必要はなかった。ここしばらくディビッドと話すことが出来たものは誰もいなかった。ごくごく一部の信頼された者たちを除いては。そしてアナーハ・シングはその一部だった。
「この計画をすぐにでも実行に移さなければ、残念ながらいくつかの工場施設はやがて修復不能なまでに破壊されてしまい、再利用するには大変な労力が必要になってしまうでしょう」彼のすぐ右に座った二番目の男がそう言った。大きな男で、その肌は夜のように真っ黒だった。その外見からは男は六十台後半か七十台前半に見えたが、恐ろしく整った外見で、その説得力は本物だった。また歴戦の勇士だとアナーハは思った。だがこの男は戦争について何も言及していなかった・・・いまのところは。
「シングさんを追い詰めてはいけない」目の前に座った三番目の男がそう言った。他の二人とは違い、彼は戦士あがりには見えなかった。彼はまるで官僚のように見え、アナーハはこの男は好きになれるかどうかよくわからなかった。
　四人は遅めの昼食を楽しんでいた。ホールにはほとんど人がおらず、聞き耳を立てるものもいなかった。
「シングさんが私たちに、原則的には同意しているのはわかっています」三番目の男が続けた。「ですが、シングさんの評議会に対する心配は感じます。評議会の存在するかどうかも定かではない意思のせいでしょう・・・あの会社の技術を、こんなすぐ利用することがいやなのではないでしょうか」
　感じる？　この男はテレパスなのだろうか？　それならなぜ地中に隠れている裏切り者を狩る検索者（ハンター）にならなかったのだ？
「つまり・・・シングさん、どうでしょう？」三番目の男は言った。「それがご心配なのではないですか？」
　なるほど。ただの推測だったとわかり、アナーハは安心した。彼はあのテレパスの検索者たちの近くにいると落ち着かなかった。彼らは大統領に忠誠を誓っていたが・・・気持ちの良い存在ではなかった。
「そうです」アナーハは言葉を止めて、注意深く続けた。「私は評議会が・・・いつかはこれに同意するだろうと思っている。だがタイミングのことを考えてほしい。最後の将軍が死んで、彼が支配していたファーマテックの工場が止まってからまだ一年もたっていない。この工場を再び稼動させようと提案することで、その工場で武器を生産するわけではないにしても、戦争のことを連想してしまう人々がいるのだ・・・」

「私たちは待つことはできます」と二番目の男が言った。「それは問題ではありません。問題は、世界に待っていられる余裕があるのかということです。シングさん、北アメリカの現状はよくご存知でしょう。率直に言って・・・いま行動を起こさない結果、何が起こるのか考えることには耐えられません。私たちはもう十分、死と破壊を体験しました。もしオメガが少しでも価値のある遺産を遺したとするならば、それを受け入れて利用することに何のためらいがあるでしょう？　破壊のための武器を作るわけではありません。この計画は多くの政治的な援助を受ける資格がありますし、貴方を助けてくれる人はきっといると思っています。私たちは評議会が貴方の味方をするように全力をつくします。ですが、貴方と大統領なしにそれはできません。私たちにはマーリン氏の同意が、すぐにでも必要なのです」
「マーリン氏は・・・ディビッドは」シングは言い直した。「貴方たちの計画に反対はしていない。マメロさん、それは確かなことです」それは嘘だったが、アナーハはいまここにすべての民の利益のために座っており、上司の個人的な哲学を代弁するためにいるわけではないのだ。「彼はただ・・・多くの派閥がこの貴重な和平同盟を引き裂こうとしていることを良く知っているだけです。かつて評議会がいくつかのファーマッテックの施設を占領したのは、それは一つの目的のためでした。敵対派閥を攻撃し、将軍たちを打ち負かすためです。百五十年かかったのですよ、みなさん。そしてディビッドだけが、どれほどこの戦いが長かったか知っているのです。ディビッドたちがその施設を閉鎖したのは世界評議会が勝っていたからではなく、すべての人間に対して過去を捨て去るようにとのメッセージだったのです。それはもう二度と独裁企業の存在を、たとえ民主主義の仮面をかぶっていても許さないということでした。そのため施設はすべて閉鎖され、その技術は放棄されました。それは人間が自分たちの道を未来へと自分の力で切り開いてゆくとの目的からだったのです」それはディビッドの言葉で、彼自身のものではなかった。
「わかります」と最初の男が言った。「だが時代は変わりました。もし大統領自身がこの提案をしたとしても、私は誰一人反対するところを想像できません。正直なところ、マーリン氏に公式に反対する者がいたとしたら、その人が町の通りを安心して歩けるかどうかははなはだ疑問です。何しろ98.5パーセントの支持率ですよ！　残りの1.5パーセントも何かの間違いでしょうし、そうでなかったら驚きです。反対する人々も、公式には決してそれを認めないでしょう。彼は巨人ですよ！　どこからも動かせない。もし彼に話すことができたら・・・」
「シングさん」三番目の男がそれをさえぎった。「私たちは奇跡を求めているのではありません。ですが私たちは、世界評議会があと数十年のうちには直面する問題を解決できる提案をしているのです。事実というのは、あの施設や生産工場は、武器を製造する以外のことにも使えるということです。初期投資は数十億ドルかかるでしょうし、適切な税金控除も必要でしょうが、地球規模の会社、もちろん評議会と密接な連携を取る組織を、半年から一年で作り上げて動かすことができるのです。当然、これから得られる利益も大きなものになるでしょう。労働者に給料を払い、新しい技術に投資しなければならない・・・だが明らかなのは、皆が利益を得るということです！　経済的にも、政治的にも・・・私たちは、世界を戦争以前の状態に戻すことができる。優越者の支配無しに。オメガの技術を人民のために使うのです！　オムニテック社は、初めての世界企業となり、大衆によって統治される最初の企業になるでしょう。こう言ってよければ、実現する『共産資本主義』です」
　アナーハはため息をついた。ディビッドとまず相談すべきだったのだ、と彼は思った。だが

最近、彼はかつて友人だった男と会うのを恐れていた。それはその目にある、昔は存在しなかった何かだった。もしくは何かが無くなってしまった目だった。火か、情熱か。あるいは自己献身によるきらめきだった。

ディビッドはいつも自分を神格化することには反対してきたが、彼はずっと恐ろしいまでに巨大化した責任を受け入れてきた。彼は人々を解放し、世界を変えたのだ・・・そしてある意味、戦争が彼を生かして来たのだ。年が経ち、十年が過ぎ、将軍たちが一人一人亡くなっていくなかで。

だが今、彼がもっとも必要とされているとき、世界がようやく自らを修復し、戦争に背を向けはじめたとき、ディビッドはどこか遠いところに消えうせつつあった。それは彼が年を取り、しおれていくかのようだった。ひょっとしたら彼は本当に年を取っているのかもしれない。オメガとソリタスの間の子は、永遠ではなく数千年しか生きられないのかもしれない。

ディビッドは死にかけているのかもしれないのだ。

その可能性を思いついてアナーハは衝撃を隠せなかった。彼らはこの提案について真剣に考えて行動する必要があった。それについては疑問の余地がなかった。何はともあれ、評議会は理性的であった。そしてもしディビッドがこれに本当に反対するとなれば・・・。

評議会はディビッドに反対できるだろうか？　原則的には、それは可能だった。評議会はディビッドの判断に対し拒否権を発動することができた。だが実際のところそれは一度も実行されなかった。もしディビッドが病気で、死にかけているのだとしたら、いつの日かどこかで自分たちで決断をしてゆかなければならないのだ。今回の出来事はそれを実行する完璧なチャンスだと言えた・・・もしディビッドがやはりこの世界企業の設立に反対するとしたら、だ。だがアナーハは全力で、彼に反対させないようにするつもりだった。

ディビッドは彼を信頼していた。アナーハはすでにその信頼を裏切る形になったが、それはある目的のためだった。そしてもし彼が契約書の詳細を多少変更したとしたら――より譲歩しやすい形にだ――ディビッドはその報告書をきちんと見る時間はないだろうし、彼はアナーハが間違ったことをするとは思っていないだろう。

彼は書類にサインして、必要な宣言をするだろう。

「私たちの意見は一致している」と彼は三人の男たちに言った。「そして私は貴方たちの味方だ。百パーセント」もしディビッドがこれを聞いたら、彼はこういった言葉の使い方は問題視するだろうが、かまうものか。「だが、何も約束はできません。もしディビッドがこれを許可したとしても、そして私がそれを助けたとしても、まだ評議会を説得しなければならない」

「なんにせよ、私たちは寄付をしようと思います。いくつか引ける糸もありますし、寄付は重要な幾人かの気持ちを変えさせることもできるでしょう。ディビッドの力を私たちにください、シングさん。そうすれば評議会はあなたのものです」

アナーハは立ち上がり、三人の男もそれにならった。それはまるで彼が協力すると言ったので、リーダーになってもよいと言っているかのようだった。おかしなものだ。

「すばらしい提案でした」とアナーハは言って、男の手を一人一人握った。「提案書を受け取って、それをディビッドに報告するのを楽しみにしています。この企業を設立することで、人間の進歩を加速させることの重要性が、彼にもわかってもらえるでしょう。ああ・・・なんという名前でしたかな、オムニ・・・？」

「オムニテック社です」と最初の男が言った。「『すべて』と『あらゆる』という意味をもた

せました」
「なるほど」とアナーハは言った。「オムニテック社か。とても・・・合った名前ですね」彼は微笑んだ。
「本当にとても合っていると思います」

＊＊＊

西暦12305年6月8日　大西洋の洋上

あたりは激しい嵐に包まれていた。だが海に浮かぶ人工島の地表は、嵐の中でも微動だにしなかった。

巨大な波が島の縁にぶつかって砕け、分厚い鉄板の上に激しく当たり、雷の拳のような音を立てていた。そのすぐあとに真っ白な本物の雷が空から落ちる。だが地表はまるで大地にしっかりと根を下ろしているかのように動かなかった。

ディビッドはこれほどの大きさの施設が秘密裏に建築されたことに驚きを隠せなかった・・・秘密裏でなければ、ほとんど気づかれずに忘れ去られていたことに。ここは戦時中、オメガの補給地点だったと彼は教えられた（島の人間は彼が大統領であることに気がつかないようだった。もしくは知らない振りをしていた）。この上で飛行機の給油や修理を行っていたらしい。その後この島は、海洋帝国の構想を抱いていたヨーロッパの将軍に占領された。そしていまこの島は、衛星軌道上で静止しているたくさんの工場へと打ち上げられるジェットロケットの打ち上げ台となっていた。

もちろん、これもオムニテック社によって運営されていた。この数十年間、他のいくつかの企業もこういった技術分野に足がかりを作ろうとしてきた。そして世界評議会と、最近創設されたＩＣＣの両方が、オムニテック社の独占を防ごうとしてきていた（同社はファーマテック社のナノ・テクノロジーの特許を持ってすらいた）。オムニテック社社にはあらゆる法的かつ商業的な制約が課されており、それは圧倒的早さで脹らみつつある同社の苛立ちのもとだったのだが、それにもかかわらずオムニテック社の独占は明らかだった。オムテニック社は世界のほぼ八十パーセントの製造ラインを管理しており、今後進歩してゆくとされる宇宙技術をほとんど独占していた。

この二五年間、人間（とオムニテック社）は大きな進歩を遂げた。戦争はほとんどの人にとってすでにぼやけた記憶でしかなかった。オムニテック社に対する最初の懐疑的な態度も、人々全員の生活環境が改善したと共にすべて消えうせてしまった。ディビッドはその名前が、その先行者である奴らの名前と腹立たしいまでに似ていると思っていた。ファーマテック社とだ。受け継ぐものがいなかったオメガの技術が再構築され毎日のように改善されてゆき、人類の生活の恐るべき速度の進歩は、その技術なしでは考えられなかっただろう。その技術にはナノ・テクノロジーももちろん含まれていたが、悪用を防ぐための変更も新たに加えられていた。

オムニテック社が関わったことでは、未来は誰にとっても明るかった。史実によると、ディビッドはこの企業の設立に大きく関わったとされていた。彼は評議会に対し、最初の勅令にサインしたとされていたのだ・・・その勅令は、かつての大統領顧問であったアナーハ・シングが作成したものだった。

彼はそれと知らずに、ファーマテックの灰の中から新しいファーマテックを作ってしまったのだった。そんなつもりは無かったのだが、これも計画の一部なのかもしれなかった。これも誰かの作った計画なのかもしれなかった。なぜなら、留まるところなく成長し続けるオムニテック社に対して彼がどういう感情を抱いていようとも、彼の究極の目標に到達するための技術を提供するのはオムニテック社だからだ。オムニテックの設立には裏切りが（シング氏はその裏切りの代価を、十倍にして返さねばならなかった）大きな役割を果たしたが、少なくとも彼はその技術力を自分の目的のために利用することができるのだ。

ディビッドは嵐から守られて、島の中央に建つ通信施設の四階に座っていた。展望窓からはこの施設の全体がよく見えた。六機ほどのジェット機が塔の下にきちんと並んでいた。一機だけ列に穴があり、その機体は打ち上げレールへと牽引されていた。メカニックたちが打ち上げ前の最後の調整に入っている。

オムニテックの人間ですら、大事な機械を信頼しているわけではないのだ、と彼は面白がった。それはいい兆しなのだろうか、悪い兆しなのだろうか？

「ジェットの離陸準備ができました」若い男はずぶぬれだった。ディビッドは男を上から下まで眺めた。

「この天気でか？　あんまり安心はできないな」

「問題ありません」と若者は誇らしげに言った。「これまで一機も事故に合わせたことはありませんし、ここの天気はいつもひどいもんです」

「そうか」とディビッド。「だが嵐がきているようだが・・・少なくとも私には嵐だと思えるが」彼はすまないというように肩をすくめた。「私は専門家じゃないが、雷では何かおかしいんじゃないか」と窓の外を指差した。「波も高い。強い風が吹いているんだろう？」

「そうですが、それについての心配はいりません。それはパイロットの仕事です。こちらへ。すみませんが離着陸の時間は守っていただく必要があります」

十分後、彼の不安をよそにしてディビッドは非軌道ジェットの後部座席に体を縛り付けていた。地上のスタッフが出発許可を出すと、エンジンがうなりはじめた。彼はこういった飛行機に一度乗ったことがあり、肉体にかかる負担には覚えがあった。

ジェットの宇宙空間への滞在は短時間に終わるはずだった。それは彼が下船したらすぐにでも、推力を上げて大気圏に再び突入するだろう。

彼の本当の旅はそこから、星々の中へと続いて行くのだ。

彼らはその船をこの十年間建築を続けており、ようやく出発の準備ができたのだった。彼という存在だけが、その船が衛星軌道から外れ、無限の中へと旅を始めるに当たって足りないパーツだったのだ。

二日後だ。考え直す時間はたっぷりある。

ディビッド・マーリンは目を閉じて、ジェットがレールを前方へ加速し離陸するのに身をまかせた。

「地球という脆いバスケットは、人間がすべての卵を入れるには小さすぎる」

――ロバート・ハインライン

第十七章

西暦28702年　惑星ルビカ

ミンジー・リュウはエアロック中の大気圧が外の環境と交じり合う中で深呼吸をした。酸素が多量に含まれた空気が、彼女の体を頭からつま先から満たす。彼女はふと生き返ったように感じた。そしてその気持ちは人工のものではなかった。腕を前後に振り回して、体の動きを確認する。着ていたスーツは軽く、ひんやりとして伸縮自在だった。何が来ても大丈夫だと思った。

ミンジーはこの瞬間が何よりも大好きだった。そもそも彼女が大学に入ったのは、これが目的だったのだ。異星の大地を恐る恐るだが、初めて踏むことができる人間になること。かつてどんな人間も見たことがない風景を、この目で確かめること。

それは新しい世界だった。まったくできたばかりの、技術に汚されていない、殖民も行われておらず、テラフォームも一切されていない大地がそこにあった。そこにあったのはいまだ人間が触れたことのない場所だった。まだ日常になる前の非日常であった。

星が出来てからまったくそのままの美しさを、見ることができる最初の人間が彼女だったのだ。そしてまた彼女はその星を見る最後の人間かもしれなかった。なぜなら彼女の仕事は惑星を評価することではなく、ただ最初の調査をするだけだったからだ。彼女はそれが気にいっていた。作業が純粋だったからだ。後になれば地表調査団や建築計画団などがやってくるだろうが、彼らは決して純粋なものを見られないだろう。彼らは自分にとっての理想の未来を現在と過去の上に築くだけであり、人間がこの世界で地球の模造品を作れるかどうかの判断をするだけなのだ。

短いビープ音が断続的に聞こえた。彼女の着ているスーツはすべての内部チェックを終えて、その報告書を着陸船の中央データベースに送信したのだ。あと数秒もすれば、この新しい世界を見る最初の人類に彼女はなれるのだ。

さて、この世界は・・・何と言う名前だっただろうか？　ミンジーは自分が足を置いている惑星の名前を忘れてしまったことを瞬間恥ずかしく思った。だがあまりにもたくさんの名前があり、しかも名前が合っていない場合もあった。それはただの人間がつけた名前であり、本物の名前ではなかったからだ。彼らはその惑星の本当の名前を、そこに住む生き物からしか知ることができないだろう。だが異星の生命などに会ったことは一度もなかった。もし銀河系のどこかに知性を持った生き物がいるとしても、存在を否定する理由はなかったが、人類はいまだにそういったものに出合ったことがなかったのだ。

彼女がＮＣＵを通して航海の基本計画書にアクセスすると、その名前が頭の中に瞬時に浮かんだ。

ルビカ・・・それは二つの音で成り立っていた。「ルビ」と「カ」で、間にはハイフンが着いていた。ルビ－カだ。

奇妙な名前だ。

彼女は惑星の情報を簡単に検索してみた。次々と心の中に映像が爆撃のように送り込まれる。

彼女は訓練された熟練さで、ほとんどの情報を脇に捨てた。欲しいものは一部だけだった。

すぐにデータベースに入っているほとんどの情報を得たが、まだ本当に理解しているとはいえなかった。こういった形で情報を利用することはむしろ本能的な処理であって、知的なものとはいいがたかったからだ。

ミンジーは物心ついた頃にはすでにＮＣＵを使っていたが、いつどこでもアクセスできる知識という考えにはあまりなじまなかった。認めたくないことではあったが、一度も理解したことがなく、記憶しようともしたことがない事柄をいつでも知ることができるというのは、どこかずるをしているような気がしてしまうのだった。

彼女の両親はリベラル派の技術者で、＜新（ネオ）カトリック＞の熱心な信者だった。そして二人は娘に、移植臓器（インプラント）による一般的な知識の習得だけではなく、伝統的な形式で教育を受けるように強制したのだった。二人は娘が社会で孤立しないように配慮することを忘れなかったのだ。ＮＣＵを一切使わないことは大きなハンディキャップと偏見を招くだろうし、将来のキャリアに傷をつけることを意味していた。ＮＣＵ反対派の人々は迫害を受けるものだったからだ。だがそれでも両親は、娘にはしっかりとした道徳教育を与えるべきだと信じていた。そのため、彼女とその兄弟たちは青春の年頃を、ＮＣＵを使えば一瞬でアップロードできる知識を使って簡単にパスできたはずのテストの勉強のために費やしたのだった。

彼女は自分で知識を身につけなければならなかったし、カンニングは論外だった。学校とクラスルームにはあらゆるところにセンサーが設置されており、彼女はいまでもＮＣＵを使って知識を検索しようとするたびに、後ろを振り返って、神経抑制銃（ニューロン・サプレッサー）を持っているシスターがすぐ後ろにいるのではないかと確認したくなる衝動と戦わなければならなかった。

今、いつものようにＮＣＵは瞬時に反応し、まるでそれが彼女の心の一部であるかのように答えてくれた。ある意味それは事実だった。バイオテクノロジーにより可能になった移植臓器（インプラント）インプラントは脳の神経ネットワークと有機的に結びつき、挿入されてから十八～二十四ヶ月の間には完全にくっつくものとされていた。

まばたきをすると目の前にそれが現れた・・・巨大な網の目のような情報の塊が、知覚できるあらゆる方向へと紐を伸ばしていた。その一本一本が利用可能なデータベースにつながっているのだ。それは恐ろしく複雑なマトリックスから生まれた格子状（グリッド）のデータベースだった。彼女が必要とするかもしれないあらゆる情報が、何千層にも折りたたまれて格納されていた。彼女はため息をついて、データが生体電子回路を通って意識に入ってくるのに身をまかせた。その感覚は、懐かしい音楽を聴いていたり、ある匂いがきっかけて普段眠っている記憶がふと蘇るときの感覚と似てなくもなかった。

記録によると、ルビカという名前はこの惑星全体を覆っている巨大な砂漠からつけられたらしかった。ミンジーはそのつながりがよくわからなかった。ちょうどその部分を説明している情報が記録から抜け落ちていたのだ。だがオムニテックの天体科学者たちと惑星調査隊には、ちゃんとした理由があったのだろうと彼女は思った。

少なくとも彼らはまともな名前を惑星につけ始めたのだ。過去には抽象的な記号ばかりつけてきていたのだった。

ルビカ。彼女はその言葉をもう一度味わうように口に出してみた。ル・ビ・カ。いい名前だった。なぜかこの場所に完璧にあっているように思えた。銀河図（チャート）に載っているかもしれない。ＯＴ３９３４－１２なんていう記号よりもよっぽどましな名前だった。

今度は短く柔らかいビープ音が、低く鳴り響いた。外部隔壁のドアが空き、昇降機が動き出したことを知らせる警告だった。

部屋は短い間震え、そして止まった。すると太陽光かもしれない銀色の光が、頭の上に広がりつつある隔壁の隙間から入り込んできた。

彼女は足を三歩前に踏み出して立ち止まった。頭上では割れ目がどんどん広がっており、深紅の異星の空がそこから見え始めた。

ミンジーは目を閉じた。彼女は新しい世界を見るときはいつもそうやって準備するのだった。この儀式は重要だった。まだ人間によって汚されていない新しい世界と調和するために。

ずしんという大きな音と共に、昇降機が地面に当たって止まった。ミンジーはさらに三歩前に出て、頭を前に傾けて目を開いた。この異星の光の中では、昇降機はまるで地球外で作られたもののように見えた。それは不気味な赤色で染められており、平べったく特徴を欠いていた。彼女は出口をくぐって昇降機に足を踏み出した。

暗い赤色に染まった昇降機は緩やかに下って惑星の地表へとつながっていた。ミンジーはまた目を閉じて、自信たっぷりに歩き出した。彼女はこの儀式を何十回もやっており、硬い地表を踏むまで何歩歩かなければいけないかよく知っていた。それに地表が硬いことは間違いなかった。結局、彼らは念入りに調査をしていたのだ。

それに、着陸艇は沈んでいるようには見えなかった。

少なくとも今のところは。

靴底に砂を感じて彼女は立ち止まり、また酸素を大きく吸い込んだ。頭がちくちくした。だがそれは大気がおかしいせいではなく、単に冒険で興奮しているからだと彼女は知っていた。そして目を開いた。

双子の太陽の光は、彼女の目を一瞬くらませた。だがヘルメットについているバイザーが、彼女の目の角膜を守るためにすでに暗く変化していた。そのまぶしい異世界の光に慣れるにつれて、彼女はあたりの景色を見渡すことができるようになった。地表は赤く染まっており、岩と砂、そして自然にできた岩の尖った塔があちこちにあった。それは地球の <平和の谷> の眺めと似てなくもなかったが、もっと巨大で明らかに異星のものだった。

彼女はゆっくりと頭を回して、自分がここに立ってあたりの景色を見る最初の人間なのだという数秒間の感慨を楽しんだ。聞こえる音は自分の呼吸と心臓の音だけだった。外の音を拾うセンサーのスイッチは、準備ができるまで入れないことにしてあった。入れれば景色はもっとすばらしい眺めに変わるだろう。

するとイヴス・ブーレの声が通信機から流れてきて、その一瞬は台無しになった。

「ルールーちゃん、またばかげたパントマイムをしてるのか？　何でもいいから早く仕事に入ってくれ、今世紀が終わる前に足を伸ばせる場所に帰りたいんだ」

ルールーちゃん？

彼女は彼が大嫌いだった。この偉大で尊大なブーレ船長は、世界でもっともくだらない人間だった。彼女は徹底的にこの男が嫌いであり、これまで会ったどの人間よりも憎んでいた。

彼女は普通上司とはうまくやっていけるほうだった。彼女は指揮系統の流れを大事なものだと思っていたし、リーダーは指導をしなければならないという立場の必要性も理解していた。普通は命令されるのは何でもないことだった。いやまったくこの上司だけが気にいらないのだった。彼女は心の底からこの男が嫌いだった。

この男と航海をしてもう八ヶ月になろうとしていたが、性的なことを求めてこない日はただの一度もなかった。もしこの近辺に文明のある植民地が存在しないという事実がなかったら、この男を即刻セクシャルハラスメントで訴えていただろう。最初に木星基地を出てから、まともな裁判所があるところには一度も立ち寄らなかったのだ。

もし彼女がそうしたとしても状況は変わらなかったかもしれない。イヴスはオムニテック社の上層部とつながりがあった。少なくとも植民計画に関わっている役員とつながりが深いようだった。そうでなければそもそもこの仕事に選ばれるわけがなかった。彼は能力はあったが思い上がっており、その航法術はひどいものだった。そしてその埋め合わせは、ミンジーが手を汚さねばならなかったというわけだ。

三人目のクルーであるアンジェロは、主に検査と鉱物調査をしていたが、ほとんど自分の殻に閉じこもっていた。イヴスと彼女のいざこざに巻き込まれそうになると、彼はいつも口を閉ざすのだった。だがミンジーはそれを責めることはできなかった。アンジェロには自分の仕事があり、もっとも近い植民地から百光年も離れた場所で、どちらかの味方につくわけにはいかなかったのだ。

だがそれらすべてを差し置いても、彼女にはオムニテック社に誓った義務があった。それは命令に従い、どのような状況であろうとも、最善をつくしてベストな仕事をするということだ。

船が迷子になるほど広かったことを感謝しなくては（今その船は頭上で軌道上を回っており、彼らの仕事が終わるまでそうして飛んでいるはずだ）。着陸と着陸の合間は、この男をほとんど見なくてすんだ。そしてもし会ってしまったときは、彼女はプロに徹して礼儀正しくする必要があった。それ以外の行動は火に油を注ぐだけだ。

今回も、いつものように彼女はそのあだ名の当てこすりを無視すると、簡単に答えた。「了解、船長。スケジュールどおりに行動します」

ルビカはこの旅の間に立ち寄ったどの惑星とも違った。それは驚くほど美しかったが、その厳しい気候に耐えられる草も水も地表には見当たらなかった。ミンジーはもしこの恐ろしいまでに異質な惑星をテラフォームし、コロニーを建設することがいったいどれほど大変だろうかと思わずにはいられなかった。

実際のところ、もし彼女に選択権があったとしたら、彼女はこの惑星を訪れようとは決して思わなかっただろう。双子の太陽をめぐるこの惑星の軌道は大きく歪んだ楕円であり、惑星は太陽に近づきすぎているか、遠すぎるかのどちらかで、テラフォームには恐ろしい困難が伴うことだろう。小さな基地を作るだけでも大変だろうことが予想された。気温を常に一定に保つ設備がないと、草すら育てることもできないだろう。ここに持ち込まれるすべての動植物には遺伝子レベルで大きな変更を加えなければならないだろうし、そのうちでも一番強いものだけが最初の一月を生き延びるのがやっとというところだろう。

だがオムニテック社は今回、断固たる姿勢を見せていた。彼らが乗ってきた船は、この恒星

系までほぼ一直線に飛んできていたのだった。途中にめぼしい利益になりそうな恒星系があれば、一応超空間から出て調査に立ち寄ってはいたが。
　上層部は彼女の知らない何かを知っているだろうか？　ここで採掘するに足る、貴重な鉱物でも眠っているとでもいうのだろうか？　しかしそんなことが可能だろうか。こんな遠いところまで探索した人間はいないことを彼女は確信していた。彼女は宇宙史を良く知っていたのだ。いやむしろ彼女のＮＣＵが適切な宇宙史を記録していたのだった。
　しばしば機械と精神の境界はあいまいになっていた。
「何か言ったかい、ミンジー？」
　今度はアンジェロだった。彼は待ちきれないというように、地表を見る機会を待っているようだった。ミンジーの理由とは違ったが、彼も自分の仕事を愛していた。彼は使命感に燃える科学者だったが、彼の使命は訪れた異星の美しさを保存し鑑賞することではもちろんなく、土壌と空気からサンプルを取り、生命体が存在できる可能性や、大気を呼吸できるようにするまでどれぐらいの時間がかかるか、そういった惑星の評価書を作成してオムニテック役員に届けることだった。アンジェロは完璧な職人だった。彼は自分の仕事のために生き、それだけが彼の生きがいだった。そして誰にも邪魔されずに平和に仕事ができれば一番良かったのだった。
　彼は同時に面白い男でもあった。だがミンジーはその面白さを理解しようと思う彼女は、数少ない人間の一人なのだろうと思っていた。
「毛玉星人は出た？」
　彼女は彼のにやにやしている顔を感じた。探査船ではよくある冗談だった。毛玉星人にエイリアン。
「毛玉星人は出てないわよ、アンジェロ、悪いわね。ここにあるのは塵と砂と岩だけよ。いつもの平均的な役立たず惑星ね」それも探査船でよくある冗談だった。みな冗談を必要としていたのだ。
「だと思ったよ。こんなところまで来てやったというのに、パーティも開かれてないなんて」
「早く着きすぎたんじゃないの？」
「かもね」彼はくすくす笑った。「こっちを向いてカメラに手を振ってくれよ。原住民をやっつけて、ポストカードを作ろう。この記念すべき瞬間を記録しておく必要があるだろう？」
　ミンジーは微笑んで着陸艇を振り返った。
　その古ぼけた船はずんぐりしていて醜く、他に形容のしようがなかった。船はただのガラクタにしか見えず、実際にそうだったのだ。この船はすでに百回は惑星に着陸しており、そもそもちゃんとした機材を探査クルーのために使うことはなかったのだ。贅沢な機材は商人たちや、軍事用の護衛船、そして植民者を運ぶ船のものだった。
　だが彼女はこのおんぼろを信用していた。この巨大な着陸艇の中にいると、まったく無能で、勇敢な船長の指揮下で動いていても安心できた。三重に冗長化された回路と、安全管理システムにより、未熟なパイロットが失敗したとしても船は守られていたのだ。着陸艇が致命的なシステムエラーを起こし、破壊されてしまったというのは本当にごくごくまれなことだった。
　だがまったく起きなかったわけではない。もっとも有能な者たちが操縦していた場合でも、だ。
　しかし彼らはここまで安全に来られたけだし、この星での任務が終われば、あとは母船に戻ってまっすぐ木星基地へと戻れるのだ。そして任務の報告をすれば終わりだ。願わくは配属変

えになればいいのだが。彼女がまとめようと思っている苦情に上席が耳を貸すとは限らないが、今後ブーレと彼女を同じ部隊に入れようとは思わないだろう。社はメディアの評判を非常に気にしており、多くの分野でオムニテック社と肩を並べている <トルースペース報道局（ネットワーク）> の影響力の大きさから世論を気にせざるを得なくなっていた。なので彼女はおそらく誰か別の隊長の部下に納まることだろう。

　その場合、彼女の昇進はないだろう。それは別にかまわなかった。少なくとも今のところは。とにかく、黙っているわけにはいかなかったのだ。結果がどうであれだ。イヴスのような奴は、警告がなければ悪ふざけをやめないだろう。彼女はその警告を、オムニテック社の監査部のおそろしく複雑な事務手続きを通して、彼に与えるつもりだった。

　何かが目にとまった。頭を少し左に回し、バイザーに明るくなるよう指示する。

　鎌のような光が西の空を切り裂き、遠くの地平線で赤い岩が描くアーチの向こうに沈んでいった。双子の船の片割れだ。こういった探査船は普通二隻か三隻で旅をし、それにより安全を確保し、かつ相互協力しあうことにより調査能力を最大まで引き上げることができるようになっていた。この船と同じように、あの二番目の船も数分後には到着しているだろう。だがそれはどうでもよかった。

　彼女が最初だったのだから。

「それで調査結果はどうだったの、アンジェロ？」

　彼女はコンソールに向かっている彼の脇に立って聞いた。分析中は邪魔をしないことにしていたが、報告書をまとめているので終わったのだと思ったのだ。

「特に問題ないね」彼は言った。「地質には水源があまりないようだし、地表にはまったく水がない。砂だらけだ」

「それは私でもわかるわ」と彼女は言った。アンジェロはびっくりしたように顔を上げたので、彼女は笑った。「ごめん」

「砂と鉱物資源かな。そんなにたくさんはない」スクリーンに表示されている意味のない文字列に指を走らせる。「結構たくさんの鉱石が眠っているはずだ。鉄を作るときに困ることはないと思うね」

「つまりこの星をテラフォームすべきだってこと？」彼女にはよくわからなかった。いったい誰がこんなところで生活したいと思うのだろう？　まだ火星には住むところはあるし、いくらでも叫び声を上げられるほどの広さの土地があったのだ。最近は地球ですらアパートを建てるぐらいの余地はあった。もちろんそれは高くついたが、ずっと家賃を払いつづけるほうが、埃まみれの岩に囲まれて生活するよりましというものだ。

　アンジェロはわからないというようだった。「すべきってどういう意味？　僕らは別に植民化の可能性を確認するためにいるわけじゃないよ、ミン。それはもう決定済みなんだ」

「テラフォームすることが？」彼女は驚いて聞き返した。会社がそういった指示を出すのは、完全な調査が行われてからが普通だったからだ。

「植民化だよ」彼は答えた。「すでに船はここに向かっている」

　なんですって？　まったく意味が通らない。「じゃあ、なんで私たちはここに来たの、アンジェロ？　遊び？　こんなところで休暇を過ごしたくないわ。砂と太陽はあるけど、海はない

し。何もないじゃない？」
　彼が答えようとしたとき、船長が部屋に入ってきた。
「リュウ、おまえは機密情報にアクセスしようとしている」彼は唸り声を出した。「そういう質問は止めたほうがいいだろう。にっこり笑って自分の仕事をすることだ。おまえが理解できない問題は私が取り扱う」
　彼女は深呼吸した。こういうときはこの男が言ったことを、普通の善良な人々の言い回しに翻訳するのがポイントだ。そうすればナイフで刺したくはなくなるだろう。
「私は私の仕事が何かの役に立つことを確認したいんです」と彼女は言った。「時間を無駄にしたと思いたくはありません」
「その言葉を報告書に入れたくはないだろう」船長は言った。「心配するな。ＯＴ社はこの岩の塊に大量の投資をしている。つまりおまえが何をしているにせよ、それは誰かの役に立っている。私たちの仕事はいくつかの資料を正確に集めることと、植民者たちのために準備することだ」
「何人ぐらい？」彼女は聞いた。
「最初のか？」船長はしばしそれを考えた。「百人を超えたぐらいだろう。技術者たちと地質学者、そして生物学者とテラフォーム技術者だ。それにナノ・テクノロジー関連の人間も来る」それを聞いてアンジェロは興味深いというように顔を上げた。「おそらく、ボットがこの大気でどういう動きを見せるのか知りたいんだろうよ」
　ブーレ船長にいいところがあるとしたら、その軽口だった。彼は秘密を秘密のままにしておけない男だった。喋らせればいつかはぽろりと何かを言ってしまうのだ。今のように。
「それだ！」アンジェロが叫んだ。その声は興奮していた。「まさにそれを見ていたんだ」
「なんだって？」船長はアンジェロの反対側の肩越しにコンソールを覗き込む。画面には三人の顔が映っており、男と女の顔が両脇から生えたようになって見える。
「これですよ」と彼は他のグラフを突き抜けている曲線を示した。「これはミンジーのボットの活動記録です。何かおかしくなったときのために、いつもこうやって記録を取っておくんですよ。ここを見てください、突然急上昇してすぐにそのまま平坦線を描いているでしょう？」
二人は頷いたが、ミンジーは船長も何がなんだかわからないだろうと思った。「特にこれまではなんとも思っていなかったんです。ボットはよく奇妙なふるまいをしますからね。ボットを崇拝する宗教があるって話、聞いたことありますか？　信者たちはナノ・ロボットが生きており聖なる存在で、ナノ・テクノロジーは神と人とをつなぐ道だというように信じているんですよ」彼は船長がいらいらし始めたのをみて、咳払いした。「それに、ミンが肉体調整プログラムを単に実行させたのだという可能性だってありました。筋肉の活性化とか、熱の発散とかね」
彼女がそんなことはしなかったと頭を振って否定しようとしたとき、彼は続けた。「だけどいま記録をチェックしたら、彼女はそんなことは何もしていないことがわかりました。僕はボットの奇妙な振る舞いは見たことがあったけど、こんなのは一度も見たことが無い」彼はそう言うと画面を指で叩いた。「この記録によると、ミンが着陸艇の外に出た瞬間、彼女の体内のボットはそのエネルギー出力を五百パーセントまで増やしました。が、それにもかかわらず、その消費エネルギー量は変わらなかった。さらに、ボットは完全に安定しており、つまり彼らは普通に分解してしまったり、不安定にあちこちを飛び回ったりしなかったということです。ボットが命令を受けていないときに、いつもそうするようなことはしていなかった」

「つまり・・・」船長はまったくわかっていないようだった。ミンジーはようやくアンジェロが言わんとしているところがわかり始めた。
「つまり、ボットはミンが船の外に出た瞬間に恐ろしく活発になったということです。そこまでのエネルギー出力を得ることができたということは——大事なことはその時彼女はあらゆる放射線から守られていたことです——この惑星上でボットは、地球よりも遥かに高い能力を発揮できるかもしれないということです。恐ろしく高い能力です。しかも、いまの事象は、これを技術的に採用して、最適化を実施する以前の話ですよ」と彼はこの事実が、血の巡りの悪い上官の頭に染み込むのを待った。「船長、ボットの寿命の問題もあります。おそらくこの惑星の環境では、ボットは人間の体の外で生きることさえできるかもしれません。再生処理を行わなくても活発に動きつづけられるかもしれないということです。これはナノ・テクノロジーの救世主になるかもしれませんよ。そんなことが可能になるのならば、ボット産業に大きな革命をもたらすのは間違いないと思います」
「つまり、この場所はナノ・テクノロジーのメッカになりうるということ？」彼女は聞かずにおれなかった。
「僕はただここには何かがあると言っているんだ」と彼は答えた。「だけど腹立たしいがそれが何なのか具体的にはわからない。放射線かと推測したけど・・・だけど何が発しているもので、どこからのものかはただの推測でしかない。ひょっとしたらこれはまったく新しい自然物質で、この星の土壌か砂に入っているものかもしれないし、あるいは双子の太陽からの放射線のせいかもしれない。テストを実施しなければならないと思う。それが何であれ、ＯＴ社がこの星にすごい興味を示した理由はまさにこれだと思う」
「そしてこれについては黙っていることだ」と船長はぶっきらぼうに言った。「それは私たちの任務ではない。任務とはいくつかのテストを実施することで、それ以上のものではない。私たちの任務外のことはするな。任務が終わったら、ここで待てばいいのだ」
　何ですって？　「ちょっと待ってください」聞き間違えだろうか？　「待つってどういう意味ですか？　何日か待機するということでしょうか？」
　ブーレ船長は首を振った。「違う、リュウ。ここで植民者たちが着くのを待つんだ」
　アンジェロと彼女は信じられないというように船長を見た。先に口を開いたのは彼女のほうだった。
「冗談じゃありませんよね・・・船長」途中まで言いかけて、それが命令違反に聞こえるかもしれないので最後に役職を追加した。だがこの指示はどう考えてもおかしかった。植民船がここまでたどり着くまでには、何ヶ月もかかるはずだ。その間ずっとここで待てというのだろうか？　ここでずっと一緒に？
　どう考えてもおかしい。
「上からの直接の命令だ」と船長は追加した。「数日前に受け取ったばかりだが、最高の優先度の亜空間チャンネルを使って送信されてきている。『適切な人員が到着し貴職の任務を引き継ぐまで、惑星ルビカを離れないことを命ずる』とメッセージにあった。心配するな」と船長は二人に意味ありげな目配せをした。「私だってここでおまえたち二人と閉じ込められるよりは、できるだけ早く帰れるほうがずっといいと思ってるんだ」どうやらこれは、イヴス・ブーレ流の好意を示すやり方らしかった。「だが本部の方針に口をはさむのは論外だ。この惑星に対しての計画はすでにできており、その評価をするのは私の仕事ではない。指示には従わなけ

ればならない」
「だけと数ヶ月ですよ？」　信じられなかった。起こりうる最悪の事態が起こってしまった。着陸艇が爆発したほうがはるかにましだったと言えた。彼女はここでアンジェロとブーレ船長と何ヶ月も過ごさねばならないのだ。
　なぜ彼女は両親が望んだような事務職につかなかったのだろう？　そうしていればいまごろ彼女は、地球のどこか緑の木々と水の近くで、平和で満足のゆく生活を送っていたかもしれないのだ。イヴス・ブーレの無い生活を。
　まったく、彼女の人生はひどいものだった。

　あとになって、アンジェロと二人きりになったとき、彼女はボットについて彼に聞いてみた。
「僕の推測は、原子の安定化に関連した何かだということだ」と彼は言った。「だけど僕はナノ技術者じゃないし、確かなことは何もいえない。いいかい、そもそもボットという存在の問題とは、そもそもの特性である不安定性と、宿主の肉体外では活動できないという弱点だったんだ。歴史によると、 <解放戦争> で絶滅したとされるホモ・オメガたちは、確か一万二千歳ぐらい長生きをしていて、彼らはボットを使って老化現象を止めることができていたらしい。あれから一万五千年経過したが、そんなことがどうして可能だったのかはわかっていない。その方法はわからないが、彼らはボットを安定化させることに成功していた。いま僕らが成功しているのはたったの何十分の時間でしかないが、それを遥かに越える寿命をボットに持たせることに彼らは成功していたんだ。彼らはＮＣＵ技術を持っていなかったから、特定のプログラムを実行させるためだけに、もっと複雑で精密な移植臓器（インプラント）を使っていたはずだ。実用化するにはかなり無理があると思うけど、効率的なやり方ではある。それに加えて、彼らは薬や放射線治療も行っていたのかもしれない。僕らが思いもつかない技術を使っていたのかもしれない」
「ポイントはここなんだが、僕らが使っているボットと、いま実現可能なナノ技術ではたいしたことができない。それを使って小さな腫瘍や、病気は治すことができるだろう。だが、昔読んだ本によると、ホモ・オメガはばらばらになっても、すぐに体が自己修復をしてもとの健康な体に戻ったそうだ。僕らの技術ではボットをそこまで使いこなすことができないんだ。その理由はなんだろう？」
「それはエネルギー出力と、エネルギー消費量の関係なんだ。人間の体の中だけでは、十億を超えた数の小さな機械を、長いこと働きつづけさせるだけの燃料を提供することができないんだ。だから上手くいくはずがない。つまりそのエネルギーは、どこか外から運ばれてきたものだったんだろう。彼らはまさにそうしたことをやったんだと僕は思う。人工的に自分の体を充電したんだ。そして――これはホモ・オメガたちもなし得なかったことだと思うけど――ボットを宿主の体から外に出して空気中で動かすということは、さらに大量のエネルギーを必要とするだけではなくて、ボット自体を構成する原子をまったく新しいものに変える必要があるだろう。そうでなければ、ボットたちは自らを引き裂いて分解してしまう。最後に、肉体の神経ネットワークから切り離されてしまったボットを、いったいどうやってコントロールするかという問題もある。ボットをどうプログラムどおりに、分解させることなく動かす？　ボット単体ではプログラムされた作業情報を、長いこと保持することができないんだ。ボットはさほど賢いわけじゃない。

「ミン、そしてさっきの記録を見てわかった事実はこうだ。この惑星にはすでに超極小の、ナノ・ボットに似た物質が大気中に存在している。これは驚くべきことだし、オムニテック社がこのルビカを植民化すると決定したのはちゃんと理由があってのことだったということだね。もしこのエネルギーを、その正体が何であれ、手に入れることができたら・・・」
「私たちはいま銀河全体でもっとも貴重な資源の上に座っているってことね」と彼女はその考えを引き継いでまとめた。「比類なきエネルギー源ってこと。ＩＣＣからこの惑星の借用権を得たら、オムニテック社の今後の優位は決して揺るがないでしょうね」
「もし誰かがＩＣＣに、僕らがこの惑星で見つけたことを伝えたとしたらどうだい？」
　彼女は彼を見た。「興味津々でしょうね。オムニテック社だけに独占することは絶対許さないでしょう」
「もちろんそうだ。そして僕らはＯＴ社との契約違反を犯すわけだが・・・」彼は言葉をあいまいに切った。
「アンジェロ、正直に答えて。もしあなたの調査結果が正しくて、いえ、半分でもあなたの言ったことが正しいと仮定したら、オムニテック社がルビカ全土を完全に掌握してしまって良いと思う？」
「いや」ためらわずに彼はこたえた。「だが、ＩＣＣに公平さを期待できると思うかい？　彼らだって自分の利益のためだけに、この土地を絞り尽くそうとするんじゃないのか？」
「そうかもしれない」彼女は政府や企業をまったく信用していなかった。二つの巨悪のうち、どちらがましだろうか？　もうこの発見を秘密にしておくには遅すぎた。明らかにオムニテック社はここに何かがあることを知っており、そうでなければすでに船団を送っていたりはしないだろう。
「どちらにせよ机上の空論だと思うけど」と彼は結論付けた。「僕らは社内通信チャンネルを通してしか誰かと通信することができないし、船長はこの問題について監視の目を光らせていることだろう。彼は骨のずいまで会社人間だから。僕らにできることはおとなしく何が起こるのか見届けることだけだ」と肩をすくめた。「面白いことになると思うけどね、確実に」
「それだけ？　私たちは一企業に、歴史上最も大きな発見を私物化させるのを黙って見ているの？」
「別にいいじゃないか？　最終的にはそれは僕らの会社なんだ。僕らにだって利益は入るだろうしね。間違いないよ」
「そうでしょうね」奇妙なことに彼女はがっかりしていた。それはまるでクラスメートのいじめっ子が、他の子供の昼食代をすべて奪ってしまったところを目撃してしまった気持ちのようだった。とても公平なこととは思えなかった。オムニテック社はたったひとつのラッキーな発見により、今後全銀河を支配するまでに成長するのだ。
　それはもちろん、これが本当に幸運な出来事だったとしたらだ。どんな居住可能な恒星系よりも遥かに遠くに離れたこの僻地の惑星で、純金を発見したというのはどう考えても筋が通らなかった。事前に偵察員をここまで送っていたとしても——そうでなければこの惑星のことをどうやって知りえたというのだ？——それは銀河系サイズの藁の山から、たった一本の藁を特定するに等しい。単純にそんなことは不可能なのだ。そこまでの幸運などありえない。
　誰かが彼らをここまで導いたのだ。何かがこの恒星系のこの惑星を指差して「行け、されば与えられん」と言ったのだ。

その考えに彼女は震えを覚えた。それは不気味なまでに落ち着かない考えだった。もし神が存在したとしても、オムニテックの役員だけに直接語りかける神などいるわけがないではないか？

そんな神がいるわけないではないか？

第十八章

西暦29475年 惑星ルビカ

袋小路へとつながる道からわき道へそれ、川岸から五ブロック離れた地点にようやくフィリップ・ロスが出たとき、雨は少しおさまっていた。
空にあった雲の亀裂はまた閉じてしまっており、太陽の光が締め出され、街は陰気で暗い空気に覆われていた。道は水で滑りやすくなっており、歩行者の姿はほとんどなかった。少なくともこの地区では。
彼は自分の保安システムを管理者パスワードを使って騙し、エレベーターをいわば乗っ取って下に強制的に降りさせたのだった。一度も止まらず、この外につながる階まで。彼の唯一の従者は無口なアンドロイドだった。それがエレベーターに乗るときは背を丸めねばならず、その巨体ががっかりしている子供のように見える様は、まるで漫画のようなおかしさがあった。だがいまアンドロイドはあるべき姿に戻ったようだった。頭部は前へ後ろへとすばやく回り、真っ赤な目が光を放っていた。その鋼鉄の関節に力がこめられており、まるで興奮しているかのようなブーンという音を放出していた。
少なくともロスはそれが興奮している音ではないかと思った。彼は人工感情についての専門家ではなかった。
「来るんだ」彼はそれに命令した。「散歩に行くぞ」
彼の護衛にあたっていた保安部隊はすぐ後ろにいるだろうし、おそらくパニックを起こして彼の強情さを呪っていることだろう。時間は短いかもしれないが、自由な人間としてあたりを歩く機会を逃したくなかった。
裏通りを抜けたとき、雨が完全に止んだ。まだ空は霞がかっていたが、視界はすばらしくよくなった。きらきらとした小型飛空艇が、あたりの暗い建物の姿を窓に映しながら飛んでいった。ぼろの皮の服を着て、ポケットに手を突っ込んだ子供が来てアンドロイドを見上げると、二人を避けるように弧を描いて、立ち止まらずに走っていった。
街は静かだった。
二人は歩き出した。最初は左に曲がり、また左に曲がり、川へとまっすぐと向かう道に入った。彼はアンドロイドが巨大な一歩を踏み出す度に四歩歩いていた。その巨大な体は猫のように優雅な動きをするようになり、たまに出くわした歩行者たちはその大きな怪物のほうばかり注目していて、ほとんど彼のことを見ていなかった。
ほとんど彼の存在は気づかれていないようだった。
時折彼はその無口な同行者にいろいろ指し示して見せた。建物や、人間や車両を。一度か二度、ロスが指し示すほうをアンドロイドが見ているのではないかと思えるときがあった。だがおそらくそれはただの偶然だろう。
「おまえはオムニ－１がルビカでもっとも古い都市だということを知っていたかね？」彼は言った。「もちろん知らないだろうが、実際そうなのだ。この惑星の植民化が始まってから八百年もたっていない。人間の歴史の長さに比べたら短いものだが、ある帝国が興りそして滅ぶに

は十分な時間だ。オムニ－１は誰にも落とされなかった」彼は小さくないプライドをそこにこめて言った。彼がここに来て仕事をし始めたのはせいぜい数十年前ということは問題ではなかったのだ。「この街が反乱軍の手に落ちたことはないし、自然災害に打ちのめされたこともない。この建物のうちのいくつかはもう建築されてから七百年もたっているものがあるのだ。オムニテック社の技術は一流だよ。実際のところ、おまえを作り上げている技術と同じものだ」

二人は新しい入植者らしい一団とすれ違った。彼らは興奮したようにうるさく喋りあい、アンドロイドを畏怖の目つきで眺めるのだった。近頃、こういった人々は日増しに増えつづけていた。不幸なことに、あまりにも多くの移民者たちが、社との契約に背いてクラン陣営に逃亡してしまうのだった。太陽系でのクランの啓蒙活動は驚くべきほど上手くいっているようだった。あのいまいましいクラン評議会は火星にオフィスさえかまえており、言論の自由に守られて、オムニテック社の正義の手から逃れ安全に暮らしていたのだった。

多くの人々が戦いに魅力を感じていたのだった。彼はここまで旅をしてきた植民者たちの興味が新しい生活を築くことなどではなく、単に金を稼ぎ、銃を撃ちたいという欲望なのだということをよく知っていた。彼らはできれば人間を撃ちたいを思っているのだ。まったく人間らしい連中と言えた。

彼らはまるで猛禽類だった。いつも上へと、戦略的優位にたつことを願っていたのだった。この連中はクランやニュートラル、そしてオムニテックの陣営に関係なく、すべてのまっとうな市民に迷惑をかけていたのだった。彼らはくずの中でも最悪の類だった。惑星ルビカの豊かな血液を吸い取ろうとするヒルだった。

新しい入植者たちは二人の後ろで立ち止まった。その中の一人の少女はまったくばかげた服装をしており、彼はそれが新しいファッションなのか、それとも他の植民地や地球から着てきたもののなのか判断をつけかねた。彼女は大胆な黒のトップを着ており、大きなサングラス（なぜこんなに空が暗く、天候操作も失敗に終わったような環境でそんなものをかけているのか、彼は決してわからないだろう）をかけており、真っ赤なハイ・ブーツ、そして歩くことも走ることもおそらくままならないほどぴちぴちのズボンをはいていた。少女はロスと保安アンドロイドに向かって走ってきた。

アンドロイドは立ち止まると、上半身を一八〇度回転させ、左の銃剣をかまえた。

「何をしたいのかは知らないが」ロスは少女に言った。「私に向かって素早く動くのはやめておくことだ」彼は隣の巨人を親指で指し示した。「彼はまず撃ってから質問をするタイプだ」彼はそこで言葉を切って、少女が心配そうな表情で立ち止まるのを見た。「より正確に言うと、ただ撃つだけだ。彼はあまり話をするタイプじゃない」

「ごめんなさい」少女はひどい訛りだった。「来たばっかりで知らなかったのよ」と言って恥ずかしそうに笑った。彼の見たところ、少女はなかなか可愛いと言えたが、最近の若い女は皆可愛くなっていた。あらゆるツールが使用可能になった現在では、外見に魅力がないというのは単に選んだデザインの結果であり、遺伝子によるものではなくなっていたのだ。「私たちは昨晩入国管理局を通ってやってきたのよ」と彼女は胸を叩いた。「職にありつくためにこれから街を出るの。質問があるんだけど、クランに就職するにはどうしたらいいの？」と女は、オムニテック社の代表取締役（CEO）であるフィリップ・ロスにそう質問した。

彼はあまりにショックだったので、一瞬笑うことさえ忘れた。

クランに就職？　なんて皮肉だ。
「さて」と彼は話し始めた。「ここはクラン反乱軍に加わるには良い場所といえないかもしれないね、申し訳ないが」女はわけがわからないようだった。「この街はオムニテック社によって運営されている。それは知らなかったのか？」女は肩をすくめた。明らかに、植民船で教えられる教材はあまり役に立っていないようだった。「お嬢さん、あなたはそういう質問をここではしないほうがいい。それに」彼は聞いた。「よければ・・・なぜクランに加わりたいのか教えてくれないかな？」
その会話に、女の友達が割り込んできていた。彼らは全部で六人おり、みな若く真剣な顔と、きらきらした目を持っていたがばかげた服装をしていた。一人を除いて。すっぽりと灰色の外套を身にまとった三十代の男だ。サングラスも刺青もしておらず、黒い皮のブーツを履いていた。簡素だが粋であり、まともな男のように見えた。男は他の連中とは違ったが、何らかの理由で一緒に行動しているようだった。
ロスの頭に警告が点ったが、彼はそれを無視した。彼は長い間孤独だったので、偏執狂的になっていたのだ。
「あたしたちがクランに加わりたいのは――」
「なぜならあたしたちは人と違うことがしたいからよ」もう少し年上らしい別の女が力強く言った。「私たちは官僚になりたいんじゃないのよ」と続ける。「惑星ルビカのあるべき姿とはまったく異なったことをオムニテック社はしているわ。もともとここは新しいことにチャレンジする人のための惑星なのよ。オムニたちは反動的で保守的だわ。クランたちは・・・もっと刺激的だわ。彼らは個性を重視するし、服従することを拒んでいるわ」
「君たちにはわかっているのかね」と彼は繰り返した。「ここはクランの領土ではない。北と南の間には・・・抗争があるのだ。オムニテックとクランたちの間にね――」
「もちろん」と、今度は二十台前半に見える若い男がいった。「だけど僕らはオムニテックの従業員なんだぜ。見てくれ」とロスにバッジを見せる。「僕らはただ質問しているだけさ。教えてくれさえすれば・・・」
「彼はおまえらがみんな馬鹿だって思っているだろうよ」と後ろにいた男が言った。それは一人だけ浮いていたあの男だった。またその話し方も違った。ロスはこの男が新しく来た入植者ではないことに気が付いた。その言葉にはこの惑星でずっと生まれ育った人間のアクセントがあった。おそらくツアーガイドだろう。だがなぜ彼は自分の同行者が危険な質問をするのを、止めることもなくただ眺めていたのだろう。しかもこんな街中で？
「なんですって？」とロスは言った。「私はこの人たちが・・・馬鹿とは思っていない」それは本当だった。彼らは世間知らずで感情的かもしれなかったが、ロスは人のことを馬鹿と思うのが嫌いだった。あまりにも多くの人々が、他人を過小評価していると彼は思っていた。ロスは自分の周りの人々を過大評価する男だった。その意味で、常に準備しているロスの裏をかくことはほぼ不可能と言えた
「わからないのか」と男は続けた。「彼はオムニテック社の重役だ。その服を見てみろ。従業員が着る高級な仕立て服だろう」といってアンドロイドを指差す。「それにそいつだ・・・いったい誰がここまで高級な保安アンドロイドを個人で所有できると思う？　俺たちはとてつもなく重要な人物と話をしているところなのさ」男はにやにや笑った。「そうではありませんか？」

ロスは少し不愉快になった。「そう、私はオムニテックの社員だ」と認める。「だが私は『重要』と呼ばれるほどの男ではない」
男は返事をしなかったが、顔にそのにやにや笑いを貼り付けたままロスとアンドロイドをじろじろ見た。
「なんで？」と二番目の女が言った。「なぜオムニが正しくないことを知りつつ、その会社のために働こうとするの？　ルビカのすべての人はそのために苦しんでいるというのに？　彼らはまるでこの惑星が彼らの持ち物であるかのように振舞っているわ。そうじゃないわよ、ここはみんなの星よ。ここは独裁国家じゃなくて、民主国家であるべきよ」
「厳密に言えば」彼は議論が不毛であることを知りつつ、言い返すのを止められなかった（結局、今日という一日は懐疑心とともに始まったのだ。彼はその懐疑心を吹き飛ばすためにベストをつくしていたのだった）。「ここは民主国家であるべきではない。オムニテック社はこの惑星の借用権を持っている。オムニテック社の船でここにやってきた植民者たちはすべて会社が雇った社員だ。それ以外の人間はすべて不法滞在者か、一時的な滞在ビザを持った個人事業主だろう。そういう意味ではこの世界は自由でも無償でもない」
彼はそれを言った瞬間に言い方を誤ったことに気が付いた。
もちろん最初の女が激しい口調でまくし立てた。「自由ではない？　無償ではない？　それじゃオムニテック社は、オメガがそうしたようにみんなを奴隷にしたいっていうの？　私たちは奴隷なの？」
二番目の女はもう少し雄弁だった。「ＩＣＣはそういった論調には口をはさみたいと思うんじゃないかしら」と彼女。「契約は一つの事実だけれども、暴虐と独占に反対して発言する自由が与えられないというのはまた別の問題だわ。オムニたちはすでに銀河の半分を所持しているのじゃなかったかしら？　なぜ彼らは労働者の権利を踏みにじろうとするの？　なぜ無垢な人々を戦争に駆り立てるの？」
ロスは六人に囲まれてしまったことに気が付いた。アンドロイドに目をやる。
その頭部は死んだように傾いていた。その四肢はだらけており、ほんの数秒前までそこにあった優雅な危険さはそこにはなかった。暗いパニックが胸に起こりつつあるのを感じながら（彼がはまり込んだ危険についてまだはっきりと理解したわけではなかった）、彼は犯人の姿に気がついた。
後ろにいたあの男が手を伸ばして、ロスに小さな黒い箱を見せた。
「それは眠っているよ」と彼は言った。「正直、あなたとうまくやっていけなくて疲れたみたいだ。少し休ませてやったらいいと思ったんでね」
これまで口を開かなかった若い男が、皮ジャケットの下から鉄の棍棒を取り出して、保安アンドロイドの右足を殴りつけた。アンドロイドはふらついたが、倒れなかった。男がまた殴りつけると、金属がぶつかりあう音が通りに響いた。
道の反対側では、通行人が何人か通り過ぎていったが、皆目を逸らしていた。こういうことはよくあることなのだろうか？　いつから彼の街は、自分が襲われでもしない限り無関心な人々だらけの、暴力的で危険な場所になってしまったのだろう？
いったいなぜ誰も何もしないのだ？
グループの残りの人間がアンドロイドの破壊に加わり、殴られたのが四回目になったとき、やっとロスは体に内蔵されている通信装置で部隊を呼び、自分の位置を知らせることを思いつ

いた。試してみたが、何も応答がなかった。
「悪いね」と後ろの男がまた言った。ロスはこの男が危険だということに気が付き始めた。「そのチャンネルは遮断させてもらったよ。プライバシーは大事だ。それにあんたの名前も知りたい」
「おまえは大きな間違いを犯そうとしている」ロスは言った。「いますぐ武器を置いてここを去ったほうがいい」
「なぜ？」と二番目の女が言った。「あんたがオムニで、クランの敵だから、私たちはあんたを放っておいたほうがいいってわけ？　わけわかんないわ。何がいいたいのかさっぱり」
　轟音と共に保安アンドロイドは横に倒れて地面に叩きつけられた。六人のうちの三人はその哀れな機械を、オムニ製の棍棒で殴りつけていた。部品のいくつかが緩みはじめたが、それはこの血と暴力に飢えた連中をさらに駆り立てる効果しかもたらさなかった。
「なぜこんなことをする？」彼は後ろのリーダーに向かって聞いた。「おまえがいるのはオムニ－１の中心部だ。逃げることはできないぞ」
　男は肩をすくめた。
「子供たちに遊びを教えてやらんとな」彼は言った。「あんたの高価なおもちゃで遊ばせてやるのさ。あんまりけちけちしなさんな。痛い目にあうことになる」彼はロスの後ろの何か、いや誰かに向かって指を伸ばした。「気をつけろ、ゆっくりダメージを与えるんだ」
　ロスが半分振り返る暇もなく、背中の下のところが棍棒で打ちすえられた。それは巨大な足で踏みつけにされたようだった。足から力が抜けて、彼は悲鳴を上げて道に膝をついた。
　次は右肩を打たれ、彼は自分が地面に顔をつけていることに気がついた。血が口からこぼれ、痛みが全身を駆け巡っていた。
「よくやった」男がそう言っている。「これがオムニたち全員に、クランが勝利したときに起こることだ。復讐だ。すべての死に対しての報いを与えるんだ」その最後の言葉は毒に満ちており、ロスはこのリーダーが誰であるにせよ、長いことクランとして活動をしてきたのであり、戦争での経験がある男だということを理解した。この男は骨の髄までテロリストだ。オムニテック社の中心部のまさにこの場所で、世間知らずの入植者たちを何人も勧誘できるような人間だ。もしこういった男がこんな本部に近いところで活動しているのだとしたら、あの暗殺者たちとやらが近くにきていてもおかしくはない・・・。
　その考えは左膝への打撃で中断され、彼は痛みで叫び声を上げた。私を殺すつもりだ、と彼は思った。そして彼を助けてくれる者は誰もいなかった。
　その時最初の銃声が聞こえた。
　彼がなんとか頭を少し持ち上ると、あの訛りがひどかった少女が地面に倒れるのが見えた。その喉には黒ずんだ穴が空いていた。その目はびっくりしているかのように大きく見開かれており、倒れると同時に手から棍棒が離れて地面に転がった。
　その煙が消えうせる前に少女は死んでいた。
　グループは大混乱に陥ったが、ロスの目はあの六番目のテロリストを、熟練した男を見ていた。彼はその男を捕まえるように、誰だか知らないが助けに来たものに言いたかったが、体がうまく動かず、弱々しくうめき声をあげることしかできなかった。
　男は消えうせようとしていた。彼は文字通り影の中に消えうせようとしていて、ロスは男が

オムニテック製の光学迷彩（クローキング・デバイス）服か何かを使っていることがわかった。それは検知されやすく追跡もしやすいものだったが、混乱している暴動の現場からすばやく離れるだけなら十分有効なものだった。

あたりは銃声に包まれていた。そして若者たちは一人一人死んで倒れていった。今日ここには何の慈悲も期待できなかった。だがロスには気にならなかった。まったく歓迎だった。彼自身が冒涜され、打ち倒されたのはまさに彼の裏庭であり、彼は議論に答えるつもりであったのに、それに対する回答は暴力だった。彼はこの若者たちを通報したりはしなかっただろう。彼はクランに入ることを思いとどまらせようとさえしただろう。彼はここに教育のために、あるいはスパイするために来たのではない。彼はここに何かを学びに来たのだ。

だが、結局彼は学んだのではなかったか。彼が理解したのは、いかにオムニテック社が非難されようと、どのような罪に対して責任があろうと、クランたちもまた同じように悪だということだった。暴力が暴力を産み、憎しみが憎しみを育むのだ。そしてそれはオムニテックが始めたことではないのだ・・・それをはじめたのは労働者たちであり、クランたちだった。ルビカに戦争をもたらしたのは彼らであり、それに耐えて生きなければいけないのは当然だった。

もし彼らが聞く耳を持たず、そして妥協することさえ拒むというのであれば、放っておけばよいのだ。こういった連中を彼はすべて消し去るだろう。

その晩、治療を受けて再び健康体に戻ったロスはオフィスに戻って、もう一度あの夢について考えた。

あの夢を、いま彼はようやくよく理解できた気がした。彼は自分に与えられた使命を理解した。それが意味するものも。

かつて戦争があり、何の罪も無い人々が二つの陣営にはさまれて苦しんだ。この罪の無い人々のうち、ある者はクランについた。それは避けがたいことだった。クランが戦う理由を理解するのがより簡単だったからだろう。彼らは理論上の自由のために、民衆の解放と民主主義のために戦っていたのだった。彼らにとって、オムニテック社の立場を理解するのはいつも難しいだろう。秩序と従順さが、この惑星が生き延びるのに必要な徳であり、緩慢ではあるがいつか本当の自由をもたらす唯一のものなのだということを理解するのは、もっと難しいだろう。

妥協はありえないだろう。クランたちは決して降伏しないだろうし、オムニテック社も武器を収めることはもうできない。オムニテック社無しには、混沌とアナーキズムが世界を覆い、そこには何の自由も、真の解放もありえないだろう。

ルビカにはオムニテックが必要だった。そしてオムニテックはフィリップ・ロスを必要としていた。彼はクランを叩き潰すだろう。最後の一人に至るまで。彼はこの惑星とそこに住む市民たちに、平和をもたらすだろう。

もちろん、皆が彼のことを呪うだろう。だが、将来は皆彼に感謝するはずだ。

それについては彼は確信していた。

＊＊＊

ジェニーは焚き火のぱちぱちという音で目を覚ました。燃える木と肉が揚げられる匂いがあ

たりに漂っており、それは沼地のじめじめとした臭いとまじりあっていた。
彼女は自分がどこにいるのか思い出せなかったし、いまがいつなのかもわからなかった。最近起こったことがすべて頭の中でごちゃごちゃしてしまっていた。そのうちのどれが始まりで、その次に起こったことが何なのか彼女にはよく思い出せなかった。戦争は覚えていた。母のことと・・・水だ。
暗く冷たい水だ。冷たい水の中の黒い何か。
アダム、彼のことを思い出したが、具体的なことは思い出せない。いくつかの映像が断片的に頭をよぎった。二人がはじめて会ったときのことと、最初の恥ずかしい抱擁、軍での訓練・・・彼の命を救うために・・・自分の命を犠牲にして・・・。
彼女は体を起こした。頭がひどく痛んだ。あたりを見回してみる。
彼女はボーラの木の下で燃え盛る焚き火の脇に座っていた。彼女は半裸で、その服は火の脇の少し向こうの岩にかけられていた。装備は木の根っこで乾かされていた。所持品をさっと確認する。彼女なぜ自分がここにいるのか、ここで何をすべきなのかわからなかったが、軍隊で培われた直感で自分を取り戻した。装備品も、そして武器も一通り揃っているようだった。
誰かが彼女をここに連れてきたのだ。ここは基地ではなかった。そこまでは思い出すことできた。間違いない。それに、彼女は自分で本物の焚き火など点けたことがない。何のためにそんなことをする？
いや、誰かに連れてこられたのだ。だがアダムはどうなった？　彼はどこにいる？
彼女は立ち上がろうとしたが、できないことに気が付いた。足に力が全然入らなかった。彼女は体をまた地面に倒すと、あたりを注意深く観察した。
時間はおそらく日が沈んでから数時間後だろう。ごく最近、まだ夜が明ける前に何かしていた記憶があった。なのでおそらく彼女はまる一日こうしていたのだ。彼女は自分の体を簡単に内部検査（スキャン）し、どこもひどい怪我はしていないことを確認した。そういった記録はまったく残ってもいなかった。ここ十二時間ほどの記録は再生することができなかった。
彼女がそうして混乱から抜け出られないでいたとき、森の中から影が現れて光の輪の中に入ってきた。
ジェニーは銃まで手を伸ばしたが、その機能がオフになっており弾薬が抜かれていることに気が付いた。彼女は岩を拳の中に握り締めて、待った。
老人は彼女が身を起こしているのを見て立ち止まった。彼は薪を両手いっぱいに持っていた。老人はおそらく七十代か七十代のどちらかだろうと思われたが、まだ若々しかった。だがその髪は灰色だった。長いあごひげは手入れされておらず、その白いフード付きローブも汚れていた。足は裸足で、武器を持っているようには見えなかった。
見た目からは判断できないと彼女は知っていたので、岩を持った手に力をこめた。
彼は薪を火の脇に落とすと、彼女に近づいた。彼女は体を強張らせて、いつでもこの見知らぬ男がもし攻撃的な行動を取ったら打ち倒せるように身構えた。
「こんにちわ」男は言った。「気分はどうだね？　大丈夫か？」
「たぶん」彼女はうなった。「ここはどこだ？」
「河から遠くないところだ」と男は答えた。「ひどい様子だったよ」彼は舌打ちして瞬きし、そして微笑んだ。もし彼の目に知性の光がなかったら、老人が痴呆ではないかと思ったかもし

れない。
「私の相棒はどこだ？」相棒がそばにいないことが急に心配になってきた。彼女はようやく血のことと、攻撃を受けたことを思い出しつつあった・・・。
「相棒？」老人は頭を振った。「すまないね。他に人はいなかったよ。あんただけだ」
「彼を見つけないと」彼女はそう言って、立ち上がろうとした。だが今度は気絶しそうになった。頭ががんがん痛み、苦い液体が喉までこみ上げてきた。彼女は地面に膝をつき、老人はすばやく歩みよって彼女を支えた。岩が手から落ちたが、もうどうでもよかった。
「気をつけなさい、ジェニファー」男はそう言った。
　彼女は彼を見たが、眼の前には星がぐるぐる回っていた。いまのは幻聴だろうか？　この男は彼女の名前を呼んだのだろうか？
「なんで・・・」と口を開いた彼女は、疲労のためそれ以上続けられなかった。
「私が誰かかな？」と老人はそれを引き継いだ。「あんたを待っていたよ、ジェニファー・ブロディ。あんたのことをずっと待っていた。そして今ようやく会えた。私の、いや我々の祈りは聞き届けられたのだな」
　男は微笑んだ。その柔らかく、きらきらとした目は人懐っこく、そして深かった。それは見る者を幻惑する眼差しだった。知的で、底が見えない迷宮のように魅力的で・・・催眠術をかけるかのように。
「ようやく始められる」と男はささやいた。そのささやきは彼女を温かく包み込んだ。言葉は柔らかい枕のように、彼女を誘惑するのだった。彼女は自分がこの世界から遠ざかるのを感じた。そして風と音と火は空虚へと消えて行き、夜が彼女を抱擁し、毛布のようにすべてを包み込んだ。

＊＊＊

　西暦28912年　星々と星々のあいだで

　スイセンが咲き乱れる広大な野原にディビッドは寝転がり、七月の太陽が剥き出しの肌を焼くにまかせていた。夏の強い香りがあたりにたちこめている。
　すばらしい一日で、そんな日が続いた一週間は楽しい生活だった。彼はここまでの幸福感というものを感じたのがいつだったのかまったく思い出せなかった。すべては美しく、すべてはあるがままので、なんというか何もかもが美しかったのだった。
　彼は少女の笑い声を聞いた。
　体を起こすと、アミイが手に花束を持って彼に向かって野原を駆けてくるのが見えた。その脇で手を握っているのはニカだ。彼女は白いサマードレスを着ており、その黒い髪が背中まで波打って流れていた。二人は本当に美しかった。
「花を摘んできたのよ」娘は彼の前に立ち止まるとそう言った。娘はいま六歳で、毎日母親に似てきているようだった。
　それは良いことだった。一番悪いのはアミイが彼に似てしまうことだったからだ。調査では彼の娘がどの程度彼の遺伝子の影響を受けるかはわからないとされていた。オメガのクオーターか、それとも完全にソリタスなのか？　彼女はせいぜい百歳ぐらいまでしか生きられないの

か、それとも彼のように不老不死となって生きつづけるのか？
　何か暗いものが彼の心の背骨をなぞったが、彼はそれを無視した。
「ありがとう」彼はアミイにそう言って花を受け取った。「きれいだね」本当だった。
「ここに隠れていたのね」妻はそう言った。妻はピクニックの籠をおろして、中から大きな敷物を出し、草と黄色い花々の上に敷いた。「あちこち探したのよ」
「一人で静かに考えたかったんだ」彼は言った。
「あっちに行っていたほうがいいかしら？」
「そんなことはない！」彼はおどろいて叫んだが、妻が笑っていることに気が付いた。冗談だったのだ。彼女は彼がどれほど二人を愛しており、どれほど必要としているか知っていたのだ。
　彼はかがみこむと彼女にキスをした。ほんの一瞬――本当に一瞬だった――唇は冷たく乾ききっており、まるでマネキンのように感じられた。だがすぐに温かさは戻り、魅惑的な湿り気も戻ってきた。それを見て、ませたアミイは吐き気がするような音を真似しだした。
「お父さんにもっと花束を持って来たら？」とニカは夫から離れながら言った。離れ際にこっそりと彼にウィンクをする。「きっと喜ぶわよ」
「わかったわ」とアミイは言うと、背の高いスイレンをくぐって行ってしまった。彼女はすぐに見えなくなったが、楽しそうなハミングがどこかから聞こえてきていた。それは真昼の熱の中で見る、気だるい夢のようだった。
　ディビッドはまた草の上に横になった。草の葉が体をくすぐるのが気持ちいい。それはかつて彼が過ごした夏のことを思い出させた。同じような野原で走り回りながら、大人になることを拒否しようとしていたときのことを。
　妻が脇で昼食を出し始めた。その香りは美味しそうで、彼の胃が大きく鳴った。彼はここ数日食べてないような気がした。だがすぐに毎朝妻が作る大量の朝食を平らげていることを思い出した。
「ルビカ」と妻は言った。
　彼は眉をひそめた。「何だって？」
「赤く、乾ききっているわ」妻は体を近づけて、空っぽのコップを彼の脇に置いた。「私の足を見てよ。昨日浜辺で一日歩いたからこうなったのよ」
「そうか」何かが気になったが、何なのかわからなかった。
　頭上では青空が灰色の雲で隠されつづあった。温度が急激に下がる。彼はシャツを着ようと腕を伸ばしたが、さっきまで着ていた白い綿のジャージーはなくなってしまい、どこから持ってきたかわからない暗い青色のジャンプスーツがそこにあった。
　振り返ってニカを見ると、彼女は戸惑って、不安そうに見えた。
「アミイはそこにいるのか？」
「アミイはどこにいるんだ？」
「ルビカにいるわ」彼女は答えた。「他のどこにいるって言うの？」
　ルビカ？　いったい何のことだ？　「そんなわけはない」彼は言った。「違う。僕らと一緒にいたじゃないか」
　彼は座りなおしてあたりを見たが、アミイの姿は見えなかった。気がついてみれば、あのハミングはもうどこにも聞こえなくなっていた。だが娘はどこか近くにいるはずだった。蒸発したりするわけがない。こんなところで。この楽園の真中で。

「彼女はここにいないわ」と妻は頭を振りながら言った。「あなたはルビカに行くのよ。アミイがそこにいると思っていたのでしょう。そうでなければ、なぜそんなところに向かっているの、ディビッド？　娘を見つけるためでなければ、そんなことはしないでしょう？」
「いや、ニカ、彼女は・・・ルビカになんていないよ。すぐそこにいたじゃないか」
　だが娘はここにはいないことが彼にもわかった。アミイはどこか遠くに行ってしまい、もうすでに六歳ではなかったのだ。彼女はすでに大人であり・・・すでに死んでいたのだ。
　やめてくれ。
　彼はその考えをどこかに押しやった。
　これは休暇だったのだ。彼は真実とはかけ離れた陰気な物事を考えるべきではなかったのだ。アミイはいつか大きくなるだろう。大きくなって年をとるだろう。年をとっていつかは死ぬだろう。そして彼はすべての人間より長生きするかもしれない。彼が愛した人間すべてを置き去りにして。だがそれは未来のことで、これは・・・これは現在のことだった。
　灰色の空が晴れ上がり、太陽が再び顔を出した。
　遠くの方から、アミイの幸せそうな、夢見るようなハミングの音が聞こえてきた。妻はまた微笑んでいた。妻はアミイの奇妙な歌に合わせてハミングし、サンドイッチを準備していた。
　だが彼は何かがおかしいという感触を拭い去ることができなかった。この場所は何か正しくない。それは彼を不安にさせた。安心できなかった。
「アミイはどこにいったの？」妻が聞いた。彼はまた座りなおして、妻をみた。妻は恐れているようだった。「あなたと一緒じゃなかったの、ディビッド？」
「いや」彼は言った。「花を摘んでいるよ」
「ルビカで？」
　突然彼はものすごく妻に対して腹を立てた。いったいなぜこのルビカとやらのことを何度も繰り返しているのだ？　いったいどうしたというのだ？
「ルビカなんて存在しない」と彼は冷たく答えたが、それが嘘であることを知っていた。そこには確かにルビカがあり、それは彼に関係したことだったのだが、ただそのつながりがどうしても理解できなかったのだった。「アミイは大丈夫だ。すぐそこにいるし、数分で戻ってくるよ」
「そう」と彼女は答えた。「じゃあなぜあなたはルビカに向かっているの、ディビッド？　娘をそこで探すためじゃなければ、なぜそこに向かっているの？」
　いまや、このすべての歯車が狂いつつあった。ディビッドは立ち上がってあたりを見た。
　黄色いスイセンの野原はすべての方角に果てしなく続いていた。他には何もなかった。青い空とスイセン、スイセンと青い空だった。
　こんなはずはない。彼は十分前にはここがスイスであったことをはっきりと覚えていた。向こうには山脈があったし、河と谷があった。いまここには・・・広大な空間があるだけだ。黄色と緑と青で埋め尽くされた広大な空間が、視界の続く限り広がっているだけだ。
　下を見ると、妻が消えていた。彼は広大なスイセンの野原で一人ぼっちになっており、空にはまた雲が戻りつつあった。それは太陽を飲み込み、すべてを鈍い灰色で染め上げていった。
　だが遠くでは、妻と娘二人の不吉なハミングが彼を呼んでいるのだった。それは蛇のように彼の首にまきつき、幽霊たちが待ち受ける暗がりへと彼を引き込もうとするのだった。
　ディビッドはそれにしたがって降りていった。

その船はゆっくりと、アステロイドに隠された赤い惑星をめぐる軌道に入った。その小惑星群に兄弟として加わるかのように、船はゆっくりと何度も回転し、中に誰も乗っていない無機物であるかのように振る舞い始めた。

船はここでただ待つだろう。そもそもそれが指示だったのだ。ここで目を開いたままただ待ちつづけるだろう。兆しが見えるまで。その兆しが、時を告げるときまで。

その時始めて、船は唯一の乗客を、あの奇妙で不安な夢から起こそうとするだろう。乗客と彼がいる世界は分かちがたい状態にあり、船のシステムはそれを理解することができなかったのだ。その間も船は乗客に水と栄養素を提供し、生命状態を監視し、さまざまな外傷から守るだろう・・・いつか時が近づいたとき、この生命体が目覚めることを船はただ願うのだ。

それまでは・・・ただ長い夜を眠りつづけるがよかろう。

「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」

――マタイによる福音書　十三章五十七節

終章

西暦29475年　惑星ルビカ

洞窟は地下深くへと曲がりくねりながら、狭い巣穴のように砂と柔らかい土を抜けて、下の固い岩盤まで続いていた。そのさらに下には、触ると温かいざらざらとした壁があった。彼が世界から隔離された部屋を作ったのはそこだった。その部屋は彼がいつか帰りたいと願っていた場所を完全に再現したものだった。

テクノロジーの力により、卵の殻のような形をしたまがい物の外面を再現することができたのだった。彼の想像力と希望がその幻想を完璧なものにした。その高解像度の窓に映し出される映像からは、流れる河と風変わりな橋、その向こうに広がるまぶしい緑色の草原が見えた。小道が曲がりながらそこを走っており、尖塔がついた古い建物を青々としたナラの木が囲んでいるのだった。

もちろん正確にはこの映像は本物とはいえなかったが、彼の記憶には忠実だった。そしてこの幻想はもちろん彼女を蘇らせるものではなかったが、夢の中ではそうではなかった。なのであの計画に関わっている時間以外は、彼はほとんどの時間をこの幻想の部屋で眠るのに費やしていた。ここで眠れば、あの人に会うことができたからだ。

近いうちに、あの人と一緒になれるだろう。永遠の向こう側で、あの人は彼を待っているだろうから。

どちらにせよ、彼の長い旅はこの惑星の上で終わるのだった。人が千回生まれ変われる時間ほど前、彼らはそう教えてくれた。彼らが間違いを犯したことは、ただの一度もなかった。それは皆が彼のことをローマン・ドラゴヴィッチ・ツボォフとして知っていたあの母国の時代からずっと変わらなかった。二十世紀後半に、彼らの指示により箱舟計画（アーク・プロジェクト）を始めたときもそうだった。また彼が人類から追放され、オムニテック社――彼のオムニテック社だ――の種を撒き散らしたときもそうだった。そして彼らが今回間違えるということはありえないだろう。

ローマンがカーテンを閉め、シミュレーションをオフにすると部屋が暗くなった。仕事に行く時間だった。彼は居住区からドアを抜け、本当にきしむ廊下を歩いた。細かいこだわりには手間をかけていた。角を曲がると、そこはもう幻想の繭の外だった。装飾がされていた壁はただの岩壁に変わり、数メートル先に進むとトンネルが巨大な洞窟になった。道は大きな口をあける崖の上にかかった自然の橋につながっていた。崖からは常に熱い風が吹き上げており、彼の白いロングコートを揺らした。ローマンは歩調も緩めずにそれを渡った。必要であれば目隠しされてでもここを歩くことができただろう。反対側には螺旋階段があり、その一番上に司令室があった。中の壁は岩ではなく鋼鉄でできており、消えることのない照明の出所は旧世紀の異物である白熱球ではなく、壁自身が発する光だった。

彼が椅子に座るとコンソールが静かに光り始めた。彼は指をパネルに走らせて、指でその表面をなぞった。あらゆる表面には薄い赤い砂がベールのように積もっていた。この地下でも、乾いた砂は入り込んできていた。地表から遥か離れているというのに、砂はどこからか入って

きているのだ。
　なぜ運命の女神はこの世界を、歴史の終焉の舞台に選んだのだろうか？　この世界は砂に埋ずもれており、ミュータントたちに呪われ、戦争に傷つけられ、愚か者たちによって統治されていた。ローマンにはどうしても理解できなかったが、近代世界はほとんどそうであった。彼は歴史の傍観者であったが、それはそれでよかったのだ・・・歴史が彼の計画を邪魔しない限りは。
　すでに二十世紀の中ごろから途切れずに続いている、デリケートな出来事の連鎖を断ち切ろうとする因子が、常に現れるのだった。計画を狂わせるその因子は予測したり予防したりすることができなかった。人間というものはいつも間違いを犯すものだし、意固地なものなのだ。一番ベストな対処法というのは、物事がうまくいかなくなったら、それを観察しすばやく対処することだ。そのための道具はそろっていたし、彼の仕事というのはいつも、損害を最小限にし、計画をもとの軌道に乗せることであった。
「こんばんわ、ローマン」柔らかい女性の声が響いた。そのアクセントと言葉遣いは古い世界のものであり、イギリス英語固有のものだった。これもローマンの過去へのこだわりのひとつだった。彼はこの音声を彼の記憶に忠実になるようにプログラムしたのだ。二万七千年の間、彼以外の誰一人としてこのコンピュータに話し掛けるものはいなかったが、彼は本当の名前で呼ばれることを好んでいた。「気分はどう？」
　彼は愛想を省いてつづけた。どちらにせよ彼女は傷つかない。「状況は？」と彼は聞いた。
「特におかしなことは起こっていません。もうすぐ嵐になりそうなので、ほとんどの通風口は私のほうで閉めておきました。それにより十パーセントの能力でしか仕事ができなくなりますが、少なくとも四十八時間はそのまま行動できるはずです」
「わかった。他に何かあるか？」
「フィリップ・ロスが恩赦を発表しました。即日有効だとのことです。武器を捨てて降伏することで、クランのメンバーたちは企業に対して犯したすべての犯罪を許されるということのようです」彼女は言葉を切った。「どうやらうまくいっているみたいですね。あらゆるところから報告があがっていますが、いくつかのクランはほぼ壊滅的な打撃を受けたようです。ほとんどの人々は反乱に興味を無くしており、物事はロス氏に有利に運んでいるものと見られます」
「うまい手だ」ローマンは最初、このロスという人物に警戒心を抱いていた。彼は意固地で、外からの干渉を受け付けないタイプに思えたが、中央評議会は彼という人物に固執したのだった。ローマンはいまその理由がわかった。この男はほとんど完璧であり、ロス自身は知らないだろうが、審判の日に重要な役割を果たす男になるだろう。「他になにかあるか？」
「私にはこれが重要なのかどうかよくわからないのですが」と人口知能（A I）は答えた。「ここしばらく二人の反乱軍兵士のことを観察していました。男の素性はよくわかりませんでしたが、保安アンドロイドの記録に残っていた外見から女のことはわかりました。ジェニファー・ブロディという女性のようです。ですが・・・」とＡＩは口ごもった。
「どうした？」
「ブロディーはすでに亡くなっていたのです、ローマン。五年前に死亡しています」
「ありえない。おそらくクランのいつもの隠蔽工作だろう。家族への報復を恐れているんだ。すでに死亡している兵士は恐れを知らない。その二人の連中が特別だというのか？」

「二人はここ数日南へと向かっていました。街や他の旅人を避けるようにです。二人のことを三度ほど見かけましたが、そのうちの二回は中立地帯（ニュートラル）の店で弾薬を買っていたときで、もう一回は私たちのアンドロイドが送ってきた情報でした。二人はそれを破壊しました」
「アンドロイドは使用不能になったのか？」
「私にわかることは、二人はそれをばらばらにして隠したのだということです。修理用のロボットを送って回収に行かせましたが、アンドロイドの痕跡は発見できませんでした。どうも二人は跡を残したくないようです」
「なかなか優秀な兵士のようだな。誰も信用していない。この二人の何が気になるのだ？」
「よくわかりません」と彼女は答えた。ローマンはその声に不安を感じ取ったように思った。もちろん、彼女は常に進歩をしていたし、そのＡＩは理性の許す限り人間らしくあるように指示してあった。彼はただの冷たい機械よりも、より人間に近いものと話したかったのだ。
　だが、心配しているというのは彼女らしくなかった。彼女にもプライドはあったからだ。
「何か・・・感じるんです」とＡＩは続けた。「この二人には何かがあります。ひょっとしたら二人の行動パターンかもしれないし、女性の身分かもしれません・・・」彼女は架空の咳をした。それはローマンがプログラムした記憶がない振る舞いだった。「許可をいただければ、もう少し調査します」
「調査を続けてくれ」彼自身も少し心配になってきていた。だが正確にはこの二人の兵士たちのせいではない。いや、それは何かコントロールできないものがあるという感触だった。このコンピュータは惑星全体を監視できるというのに、異常を検知するためにＡＩが頼っているのは、直感や、合成された感情であるという事実だ・・・。
　彼はその考えを頭から押しやった。失敗する可能性を心配してもはじまらない。日々の業務に集中したほうがいい。「他になにかあるか？」
「ありません。今日はいまのところ、比較的何もない日です」
「わかった。それでははじめよう。オムニ－１からだ・・・私たちの目と耳から来る報告はどうなっている？」

　二人はその日の業務を四時間もしないうちに終わらせた。いつものように、彼の短い声明は秘密のチャンネルを通って運ばれるので、この場所にいる彼のことを追跡することはできなかったし、またメッセージはすべて役員しか使えないオムニ方式によって暗号化されていた。声明に関して質問をするものはいなかたったし、それが公式な指示としてオムニテック本部に届いたとき、その発信者やメッセージの内容を調べようとするものは一人もいなかった。何千もある役員支部のすべてにそれぞれの思惑があり、独自の目的を持っていた。そしてもし上席に異を唱えるような質問を投げる者がいたとしたら、その人間は自然と注目されることになってしまい、言いたくないことまで喋らされるかもしれなかったのだった。
　ローマンはだいぶ昔に、欲望と裏切りによる人間不信の環境を作り上げておいたのだった。そして彼自身はこのフランケンシュタインの怪物に直接指示を与えたことはなかったが、オムニテック社はまだ彼の意のままに踊る存在であった。日々の業務において、その糸はほとんど見えなかったに違いない。しかもそれを操るのは巨大な人形遣いであり、もしくはほとんど神ともいえる存在だった。だが時間をかければ、あるパターンを見つけることができたかもしれ

ない。だがどこを詳しく見ればよいか、誰にもわからないだろう。皆自分の小さな領土を失うのを恐れているのだ。あのどうやら頑固らしいフィリップ・ロスですらそうだろう。それに皆短い期間でしかものを考えられないはずだ。糸の動きは微妙だったし、短い期間ではその結果も大きなものではなかったのだ。もしほぼ三万年にわたる時間を一目で眺め渡すことができる人間がいるとしたら、そのパターンははっきりと見えたことだろう。だが普通の人間の人生という観点からは、それを超える視点というのは考えられるべくもなかったし、パターンはあいまいで、ほとんど形をなしていなかっただろう。それは複雑な織物をすぐ近くで眺めているのと同じことだ。

「また明日」と彼はＡＩに告げた。「二人のクラン兵士を監視し、何か起こったら知らせてくれ」

「わかりました、ローマン」彼女は返事をした。「おやすみなさい。よく眠ってくださいね、あなた」

　彼はかすかに微笑んだが返答はしなかった。彼女には言わなくてもわかるだろう。彼は階段を注意深く下りて部屋に戻った。

　部屋に戻った瞬間、シミュレーションが自動的にオンになった。外には夜が映っており、雨が降っていた。町にはあちこちに街頭がついており、通りにはほとんど人がいなかった。頭上のフロアでは誰かが歩き回っていた。いつものように、その効果はやや不気味だったが、ローマンは幽霊を近所に設置することにもう慣れていた。目に見えない存在が彼を安心させていたのだった。一人ぼっちではないと思わせてくれていたのだ。本当の人間との交友がないのだから、音と映像で我慢するしかないのだ。

　彼は座ってウォッカのボトルを取り出した。彼は創造機（ビルダー）をキッチンに設置していた。まがい物の現実を作るためだけに、便利さをも犠牲にするつもりはなかった。瓶を椅子の脇のテーブルに置くと、グラスを一杯に満たした。グラスを持ち上げて口につけ、一息でその透明な液体を飲み干す。少しカーペットにこぼれた。彼はすぐにお代わりをついだ。頭がぼんやりとしてきたが、液体は体を骨まで温め、人生の最初の頃の記憶を呼び起こさせた。かつて彼は冷血な男の下で、世界の歴史を変えられると信じていた男のために働いていたのだった。

　たしかに、その男は歴史を変えたのかもしれない。だがそもそもの目的とはかけ離れた変わり方であった。だがその男の名前はまだ人々の記憶に残っているのだ。そのときから何千年もたち、人間が戦争で一度滅び、そして蘇ったあとも。たとえばこの計画がすべて終わったあと、ローマンのことを覚えている者が果たしているだろうか？　彼らは覚えているかもしれない。それとも、単に彼は巨大な歯車の部品の一つに過ぎず、指示を受けてただ回るだけの存在であったと記憶されるのかもしれない。どちらにせよ、彼はもうそんなことを気にすることができなくなっていた。情熱はすでに義務となり、献身はただの責任となり、野望は実行しなければならない仕事となった。それ以上でもそれ以下でもなかった。

　彼は目を閉じてグラスから液体をすすった。

　下の階では、誰かがラジオのスイッチを入れたようだった。バッハのバイオリン二重奏が、数え切れないほどの時と、故郷から何十億マイルもの距離を越えて、彼の部屋へと流れてきた。異星の岩盤に囲まれて彼は一人ぼっちだったが、孤独ではなかった。そうは思わなかった。ゆっくりとだが確実に、ローマン・ドラゴヴィッチ・ツヴォフは深く底のない眠りへと引き込ま

れていった。眠りの底では、甘く苦い夢が彼を待ち受けているのだった。

あの人の声が夢の中で聞こえたが、それはどこか遠いところから聞こえてきているようだった。集中して何を言っているのか聞き取ろうとするが、その言葉はわからなかった。

彼女は海の上の白い崖の上に立っていた。波の轟音がすべてを覆い隠していた。彼はそこに近づきたかったが、二人の間には透明な空虚があった。その空虚は銀河よりも広く、人生という年月ほど深かった。彼女は危険なまでにその縁に立っており、彼は後ろに下がるように言いたかったのだが、もし口を開いたとしても、波の音で何も聞こえないのは明白だった。

「話したい・・・」風が一瞬吹いて、言葉の断片を運んできた。「すぐにです・・・」そして言葉はまた薄れ、消えてしまった。言葉は海に運ばれ、手のつけられない強風によりばらばらになってしまった。

彼は動いて話そうとしているのだが、まるで磔にかけられ、猿轡をかまされているかのように動けず、指一本動かすこともできなかった。体が薬を盛られたようにだるかった。

「・・きて！」声は言った。それはどんどんはっきりと、近づきつつあった。だが崖を見ると、二人の距離はどんどん離れていており、そしてイヴェットはますますその縁へと危険なほど近づいていたのだった。彼女は彼のほうを見ることさえしなかった。その目は真下の海を見つめていた。塩っぽい風が彼女の髪の毛を揺らし、ほっそりとした白いドレスを揺らした。まるでネコがネズミで遊んでいるかのようだった。彼は絶望的な気持ちで彼女に気をつけるよう伝えたかった。縁から離れて自分の腕の中に来るように叫びたかった。

「ローマン、起きてください！」

ローマンは目を開けた。目の前には何も映っていなかった。シミュレーションは電源節約のためにオフになっており、部屋は墨をこぼしたように真っ暗だった。一瞬混乱した彼は、古い本能のまま電源スイッチをまさぐり、瓶にけつまずいてそれを割ってしまった。ウォッカが床にこぼれてカーペットを濡らす。

その音と強い匂いで彼は目を覚ました。

「照明を」と彼が言うと、明かりがついた。シミュレーションがまたオンになったが、彼はもうスクリーンの映像には興味をなくしていた。「何があった？」

「すぐに上にきてください」人工知能は言った。ローマン以外の者がそれを聞いたら、まるで心配しているようだと思ったかもしれない。「何かが起きています」

「どうした？」彼はぐらぐらと立ち上がった。頭がまだふらふらする。

「二人の旅人たちです、ローマン。何かが起こりつつあります」

彼は眉をひそめた。その言葉を理解できる文脈に当てはめる。「つまりあのクランの兵士たちのことか？　問題があるのか？」

「さまざまな出来事が収束しようとしています、ローマン」と彼女は言った。「あなたが探すようにと言っていたパターンです——兆しです——あらゆるところにそれが出現しています。あの二人の兵士はその一部だったようです。あの二人の存在により出来事が動き始めたのです。うまく説明できません・・・それは直感というか・・・私の心がそうだと言っています。ローマン、こちらに来て自分で見てください。お願い」

彼女は本当に心配しているようだった。彼の頭がようやくすっきりとし始めた。アルコールの残りは集中力によりかき消された。彼はドアを出て、少しずつその歩調を速めた。背骨がち

くちくし、心臓が大きく鼓動を打っていた。
　パターン。収束する出来事。兆し。
　もしＡＩの言っていることが正しいとすれば、彼はまったく準備をしていなかったことになる。彼はここまで大きな出来事であれば、事前に通知がくるものだと思っていた。雷が来る前に、地平線に黒い雲が現れるように。だがおそらく彼は間違った方角を見ていたのだろう。おそらくまったくつまらないことに注意を払いすぎていたのだ・・・あるいはつまらないことをあたりまえのことだと無視してしまった結果、その兆しを見誤ったのだろう。
「ローマン」彼女は言った。彼は崖の橋を渡っていた。風はいつもより強く吹き上げており、深い奥底では風が唸り声を上げていた。ローマンは立ち止まった。何かがおかしい。どこかでタガが外れてしまっているのだ。「ローマン！」
「今向かっている」彼は言った。「あと少しだ。どうした――」
「ローマン、ここに来た人間がいるわ！」
「何だって？」
「怖いわ・・・」と彼女は言うと、静かになった。
「怖い・・・」ローマンは前に足を一歩踏み出し、そこで初めてＡＩが言った言葉の意味を理解した。体が凍りつき、氷のような戦慄が走る。「誰が来たんだ？」答えはなかった。「人が来たとはどういう意味だ？」回答はない。
　ＡＩが彼の質問に答えないというのはありえないことだった。
　背後で鳴った鋭い音で、彼は知らずと歯をかみ締め、目を見開いた。
　それはまるでブーツで石を踏んで歩くような音だったのだ。
　ローマンは肩越しに後ろを見た。
　何かがトンネルの影の中で動いていた。背が高く、黒い何かだ。ローマンはその場で振り返った。手のひらが冷たくなっていた。息が荒くなる。これはパニックなのだろうか。彼には思い出せなかった。
「そこにいるのは誰だ？」彼はそう言いたかったが、唇から出たのは泣き声のようなうめき声でしかなかった。
　その影が暗がりから照明の中へと出てきた。影のようなシルエットが肉体へと変わってゆく。それは大きく口を開けている真っ暗なトンネルと、狭い橋が弧を描き始める境界線に立ち止まって、彼に向かって微笑んだ。
「神よ」ローマンはささやいた。「ありえない」
「あんたの神・・・だろうな」かつてヴァーニャだったモノがそう口を開いた。その外見は、かつて二万七千年前、ソビエト連邦から彼を連れ出したあの男にそっくりだった。よく日焼けしたその肌と、ごく普通の服装の下には、時間という存在そのものよりも古く、暗いものがうごめいており、どう考えても人間とはいえない何かが隠されているようだった。ローマンはなぜ自分がそう理解したのか説明できなかったが、ただ理解したのだった。そしてこの化け物は人間の声で、しかもロシア語で喋ってはいたが、その声は鉄の剃刀がこすれあう音のようだった。「我々は自分たちの神を殺した。だから私にはその概念がわからない。我々にとって不可能なことなどないのだよ、ローマ君。人生はただの夢で、死とは乱暴に目覚めさせられることなのだ」その生き物は腕を広げて、不気味なまでに歯をむき出してにっと笑った。「同志よ、未来へよくやってきた」

ローマンは自分がちっぽけで、ただの人間に過ぎないと感じた。だがすぐに、この怪物に自分が恐れていることを見せはしないと考え、膝をついて屈服する代わりに、本当に知りたい質問を口にした。
「いったいここで何をしている」と彼はそれに聞いた。「どうやってここに入った？」
「我々があんたを永遠に自由にやらせておくとは思っていなかっただろう。どうかね、ローマ君？」
「その呼び方はやめてもらおう」ローマンは何とか声に出した。
ヴァーニャは肩をすくめた。「もう忘れていたかもしれないが、あんたにはまだやってもらう仕事がある」
「いったい私がここで何をやってると思っている？」驚くべきことに、恐れは怒りにとってかわった。「こんな誰も来ないような岩の中深くで・・・」彼は適切な言葉を探した。「・・・牢獄に閉じ込められたまま、あなたたち以外の誰のために仕事をしていると思っているんだ？私にはやらなければいけないことがある。その他のことはほとんど何もしていない」
「少し外に出ることを考えたほうがいいんじゃないか」とそれは言った。「あまりにも長い孤独は、魂にとって良くない。まあそれは、まだあんたが魂を持っていればの話だが」と笑い声を上げた。「だが我々に必要だったのは、魂を持った君だったのだよ、ローマ君。だから心配は無用だ。ああ、すまない。ローマン。あやまらせてくれたまえ」
ヴァーニャは歩み寄ってきた。ローマンはその生き物のどこがおかしいか理解した。その目は死人の目だった。まるで肉体だけがそこにあって、魂が抜けてしまった抜け殻のようだった。そこにあるのは操る糸が見えないただの人形だった。
それは彼の背中を凍りつかせた。
「私の質問に答えてもらおう」と彼は弱々しく言った。「どうやってここに入った？　どうして私がここにいるとわかった？　誰もここには入って来られない・・・不可能だ」
「不可能とは何だね？　ありそうにないとか、ほぼ起こらないとかいうことかね？　あんたは人間にしては年を取っているほうかもしれないが、ただの人間に過ぎない・・・とても小さな存在ではないのかね」それは彼と橋の上ですれ違い――その瞬間ローマンは自分が崖に突き落とされるところを想像した――そのまま反対側の階段を上ってゆく。「我々はすべてを知っていた」
「なぜこれまで一度も姿を見せなかったのだ？　私はあなたたちがもう・・・」彼は言葉を切った。
それは振り返って、彼を見つめた。その眉は大げさに上げられており、楽しんでいるかのような笑いがその唇に浮かんでいた。その表情はほとんど猥らといってもよかった。
「私たちがどうしたと思ったのだ、ローマン？　死んでいなくなったとでも思ったのかね？あんたが人間に不老不死を与えるずっと前から、我々は不死の存在なのだよ、同志ドラコヴィッチ。我々は消え去りはしないし、あんたもそうだ。我々はあんたを必要としている」
「なぜ今なのだ？」ローマンはそれが階段を上がるのを後について歩いた。「私はこの計画すべてが無意味ではないのかと、この長い時間の間何度も考えた。もう永遠ほど昔のことのように思える、あなたとした約束のことはともかくだ。なぜここまで待つ必要があった？」
それは司令室に入り、ローマンは追いついた。ヴァーニャは部屋の四面を埋め尽くすスクリーンとコンソールを感嘆したように眺めている。

「これはすばらしい、ローマン。すばらしい出来栄えだ。我々があんたを信用したのはまったく間違いではなかった。あんたは常に我々の期待を裏切らなかった」とそれは彼を見る。「あんたを放っておいたのにはわけがある、ツボォフ先生（ドクター・ツボォフ）。なぜならあんたは人類の未来の設計者だからだ。我々にとってあんたは預言者であり、操り人形ではない。あんたに糸をつけて、マリオネットの真似事をさせるつもりはまったくなかった」ヴァーニャは指を空中で動かしながら微笑んだ。「あんたには義務を与えたが、それは首に鎖をつなぐものではなかった。あんたにはインスピレーションを与えたが、一から十まで命令どおりに動くよう言ったわけではない。この計画はあんたのものだ。我々のものではない」と言ってそれは椅子に腰をおろした。「あんたの友達は死んだよ」
「友達？」ローマンにはわけがわからなかった。
「あんたが話していた機械だ。彼女は死んだ」
　ＡＩだ。彼は人工知性のことを話しているのだ。「あんたがやったのか」
「もちろん違う」ヴァーニャは答えた。「何かが起こりつつある」
「最後に彼女はそう言っていた」ローマンは操作パネルの一つに近づき、ＡＩを手動で動かし始めた。すべては問題ないように見える。「イヴェット？」彼は聞いた。「状況を報告せよ」
「死んだ恋人の名前を付けているのかね、ローマン？」それは面白がっているようだった。「なんて人間らしいんだ」
　ローマンはそれを無視した。「返答しない。何が起こったのか調べるためには完全なチェックをしないといけない」
「私には原因がわかる」偽ヴァーニャはそこで言葉を切った。「彼女は殺されたのさ」
「誰に？」
「私には・・・わからん」ヴァーニャは怒っているようだった。いくばくかの不安も混じっていたかもしれない。ローマンはその事実に、何か安心すると同時に理解を超えた恐怖を覚えた。ここまで強力な存在を不安にさせるものがあるというのか・・・？
「何が起こっているのだ？　ＡＩは他にも何か言い残していた。二人のクラン兵士たちのことだ。そして兆しと前触れについて」彼は聞いた。「もうすぐなのだろうだろう、そうではないのか？」
「終わりがかね？　私はそう思うし、我々はそう思っている。我々も全能ではないのだよ、ローマン。人間というのは実に予測しにくい生き物だ。あんたたちは実に頑固な種だな」
「我々？」彼は答えを知っていたが、聞かずにはおれなかった。
「あんたたち人間だよ」と偽ヴァーニャは答えた。「私の変装にひっかかるあんたじゃないだろう。これでは騙せないことは知っている」
「かつては騙された」彼は言った。「一万五千年前に、あなたたちと接触する機会があってそのときに理解した。何かつながりがあるはずだと思った。そうであるはずだと」
「他にもこういった者たちがいるのだよ。一つのバスケットでは、卵をすべて入れておくことはできない」
「その彼らにもすべて、私にしたのと同じ約束をしたのか？」
　ヴァーニャはうなずいた。「だが同じ人間として言わせてもらおう」とそれはウィンクした。ローマンは知らずと身をすくませる。「あんたは我々のもっとも貴重な人材だ。想像できると

は思うが、他にもこういった代理人がいる。そしていつ彼らが我々に対して敵対行動を取るかはわからない」
「他の代理人？」
「他の預言者たちだ。何かが起こりつつある。ローマン、あんたが言ったように、兆しと前触れが現れてきている。いま我々はあんたを強く必要としている。そして、そろそろあんたに真実を見せるときだろう」
「なんの真実だ？」ローマンはささやいた。突然、彼は骨の髄まで恐怖を感じ、いますぐにこの場所から逃げ出したくなった。
「すべてのだ」と見せかけのものをまとったそれは言い、それを脱ぎ捨てた。

　ローマンは膝をついた。彼にはわかった。彼が何をしたのか、自分が何に参加しようとしていたのか。
　彼らはここにいたのだ。美しいまでに残酷な彼らは、太陽の光の中にある影がくっきりとその姿を表すように、消えることなくいつまでも存在するものだった。彼らは次元と時間を超えて生きており、ローマンのようなただの人間とはまったく異なった、人知を超えた存在だった。
　彼は長いこと膝をついて、うなだれたままそうしていた。彼は涙を流し、笑いまた涙した。彼はいまこの瞬間から、すべてが変わるのだと思った。
　彼らはやってきたのだ。

　そしてすべてが始まった。